

Re:SAO

でいあ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

キリトが《ビーター》となった直後にアスナが手を差し伸べていたら、キリトとアスナは別れることなくそのまま共に戦い続けたのではないか。

という設定の元に描く、クリアスがイチャコラするのを眺めたい人たちのための再構成SAO。プログレッシブをなぞりつつ、原作1巻まで行く予定です。

p i x i vとのマルチ投稿。

目次

第一層

第一話

1

第二話

14

第三話

28

第四話

39

第五話

48

第六話

60

第二層

第七話

72

第八話

83

第九話

94

第十話

105

第十一話

115

第十二話

129

第十三話

142

第三層

第十四話

155

第十五話

167

第十六話

180

第十七話

192

第十八話

203

第四層

第十九話

218

第二十話

229

第三十二話	428
第三十一話	417
第三十話	404
第二十九話	393
第五層	
27・5	385
第二十八話	365
第二十七話	321
第二十六話	302
第二十五話	289
第二十四話	277
第二十三話	264
第二十二話	253
第二十一話	241

第一層 第一話

一か月で二千人が死ぬ災害。

現代日本の治安は極めて高く、自然災害を除きこのような規模の死者が出ることはありえない。

ならば、その出来事は事件ではなくもはや災害といえるのではないだろうか。殺人事件が起きてもせいぜいが一人、二人。無差別なテロが起こったとしても十人に届くことは極めて稀であろう。

二千人という数はこの時代の、この国の人間にとつて理解の範疇を超えていたことは疑いない。しかも、この出来事がたった一人の男によつて引き起こされたとしたのなら……。

そういった意味で、今世間を騒がせている「災害」は異質であった。自然災害ではなく、人為的な「災害」。しかも、引き起こした本人が直接手をかけるのではなく、仮想世界という限定的な環境で起きた事象によつて人が死んでいく。外部からはまるで手出しができず、人が死んでもその原因すらわからず、さらにいつだれが死ぬのかもわからない。運の悪いことに事件に関わってしまった人間は、毎日人が脳を焼かれ死んでいくのを黙って見ることしかできない。

警察はまるで有効な手を打つことができず、たびたび会見を行うも内容は進展なし。インターネット環境、VR環境における事件解決能力の無さを世間に露呈させた。一月も経つ頃には、人々は理解し始めた。

解決方法はただ一つ、首謀者たる茅場明彦かやばあきひこの言う、ゲームをクリアすることだけなのだ。

アインクラッド第一層西の森。

猪のようなモンスターが跋扈するこの森を、明日奈は注意深く進んでいた。

目的は一つ、全PCが最初の拠点とする「はじまりの町」で聞いた噂、隠しログアウトスポットを探すためである。

ソードアート・オンラインというゲームに囚われてから約二週間。明日奈ははじまりの町の安宿の中に籠り続けていた。不思議なことにゲームの中でも空腹を感じるため、最低限の食料こそ購入していたが、それ以外に外出することはなかった。

現実世界の父や母、兄がきつとすぐに助けに来てくれる。

ゲームに囚われたと知った直後こそ恐怖したものの、その後すぐにこの考えに至ったアスナは宿屋で待機することを選んだ。しかし、一日二日そして一週間と経っても助けは来ず、明日奈の心には焦燥と恐怖が募っていく。

そんな時に耳にしたのが、隠しログアウトスポットという単語であった。

二〇二二年十一月十九日、現実では受ける予定だった統一模試の日にちであり、エリートコースと呼ばれる道を進んでいる明日奈にとって、統一模試は自らの価値を示す機会の一つである。

その価値が一体誰のためのものかは別としても、今の自分にとって譲れないものである以上、この事実は明日奈に圏外に出るという選択肢を取らせる要因として十分なものであった。

情報の元である二人の男性には一笑に付されたものの、NPCから位置情報を聞いた明日奈は西の森に向かった。

そして、目的となる不気味な洞窟を発見し、若干の怯えを感じつつ洞窟に入った明日奈はそこで認識をさせられることになった。

このゲームの理不尽さと死の恐怖を。

突如として振り下ろされた棍棒に、明日奈は全くと言っていいほど反応ができなかった。

洞窟に入っただけで、不気味な壁の感触に顔を上げると、狼型の巨大なモンスターが道を塞いでいたのだ。

——殴られた。

それを認識した時には、明日奈は洞窟の外まで吹っ飛ばされ、視界

の片隅にはギリギリ赤いバーが残るHPゲージが映っていた。
身体が震えた。

このゲームに囚われて以来目を逸らしていた、このゲージが無くなれば死ぬという現実を無理矢理突きつけられたのだ。身体を起こそうとしても、衝撃からかまるで動かず、HPを回復しようにもどうすれば良いのかわからなかった。知らなかった。

——死ぬ？　こんなにあつけなく？　何もできずに？
死にたくない。

十五年。他人から見れば短いのかもれないが、明日奈にとっては走り続けた十五年だった。友人を作ることも、遊ぶこともなく、学業に専念し親の期待に応えるため努力してきた。例え自分の心から望んだものではないとしても、これが正しいと信じてひたすらに、がむしやらに走ってきた。それなのに。

——こんな無様に？　いやだ、まだ死にたくない。こんなところで……！

再度振り上げられた棍棒を見ても、明日奈は諦めることができなかった。

必死で体を動かそうとした。しかし動かない。できることは振り上げられた棍棒を見続けることだけ。

棍棒が振り下ろされる。この攻撃に当たってしまったら、わずかに残った明日奈の体力ゲージは木端微塵に吹き飛ばされる。落ちてくる棍棒は、無慈悲に明日奈を死に導くだろう。時間が延びる。迫ってくる棍棒がやけに遅くなるのを感じた。

直後、モンスターの身体は真つ二つになった。

明日奈を襲うはずだった棍棒も、モンスターも青く輝く結晶になり消えていく。

「間に合ったか。大丈夫かビギナーさん？」

「オレたちよりも早いとかどういうレベルングしてるんだキー坊。しかし情報屋の名前を騙ってデマ流すとはいい度胸ダ」

聞こえたのはキー坊と呼ばれた少年と少女の声。

——助けられた……？

助かったと認識した瞬間、明日奈は急にきた震えを抑えることができなかつた。

この人たちが来なければ、自分のHPゲージは消滅し死んでいたという事実。

そして、誰にも看取られることなく、自らが死んだという事実しか残らない残酷な結果に恐怖したのだ。

「ああ、こんなに震えて。ホレ、回復ポーションだ。サービスしとくよ飲みナ」

無理矢理口に突っ込まれた回復ポーションとやらを飲み込みつつ、明日奈は顔を上げる。

自分にポーションを突っ込んだ少女には髭のようなものがペイントされていた。

「あなた達は……？」

ポーションを飲み終えた明日奈は、震える声で問いかける。

「しがない情報屋とそのお供サ。マ、とにかく今は休んだほうがいいヨ。キー坊護衛頼むヨ」

「このエリアで俺必要か？ まあかまわんけど……立てるかい、ビギナーさん。木陰に行こう」

徐々に色を明るくしていく体力ゲージを片目に見つつ、差し出された手を取り立ち上がった明日奈は改めて二人を見る。

猫の髭のようなものをペイントされた少女は金髪で自分よりも背が低く、飄々とした雰囲気を放っていた。

そして手を貸してくれた少年は黒髪の短髪で、優しそうな眼をこちらに向けていた。

「ん、もう大丈夫そうだな。んじゃ軽く見まわってくるから……アルゴ、その子頼むぞ」

「アイアイ」

少年は手を軽く振りながら歩いていく。その声は、先ほど自分を殺そうとしたモンスターを一撃で真つ二つにしたとは人と同一とは思

えないほど軽い声だった。そしてその少年に、アルゴと呼ばれた少女は何事もなかったような軽い口調で応える。

少年が遠ざかっていくのを見ながら、明日奈はハツと気づく。自分は助けてもらったのに、この人たちにお礼を言っていないと。

「あの、助けてくれてありがとう」

「助けたのはキー坊だからネ。オレっちは何もしてないヨ」

「それでも、あなたも来てくれたわ。その……ポーション？　っていうのも使ってくれたみたいだし」

「NPC売りの安物だからネ。気にしなくていいヨ。それよりも、今後ご糞屑にしてくれるとありがたいネ」

「ご糞屑？」

くつくつと笑う少女を見ながら、明日奈は疑問を感じ、すぐに自己解決した。

先ほど、このアルゴという少女は情報屋と言っていた。名前の通り情報を売り買いしているのだろうが、ゲームというものをほとんどやったことがない明日奈は、情報屋というものがどういう意味を持つのかいまいちピンとこなかった。

「情報屋……でしたっけ？」

「ソウ、文字通りこのゲーム内のありとあらゆる情報を売買する仕事サ。あらゆる情報を集めて整理し、対価に応じて提供する。状況に応じて秘匿もするシ、無償で配布もすル。ちなみに今の情報、十コルだヨ」

にやりと笑うアルゴを見ながら、明日奈は思う。

まるで現実のようだ。

このソードアート・オンラインはゲームであり、感じることはすべて作り物。そう思っていた。しかし、先ほど明日奈が感じた恐怖は絶対に作り物ではなかった。自分はある時間違いなく、死を恐怖し、覚悟し、そして安堵したのだ。

この感情が作り物ならば、現実で感じていたものは一体何だったのか。少なくとも明日奈は、先ほど以上の感情を方向はどうあれ、感じたことはなかった。現実よりも感情を揺さぶられるゲーム。

兄にナーヴギアを借りる前に読んだ雑誌で見た、これはゲームであつても遊びではないとは、まさにこのことだろう。

——先ほど感じた感情が遊び？ ゲーム？ 冗談じゃない、この感情は本物。ならば……

明日奈は一つの決意をした。

このゲームが現実だというならば、死ぬ気で生きてやろうと。

あのまま宿屋に籠って腐っていくくらいなら、努力し、努力し尽くし、戦い抜くと。

そして、戦うための情報は今日の前にあるのだから……！

「アルゴさん、隠しログアウトスポットはデマなんですよね？」

「……ごめんネ、そんなものはないヨ」

あえてわかりきっていた質問をすることで、決意を確認する。

ここでログアウトができないならば、ゲームをクリアするしかないのだ。そして、ゲームをクリアするために必要なものは一つだった。

「じゃあ情報売ってください。どうすれば強くなれるかを」

「それは……死なないためかな？」

アルゴの返答は至極当然のものだろう。つい先ほどまで死にかけていたのだ。あの恐怖を体感し、死にたくない、死から逃げたいと思うのは当然の考えといえる。

しかし、明日奈が求めていたのは違うものだ。自分が求めるのは戦う手段。自らを押し上げ、誰の手も借りることなく、一人で立ち続ける手段。その情報を、明日奈はここで手に入れる必要があった。

「いいえ。もう二度と後悔したくないんです。何もできないままに死にたくない。わたしは、この現実で戦い抜くと決めました。でも今のままじゃ何もできない。何をするにも、わたしはあまりにも知らなすぎ。だから、情報が欲しいんです」

「ふうん……、じゃあまずはこれかな」

アルゴはそう言って、一冊の本を手渡してきた。

表紙には《SAO Strategy Guide 1F. Field Area》と書いてある。つまり第一層の攻略ガイドということだろう。

「参考書のようなものだネ。特別に無料タダにしておくから役に……」

立ててくれ。と続けるつもりだったが、急に渡したガイドブックを猛然と読みだした少女を前に、アルゴは啞然とし、言葉を続けることができなかった。

先ほど助けた直後は、絶望し濁った眼をしていたのに今では爛々と目を輝かせてガイドブックを読んでいる。

面白い子だ。

アルゴは偶然命を助けることができたこの少女との出会いに感謝した。

情報屋を名乗るアルゴにとって、情報というものは己の武器であり、その武器である情報を提供し生かしてもらうことこそが情報屋の存在意義、つまりアルゴの存在意義であった。

ほとんど無料で配っているガイドを渡すだけで、生き生きとした少女を見て、アルゴは一定の満足感を得ることができたのだ。

アルゴは情報を扱う仕事柄、情報収集のために様々な人間と関わりを持つ。特に情報を多く持ち、また求めているベータテスターやフロントランナーは、基本的にこの髭を生やした少女と顔見知りになる。つまり彼女は、最も危険な場所にいる者たちとの関わりが多いのだ。

巷ではベータテスターは情報を独占している。旨みのあるクエストや狩場を独占し、後続のプレイヤーたちの妨害をしている等と言われているが、実際のところはそうではない。多くのベータテスターは新しい情報を得るため、自らが持つ情報をアルゴに提供する。つまり、彼らは常に新しい情報を得るために動いているといえる。

新しい情報を得るためには危険を冒さなければならぬ。

自分自身でも情報を得るために前線に出ることはあるが、そう頻度は高くない。基本的には前線で戦いをしてきたプレイヤーたちから情報を得ているのだ。

だからこそ、アルゴはこのゲームで最も死に接していると言える。

昨日酒場で話したのに、今日は黒鉄宮の名前に二重線が引かれていた者。

行動不能に陥り、そのHPが無くなるまでアルゴにメッセージを送ろうとした者。

友人が死に、その死の状況を詳細に送ってくる者。

アルゴの持つ情報は、最前線を走り続けた者たちの多数の犠牲と引き換えに正確になっていく。

自身もベータテスターである以上、大手を振って活動するわけにもいかず、またそのような気性の持ち主でもなかった。

だが、数多の犠牲によって得た情報を無駄にすることは、アルゴにはできなかった。

そうして、少しでもこれからの犠牲が減るようにと各町の道具屋に無料で置くようにしたものが、先ほど目の前の少女に渡したものと同じガイドブックなのだ。

この少女が有効活用してくれることを祈ろう。

そう心の中で呟いたところで、アルゴはとあることに気付いた。

目の前の少女の名前を聞くのを忘れていたのだ。

「そういうえば御嬢さん、名前を聞くのを忘れていたけどなんて名前だ伊？」

普段なら情報代やら何やらと付け加えるところだったが、目の前の少女の様子を見てそんな気分でも無くなったアルゴは、気軽に名前を尋ねた。

「名前ですか？　結城明日奈です」

「ごめんなさい！　プレイヤーネーム！　プレイヤーネームでお願いしますー！」

気軽な質問に対して返ってきた答えに、アルゴは盛大に動揺した。

——まさかリアルネームを答えるとは思わなかった！

オンラインゲームにおいては、基本的にリアルの話はご法度。よほどのことがない限りは、どれだけ親しくしていても話題にしてはいけないのだ。しかし、彼女は平然とリアルネームを名乗った。ビギナーなのは理解していたが、オンラインゲームの初心者だとは思わなかった。

ただ。

その後プレイヤーネームもアスナであることを聞いたアルゴは、リアル情報についての話を懇々とレクチャーするのであった。

「周辺で転がってるプレイヤーもいなかったし、問題はなさそうだな」
右手に剣を持ち洞窟の周囲を回っていたキリトは、安全の確認が取れたことで先ほどの少女がいた場所に戻ろうとしていた。

情報屋である《鼠》のアルゴに、ログアウトができる場所があるというデマによって圏外に行ったプレイヤーが帰ってこない、原因のモンスター倒すの手伝えと言われたのは一時間くらい前の話。

ちやうど別の情報を欲していたキリトは、その情報を調べてもらうのと引き換えにこの依頼を受けた。

アルゴと同じベータテスターであるキリトは、他のベータテスターと同様常に最前線に赴き、自らのレベリングと情報収集に勤しんでいる。

そして攻略を続けているうちに、キリトは自らのベータテストの情報は当てにならないということを理解した。

ベータテストと正式サービスとの差異。絶対に死ぬことができない状況での戦闘、本来より押し進めることができた場所を進むことができず、戦闘時にもより危険な技を使うモンスターが増えている。

ベータテストでの情報を元に攻略するほうが危ない。

思わぬ落とし穴を踏めば即、死に繋がる。このような状況で、経験という名の先入観による盲目は極めて危険と言えた。

よって、キリトは正確な情報を求めた。そして、アルゴもキリトの持つ実践的な情報を求める。

必然的に情報屋アルゴとの繋がりは強くなり、アルゴからも相応のプレイヤーとして認識されていく。

——まあ、同年代として絡み易いってだけなのかもしれないが。キリトは現実での事情から、あまり人付き合いが上手くない。

普段こそ飄々とした態度でコミュニケーションを取っているが、自分から話題を振ったりするのは特に苦手なのだ。

そこら辺がばれているのか、時折からかわれたりするものの、基本的に会話を進めやすくしてくれるアルゴとの会話は、キリトにとって苦痛なことではなかった。

——モンスターは倒したし、オレンジになるのはごめんだ。犯人はアルゴに任せて退散しますかね。

依頼は達成したので町に帰る前に一言声をかけようと思い洞窟の前まで戻ってきたキリトは、やたらと生き生きとしている少女と、それを見て苦笑いしているアルゴという珍しい光景を見ることになった。

「……ビギナーさん随分と生き生きとしてるけど、何があつたのあれ」「ガイドブック渡したら生き返ったように読み始めたんだ。元気があるのはいいことだよ」

岩の上に座っていたアルゴは面白そうにビギナーの少女を見ている。

キリトとしても、あのガイドブックの情報源の一人である以上、あの本が有効活用されることは喜ばしいことだった。

あの調子なら、そう簡単に死ぬことはないだろう。

ぎりぎり助けに入ることができ、彼女が顔をあげたときに見えた瞳は絶望で濁っていた。しかし、今の彼女の眼は先ほどとはまるで違う。生きることを決意している目だ。

この世界は残酷だが、戦う術はある。あの少女が戦う道を選んだのであれば、同じく戦っている自分とまた会うこともある。その時まで健在であることを祈ろう。

「じゃあ先に帰るわ。あの件よろしくな」

「わかってるヨ。またよろしくナ」

アルゴに声をかけてから、キリトは町に向けて歩き始めた。

ビギナーの少女にも声をかけるべきか迷ったが、結局何も言わずに帰ることにした。熱心に本を読みこんでいるし、見知らぬ男性から声をかけられても迷惑だろうから。

「あの一！」

そんな時に、後ろから声をかけられた。振り返ると、ビギナーの少

女がこちらを向いている。

はて、何か用事だろうか。と見返すと、少女は見惚れるような笑顔と共にこう言った。

「助けてくれて、ありがとう」

コミュ障のキリトには、ああと一言呟くことしかできなかった。

命を助けてくれた少年の背中を見送る。

そういえば、彼の名前を聞いていなかった。

「アルゴさん、彼の名前はなんて言うんですか？ キー坊と呼んではいきましたけど」

アスナにとっては当然の疑問。命の恩人の名前を聞きたいだけのこと。しかし、アルゴはそれにこう答えた。

「気になる？ 気になる？ その情報は百コルだよ」

やたらとニヤニヤした顔を向けられて、アスナは軽い苛立ちを覚えた。

「アーちゃんがこのまま戦うことを選ぶなら、いずれ会う機会もあるだろうサ。その時に直接聞くといいヨ」

——確かに、一方的に名前を知るのも失礼かもしれない。わたしも自己紹介してるわけでもないし……。

いずれ会う機会。

彼はこの世界で戦うことを選んでいて、自分も戦うことを選んだ。

ならばその再会は必然かもしれない。根拠もないのになぜかそんなことを感じたアスナは、自らの考えを不思議に思いつつ手元のガイドブックを再度読み始める。

先ほどまでに読んだのは、モンスターに関すること。

このこの来るまでの道中に出くわしていた猪型のモンスターは、非アクティブという自分から手を出さなければ襲ってこないモンスターであることが書いてあった。

それを読んだとき、わたしの努力は一体と軽く気を落したものが、対処方法を理解できたから問題はないだろう。

《フレンジー・ボア》。通称青猪と呼ばれるそれは、今現在アスナ

とアルゴの周りに二、三匹存在していた。しかし、向こうから襲って来る様子はない。ガイドブックにはソードスキル一発で倒すことが可能と書いてあった。

——ソードスキルか。わたしが持つてるのは細い剣だから、この《リニアー》ってやつかな。

細剣スキルの最も基本な技である《リニアー》は、単発の突進技である。

発動方法はフェンシングのように構え、切っ先を捻るように放つ。アスナはガイドブックを収納すると、腰に下げていた細剣を抜く。視界の隅でアルゴがギョツとしているが、気にすることなく最も近くにいた青猪に向け剣を構える。

瞬間、アスナの身体は青猪に向かって突進した。

ソードスキルのシテムアシストを受け、加速したまま突き出した細剣は青猪の胴体を貫き、青い光のエフェクトに変える。ここまで来るときの道中に、慎重過ぎるほど警戒してきた相手に対してあまりにもあつけない勝利。

「なんだ、やればできるじゃない」

初めてモンスターを倒し多少の満足感を得つつ、アスナは自分に言い聞かせるようにそう呟いた。

速い。

アルゴは率直にそう感じた。

《リニアー》というスキルは確かに移動速度を向上させ、一直線に突き進むというスキルだ。

しかし、今アスナが放った《リニアー》はあまりにも早すぎた。

そして、放った後の姿はあまりにも美しかった。

同じ女性であるアルゴがそう思うほどに、アスナの《リニアー》は完成されていた。

——ついさっきまでソードスキルのソの字も知らなかったのに、何故これほどの。

細剣スキルを取れば誰でも使うことができる基本技。しかもアス

ナノレベルは恐らく1。まさにビギナーというにふさわしいプレイヤーのはずだ。しかし、アルゴが今まで見た《リニアー》の中で最も速く、最も鋭いのは今の《リニアー》だった。

——この子も、選ばれてるってことなのかナ。

アルゴは多くのプレイヤーを知る故に知っていることがある。稀にいるのだ、同じソードスキルでも別物のような動きをする化け物のようなプレイヤーが。そういったプレイヤーは総じて、戦闘時に目を見張る動きをする。どんな強敵と相対していても、目を向けずにはいれない程存在感を放つ。たとえそれが防御でも、剣の一振りであったとしてもだ。

先ほどの黒髪の少年、キリトはそういうプレイヤーだった。

そして、アルゴの直感ではこの少女、アスナも特別なプレイヤーになりえる。

きっとこういうプレイヤーたちが、ゲーム攻略を引っ張っていくのだろう。

アルゴはアスナに対する認識と重要性を上方修正した。

自分の直感が当たりますように。この出会いが、いい方向に働きますように。

アルゴはそんなことを願いつつ、そろそろ帰ろうとアスナに声をかけるのであった。

第二話

あの森での出来事から二週間ほどが経ち、その間迷宮区に潜り続けていたアスナは疲労と空腹を感じていた。

虚ろな意識の中で思い出すのは、自らが殺されそうになったとき、黒髪の少年がああ狼もどきを真つ二つにした光景。

アスナはあの時、助かったという安堵と同時に、美しいと感じた。分断され、青い光となつて散つた狼の奥に見えた少年の眼。

吸い込まれるような瞳の黒、その奥に見えたのは熱を感じるほどの意思の強さ。

その意思を汲み取るように狼を両断した黒い剣。

あのような美しさを、自らも持ちたい。あの人に追いつき、名前を聞きたい。

そしてもし叶うなら、死ぬ前に感謝を伝えたい。

そのため、アスナは睡眠も碌にとることなくひたすらに敵を倒し続けた。前に進み続けた。

しかし、無理が祟つたのだろう。肉体的な疲労がなかりと、気を張り続けていれば精神が疲弊する。

精神を回復するためには睡眠なり食事なりをする必要があるだろう。しかし、今のアスナにはその時間すら惜しかった。

今できることを全部する。

最前線で戦い続けるには、がむしゃらに努力をするしかない。

敵を倒し、レベルを上げ、あの人に追いつき、共に戦う。そして、いつか自分は死に場所を得るのだ。

今のアスナにとってそれだけが目標であり、生きる動機でもあった。

だが、そのような無理を続けた結果今の状況に陥った。

注意力は散漫とし、気力で動こうにも、体力的に問題ないはずの足に力が入らない。

精神的な疲れというのは、肉体にも影響するのか。仮想のものだけだ。

震える足を動かしつつ、アスナは前方に見えた扉を開ける。

——奥の部屋で少し休もう……。

迷宮区においてはあまりにも迂闊。正常な判断ができれば絶対にしないであろう行為を、アスナは躊躇いなく行った。

部屋に入ったアスナを待っていたのは休憩所であった。但しモンスターのという言葉が前につく。

大斧を持つ狼型のモンスターが九体。

ソロで動くアスナは基本的に一対一の状況で戦闘を行う。

稀に一対二での戦闘もあるが、敏捷性を強化してきたアスナにとっては特に問題なく捌くことができた。

しかし、九体。

さらに周囲を囲まれ逃げる場所はない。

消耗しきったアスナにとって、この状況を切り抜けるのは極めて困難だった。

——さすがにこの状況は厳しすぎるかな……。

モンスターが一斉に飛びかかってくる。

ターゲットがアスナだけである以上、スペースの関係から七体同時には攻撃できない。それを利用し、アスナは攻撃ができないモンスターたちの合間を抜け攻撃を加えていく。

大斧は重いための、振りが大きくなる。

アスナにとっては躲しやすい攻撃だったが、同時に一発も受けてはいけない攻撃でもあった。

前方から迫る二体が振り下ろす斧の隙間を縫い、逆に足に一撃ずつ攻撃を加える。足を執拗に攻撃し続ければ多少は動きも遅くなるだろう。迫ってくる斧の下、横を縫って進み、背後に回りつつ足を攻撃し続ける。しかし、一度にせいぜい一回か二回しか攻撃を加えられない。ソードスキルを使えないこの状況では、アスナの攻撃は致命的に火力が欠けていた。

敏捷性を高める代償は、筋力や体力。一発の重さではなく、手数とクリティカル攻撃の多さ。防御ではなく回避に特化させたアスナの

構成は、対多数の戦闘において効果的である。

アスナにはレベル相応の体力はあれど、敵の攻撃を正面から受け止めるための筋力や体力は持ち合わせていないのだから、当然逃げ回りながら攻撃することになる。

しかし、集中力を欠いた今のアスナにはこの猛攻を躲し続けることは不可能だった。

前方左右からの攻撃を回避し正面の敵に一撃を加えようとしていたアスナは、スペースが狭すぎるため一瞬足を止めてしまう。直後、背後から振られた大斧に気付いたが、回避することができなかった。

大斧の一撃が、アスナの真後ろからクリーンヒットする。壁際まで吹っ飛ばされたアスナは自らのHPゲージを確認する。

一撃死こそ免れたものの、一気にイエローまで削られたHPゲージ。横には一時行動不能のステータスマークが点灯していた。

一対一の戦いであっても決して受けてはいけない状態異常。それを一対七の状況で受けてしまった。

ポーションも使えず、回避もできない。

ただHPを削られるのを待つだけの状況。

——ここまでか。

包囲を狭めた狼たちが、斧を振り上げる。

——最期まで頑張った。戦い抜いたから、いいかな……。

迫りくる大斧を見つつ、アスナは思う。

生き抜くことはできなかつたけれど、戦い抜いて死ぬならば後悔はない。

はじまりの町の宿屋で腐っていくより、よほどマシであったらう。

——結局、あの人の名前を聞くことができなかったな。

心残りは、それだけ。

アスナは目を閉じ、振り下ろされた大斧を受け入れた。

「やらせるかよこの野郎！」

聞き覚えのある声に目を開く。

視界には見たことがある背中。

そして、上下真つ二つになった狼もどきが三体。

「今回も間に合ったみたいだな、細剣使いさん」

「貴方は……！」

「話は後だ、一先ずここを切り抜ける。動けるか？」

「え、ええ」

ふらつく足に活を入れ、立ち上がる。

HPゲージは黄色いままだが、一時行動不能のマークは消えていく。

攻撃を行うことは十分に可能だった。

「背中は任せた、同時に行くぞー！」

三カウントの後、同時に攻撃を仕掛ける。

追いつきたいと思っていた背中が、今後ろに。

背後の心配はない。ならば思う存分に動くことができる。

三体が倒されたことで大きく空いたスペースを、アスナは最大限に活用する。

アスナは持ち前の敏捷性でフェイントを仕掛け攻撃を外させる。それによってできた隙にアスナは渾身の《リニア》を叩き込む。

その速さはまさに流星の如く。

散漫だった注意力が研ぎ澄まされ、左右から飛んでくる攻撃を容易く回避し、出来た隙に細剣による突きが吸い込まれていく。

——今までで最高に調子がいい。もつと早く……正確に動ける！

アスナは無心に攻撃を繰り返す。背後で戦っている少年に攻撃がターゲットがいかないように誘導しつつ、自らを狙ってくる狼を青い光に変える。攻撃の手数を稼げる今、その火力は少年のそれに匹敵するほど高いのだから。

「突破口が開けた！ 安全地帯に逃げ……ここ……皆殺しですか！」

黒髪の少年の声が聞こえる。

気づいたら、自らを襲ってくる敵はいなくなっていた。

少年の方も残り一体のようで、数秒後にはその一体も青い光となっ

た。

「あの状況からよくもまあこんな戦闘を……あんま無理すると死ぬぞ？」

少年が剣を背中の鞘に収めながら近づいてくる。

確かに死んだと思った。少年が助けに入ってくれなければ間違いなく、黒鉄宮の Asuna の名前に二重線が引かれていたことだろう。

少年の言葉に対して、お礼を口に出そうとするも、戦闘後で気が抜けたのか、意識が遠のく。

——また、助けられたな……。

安堵と多少の悔しさを覚えながら、アスナの意識は暗転した。

目が覚めると、見覚えがある森の中だった。

——ここは、迷宮区の外の……？

体を起こして周りを見渡すと、木に背中を預けて目を閉じる少年の姿があった。

物音を立てないようにそっと近づいてみる。

「おはよう、細剣使いさん。よく眠れた？」

どうやら起きていたらしい。

すぐに目を開けて声をかけられる。

——見張ってくれていたのかしら。

疑問を浮かべたアスナの心を読んだかのように、少年は言葉を続けた。

「よく眠っていたから起こすのもなんだと思ってね。噂になってたよ、迷宮区の奥で狼を突き殺す赤ずきんがいるって」

笑いながら話す少年に対して、アスナは苦笑いしかできなかった。

アスナは赤いフード付きのコートを装備しているため、フードを被れば確かに赤ずきんと言える恰好だった。尤も、手に持つのはリングゴではなくレイピアで、狼に食べられるのではなく食べる——経験値的に——側だったわけだが。グリム童話も真っ青だろう。

仮想現実なのにロマンがない話だと、我ながら思う。赤ずきんぐら

い可愛げがあれば、もっとうまく人付き合いができるのだろうか……。

無いものねだりをしてもし方がないし、つい先程まで命のやり取りをしていたというのに、少年の飄々とした雰囲気はアスナの心の張りを緩めてくれた。会話がとげとげしくならなくて済む、今はそれだけで充分だった。

「また、助けてくれたわね」

「たまたまさ。ちよっと気になってね、少し様子を見に行こうと思っ
てきてみたんだ。そのおかげで今回は間に合った。でも、次は間に合
うかわからない」

「でも、そのたまたまで、わたしは二回も命を助けられた。お礼ぐらい
言わせてもらってもいいと思わない?」

アスナは少年の横に腰を下ろし、膝を抱える。

そして、心からの礼を、少年に伝えた。

「ありがとう。貴方のおかげで、わたしはもう少しだけ戦うことがで
きそう」

アスナはあの時、死んでもいいと思っていたのだ。

一か月で二千人が死に、未だ第一層の攻略の糸口さえ見つけられて
いない。

まるで進展がなく犠牲者だけが増えていくこの状況に、始まりの町
ではクリアは絶望的という噂が流れ始めているという。

正直なところ、アスナ自身クリアは不可能だろうと考えていた。

一か月で一層、百層を攻略するためにはこのままのペースで百か
月。八年以上の時間がかかることになる。仮にクリアへの糸筋が見
えたとしても、現実世界の体もたないだろう。長くても三年。その
程度でクリアしなければ、このゲームに殺されなくとも現実世界での
体が衰弱して死ぬ。三年も寝たきりで点滴のみの生活だ、体が弱けれ
ばこの時間はさらに短くなるだろう。

どうあがいても、現状が続く限り生きて現実世界に戻るのとは不可能
なのだ。

あの西の森で、アスナはこの世界を戦い抜くと決めた。

現実世界の死を覚悟してなお、何のために戦うのか？
それは死に場所を得るために他ならなかった。

現実世界の結城明日奈はあの西の森で死に、このSAOという現実で生きるアスナが生まれた。

自分は一度死んだのだ。もう怖いものなど何もなかった。

ひたすらに前に進み、少しでも情報を残し、後に続く者たちのために死ぬ。

マップピングをし、一度迷宮から出てマップデータをアルゴに送信してまた迷宮にもぐる。その繰り返しを二週間。

碌に休憩を取らずにひたすらに攻略に突き進む姿は、まさに攻略の鬼と言えた。

だが、それによって少しでも攻略が早くなるならば、それは本望だと、アスナは本気で考えていたのだ。

「もう少しだけと言わず、これから長いこと戦ってほしいもんだね。ただでさえ前線は人不足気味なんだ、君のような剣士に簡単に死なれるのは困る。助けたのが無駄になるのも、なんか気分悪いしな」

しかし、隣に座る少年はアスナに死なれるのは困るという。

どうせみんな死ぬというのに、なぜこの少年は……。

「それに、死ぬならマップデータを遺していつてもらわないとな。ホントは寝てる間にやろうと思えば色々できはしたんだけど……」

寝てる間……色々!?

その言葉を聞いた瞬間にアスナの思考は全て吹っ飛び、細剣を少年に向かって突き出した。

「ヒイツ!？」

「あなた、わたしの身体に何をしたの……?？」

「してません！ 何もしてません!!!」

ゆらりと殺気を放ちつつ少年に近づく。

寝てる間にいろいろできるとこの少年は言ったのだ。

つまり、わたしがさつき寝ていた時にこの少年は……!？」

「嘘おっしやい……!？」 寝てる間にわたしの身体に色々……その……したんでしょう!? そんなことする人じゃないと思っていたの

に！」

「濡れ衣だ！ 待つて！ できるつてだけで何かしたつてわけじゃないから！」

盛大に慌てている少年を見て、アスナは少しだけ冷静になれた。

そもそも何かするのであれば、こんなところまで連れてこないだろう。それこそ迷宮内の安全地帯で寝ている間に手足を縛られたら、こちらはどのようにすることもできないのだから。

「……まあ、実害はないようだし、何もなかったということにしておきましょうか」

細剣を収めると心からほっとしている彼を見て、軽いため息が出てしまう。

どうも本格的に、精神的に不安定になっているようだ。

寝ている間に何かされたのではと怒っていたのに、ほっとしている少年を見ると、何もされていないのは女性としてどうなのかといった思考が出てきてしまうのだから。

そんな何とも言えない葛藤をしていると、少年が立ち上がった。

「んじや、俺はそろそろ町に戻りますかね。君もそろそろ戻ったほうがいい。日が暮れてきたし、明日は大事な会議があるからね」

「大事な会議？」

「ああ、明日十六時からツールバーナの劇場で第一層ボスの攻略会議があるのさ。君は本調子じゃないようだし、今日は早めに帰って会議と攻略に備えたほうがいい。もちろん、君がボス攻略に興味があるなら、だけどね」

そういつて黒髪の少年はアスナに背を向けて歩いていく。あの時と同じように……。

キリトが攻略会議の開催場所である劇場に着いたのは、会議が始まる直前だった。

そこにはすでに三、四十名ほどのプレイヤーが集まっていて、主催者と思われる男がステージの前に立っている。

——結構集まってるな。さて、あの細剣使いフェンサーさんは……いた。

客席の端に座っている赤いフードのプレイヤーを見つけたキリトは、「横失礼」と一声かけてから腰を下ろした。

「やっぱり来たんだな」

「当然。レベルを上げたのはボス攻略に参加するためだもの」

「まあ君なら十分過ぎるほど戦力になれるだろうな。体調が万全なら、だけど」

瞬間ぎろりと睨まれる。

そして昨日すっかり休んだから問題ないわよと言って前を向いてしまった。

キリトは少女の眼光の鋭さに冷や汗をかきつつ、同様に前を向いた。

会議が始まってすぐ、キバオウと名乗る乱入者がベータテスターに対する糾弾を行い、それをエギルと名乗る男が仲裁するという騒ぎがあったものの、それ以降は順調に会議は進んでいった。

現在ステージ上では今回の攻略会議の主催者であるディアベルと名乗るプレイヤーによる、ボスに関する説明が始まっている。

ボスの名前は、《イルフアング・ザ・コボルド・ロード》といい、でかい犬が斧と盾を持って突っ込んでくる。体力が減るとタルワールという武器に持ち替えることがわかっている。ボスの周りには《ルイン・コボルド・センチネル》という取り巻きが三匹popするため、三班を取り巻きに、残りの班をボスに当てるとというのが基本的な戦法になるだろう。

ディアベルはアルゴの配布している——多くのプレイヤーは知らないだろうが——ガイドブックを見ながら説明をしている。

説明を受けたプレイヤーは皆納得をしているようだが、キリトには不安があった。

その情報はあくまでベータテストでの仕様で、正式サービスでの仕様ではないからだ。

——あまり目立つことはしたくないんだがな……。

質問を受け付けているディアベルに対しキリトは挙手で発言を求め。

「拳手してる君、発言をどうぞ」

「どうも。さつきディアベルさんが説明してくれたボスの武器や戦法なんだが、それはあくまでベータテストでの話ですよ？ 正式サービスで変更が入ることもあるんじゃないかと思うんですが……」

「確かにその可能性はあるな。取り巻きの数が増えるかもしれないし、ボスが持つ武器に違いが出てくることもあり得るか」

「はい。确实じゃない情報を盲目的に信じてしまうと危険ですけど、他の可能性もあることを想定しておけば多少は対応しやすいと思います」

「そうだな……。わかった、ありがとう。基本的にはガイドブック通りに行くが、ボスの動きに違いがあることも大いにあり得る。その場合は現地で判断するしかないから、作戦変更がありえるということをお頭に入れておいてくれ」

ディアベルの言葉に皆が頷く。

それを見てキリトは一息吐いた。これで盲目的な過信による犠牲は出なくて済むかもしれない。

「……意外ね。ソロのあなたは、あまり目立ちたくないのかと思っただ」

横から聞こえる声は、多少の驚きが混じっていた。

「目立ちたくないのは間違いはないんだが、指摘できることを指摘せずにそのままにするのはなあ……。どうも最近、そういうのが放っておけなくて。一体どうしちまったんだか」

キリトは苦々しい表情で答える。

ソロプレイヤーの行動指針は自分中心。他者に極力関わらず、自己の力のみを頼りに行動するのが基本だった。

しかし、最近のキリトはどうも世話焼きになってしまっていた。

迷宮で危なそうなプレイヤーの援護をするのは前からだが、頻度は間違いなく上がっているように思える。

「よし、それじゃあ各自自由にパーティーを組んでいこう！」

只でさえ苦々しかったキリトの表情は、この一言で苦虫を噛み潰したようになった。

この攻略会議で顔見知りはいても、彼らは大体フルパーティーを組める友人関係を持っている。

わざわざキリトに声をかけてくるとは思えなかった。つまり、キリトは必然的にぼっちになるのだ。

現実世界でもぼっちだったなーと嫌なことを思い出し、キリトの纏う雰囲気は沈んでいく

普段の狩りやフィールドボス程度ならともかく、階層ボスに挑むときにソロというのはさすがに不安だった。

そしてぼっち同士の必然か、自らの横にいる人物も、自分と同様の沈んだ雰囲気を出していたことに気付いてしまった。

「その様子では、細剣使いフェンサーさんもあぶれるみたいだね？」

「まあ、グループがあるみたいだし。見知らぬ人と組むのもね」

「じゃ、じゃあさ！ 今回のボス戦だけでもパーティーどうだ？ 流

石にボス戦にソロで参加するわけにはいかないし」

「……あなたから誘ってくれるなら、いいわ」

返答を聞いたキリトは、メニューウィンドウからパーティー申請を送る。

少女は申請を受託し、キリトの視界の右上にある自身のHPバーの下に少女の名前——Asuna——とHPバーが追加される。

——Asuna……アスナかな？

少女を見るが、パーティーを組んだことに対しての反応は特にないようだ。

互いの名前はHPバーの名前を見れば分かるわけだが、この少女が周りに名前を隠している可能性もある以上、下手に名前を呼ばないほうがいいだろう。女性プレイヤーにとって名前が広まることは決していいことではないし、この少女の場合他にも目立つ理由があるのだから。

——美人さん、だったもんなあ……。

初めて会った日、去り際にお礼の一言と共に見せてくれた笑顔。

それは、キリトの脳裏に強く刻み込まれた。

生まれてこの方家族以外の女性との関わりをほとんど持たなかつ

たキリトには、女性から笑顔を向けられるということは余り経験がないことだった。リアルでの自分の視線は常に下向きに設定されているし、そもそも引きこもり予備軍の自分にわざわざ声をかけてくる人間などいない。好意的な視線や表情を向けられることなど、皆無と言つてよかつただろう。

それでも生きて来られたのは、家族が自分に対してとても良くしてくれたこと。そして、仮想世界という逃げ場所があったからだ。仮想世界での、リアルとは無関係の人付き合いは、キリトにとって非常に重要な位置を占めていた。

それが故に、キリトは彼女のことを気にかけていた。

彼女が迷宮区に籠っている間、様子を見に行つたのは一度や二度ではなかった。アルゴからも様子を見に行つてやつてくれと言われてはいたし、個人的にも彼女に死なれたくはなかった。自分に好意を向けてくれた人間を、むぎむぎ死なせたくはない。この感情が影響してなのか、他プレイヤーの援護をする機会も増えて行つた。

一昨日の迷宮区では、彼女が一時行動不能スダメンをもらつて動けないでいるところに出くわし助けることができた。

その後、安全地帯まで移動してから一悶着あつたのだが、その時彼女は「もう少しだけ戦える」と言つた。まるで、自らの死が近いうちに来ると確信しているように。

彼女は恐らく、死を望んでいる。

自殺しようとしているのではない。殺されようとしているのだ。

自らが全力を尽くし、後悔することなく戦い抜く。その結果が死であるならば、受け入れるつもりなのだろう。だからこそ彼女は迷宮に潜り続ける。まるで死に場所探しに行くかのように。

どれだけ気をかけていても、本人が死ぬ気ならばどうしようもない。キリトもフロントランナーである以上常に彼女を見ているわけにはいかない。このパーティーもボス戦だけの約束であるし、その後も組み続けるかと言えば、恐らく彼女は拒否をするだろう。彼女は他人を自らの死に場所探しに付き合わせたりはしないはずだ。

それならば——視線だけを左上に向けキリトは思う。

自分の視界にこのHPゲージが映っている間だけでも、彼女を守りたいものだ。

パーティー編成があらかた終わり、その組み合わせに応じて役割が割り振られていく。

「君たちは二人パーティーか。さすがにボスの担当は厳しいだろうし、取り巻き担当の援護をお願いしたいんだが……」

「かまわないよ、了解。取り巻き潰しだって重要な仕事だし、二人なら遊撃もしやすいから」

キリトはディアベルからの指示を二つ返事で引き受ける。

先ほどパーティーを組んだ少女の意見は聞いていないが、否はなさそう。

取り巻きならともかく、二人でボスを相手にするのは流石に危険が大きい。

ボス戦でも突っ走ろうとするのかなとキリトは不安に思っていたが、この様子を見るにその可能性は無いだろう。

「よし、じゃあこんなところかな」

各パーティーの担当が決まったところで、ディアベルが会議を閉める。

「ボス攻略は明後日の正午。集合は朝の八時にここで。俺たちはこれから連携の練習に行く。明日は自由行動で練習するもよし、休養するもよしで、鋭気を養おう。解散！」

キリトの横にいた少女は、解散と聞いてすぐに劇場を後にしようとしていた。

キリトは慌てて追いかける。

「なあ、連携練習参加しないのか？」

「……何が重要な仕事よ。遊撃って要は戦力外ってことじゃない」

「ま、まあ二人だから仕方ないさ。スイッチこそできて、POTローテなんて組めないしなあ」

攻撃や守備の担当を交代しながら戦うスイッチはパーティー戦闘

の基本で、二人でも可能な動きだ。

しかし、二人ではPOTローテ——回復アイテムを使用し体力が回復するまで後方に下がるローテーションを組むことはできない。

定期的な回復をすることが難しい以上、常にターゲットをとり続けることはできないのだ。

「ね、ねえ。スイツチ……POTローテって何……？」

あ、そこからですか。

明日は連携の練習からだなど、気まずそうにしている少女を見ながらキリトは翌日の予定を立てるのだった。

第三話

スイッチとPOTローテ。

今まで一度もパーティーを組んだことがなかったアスナには、初めて聞く言葉だった。

「様子を見る限り経験はなさそうだね。……明日はその練習に充てたいけど問題ないか？ 早朝だけど、練習にちょうどいいクエストを受けられるんだ」

「かまわないわ。どうやら基本的なことみたいだし、今後パーティーを組む機会があるかはわからないけど……覚えておいて損はなさそうだし」

今回のボス戦で初めてパーティーを組んだが、このボス戦が終わった後は当然ソロで活動するつもりだ。

だが、ソロで動くつもりであっても一時的な共闘等はあるかもしれない。ありがたいことに、目の前の少年は練習に付き合ってくれるという。この機会を逃す訳にはいかないだろう。

「オーケー。じゃあ明日はそういうこととして……、これからどうする？ 今日中に動き方やクエストの内容やらの説明しておきたいし、その辺の酒場で打ち合わせでもしないか？」

「……あまり人目に付きたくないわ」

ソロで活動することが前提なのだから、誰かと一緒にいるところをあまり見られたくなかった。

この人と食事すること自体は、別に嫌ではないのだが……。

「じゃあ、どっちかの宿とか？ 鍵とかかけれるし」

「絶対ごめんだわ！ 何するつもりなの!? いやらしい！」

前言撤回。こんな狼と一緒に食事なんてできない。

アスナは全力で拒否し、自らの宿に戻っていく。

「ちよ、ちよっと待って！ そういうつもりじゃなくて！」

後ろから慌てたような声が聞こえるが、気にしない。

いきなり宿に連れ込もうとする男の言葉に耳を貸す気なんて、アスナにはさらさらないのだ。

「ほら、うちの宿なら、一泊八十コルで格安だし！ 部屋も広いし、牛乳も飲み放題！」

宿の問題じゃない、一緒に泊まる人間の問題なのだ。

「あとはあんまり使わないけどお風呂とかもあるし！」

瞬間、アスナは踵を返し持ち前の敏捷さで一気に少年の胸倉に掴み掛る。

「ヒイッ！」

少年が怯えた顔をしているが、そんなことは今のアスナに関係なかった。

「お風呂……あるの？」

お風呂に入れる。アスナの頭の中はそれでいっぱいだったからである。

「わあああ……！」

アスナの目の前には、小さいながらしっかりとっていて、お湯がなみなみとたまっている浴槽があった。

「食事はお風呂に入ってからにしよう。では、ごゆつくり……」

少年が浴室の扉を閉める。

——鍵はついて無さそうだけど……まあ、大丈夫よね？

少年の顔を思い浮かべ、問題ないと判断したアスナはメニューから武器防具全解除を選択する。

続いて衣服、下着、髪型を全解除し、生まれたままの姿になったアスナはそつと浴槽に足を入れる。

一か月ぶりのお湯の感覚に、アスナの身体はビリツと震える。

「あ……っ……」

声にならない音がアスナの口からこぼれる。

足をお湯に入れただけでも、張りつめていた精神が緩んでいくのを感じる。

給湯口から流れ出るお湯を、アスナは頭から被る。

——温かい。

S A Oに囚われて一か月。口にするのは安物のパンと水のみ。

安宿に籠った後は、薄暗い迷宮区に籠った。

アスナはこの一か月、この温かさと全く無縁の生活をしてきたのだ。

アスナは後ろから浴槽に倒れこむ。

アスナの全身が温かいお湯に包まれる。

もう、我慢できなかった。

「ふああああああああ……」

緊張とは無縁の声がアスナの口から発せられた。アスナの心も身体も、お湯の温かさで溶けきってしまったのだ。

——もう、思い残すことは何もない。明後日のボス戦で死んだとしても……いや、最後に甘いものを食べたいな……。

浴槽で存分に身体を伸ばしながら、アスナは思う。

わかっていなのだ。このお湯の温かさも、この満足感も、すべてはナーヴギアから発せられた電気信号でしかない。紛うことなき偽物なのだ。

でも、この一回の入浴ほど、アスナの心を満たしたものはあつたらうか。

現実ではとある企業の社長令嬢であつたアスナは、毎日の食事やお風呂に事欠くことはなかった。

食事はそれ相応の価格のものだし、お風呂も広く、二十四時間入ることができた。

それは明日奈にとってはあつて当然のもので、それに対して特別な価値を感じたことはないのだ。

——食事をして、お風呂に入っても、満足感を感じることもなくて今までなかった。でも、この入浴は今までのどんなものよりも貴重に思える。

お風呂に入りたい。甘いものが食べたい。

この感情はナーヴギアが作り出したもの。それは間違いない。

しかし、この作り出された感情を否定することは、今のアスナには不可能だった。

結局宿に連れてくることになった少女が浴室に入るのを見送り、キリトは窓際に備え付けられた椅子に腰かけた。

扉一枚を隔てて美少女がお風呂に入っているという事実には、キリトは心穏やかでいることはできなかつた。しかし、考えれば考えるほど落ち着かなくなることはわかつていたので、水でも飲もうとキリトはコップに入った水をアイテムストレージから取り出した。

浴槽からちやぷん、ちやぷんと水音が聞こえる。

この宿屋の周辺は牧場で、夜になると物音一つ聞こえない。

鍵のない扉に隔られた浴室から聞こえる音は、十四歳の少年であるキリトを大いに葛藤させた。

——これは予想以上に辛い……。落ち着け、クールになれ。

自制心を総動員し、キリトは心を落ち着かせる。

たとえどんな理由であれ浴室の扉が開いてしまえば、次の瞬間、キリトは犯罪者収容施設の黒鉄宮こくてきみやう行き間違いないのだ。

「ふああああああああ……」

キリトはグラスを落とす。キリトの精神のHPゲージはイエローになっていたが、レッドには至っていないかつた。

キリトは自らのチキンハートに感謝する。

——はやく、上がってこないかなあ……。

自分の度胸の無さを褒めるといふ悲しい事態に心の涙を流しつつ、キリトは頭の中の邪心を抑えつけるのであつた。

コンコココンツ。

唐突になつたノックの音に、キリトは読んでいた逆さまのガイドブックを落とす。

——このノックの仕方はアルゴかな。

扉を開けると、予想通り情報屋の少女アルゴが立っていた。

「珍しいな、あんたが直接部屋に来るなんて」

「いやなに、どこぞの剣士が少女を風呂で釣って宿に連れ込んだって噂が流れててネ」

「ま、まっさかあ。そんなことあるわけないじゃないか。いや、途中ま

で一緒だったけど、もう宿に帰ったんじゃないかな？」

アルゴの直球過ぎる指摘に、キリトは冷や汗を流しながら否定する。

そんな噂が事実だと流れたら、自分はもう女性プレイヤーと話す機会はなくなってしまうだろう。

「ふーん。まあ、この間の依頼の報告もあるんだ。お邪魔するヨ」

「あつ、こらっっ！」

アルゴは躊躇うことなく部屋に入っていく。

部屋に入り早々に内装の物色を始めたアルゴを尻目に、キリトは頭を抱える。

「ん……、何だこの部屋……バスルーム？ 情報通り風呂があるじゃないカ、キー坊」

アルゴは当然のように浴室に気付く。

——まずい……！！

その扉を開けられたら、キリトの運命は牢獄行き一択だ。

「ちよっ、待てー！」

扉を開けようとしたアルゴを抑えにかかるも、アルゴは身体を回転させひらりとかわし、逆にキリトの足を引っ掛ける。顔から床に突っ込むことになったキリトには、アルゴが扉に手をかけるのを止める術はなかった。

「さて、ぐ（開帳……こりゃ驚いたナ」

浴室の扉が開かれた。

キリトは浴室から白い湯けむりが流れ出てくるのを確認する。

——終わった。

キリトはそーっと顔を上げた。

少女がこちらを振り向いている。

茶色の髪からは水しぶきが飛び、傷一つないきめ細やかな肌色の上には、たった今装着したばかりであろう——おそらく初期装備の——白い下着。

突然の出来事に呆然としている彼女と、同様に頭の回らないキリト。

「えつと……そこも初期装備……なんですね？」

直後、キリトは自分に向かつてくる流星を見た。

しばらくしてキリトは目を覚ました。床に転がったままであったので体を起こす。

部屋の中には椅子に腰かけたアルゴ。そして、ベットの上には丸い物体が毛布を被っていた。

茶色の髪がはみ出しているため、細剣フェンサー使いの少女であろうが、先ごとの出来事もあつてか声をかけることもできなかった。

「いやあ、とてもいいものを見せてもらったよキー坊。こんな場所で痴話喧嘩を見れるとは思わなかったヨ」

痴話喧嘩という単語に、ベットの上の物体がピクリと反応する。

しかし、反論すると墓穴を掘ると思ったのか、また動かなくなった。

「勘弁してくれ。流星に黒鉄宮行きを覚悟したぞ今回は。それで、報告があるって言ってたな。さっそく頼むよ」

キリトは右手で頭をかきながらアルゴの座っていた椅子の対面に座る。

「ン？ いいのかいキー坊。ここで話しても」

アルゴはベットに視線を向ける。確かに、今から話す内容はビギナーに聞かせるには少々問題があるかもしれない。しかし、どうせ明後日のボス戦の後にはすべてが明らかになるのだ。あらかじめ知っているならばこの少女も口を出すことはないだろう。

この少女が薄汚いベータテスターと深く関わっている。

そんな噂が流れるのを、キリトは是としなかった。そして恐らく、対面に座るアルゴもそう考えているのだろう。だからこそ、キリトとこの少女が一緒にいるこの場所にわざわざ訪ねてきたのだろうから。キリトは黙って頷き、アルゴに話を促す。

「……わかつた。では手短かに報告するヨ」

ベータテスターのこの一か月の死者は約三百名。公式サービスのベータテスターログイン率の予測から、損耗率の推計値は40%前後。ビギナーの約二倍。

アルゴはこの事実を淡々と口にした。

「……予想より多いな」

「ベータテストとの差異はほんの少しだ。実際に配布しているガイドブックの情報である程度は通用しタ……それを当然と思っているベータテスター以外にはナ。武器が違ウ、使う技が違ウ、モンスターpopの間隔が違ウ、本当に少しの差異がベータテスターには落とし穴になる」

当然と思っていた知識から、少しの違いで落とし穴に嵌る。そして、その落とし穴にすぐに気づけなかったものは代償を支払うことになる。命という名の代償を。

「ディアベルは、この情報をお前に聞いたか？」

「……その情報は百コルだヨ、キー坊」

アルゴの返答が遅れる。ということは、そういうことなのだろう。ディアベルは現状のベータテスターとビギナーの確執を、はつきりと認識している。

あの始まりの街でのデスゲーム宣言を聞いた直後、ひたすらに前に走り続けた。

数少ないリソースと……より良い武器、効率の良い狩場を求めて、ベータテスターたちは前に前にと走り続けた。剣を振ることすらおぼつかないビギナー達を置き去りにして。

ベータテスターはいち早く前線を経験することで、後続の者たちへ情報を残す。

しかし、後続したビギナー達はこう考える。ベータテスターは自分たちを見捨て、旨みのある狩場を独占し、自らの利益のためにしか動かないと。

ビギナーとベータテスターの亀裂は、修復不可能なまでに広まっていた。

明後日のボス戦で一人でも死者が出れば、その不満は全てベータテスターへと向く。

ビギナー達のベータテスターへの不信はもう抑えきれない。

「まあ、了解したよ。情報助かったぜアルゴ。また頼む」

キリトはメニューを操作し、指定されていた金額をアルゴに送金する。

確かニ。とアルゴが金額を確認し、そのまま立ち上がる。

「じゃあオレたちはもう一人の方に情報を伝えてくるヨ。またナ、キー坊。細剣使いフエンスァーさんにもよろしくナ」

アルゴが部屋を出ていくのを見送り、キリトは溜息を一つ吐いた。何とも気が重くなる話だ。かじ取り一つ間違うと、ベータテスターとビギナーの全面戦争だ。一度そうなってしまうえば、負けるのは圧倒的に人数の少ないベータテスターの側。残されるのは情報源を失い、手探りで進まねばならないビギナー達。ゲームクリアなんて遠い夢、不可能になってしまおうだろう。

——何とも気が重い話だ。

この状況で求められるものがなんなのか、キリトは理解していた。一つは皆をまとめる統率力を持つ英雄。そしてもう一つは……、

「ねえ。今の話、どうしてわたしに聞かせたの？」

聞こえた声に、キリトは思考を一旦停止させる。

「わたしにはベータテスターもビギナーも関係ないけど、ああいう話をするってことは貴方はベータテスターなんでしょう？ わたしにも隠しておいた方がよかつたんじゃないの？」

少女は起き上がり、ベットの从上からこちらを見ていた。

こちらを必要以上に警戒しているという感じではないが、納得のいく理由が見つからないのだろう。その表情には明らかな疑念の色が広がっていた。

「その理由はボス戦の前にも話すよ。ちよつと面倒な話になるしな。それより飯にしよう、腹減つたらろ？」

キリトは無理矢理話題を変える。

実際に今話してもどうしようもないことであるし、話す内容にしても最低限のことしか話すつもりはなかった。

「……まあ、いいけど」

少女はベットから降り、先ほどまでアルゴが座っていた椅子に座る。

キリトはストレージからパンを二個取り出すと、一つを少女に手渡す。

「一番安いパンだけど、結構うまいよなこれ」

「本気で言ってる？ 味なんてほとんどしないじゃない」

「そのまま食べたらな。ちよつと工夫すると中々食えるんだ、一日一回は食ってるよ。……これ、使ってみてくれ」

キリトはメニューから小さな器を取り出し、椅子の間にあるテーブルの上に置く。少女がその器を軽くつつくと、指先が光った。

キリトはパンに塗るように促す。

「これは……クリーム？」

「騙されたと思って食べてみなよ」

じつとクリームが乗ったパンを見ていた少女は、意を決して齧り付く。

一瞬固まったかと思えば、一気にパンを食べつくしていく。

よほど気に入ったのだろうか。

このクリームをもらえる逆襲の牝牛というクエストは、手間の割に経験値やコルがおいしいクエストだ。一日ガッツリ周回したため、クリームの在庫にはまだ余裕がある。

「もう一個食べる？」

キリトの問いかけに少女はびくりとしたが、一拍おいて拒絶した。

「……いい。美味しいものを食べるために、ここに居るわけじゃないもの」

「じゃあ、何のために？」

「自分が自分であるために。あの時貴方に助けられたとき、決めたの。最初の街の宿屋に籠って腐っていくくらいなら、自らの意思で戦い、戦い抜いて、そして……！」

『満足して死ぬ』、か」

「そうよ。ゲームのクリアまで百層。なのに一か月かかっても第一層すら攻略できていない。単純計算で百か月、八年以上よ？ ゲームをクリアする前に現実のわたしたちの身体がもたない。無理だわ、わたしたちはここで死ぬ。もう、帰れない」

少女の表情には絶望と諦観がうかがえる。SAOに囚われた者たちが直面している現実。

この少女が言ったことは的を射ていた。現状がこのまま続くようでは、ゲームクリアはおろか半分の五十層までたどりつけないだろう。攻略が長引けば、現実世界で体力のない者から徐々に脱落していく。最終的にはラスボスを見ることも叶わないまま、この世界の人間はいなくなるだろう。それほどに、ゲームの攻略は停滞し状況は切迫していた。

それでもと、キリトは思う。

自分のエゴなのは理解している。常に死の危険と隣り合わせのデスゲームで、こんなことを言うのは都合がいいとも理解している。この少女が死に場所を得ようとしているのも、今の言葉から明らかだ。しかし、キリトは言葉に出さずにはいられなかった。

「それでも俺は、君に死んでほしくない、生きていてほしいと思ってるよ」

少女が驚いたようにこちらを見る。

彼女が青いポリゴン片になる光景だけは、見たくない。

彼女の作る笑顔が砕けることだけは、決して許してはならない。

少女の顔を見返しながら、キリトは心の底からそう思う。そして、自嘲する。

——共にいられるわけじゃないのに、何を都合のいいことを言ってるんだか。

話は終わったと、キリトは立ち上がる。

明日の朝は早い。クエストの関係上、七時にはここを出なければならぬだろう。

「明日は七時にはここを出なきゃならないから、それまでに用意をしておいてくれ。何かあればメッセージを飛ばしてくれ。部屋は隣だからすぐに来れるようにしておくよ」

最後におやすみと言って、キリトは部屋から出る。最後に少女が何か呟いていたような気がしたが、何かあるならメッセージが飛んでくるだろう。

つまらないことを言ってしまった。

キリトは自分の部屋に戻る間に、軽い後悔で溜息を吐くのだった。

「なんなのよ、もう」

少年が部屋から出ていくのも気にせず、アスナはそう呟いた。

アスナの頭の中では少年が言った言葉が繰り返し流れていた。

死んでほしくない。

このデスゲームに囚われて、初めて言われた言葉だった。

生きていてほしい。

親にすら、こんなことを言われたことはなかった。

両方とも、自らを気遣う言葉。

あの少年は、アスナの命を気遣ってくれたのだ。

「なんなのよ、もう……」

再び同じ言葉が出る。

現状ではゲームクリアなんて不可能だし、遠からずみんな死ぬ。アスナはそれを口に出した。内容は間違っていないなかっただろう。そのことはあの少年もわかっていた筈だ。

それなのに、あの少年はアスナに生きてほしいと言う。

——そんなこと言われたら、簡単に死ぬなんてできないじゃない……。

アスナは死に場所を探していた。

自らが満足すれば、それでいいと思っていた。この世界に現実での知り合いなんていない。誰にも知られることがなくても、戦い抜いて死ぬなら満足できる、そう思っていたのだ。

だからだろうか。

少年の純粹に自らを心配する言葉は、アスナの心に深く突き刺さった。

アスナは椅子に座ったまま、膝を抱える。

「ホント、なんなの……」

膝に顔を埋めたアスナ。その頬が紅潮していることを指摘する者は、誰もいなかった。

第四話

ウインドフルーレ。

第一層のクエストボスからドロップする細剣であり、この階層では最も軽く正確な攻撃を放てる武器だ。敏捷性や正確な攻撃によるクリティカルを狙うプレイヤーにとって、この武器を入手できるかどうかで初期レベリングの効率は大きく変わる。細剣使い自体の数が少ないため市場に出回ることは少ないが、第一層の細剣カテゴリの最上級に位置する武器は、間違いなくウインドフルーレであった。

今、その珍しい細剣使いであるアスナの腰には、ドロップ後強化されたウインドフルーレ+4が差されている。

本日早朝、アスナはパーティーの少年とクエストボスの討伐を行った。その内容は、彼曰くちようどいいクエストであったわけで、アスナは存分にスイッチの練習を行うことができた。

自らが可能な限り攻撃を行い、敵攻撃を誘い出してから交代。その動きをひたすらに続ける。これまでのアスナは攻撃の回避に徹していた。攻撃を回避することで敵の隙を作り、そこに攻撃を加えていた。しかし、ただ攻撃を回避するだけでは行動停止時間が短く、急造のパーティーではスムーズな交代が難しい。よって、敵の攻撃を防ぐか弾くかしなければならぬのだが、これが意外に難しかった。

敵の攻撃を受け止める筋力を持たないアスナは、必然的に攻撃を弾く選択肢を取らざるを得ない。敵の攻撃を弾くには、向かってくる敵の武器に対して正確なクリティカル攻撃が必要になる。動きを止めている相手に対してクリティカルを打ち込むことは、今のアスナには難しいことではなかった。しかし、それなりの速度で動く敵に対してクリティカルを打ち込むには、アイアン・レイピアでは少々正確性が欠けた。尤も、ウインドフルーレを手に入れたことで正確さは比較的解消されたので、問題はなくなったわけだが。

今まで初期装備のまままで走り続けたアスナにとって、武器を変えることによる変化は驚愕に値するものだった。

自分の思う場所を突くことができ、その鋭さも増したことでダメージ量も大きく上昇した。

これならば、足手纏いになることはないかもしれない。

レベリングを開始するのが遅かったアスナは、無茶なレベリングによつて最低限のレベルを確保しているものの、それでも明日ボス攻略に参加するプレイヤーの中では最下層に位置するだろう。パーティを組んだ経験もなく集団戦の経験も初めてだ。予期せぬ事態で動けなくなることは十分にあり得た。

——命がけの戦いで力が足りず、自分だけが死ぬならばいい。でも、足を引つ張り周囲の人間を巻き込むことだけは避けたい。特に、今自分の前を歩いている少年だけは、絶対に……。

昨日の夜、彼に言われた言葉が脳裏によぎる。

死んでほしくない、生きていてほしい。

アスナの心に深く刻まれた、二度も命を救ってくれた彼の言葉。

死に場所を探し無茶な戦いに挑んでいた自分を、危険を承知で助けてくれた。現状に絶望し、現実での死を訴えてもなお、生きてほしいと言ってくれた。彼に命を助けてもらったおかげで、自分は走り出すことができた。

アスナはこの少年から与えられてばかりであることを自覚している。

今腰に差しているこの剣だってそうだ。本来なら、自分は店売りのアイアン・レイピアでボス戦に挑むことになっただろう。しかし、今アスナはウィンドフルーレという強力な武器を使うことができる。強化することができたのも、余ったお金で防具を整えておくというのも、皆彼の助言だった。

このままでは彼に追いつくことなんてできないだろう。一方的に与え、与えられる関係。そんな関係が長く続くわけがない。彼と共にありたいならば、自分と共にいるメリットを彼に与えなければならぬ。

——彼と共に？ ……何を考えてるの、わたしはいつか死ぬというのに。

足が止まる。アスナは自らの感情が制御できていないことを理解していた。この葛藤がどういった感情から来るものなのか。ただ、悪感情からのものではないことだけはわかっていた。

「急に止まってどうした？ ラグったか？」

足を止めたアスナに気づいたのか、前を歩いていた少年から声がかかる。

なんでもない。と返し、アスナは再び歩き始める。

明日のボス戦でこの葛藤は晴れるのだろうか。そんなこと思いながら。

路地裏に入っすぐの壁に背中を預け、キリトはアルゴからの報告を待っていた。

早朝からパーティーを組んだ少女とクエストを攻略し、彼女の武器の強化まで終わったところで予定が無くなった。

予定がないのなら、買いたいものがあるので失礼する。と言う少女を見送ったあと、キリトはアルゴにとある依頼をした。

昨日、宿屋で彼女が語った言葉。

このままのペースではクリアする前に現実の身体がもたない。もう、帰ることはできない。

キリトにはその言葉を否定することはできない。

攻略序盤は安全マージンを手に入れるため、より長くレベリングをする必要があるのは理解していた。しかし、それでも一か月という時間はキリトには予想外だった。想像以上に被害が大きい。前線で戦うことのできる戦力がごろごろ消えていく。さすがに直近では死者の数は減ってきているようだが、それでもゲーム開始初期に前線に出ていた人間たちは今どれほど残っているだろうか。

失った戦力は戻らない。この世界では人が減ることはあっても、増えることはない。戦力を増やすにはビギナー達の育成が必要だが、皆が皆戦う意思を持っているわけではない。仮に戦う意思を持ったとしても、最前線まで来るまでには膨大な時間が必要になる。しかもこの停滞した状況では、希望を持ち続けることは難しい。クリアできる

という希望がなければ、人は前に向かって進めない。もし失敗すれば、フロントランナーに被害が出るだけではなく、この世界は絶望に染まってしまおうだろう。

だからこそ、明日のボス攻略は失敗するわけにはいかなかった。

——だが、もし失敗すれば……彼女はとうするのだろうか。あの時のように死に急ぐような戦いをするのでは……。

少女が死を求めているのは理解していた。

キリトは不安になった。彼女が言う買い物というのは、死ぬための準備なのではないかと。

細剣使いの彼女が何を買いに行ったのか、調べてほしい。

アルゴは程なくして戻ってきた。

曰く、死ぬ前の人間があんなものは買わない、という。

アルゴにしては抽象的な報告だ。しかし、アルゴがあフェンサーの細剣使いの少女を気にかけていることを知っているキリトは、それ以上聞くことはしなかった。情報屋としてのプライドを持つ彼女が言わないのであれば、それは聞かないほうがいい。

キリトは指定された千コルをアルゴに送り、路地裏を後にした。

ボス攻略当日。

四十四名のボス討伐隊は列を作り迷宮区を歩んでいる。迷宮区のモンスター自体はもはやこのメンバーの敵ではない。popした瞬間に倒されてはポリゴン片に変えられていく。列から少し間を開けて、最後尾を歩いているキリト達には出番が回ってくることはなく、ただ黙々と歩き続けるのだった。

「……ねえ、アルゴさんの話をわたしに聞かせてくれた理由、教えてくれる？」

ああ、そういうえば約束もしたか。

少女の突然の問いかけに、キリトは一昨日の会話を思い出す。アルゴから受けたベータテスターの損耗率と、ビギナーの損耗率との差。ビギナーよりも二倍の割合で、ベータテスターは死んでいった。数こそ少ないため、人数ではビギナーの方が圧倒的に多いが、それでも死

者の中のベータテスターの割合は無視できない数であった。

「君も薄々感じてるとは思うが、ベータテスターをビギナーの間には深い亀裂がある。最初の攻略会議の時に、キバオウがベータテスターの追及をしたのがいい例だ。ビギナーの多くはベータテスターに強い不満を持っているんだ。自分たちを見捨てたとね。……そして、それは事実だ。多くのベータテスターは自らの利益のために、ビギナーを置いて走り出した。もちろん、俺も」

キリトの脳裏にはデスゲームが始まる前に出会い、ほんの少しだけレクチャーをした青年——クライン——の顔が思い浮かぶ。

茅場晶彦による<<チュートリアル>>が終わり、広場から出られるようになった瞬間、キリトはクラインを連れ出した。始まりの街周辺のリソースはすぐに埋まる。お前一人なら次の街まで連れて行けるからついてこい、と。

クラインは拒否した。

自分には共にSAOを購入した仲間がいる。見捨てるわけにはいかない。

それを聞いて、キリトはクラインを見捨てた。クライン一人なら何とかできる自信はあった。しかし、クラインの仲間までとなると、キリトの手には余る。

連れていけない。

そう判断したキリトは、一人で街を飛び出した。

この時の判断によって、キリトはフロントランナーの中でもトップクラスの實力を得ることができた。ひたすらに先行することで、高い経験値、より良い装備を確保してきたのだ。

だが、同時に思う。

自分がある時、クラインの仲間と共に進む選択肢を選んだのならば……。

ベータテスターがここまで憎まれることはなかったのではないだろうか。自分一人がビギナーと共に歩んだところで大した影響はないだろう。でも、もしかしたら、ビギナーとベータテスターの間の架け橋くらいにはなれたかもしれない。

だが、キリトはその選択肢を選ばなかった。その結果が今の状況、この状況を作ったのは、間違いなく自分も原因の一つなのだ。

少女はこちらを向いているが、言葉を発そうとはしない。

それを確認してから、キリトは続ける。

「俺は最初の攻略会議で、ボスの仕様がテストから変わっているかもしれないと発言した。ディアベルもそれを認め、皆も認識した。でもね、誰か一人でも死んだらビギナーはきつとこう考える。情報は正確じゃなかった。ベータタテスターの情報は信用できないってね。冷静に状況を考えれば分かることなんだ。テストと正式サービスは違うと。でも、そんな考えが通用しなくなってるくらい、ベータタテスターに対するビギナーの不満は大きい」

攻略が上手くいっていれば問題なかった。例え半分の間人が死んでも、定期的にクリアに近づけるのなら大きな不満が出ることはないだろう。進んでいるという実感があるのだから。

しかし、今の状況は違った。テストゲームが始まって一か月何の進行もなかったのだ。そんな中でボス戦の情報が間違っていたらどうなるか。自分たちを見捨てたベータタテスターは、攻略の邪魔をしようとしている。なんて考えが出てきかねない。

そうなれば、ベータタテスター排斥の動きが必ず出てくるだろう。攻略に不可欠な、レベルが高く知識も豊富なプレイヤーを失うことになる。自分達の首を絞めるようなものだ。

「君に話を聞かせたのはこれが理由だ。正確な情報を知っていてほしかった。ボス戦の後どうなるかはわからない。だが、どんな結果になってもどうすれば自分が巻き込まれないか、それは理解できただはずだ」

「何が起きても、被害者の振りして黙っている。……そういうことね」
少女の答えにキリトは頷く。

この少女は特殊な行動をしていたため、事情に疎い。ボス戦に参加するためにパーティーを組むのは仕方なかったが、それはつまりベータタテスターと関わらせてしまうということだ。関わった以上、彼女にもヘイトが向きかねない。ならば事実と背景を理解してもらうこと

によって、問題に巻き込むことを避けてもらう必要があった。

「貴方は、自分が生贄になると確信しているのね」

聡い人だ。キリトは素直にそう思う。

求められるのは英雄と生贄。一人はベータテスターとビギナーの橋渡しになり、一人は他のベータテスターに向かう憎悪を一手に背負う。間違っても、情報屋の彼女が憎まれるようなことがあつてはならない。

「……もうすぐボス部屋につく、前に追いつこう」

少女の言葉に答えることなく、キリトは話題を終わらせるのであつた。

ボス攻略は問題なく進んでいる。

事前情報と同じと判断されたボスに対して、各班は落ち着いて対応できており、このまま進めば誰ひとり死ぬことなく攻略ができるかもしれない。

そして、自らに与えられた役割は取り巻き潰しだ。

「スイッチ」

取り巻きである<<ルインコボルト・センチネル>>が持つメイスを弾き返し、細剣フェンサー使いの少女とスイッチする。

ほぼ同時に発動された<<リニア>>がセンチネルの弱点である喉元にクリティカルヒットし、HPゲージが大きく削れているのが見える。

飛び込みの思いきりと、ソードスキル発動からダメージの発生までの速さが尋常ではない。アイアン・レイピアでも目を見張るほどの速さだったが、強化されたウィンドフルレを持つことによってそのスピードは格段に上がっている。スピードと正確性は、今攻略に参加している中で最上位なのは間違いない。剣を使う者ならば目を離すことができない程に、その剣の速さ、鋭さは存在感を持っていた。

彼女が今使っているのは<<リニア>>だけ。

今後使える技は増え、剣技は研ぎ澄まされていく。

この少女がどこまで行くのか。どのような剣士になるのか。その成長を傍で見たいと思うのは、当然の欲求であるように思えた。しかし、キリトにそれは許されない。ベータテスターである自分が傍にいれば、この少女も巻き込んでしまう。未来を潰しかねないのだ。

「これで、終わりー！」

クリティカルで体勢を崩され、喉元に集中攻撃を受けたセンチネルがポリゴン片に変わる。

順調だ。攻略は極めて順調だ。

取り巻きの排除はRepopよりも早く進み、取り巻き対応の班はPOTで全回復できている。

ディアベルからの指示があれば、即座にボスに向かうことも可能だ。

部屋の奥では、HPゲージが最後の1本に入った<<イルファング・ザ・コボルトロード>>が武器を投げ捨て、腰の剣に手を伸ばしている。

「ボスの武器が変わったぞ！ 範囲攻撃はもう来ない、取り囲むんだ！」

ディアベル率いるC隊がイルファングを取り囲むように並ぶ。変更の武器は曲刀だ、横薙ぎ攻撃はせずひたすらに振り下ろしの攻撃をしてくる。一発の火力は大きくなるが、範囲攻撃がなくなるためこちらの火力も大幅に上がる。はずだった。

——細い！

頭の芯にピリツとする感覚を覚えたキリトは、武器の違和感にいち早く気付いた。テストでの武器はタルワール。すなわち曲刀カテゴリの大剣だった。しかし、今イルファングが取り出した剣は、あまりにも細すぎた。タルワールでは決してない、あれは……！

「刀だ！ テストとは違う！ 横薙ぎの範囲攻撃が来るぞ!!! 後ろに飛べえ!!!」

キリトが大声で叫ぶ。しかし、イルファングはすでにソードスキルの発動モーションに入っていた。

刀専用ソードスキル<<旋車>>。

ソードスキルが発動され、竜巻のような剣閃が取り囲んでいた全員を捉える。

前衛を担当していたC隊全員のHPゲージが一気にイエローまで削られ、同時に一時行動不能の状態異常が点灯する。前衛の戦闘力は、たった一発のソードスキルで奪われた。

一撃で前衛の全員が戦闘不能、想定と違う武器、そしてリーダーのディアベルが指示を出せないことで、全員の動きが止まる。

「追撃が来る！ C隊に援護を……！」

一瞬遅れて、両手斧使いエギル以下のパーティーが援護に向かう。しかし、ボスはすでに追撃に移っていた。そのターゲットはボスの真正面で指揮を執っていたリーダー、ディアベル。

イルファングは下段からの切り上げで、ディアベルの身体を空中に投げ出す。

そして、止めとばかりに斬り下し、斬り上げ、突きの三連撃を繰り出す。

その三連撃すべてが、空中で動きの取れないディアベルにクリーンヒットする。

後衛のキリト達の傍まで吹き飛ばされたディアベルのHPゲージは、イエロー、レッドと減っていく。キリトが駆け寄りポジションを飲ませようとするが、手で制された。HPゲージが完全に無くなる、ディアベルの身体は白く光り始める。

「キリトさん、後は頼む。ボスを、倒し……！」

キリトの目の前で、ディアベルの身体はポリゴン片となり、消える。誰も動くことができなかった。あまりにも順調だったボス攻略。その最初の落とし穴に嵌ったのは、レイドリーダーであるディアベルだった。

第五話

指揮官の死亡。

現代の軍隊においては明確な階級が設定されており、最上位のものが死んだ場合は次席が、そのものが死んだらさらに次の階級のもものが指揮を引き継ぐ。その制度が明確になっているため、多少の混乱はあろうとも統率が一瞬で取れなくなるということはないだろう。

だが、このSAOには階級など存在しない。

リーダーが死んだら、それで終わりなのだ。

複数のギルドが参加しているのならば、レイドリーダーが死んでも別のギルドの統率者が指揮を引き継ぐ。こういったことが可能であつたらう。

しかし、この第一層攻略レイドのリーダーはディアベル一人のリーダーシップによって統率されていた。つまり、ディアベルが死んだ場合の指揮を引き継ぐ人間がいないのだ。

まとまりの取れない集団など、烏合の衆に過ぎない。戦線は一瞬で崩壊した。

うわあああ——誰かが恐怖の声を上げると、恐怖は伝染し、周囲から悲鳴が次々と上がる。

間の悪いことに三体のセンチネルがRepopし後衛に襲い掛かった。あれほど楽観的に行われていた攻略が、一瞬にして絶望的な戦いに転落した。イルファングは再び部屋の奥に戻り、一時行動不能がまだ解除されていないC隊に向かい出す。

ボスを止めなければC隊は全滅する。取り巻きは現在三体、両方ともにHPはグリーン。取り巻きはもう一匹がRepopしても二隊当てれば何とかなる。前衛のA隊と火力のF隊が回復中。ならば……！

「E隊は引き続き取り巻きを！ G隊も戻ってこい！ 後方はキバオウさんまとめてくれ！ B隊は俺に続け、C隊を救うぞー！」

全力で思考を回転させ、判断を行い指示を出す。誰も指示を出すこ

し、止まるわけにはいかない。いまこの剣には後方にいる四十名、そしてあの少女の命がかかっている。

「……しまった!」

斜め上段から振りかぶられていた刀が突然停止し、直後下段からの斬り上げに変わる。攻撃を弾かれ続けていたボスが行動をキャンセルすることでフェイントをかけてきた。

振り下ろしに対処するために上段への突きを放っていたキリトは、その動きに対応できなかった。

回避行動もできず、キリトはクリティカルヒットを喰らうことになるだろう。HPは残り四割を切っている。追撃をもらえば一気にHPがもつていかれるに違いない。

イルフアングの刀が光る。キリトの脳裏に浮かぶのは、ディアベルに止めを刺した三連撃ソードスキル<<緋扇ヒオウギ>>。

防御も回避もできない。突きによって右手を伸ばしきった状態から、ソードスキルを弾けるような攻撃を繰り返すことも不可能。初撃をクリティカルでもらってしまえば一時行動不能スダシがついて、その後の防御もできなくなる。つまり、この状況はキリトにとって完全な詰みだった。

——ここまでか……!」

迫りくる刀をキリトは見続ける。例え回避できずとも、キリトは自身の命を刈り取るだろうそれを見続けた。

——瞬間、後方から閃光が走った。

その閃光は、キリトに吸い込まれるはずであった刀を大きく弾き、キリトの真横に着地する。

キリトを助けたその人物は、赤いフードを被り、右手に持つ輝く細剣ウインドフルーレはわずかに震えている。

「二人で格好つけないで。パートナーでしょ?」

上からかけられた声に、キリトは顔を上げる。そこには閃光——<クリニアー>>を放った少女、アスナが立っていた。

初めて人の死を見た。

ディアベルがポリゴン片になって散っていく姿を見たアスナは、衝撃で動くことができなくなった。

その死はあまりにも一瞬だった。碌な言葉も、身体すらも残すことはない。

その死はあまりにも簡単すぎた。アスナが日々倒してきたモンスターと変わらない、安っぽいエフェクト。

その死はあまりにもむご過ぎた。こんなの……人間の死に方じゃない。

周囲から恐怖の叫びが上がる。

無理もない。こんな死に方を見せられて恐怖しないものなんていない。事実、アスナは腰が抜けたように座り込んでしまっていた。

誰も動けない。皆自らの武器を固く握りしめ、足が震えている。

順調に行き過ぎたボス攻略。このまま何事もなく終わると思っていた直後に、嵌ることになった落とし穴。底まで落ちたディアベルは死んだ。そしてその落とし穴は、自ら穴を広げ自分たちの足元に迫ろうとしている。

アスナは真横に立っている少年を見上げた。

きつとこの少年も恐怖に震えているのだろう。剣を握りしめている右腕が震えている。周囲に目線向け、周りの人間がどう動くかを確認しているのだろう。

アスナは少年に声をかけようと腕を伸ばした。撤退しよう、そう言うつもりだった。リーダーが死んだ以上、まとめ役を欠いたままでは各個撃破されかねない。このままこのボスと相対すれば、無駄な死者が出てしまう。アスナは少年の左腕をつかもうとした、その時。

「E隊は引き続き取り巻きを！ G隊も戻ってこい！ 後方はキバオウさんまとめてくれ！ B隊は俺に続け、C隊を救うぞ！」

少年は全員に聞こえるほどの大声を出し、ボスに向かって走っている。

咄嗟に出された指示に、誰もすぐに反応はできなかった。

少年は振り返らない。まるで自分のことなどいなかったかのよう

に、一人でボスと剣を合わせた。

イルフアングが持つ刀が光のを見てアスナは立ち上がる。

ソードスキルが発動されれば、あの少年がディアベルの二の舞になるかもしれない。今すぐにでも少年の元に向かい、援護をしなければならぬ。

しかし、アスナは動けなかった。あれほど望んできた死が間近にあるというのに、肝心なところで足が^{すく}竦んだ。先ほどのディアベルの死。自分が求めていたものがどういふものなのかを、アスナは知ってしまった。

青いポリゴン片に変わる自分の身体。誰かに生きた証を遺すこともできず、言葉も伝えることができない。

その絶望的な事実が、アスナの動きを縛った。

刀が光を放ち少年に向かって放たれる。まともに食らえば間違はなく死ぬ、必殺の一撃。

その一撃を少年は、ソードスキルすら使わず弾き返した。

弾かれた刀は光を失う。再び上段に構えられた刀が光を放って振るわれるが、再び弾き返される。

それを何回繰り返すのか。

少年はボスと単独で渡り合う。発動されたソードスキルを弾き返すことでキャンセルし、時間を稼いでいく。アスナは——いや、その場にいた全員が、少年の姿に目を奪われていた。

少年の剣技は全く無駄がない。最小限の動きで敵の動きを潰し、次を予想して攻撃を放つ。未来が見えているかのようなその動きは、片手剣戦闘の完成形と言われても誰も疑わないだろう。

「っ！ B隊前が出る！ C隊抱えて下がるぞ！」

「E隊！ センチネルを自由にさせるな！ あんなん長くもたん！」

急いで取り巻き削って援護や！」

その剣技を目にし、冷静さを取り戻した者たちが動き出す。

前衛後衛それぞれに指示が飛び、戦場は冷静さを取り戻していく。

絶望的な状況で、ただ一人だけ冷静に指示を出し、先行しボスに向

かった。

周りが動くかどうかなんて、彼にもわからなかっただろう。それでも彼は動いた。

仲間を助けるために、自ら最も危険な場所に飛び込んだ。

アスナは彼の背中から目を離せない。周囲が動き出してもなお、アスナは彼の背中に、彼の戦いに見入っていた。

結果的にそのおかげで、アスナは異変にいち早く気付くことができた。

瞬間、アスナは最前線に向かって駆け出す。死の恐怖や、怯えなどすべて吹っ飛んだ。

アスナの眼には、少年が繰り出した突きがボスのフェイントによって外されているのが映る。

——速く、もつと速く……！

このままでは、あの少年はディアベルと同様に死ぬ。自分を二度も助けてくれた少年は、今度はこの部屋にいるプレイヤー全員を助け、その代償に自分の命を捧げようとしている。

こんなことで死なせない。あの少年だけは絶対に守ってみせる。

敏捷性をレベルの限界まで高めているアスナは、間合いに入った瞬間に<<クリニア>>を放つ。

目標はボスの刀。下から降り上げられているそれが少年の身体に吸い込まれる前に、アスナは渾身の一撃を叩き込む。その<<クリニア>>はまさに閃光。十分な加速から繰り出された一撃は刀を弾くだけではなく、その衝撃でボスを部屋の奥まで吹き飛ばした。

——間に合った……！

ボスが部屋の奥に吹き飛ばされていくのを見ながら、アスナは少年の横に着地した。

「二人で格好つけないで。相棒パートナーでしょ？」

少年を助けることができたと確認した直後、身体に震えが走る。恐怖が消えたわけでもない。先ほどの光景を忘れたわけでもない。しかし、アスナは今初めて自分以外の誰かのために命を懸けた。弾くことに失敗すれば少年と共にソードスキルの直撃をもらう可能性が

あった。それでもアスナは、この少年のために命を懸ける選択をしたのだ。

「ありがとう。助かったよ」

少年は立ち上がり、アイテムポーチから回復POTを取り出すと一息に飲み干した。

「C隊後退完了！ B隊前に入るぞ！ これ以上ダメージディーラーに壁をやらせるな！」

「E隊G隊で取り巻きの対処安定や！ あんたら一回戻ってこい！」

「A隊オールグリーンまであと六十秒！」

「F隊回復完了、前衛の援護に向かう！」

後方から続々と状況報告が飛ぶ。

全てをこの少年が動かした。

失った戦意を取り戻し、プレイヤー達は敵の前に立つ。

「よく支えてくれた、感謝するぜ。とりあえず俺たちに任せてくれ、一度後退を」

両手斧を持った大柄な青年、B隊のリーダー——確かエギルという名前の——が後退するよう勧めてきた。

「頼む。前衛は包囲は禁止！ 全方向攻撃が飛んでくる！ 無理にスキルを迎え撃たず、防衛に徹してくれ！」

了解！ という声を聞き、アスナは少年と共に後方に下がる。

今前衛を務めているB隊の援護には火力担当のF隊が付く。部屋の奥から突進してきたボスをB隊が受け止め、弾き返したところを左右からF隊が攻撃を加える。後方を開けることで全方位攻撃を防ぎつつ攻撃を行うことで、攻撃の手段を狭められたイルファングはHPをじわじわと減らしていった。

戦況は明らかに、再び攻略レイド側に傾いていた。

キリトは後退し、E隊のリーダーであるキバオウのそばに駆け寄る。

「アンタ、ようやってくれた。アンタが動かんかったら、何人死んだかわからん」

「博打には勝てたみたいで助かったよ。今C隊の状況は？」

「ポーシヨン飲ませて休ませとる。シヨックは大きそうやが、体力はイエロー止まりや。後2分もすればオールグリーンまでは回復するやろ」

「そうか……ちよつと話してくる。全体見といってくれ」

キバオウが頷いたのを確認し、キリトはC隊のもとに駆け寄る。

C隊の面々は床に座り込み、体力の回復を待っている。表情こそはよくはないが、戦意があることは皆の眼を見る限り間違いないだろう。

キリトはディアベルとよく話していたシミター使いの青年——確かにリンドと言ったか——に声をかけた。

「アンタたちは、まだ前衛に出れるか？」

まだあのボスの前に立てるか。パーティーメンバーが死んだ状況で、まだ戦い続けることができるか。戦意があるのは理解している。ならば、それを言葉にし行動に移すことができるのか。キリトは青年に問いかける。

「やれるさ……！ このまま黙っているわけにはいかない！ ディアベルさんの仇を討たなければ……！」

リンドの言葉に、C隊の面々が頷く。戦う覚悟はできているのは間違いない。ならば、キリトのやることは一つだった。

「わかった、なら俺と相棒が強打を叩き込む。リンドさん、アンタたちはラストアタックを狙え」

「……いいのか？ ラストアタックはレアアイテムが手に入るんだろ？」

ラストアタックボーナス。ボスモンスターの止めを刺したプレイヤーが得ることができる権利で、その階層で手に入るものより高い階層のアイテムや、ワンオフの貴重品がドロップするというものだ。

確かに、ラストアタックを取るかどうかで今後のレベリング効率が変わる可能性は高かった。しかし、今のキリトはそれにこだわることはしなかった。第一層のラストアタックはディアベルに捧げられるべきだ。それが、このアインクラッド初のボス攻略レイドのリーダー

に対する敬意だと、キリトは考えたからだ。

「構わないさ。ま、あんたらが取り逃したら遠慮なくもらうことにするよ」

「ふっ、それは渡せないな。……HPがグリーンになった。準備完了だ」

C隊の面々が立ち上がる。

キリトは先ほどから横にピタリとついている少女を見て、拳を突き出す。

「付き合ってもらうぜ、相棒」

「ええ、任せておいて」

キリトと少女の拳が合わされる。

準備はできた、後はこの戦いを終わらせるだけだ。

「C隊が前に出る！ B隊、F隊はスイッチ用意！」

キリトは相棒の少女、C隊と共に前に駆ける。敏捷が高い二人が一気に前に出たところで、キリトは最後の指示を出す。

「B隊が武器を弾いたところにソードスキルを叩き込んで一気に後方に抜ける！ C隊はその後フルアタック！ いくぞ！」

キリトは剣を前に突き出し、ソードスキルを発動させる。発動するのは片手剣突進技<<ソニックリーブ>>。その威力とスピードは、ボスを削りラストアタックのお膳立てをするに申し分ない。

「スイッチ！」

B隊の面々がイルファングの刀を弾き返し、両横に飛びのく。

その隙間を、二本の線が突進していく。<<ソニックリーブ>>と<<リニア>>。左右からイルファングの脇の下をすり抜けるように放たれた二つのソードスキルは、ボスの胴体にクリティカルヒットし体力ゲージを大きく削った。

突進技を放った二人はそのままボス部屋の奥まで突き抜ける。

後方では、C隊が残りわずかとなったゲージを削り切るために攻撃を加えている。残りゲージは一割弱。

あとはこのまま待機していれば、問題ない。

キリトは戦況を見守る。

センチネルは完全に対応されており、指示するキバオウに慌てた様子はない。後方に下がっているB隊F隊も完全に下がる事ができている。前衛のC隊のすぐ後ろには壁タンクのA隊が控えており、危険になつたらすぐにスイッチ可能だろう。

さすがに勝つたか……。

そう思った直後、キリトの項うなじの辺りにピリツとした感覚が走る。キリトの直感が危険を感じている。

HPは5%を切った、攻略組全体の体力も布陣も問題ない。このまま押し切れる、普通に考えれば間違いない。なのに何故、こんなに嫌な予感がするのか……!!

キリトは目を疑った。

包囲をされていないはずのイルフアングの刀が横向きに構えられる。キリト達の位置はボスの索敵範囲のはるか外だ。範囲技が来るような間合いではない。つまり敵は前面だけ、それなのに刀が横向きに構えられた。

「横薙ぎの多段技が来るぞ！ 全力で後方に飛べえええええ!!」

キリトは力の限り叫んだ。

イルフアングが発動したのは刀系ソードスキル<<辻風>>。単発の横薙ぎに、剣圧による攻撃判定が複数回来る大技だ。

キリトの声に反応したC隊は即座に後方に飛び、A隊が即座に入る。重武装の盾持ちで編成されたA隊はHPを多少減らされるものの、攻撃を何とか食い止める。

これ以上この戦いを伸ばすわけにはいかないと、キリトは決意した。ボスの攻撃が前衛の防御力を上回っている以上、長引けば長引くほど前衛の負担が大きくなり、そのうちPOTローテが回らなくなる。そうなれば、残り5%まで減らしたのに撤退する羽目になりかねない。

「ここでボスを倒す！ 細剣フェンサー使いさん！」

「ちよつと待って！ 今ボスに近づいたら全方位攻撃が来るかもしれないわ！ 下手に近づいたら……」

キリトはボスに向かい駆け出す。少女の声は届いている。一人な

ら無理だ。だが、この少女となら……やれる。削り切れる。キリトは確信を持っていた。

「ソードスキルが発動される前に削り切る！ 来いアスナ！ 君とならやれる！」

少女の眼に驚愕が映る。しかし次の瞬間には、キリトと共に駆け出した。

なぜ自分の名前を知っているのか。アスナは驚愕で一瞬思考が停止した。

しかし、次の瞬間にはボスに向かって走り出し、少年と肩を並べる。名前を呼ばれ、肩を並べた。この少年と共に戦っているという事実には、アスナは高揚した。行うことは先ほどと同じ。<<リニア>>を少年の攻撃と同時に当てるだけだ。

「一瞬でいい！ 奴よりも——速く！」

少年が叫ぶ。ボスの索敵範囲に入ってから、ソードスキルが発動するまでの僅かな時間。その時間内にボスの体力を削り切れば、もしくはソードスキルの発動がキャンセルされれば勝てる。必要なのはただひたすらに速いこと。それだけだった。

イルフアングの刀が横薙ぎに振るわれる直前、アスナと少年は二本の閃光となり、ボスの背中にソードスキルを直撃させる。強烈な攻撃を受けたイルフアングの体力は一気に減っていく。アスナはボスのHPゲージを注視する。ゲージがググツと減り始め、そのまま0になると思った瞬間、

——残った!?

HPゲージは削り切られることなく、数ドットを残して停止した。アスナは油断していた。完全に体力を削り切れると思いき、動きを止めてしまっていたのだ。

ボスの眼がこちらに向き、剣が横に振りかぶられる。ターゲットは間違いなくアスナに向かっていった。

防げない。アスナはそれを理解していた。

アスナの使う細剣は武器を受け止めるための頑丈さが足りなかつ

た。動きを止めてしまったアスナは回避に移行できない。そして、剣を受け止めるといふ選択肢も取れない。つまり、何も手が打てない。ボスの振るった刀が迫る。

「——どこ見てんだ？」

少年の声のアスナに届く。声が聞こえるのはボスの背後から。間違いない、自分の反対側にいる少年の声だ。

「うちのお姫様に……色目使ってんじゃねえぞ……ッ！」

白い筋がボスに走る。同時に数ドット残っていたボスのHPゲージは、今度こそ間違はなく空になった。

<<イルフアング・ザ・コボルトロード>>がポリゴン片となり、散っていく。暴風のように刀を振るい続け自分たちを絶望に叩き落としたボスは、あまりにもあつけなく消え去ったのだ。

Congratulations!!

部屋が明るくなると同時に点灯されたその文字は、第一層のボスが攻略されたことを示していた。

——勝った……。

歓喜の叫びが部屋中から発せられる。

万歳をするもの、ハイタッチをするもの、歓喜のあまり抱き合うもの。この部屋にいるすべての人間が、歓喜し、喜びを分かち合っていた。

アスナはすぐ横に立っている少年に近づく。

自分に気付いたのか、笑みを浮かべ彼は手を上げる。

アスナは少年とハイタッチを交わす。少年が浮かべた笑顔を見て、アスナも笑顔を隠さなかった。

——やっど、終わった……！

厳しい戦いが終わったことを、アスナはその笑顔を見ることで実感できたのだから。

第六話

細劍^{フェンサー}使いの少女——アスナとハイタッチを交わし、キリトはやっと一息ついた。

第一層ボス攻略。

参加者四十四名中、死者一名。

数字だけで見れば悪くないものだ。事実、フロントランナーたちはその戦力を大きく削られることなく、攻略を達成できた。一時壊滅の可能性があつた状況を考えても、幸運であつたと言える。

しかし、キリト達はその中心となつた人物を失つた。

騎士^{ナイト}を名乗つたあの青年は、キリト達にボスの攻略を託し、逝つた。今後の攻略でも中心を担うであろうはずの人物を、最初の攻略戦で失つたのだ。そのダメージは計り知れない。攻略隊には新たなリーダー、そして可能なら中心となれる人物が複数人必要だ。キリトはこの戦いでそう確信した。

「よくやってくれた。この勝利はアンタのものだ」

肩を叩かれ振り返ると、B隊のリーダーであつたエギルが立っていた。

「ありがとう。だが、素直に喜べる結果じゃないな……」

「確かに、大きな痛手だ。まさか舵取り役が最初にやられちまうとはな……」

賞賛をキリトは素直に受けたが、内心ではとても喜べる状況ではなかった。

しかし、何はともあれ直接協力してくれた者たちには感謝をせねばならない。キリトはキバオウとリンドの元に近寄る。

「おう、お疲れさん。よう決めてくれたな」

「お疲れ様だ。最後の回避指示がなければ危なかつたかもしれない、助かつたよ」

こちらに気付いた二人は、共にキリトに感謝を示した。

「いや、急に新しい動きをできてちよつと驚いたよ。あと……ごめんな、ラストアタック取つちまつたよ」

「いや、我々が取れなかったら君が取る。そういう話だったからな、問題ないさ。むしろ、あそこで君が倒してくれなかったら被害が増えていたかもしれない。謝罪なんて受けたらこっちが困るさ」

なあ？ 皆。と、リンドは周囲に集まっていたC隊の面々に問う。C隊の面々が頷いているのを見る限り、ラストアタックに関してこの面々としこりが残ることはないだろう。集団内で存在感を持つているプレイヤーとは可能な限り友好的な関係を作りたかったため、問題がなさそうだと確認できキリトは安堵した。同時に、この雰囲気ならば攻略隊内でのベータテスターとビギナーの亀裂も、抑えることができるのではないかとも思った。

「なあ、ラストアタック取った兄さん。そろそろ教えてもらえるか？ アンタが何故、ボスの技を知っていたかを」
その声が聞こえるまでは。

黒いフードを被った男の指摘に、歓喜に溢れていた場は静まり返った。

「あんた、ディアベルさんが攻撃を喰らったとき、どんな攻撃が来るか知っていたよな？ ボスが倒される直前もそうだ。アンタはボスが使ってくる技を知っていた。なのに、情報を提供しなかった。ラストアタックを取るために……そうだろ？ ベータテスターさん」

横にいる少年を見ると、表情が険しくなっているのがわかる。

「確かにあいつ、ボスのソードスキルを見切ってたよな……」

「なんでディアベルさんに教えなかったんだ？」

周囲からも疑いの声が出始める。

しかし、アスナは確かに聞いていた。ボスが刀を抜いた直後に、キリトが叫んだことを。ディアベル達が攻撃を受ける前に指摘がなされたことを、アスナは間違いなく聞いていたのだ。

ボス戦が始まる前、少年はアスナに何があっても黙っていることを求めた。だが、アスナは彼の背中を見てしまった。彼が仲間のために戦っている姿を見てしまった。仲間のために命を懸けた姿を、アスナははつきりと目に焼け付けていたのだ。

だからだろう、アスナは彼が糾弾されるのを黙って見ていることなどできなかった。

「ちよつと待って」

アスナはフードを取り、少年の前に出る。

自然周囲の視線が集まるが、アスナは気にせず言葉を続けた。

「わたしはこの人がディアルさんたちが攻撃を受ける直前に、武器が違うと叫んでいたのを聞いているわ。情報を提供しなかった？

違うでしょう。この人は逆に前衛の人たちに回避しろと叫んだわ。

C隊の人たちなら、しつかり聞いていたんじゃない？」

アスナはC隊の面々に目を向けると、しつかりと頷いている。

「この通り、C隊の人もそう言っている。それに、ベータテスト時代の情報はわたしたちだってあのガイドブックから得ているわ。ボスに対する情報量という面ではベータテストもビギナーも同じだったはずよ。ならば、彼が指摘した情報はもつと先で得た経験からのものと考えるのが自然でしょう？」

アスナの意見は至極尤もであった。

少し考えれば分かる。ベータテストはここより上の階層の知識を持っているのだ。その中に、刀という武器についての情報があったとしても、何ら不思議ではない。

しかし、アスナの意見は全く別の切り口から否定されるのだった。

「いいや、違うね。あの情報屋もグルだったのさ。ベータテスト同士で共謀して俺たちを騙したんだ。あのベータテストたちが無料で情報を配布？　ありえない。善意の振りして嘘情報を流して、ベータテストーだけで美味しいところを掠め取ったんだ。ラストアタックを取ったのがその紛れもない証拠じゃないか」

——まずい……！

アスナは危険を感じた。アスナの知る限り、アルゴという少女は嘘情報売るような人間ではなかった。事実、ガイドブックに書かれていた内容に嘘の記述はなかったし、間違っていたとしてもベータテストからの変更点として許容できる範囲だ。ベータテストとの変更点があるという注釈もついている。しかし、この間違っている部分があ

るということが、この場にいたベータテスターへの不信を持っている者たちの疑心を大きくした。ビギナーにはどこの情報が間違っているかわからないからだ。

「待って！・あの人はそんな人じゃない！」

アスナは怒りに震えた。アルゴという少女は無償で貴重な情報をまとめ、配布してくれていた。そのアルゴへの中傷を、アスナは許すことができなかった。アルゴの信頼に信用が無くなったなら、ガイドブックの信用も同様に無くなってしまう。そうならば、ビギナー達は一切の情報が無い状態で、前線に向かわなくてはならない。犠牲者が増えるのは目に見えていた。それをこの男は理解しているのか……！

「おいあんた、さつきからやけにベータテスター共の肩を持つな？」

同じパーティーのようだし、グルなんじゃないか？」

限界だった。

攻略に尽力したアルゴと少年。この二人への誹謗に耐えることなどアスナはできなかった。アルゴのまとめた情報のおかげで、攻略レイドを組むことができた。少年の先の情報のおかげで、犠牲者を一人で済ませることができた。

それなのに、この男はベータテスターというだけで二人を貶めようとしている。

アスナの堪忍袋の緒が切れる。

この何も考えてない男に対し、ありったけの怒りをぶつけようと口を開こうとした。

「おいおい冗談はやめてくれよ。そいつは真正銘のビギナーだぜ？」

一緒にされちゃ困るな」

アスナの動きが止まる。

怒りも一瞬にして消えていく。代わりに湧いたのは、戸惑い。

「自分が利用されてるとも知らず熱くなっちゃって。これだから優等生ってのは笑えるよ」

アスナは言葉を発した少年を見る。こちらに向けられた表情は嘲りの色をもっている。

「ベータテスター？ 情報屋？ あんなつまらない連中と俺と一緒にされちゃ困るね。俺にとつちや、あいつらはラストアタックを譲ってくれたお前らビギナーと何も変わらない。だが安心しろ、俺は本物だ。俺はテストで誰よりも高く昇り、誰よりも多くの知識を得た。戦いのたの字も知らない連中と同列に語られるなんて、虫唾が走る」

少年がニヤニヤと、軽薄そうな顔で語る。

心の底から自分たちを嘲っている。

そう見える表情で。

周囲がざわつく。

いたるところから不満と軽蔑の声が上がる。あの少年を悪者にする流れが、完璧に出来上がってしまった。この雰囲気を変えることは、もうアスナにはできない。

「なんだよそれ。チートじゃねえか」

「ベータ上がりのチーターなんて最悪だ……」

「ベーター……」

ベータテスターに対して思うことがあつたであろう者たちが、不満の声。少年はその中のひとつの単語に反応する。

メニューを操作し、ラストアタックボーナスで得たであろう黒いコートを身に着けた少年は、攻略組全員の前で宣言した。

「<<ベーター>>か、いいねえそれ！ ラストアタックと一緒にもらっておくぜ！ 俺は<<ベーター>>だ。これからは、元テスター如きと一緒にしないで貰おうか」

全身を黒い衣装に包まれた少年は、部屋の奥にある次の階層への階段へと向かっていく。

「二層の転移門は俺が有効化しアクティベートといてやる。町に戻っておとなしくしとけ。居るんだよなあ、ボスに勝って浮かれて次の階層の初見mobに殺される馬鹿が」

少年は高笑いを残し、階段を登っていく。

誰も言葉を発しない。

少年を追うことができるものは、誰もいなかった。

アスナは俯き、顔を上げることができなかつた。

余計なことをしてしまった。その思いが、アスナの心を沈ませる。何も話すな。被害者の振りをしている。

ボス戦の前に、少年にそう伝えられた。少年は、自分が生贄になることを覚悟していたのだ。

だが、実際にその場になって、アスナは黙っていることなどできなかった。そしてその結果、少年にこの世界で一番重いものを背負わせてしまった。

<<ビーター>>。ベータテスターと情報屋アルゴに向きかけたヘイトを全て引き受け、一人で進んでしまった。

——相棒と言ってくれたのに、わたしはあの人の足を引っ張っただけだつた。

相棒と呼んでくれた。肩を並べて戦つた。彼の窮地を、自分の剣で助けることができた。

調子に乗っていたのかもしれない。

アスナの眼尻に涙が浮かぶ。彼が背負つたものは、アスナの想像をはるかに超えていた。ベータテスターに向かう憎悪を一手に引き受けることになったのだ。誹謗中傷されるだけならまだいい、下手をすれば襲撃を受ける危険だつてあるのだ。

襲撃を受けて、HPが0になつてしまつたら……。アスナは先ほど見た人間の死を思い出す。あの青年は少しであれ言葉を残すことができた。その死を惜しまれもした。だが、あの少年がもしプレイヤーに襲撃され殺されるなら、憎まれ、罵られ、その思いを誰にも知られることなく死ぬ。そして、殺した人間たちは喝采を上げるのだ。諸悪の根源を殺したと。

一人にしておくことなどできない。

ここでアスナが街に戻つてしまえば、あの少年はずつと一人で進むことになるだろう。アスナは、それを許容するなどできなかつた。例え力不足であつたとしても、彼は自分を相棒と呼んでくれたのだ。相棒が前に進むのであれば、自分も進むしかない。

目尻にたまつた涙を拭き、アスナは階段に足を向けた。少年に追

つき、相棒として隣に並ぶために。

「待ってくれ」

階段に向かっていたアスナは、後ろからかけられた声に足を止める。振り向くと、大柄な青年エギルの姿があった。

「あんた、あいつのところに行くんだよな？ 共に進むために」

アスナは頷く。

「なら、伝言を頼みたい。次のボス戦も共に戦おうってな」

自分が頷くのを見て、エギルは少年への伝言をアスナに頼んだ。

この大柄な青年も、彼が一芝居打ったことをわかってくれていた。自分以外にも彼を案じてくれた人がいたことに、アスナは安堵を覚える。

「ちよい待ちい」

エギルの後ろから再び声がかかる。

そこに居たのはキバオウとリンド。共にあの少年と戦闘中に話していた人たちだ。

「ワイからも伝言頼むわ……。今日は助けられた、借りは必ず返す……。そう言うといってくれ」

「俺からもだ。C隊は君に助けられたことを忘れない。そう伝えてくれ」

キバオウは頭をかきながら、リンドは真面目な口調でアスナに伝言を伝える。

アスナは二つ返事で了承し、一礼してから階段に向かう。

心なしか、アスナの足取りは軽くなった気がした。

「……あのガキに全部背負わせてしもうた、情けない話や」

あの少年と共にいた少女——確かアスナと言ったか——が階段を上っていくのを見送った後、エギルと同様に少年に伝言を頼んだキバオウが悔しそうに呟いた。

「ディアベルさんが死んだ後、我々を導いてくれたのは間違いなく彼だ。……我々があのままボスを倒していれば、彼に向かう疑いは半分減らせたんだ。彼は仇を取る機会を与えてくれた。その期待に応え

ることができず、逆に重荷を背負わせる羽目になるとは」

同じく伝言を伝えに来ていたリンドは、憤懣ふんまんやるかたない思いを隠しきれていない。

あの少年はベーターテスターや情報屋に向いた糾弾を、自ら引き受けた。

この行動で、ベーターテスターへのヘイトは全て<<ベーター>>と名乗った彼に向かう。SAOプレイヤーが二分される事態は恐らく避けられることができるだろう。あの時、彼はこの世界を一人で生きていく覚悟を決めたのだ。しかし、彼の相棒は彼を見捨てなかった。「あの嬢ちゃんも大したもんだよ。彼と共に行くということは、そのヘイトを彼女も受けるってことだ。生半可な覚悟じゃ追うことなんかできない。俺にはその覚悟はなかった。あの二人が行動するのを、俺達は見ていることしかできなかった。……あの二人には返せない恩ができた」

キバオウとリンドが頷く。

エギルは思う。あの少年たちと共に歩むことはできない。それは彼らの覚悟と、その行動によって保つことができたこの状況を崩すことになってしまう。共に活動できるのは、精々が攻略に関する時だけだ。

ならば、その時だけは彼らと共に戦おう。自分は命を懸けて、あの二人を守ろう。

エギルはそう決意する。

「ワイらはディアベルはんが遺したメンバーをまとめにやらん。もしかしたら二分するかもしれないが……不満分子を抱えて一つになるよりは、二つに分かれてやる方が統率は取りやすいかもしれん」

「方向性が違う面々をまとめることができたのは、統率者が一人だったからだ。だがさつききのボス攻略の戦いでは、統率者が一人というのは極めて危険であることを認識できた。バラバラにならない程度にリーダーが複数人必要になるだろう。僕たちがそれをやらなければならぬ」

「なら俺はあんたらとは少し離れて、フリーの立ち位置を保とう。俺

の組はちようど四人だ。あの二人がボスでパーティーを組むときに誘いやすいからな」

それがいいといったように、二人が頷く。

あの二人をバックアップする準備はすぐに行ける。彼らは死なせてはならない。少なくとも、今後攻略に参加している者たちで中心にある者たちは、その認識を持つ必要がある。

少年の振るう、誰もが見惚れる圧倒的な剣技。

少女が繰り出す、閃光のような輝きを放つ剣技。

この二つを失うことはできない。なぜなら、彼らの剣技はそれだけで人を導くことができるのだから。

キリトの目の前には途轍もない絶景が広がった。

山頂に草原を持つテーブルマウンテンが連なっている。第二層に存在する街は全てそのテーブルマウンテンを丸ごと一つくりぬいて作られているのが見て取れる。

第一層から第二層に至る螺旋階段を抜け第二層の扉を開いた先に出たのは、急角度の断崖の中腹だった。

今キリトがいる位置から一番近くにある街、第二層主街区の<<ウルバス>>はフィールドを一キロほど踏破した先にあった。

転移門を有効化するためにウルバスに行く必要があったが、ボスが倒されてから二時間後には自動的に有効化される。ならば、少しくらいのんびりしても問題ないだろう。

キリトはその場に腰を下した。

覚悟していた結果だった。

ディアベルが生き残っても、この役割は必要だろうと理解していたつもりだった。

キリトは今後恐らく全ての人間から罵られ、嫌悪され、生きていくことになるだろう。隣に立つ者は人ではない、死だ。そして、それはモンスターからもたらされるものだけではない。このデスゲームにおいて、今のキリトは最もプレイヤーキルによる死亡の可能性が高いプレイヤーになった。

望んだわけではない。だが、必要だからとその役割を引き受けた。理解はしている——分裂を避けるため、どうしても必要だったのだから。

しかし、だからといってすぐに全てを受け入れることができるわけではない。

何故、ボス攻略に尽力した自分がこのような目に合わねばならないのか。その思いが消えることは恐らくないだろう。キリトは今後も攻略に参加していく。生きている限り、ゲームクリアに向けて努力を惜しむことはない。今日<<ビーター>>という名乗りをして、キリトのゲームクリアに対する想いは強くなった。

誹謗中傷を長く受け続けて、まともな精神であり続けることができないものなどそう多くはない。そして、キリトにはその自信がなかった。自分が狂ってしまう前に、自分が自分である内に、ゲームクリアが必要になったのだ。

「寂しいし、辛い。でも進まない」と

これからの道のりは長い。ならば、今のうちに一言くらい弱音を吐いてもいいだろう。立ち上がったキリトは、このやるせない思いを覚えて言葉にした。

少年を追いかけて階段を登り、終着点であろう扉にたどり着いたアスナに聞こえてきたのは深い悲しみを感じさせる言葉だった。少年はアスナに気付くことなく絶景と言っていいその景色を、遠くを見つめている。アスナはその後ろ姿に、声をかけることはできなかった。アスナの仕事は、彼が一人ではない、理解者もいるのだということ伝えることだった。しかし、あまりにも簡潔で、悲痛な言葉はアスナの心に突き刺さった。

自分が余計なことをしなければ、自分があの時黙っていたら、彼がここまでの状況に置かれることはなかったのではないか。

アスナは自分の判断に後悔した、同時に感謝した。

アスナはあの時彼を庇った。結果的にそれが彼を追い込むことに

なったが、同時に彼と共に在れる理由を作った。そして、彼のことを理解している者たちと、アスナは繋がりを持つことができた。

もしあの時アスナが庇わなければ、風当たりは多少は軽くなったかもしれない。しかし、その代わりに彼は一人になる。寂しい、辛い、そんな想いを漏らした彼を一人きりにすることになっていたので。

——自分は彼の相棒だ。一人きりになどしない。少なくとも、彼がわたしのことを邪魔と思わない限りは……。

アスナは扉を出す。

謝りたいことがある。伝えることがある。教えてほしいこともある。

少年はすぐにアスナに気付いたようだが、こちらを見ることなく前を見ている。アスナも少年の隣に立ち、同様に正面を見ながら言葉を発した。

「ごめんなさい。わたしが余計なことをしたせいで、あなたに重荷を背負わせてしまった」

「いいんだ。自分で納得した上でやっているんだから……すまない、結局君を巻き込んでしまった」

少年の表情は重い。本来なら余計なことをしたと怒っていいはずなのに、アスナを巻き込んだことを逆に謝罪してくる。優しい人、そして不器用な人だと、アスナは思う。

「伝言を預かっているわ。エギルさんからは『次のボス戦も共に戦おう』。キバオウさんからは『今日は助けられた、借りは必ず返す』。リンドさんからは『C隊は君に助けられたことを忘れない』ですって」
「……そっか」

少年の顔に少しだけ笑みが浮かぶ。しかし、寂しそうな表情は変わらない。

言うべきは今と、アスナは言葉を続けた。

「そして、もう一人……『相棒を置いていくなんてひどい。責任とって連れてけ』だそうよ」

少年がこちらに顔を向けた。その表情は先ほどまでの重い雰囲気が無くなり、驚愕だけが見て取れる。

「わたしは死にたいと思っていた。でも今日、わたしは目標を見つけ
た。その目標を達成するために、この世界で生きると決めたわ。そし
て、その目標を達成するためには、あなたの傍にるのが一番いい。
だから、わたしはあなたについて行く。あなたがダメと言っても、勝
手について行くわ」

一言一言、自分の意思を確かめるように言葉を紡ぐ。

この人を一人にしたくない。この人と肩を並べたい。対等な関係
を築いて、共に戦いたい。そして……この人を死なせたくない。出
会ってからたった二週間。それなのに、アスナの心はこんなにも動か
されてしまった。

少年はこちらを見たまま動かない。

しかし、しばらくして一息吐くと、再び前を見てポツリと言った。

「ありがとう」

アスナの顔に笑みが浮かぶ。

少年はアスナのことを受け入れてくれた。話したいこと、聞きたい
ことは沢山ある。だが、今は一つだけ聞ければいい。

アスナは笑顔のまま少年に向き直り、最も重要なそれを問いかけ
た。

「ねえ……名前、教えてくれる？」

アスナの髪が、風になびく。こちらに視線を向けた少年の顔が赤く
染まった。それを見て、アスナは笑みを深くする。

この人はこれから、どれくらいの表情を見せてくれるのだろう。

そんなことを考えながら、アスナは少年の答えを待つのであった。

第二層 第七話

第二層主街区<<ウルバス>>。

直径三百メートルほどのテーブルマウンテンを丸ごと掘り抜かれた中に存在する街だ。

つい先程この街にたどり着いたアスナは、隣を歩く黒づくめの少年——キリト——と共に、街の中央広場にある転移門を有効化するために、目抜き通りを進んでいた。

主街区に流れるBGMのような音楽も、通りを行き交うNPCの服装も第一層の各町とは異なっており、違う層に来たということのアスナは実感する。転移門はボス攻略後二時間で自動的に解放される。ボス撃破後その事実は即座に全プレイヤーにメッセージが送られるシステムになっているようで、今頃第一層の転移門の前には大勢の<<観光客>>が集まっているだろう。

急ぐ必要もないけど、待たせるのもかわいそうだから有効化しちやおう。そう言っただけで中央広場に向かうキリトに着いてきたアスナだが、その心中は穏やかではなかった。

第二層入り口の扉の前、この街への移動をし始める前に、アスナは隣に歩く少年の名前を教えてもらった。第一層の攻略中に突然名前を呼ばれたアスナだったが、どうせアルゴから買ったのだろうと気にしてはいなかった。

その後何やかんやあつて共に行動すると決めたわけだが、一方的に名前を知られているのはフェアではない。そこで改めて少年の名前を聞いたわけであるが、ここら辺に書いてあるだと、アスナの顔の左上を指さす少年。視線だけ動かすとのことだったが、顔も同時に動かしてしまうアスナを見て、少年はアスナの頬に手を添える。

HPバーの横に書かれたKiritoという文字。

きりと……君？

ローマ字読みで声に出すと少年の顔が赤くなり、思考が少年の名前

に向かっていたアスナも、自分の頬に少年の手が添えられていたことに気付き顔を赤く染めた。

その後数秒そのままの状態だったが、アスナが頬に触れている手を無言で指摘し、少年がはつとしたように手を放す。両者の顔の赤みは中々取れなかった。

何とも恥ずかしい顔を見せてしまったアスナは、動揺で締まらない顔をフードで隠して歩いている。道中のフィールドでモンスターの一体でも出てくれば気持ちを切り替えられたのだろうか、運の悪いことに戦闘が行われることはなく主街区まで着いてしまったのだ。

同年代の男性とまるで接点がなかったアスナにとって、先ほどの出来事の衝撃は強烈だった。父や兄、医療関係の人に触れられたことはあれど、それはアスナがまだ小さかった頃の話だ。中学が女子校であるアスナには、近い世代の男性と関わる機会はないし、また機会が欲しいと思うこともなかった。だからだろうか、不意に、本当に不意に起こった同世代の少年との接触は、アスナを動揺させるには十分過ぎたのだ。

しかし、横を歩く少年は今、何もなかったという風に平然と歩いている。

そのことに何故か悔しさを感じるが、掘り返すと自爆する可能性もあるため、アスナはぐつと口を閉じたまま歩くのだった。

中央広場の転移門の前に着いたキリトは、横に立つ少女をちらと見てから転移門に手をかざした。

垂直の水面のようなものに手が触れると、石で造られたアーチ状の門が光り始める。この光が収まることで、第二層<<ウルバス>>の転移門有効化が完了する。本来ならボス攻略レイドの面々が、下の層からやってきた人たちと喜びを分かち合う光景が作られることになるはずなのだが、キリトは手をかざした段階で、そそくさと中央広場を後にする。

後ろからは赤いフードを被った少女、アスナが着いてきており、二人は事前に話していた通り広場に面した教会らしき建物の三階にあ

る小部屋に転がり込んだ。

「こんなに慌てなくても、まださっきの噂なんて伝わってないんじゃないの？」

アスナの問いは至極当然だ。幾らメツセージでリアルタイムに情報をやり取りできるとは言え、攻略組は徒歩で帰還するわけだし、迷宮区からメツセージを送ることはできない。である以上、今この第二層にやってくる<<観光客>>の皆様に<<ビーター>>とは何かを問いかけたところで、泡だて器か何かと返ってくるのがオチである。しかし、知られていないとはいえあのまま転移門の前にいれば、誰かしらに話しかけられるのは確実だった。目立ちたくない、本当にこれ以上目立ちたくないキリトはそれを理解していたがゆえに、人がまず来ることのない場所に一時避難したのだ。

「目立ちたくないからいいんです。それよりアスナ、君は俺に着いてくると言ったね？　俺はこれからベータテストで最後の最後に情報が出た、あるエクストラスキルを取りに行くつもりなんだが……君はどうする？」

「エクストラスキル？　何それ」

疑問の顔を向けてくるアスナを見て、彼女が初心者であることをキリトは思い出した。

その戦いぶりは熟練のベータテスターよりもはるかに存在感を放つため、ただの初心者と同様には扱えないキリトであったが、その知識量に関しては間違いなく初心者のそれであった。

ちなみに、つい先程キリトが自分の名前を名乗るときにも、アスナが初心者であることを思い出したはずなのだが、その記憶は少女の表情と共にキリトの心の宝箱に封印されている。

「取得に何らかの条件が必要なスキルのことさ。片手剣とか細剣みたいに最初から選べるわけじゃなくて、クエストやスキルの熟練度を条件に解放されるスキル、それがエクストラスキル。そして、第二層には<<体術>>のエクストラスキルを取得できるクエストがあるんだ」

「<<体術>>……要は素手で戦うってことよね？　剣の方がリーチ

も長いし、威力も高いんじゃないの?」

アスナの疑問は尤もだ。ことMMORPGにおいて、使いやすさはさておき、素手が剣や槍の威力を上回るといふゲームを見かけることはあまりない。しかしこのSAO世界において、<<体術>>というスキルは威力の低さを補う極めて重要な利点があった。

「威力は確かに武器スキルよりはちよつと低めだ。鉤爪やナツクルを使えば威力は補えるけど、重要なことはそこじゃないんだ。このSAOではソードスキルを発動すると、必ず硬直があるよな? その硬直が解けない限り、次の行動に移ることができない。でも、一つだけ例外がある。それは、ソードスキルの硬直中に別系統のソードスキルを発動することだ。それによって実質コンボのような動きができるし、硬直中もソードスキルによる一定の行動ができるから、回避として使うこともできる」

「……なるほど、だから<<体術>>なのね。武器を持ち変える暇なんてないから、剣から槍や斧のスキルに繋げることができない。同様に攻撃モーションの後で、盾を前に掲げるような盾のスキルを発動できる体勢を取ることが不可能。でも、<<体術>>なら足さばきや何も持っていない自由に動かせる左手を使つて隙を埋めることができる」

少し話ただけでこの理解力である。頭の出来のよさに差を感じ悲しくなるが、キリトは続ける。

「まさにその通り。そういう使い方が発見されたのは、さっきも言った通りテストでも本当に最後のほう。情報も皆無と言つていいほど出回つてないし、俺も実戦で使用したことはない。火力不足だからどのくらいの階層まで通用するかもわからない。でも、このデスゲームとなったSAOでは回避手段があるに越したことはない。それに第一層の中盤に出た、<<スワンプロボルト・トラッパー>>が使つてきた武器落デイスアームのような属性がある攻撃を受けたときに、武器を取りに行かずに反撃できる点も重要な」

第一層での武器落デイスアームとし攻撃で、多くの犠牲が出たと聞いていたキリト。戦闘中に武器を失うということは、まさに致命的だ。予備武器が

あればよいが、メインと同じレベルの武器を二本持つのは現実的ではない以上、性能が落ちる物を持つしかない。また、落とされた装備を確実に回収できる訳ではないのだ。だからこそ、キリトは無手になっても戦う手段を持ったために、 \llcorner 体術 \gg のスキルを取ることを決心した

「正直本当に有用かはわからないから、とりあえず自分で使ってみて、その後も使っていくかはその結果次第で……と思っていただんだ」

「でも、間違いなく有効なスキルだという確信をキリト君は持っている……そうでしょう？　なら、わたしもお供させてもらおうわ、そのクエストに」

まったく、この少女はどうしてこうも鋭いのか。

「了解。まあ、この後クエストの情報を聞くために、アルゴが来るのを待たなきゃならないんだけど……」

キリトは部屋にある窓から広場を窺う。

広場には次々に \llcorner 観光客 \gg の皆様が転移してきている。スキルの話をしている間に一体どれほどの人数が転移してきたのか……中央広場は人で溢れ返っている。

「アルゴさんならすぐに転移してきそうなのに……もしかして、もうこっちに来てるのかしら」

「二応、第二層に飛んできたらメッセージ飛ばすとは言ってたんだが……」

ボス攻略の時間帯、アルゴははじまりの街で待機していると言っていたから、転移門を抜けるだけで第二層に来れるはずだ。改めてメッセージを確認するも、アルゴからの連絡は来ていなかった。

「あつー！　キリト君、あそこ！　あの追われてる人、アルゴさんじゃない？」

横で広場を眺めていたアスナの声に、キリトはメニューウィンドウから視線を戻す。アスナの視線の先を見ると、フードを被った女性プレイヤーが、二人の男性プレイヤーに追われている姿だった。彼らは西の通りに姿を消す。何処からどう見ても、厄介事に巻き込まれているのは間違いないだろう。

「キリト君、どうする?」

「追ったほうがよさそうだ。〈〈追跡〉〉かけるからついてきてくれ」

キリトが窓からすぐ下の屋根に飛び降り、アルゴが向かったであろう方向に屋根伝いに進んでいく。後ろから「ちよっ、キリト君!」という声が聞こえるが、キリトは構うことなく屋根から屋根に飛び移る。その最中メニューを開き〈〈索敵〉〉スキルを選択、サブメニューから派生機能の〈〈追跡〉〉を選択、プレイヤー名〈〈Argo〉〉を指定する

アルゴの足跡が緑の光を放って表示され、キリトはそれを辿って後を追う。アルゴ達が向かっている先は西の平原地帯、大型の牛が生息するサバンナマップだ。そしてその奥には多くの岩が並ぶ荒地が広がっている。圏外に出たことで途端に事態はきな臭くなってきたが、それ以上に第一層から登ってきたばかりのプレイヤーがソロで行動するにはリスキーな場所だった。

キリトは後方から追いかけてきたアスナと合流し、西平原に繰り出す。一対二、しかも敏捷全振りのアルゴが撒くことができない相手が二人となると、それ相応の手練れなのは間違いない。対人戦闘になることはないだろうが、人数優位を確保するためにもアスナには着いてきてもらう必要があった。

「屋根から屋根に飛び移るなんて映画だけの話で、まさか自分がやることになるなんて思わなかったわ……」

ウルバスという町の家並みがほぼ同じ高さだったからできたことだが、思わぬアクション体験に精神を多少削られたのだろうか、隣を走るアスナの顔色はよくなかった。

「まあ、あの高さで落ちても死なないから」

「そういう問題じゃないのよ……」

アスナの表情がゲツソリとしている。だが仕方ない。

年齢は関係なく、運動能力も関係もなく、敏捷性が高ければスタントマン顔負けの動きを、現実ではやれないことを容易くできてしまう。それがこのソードアート・オンラインという世界なのだ。

アルゴに追いつくことができたのは、平原地帯を通り過ぎ荒れ地に入っただけの所であった。

アルゴは岩壁に背を向け、忍者のような恰好をした二人の男に追いつめられていた。

キリトとアスナは三人の死角から岩の上に登り、様子を窺う。

キリトとアスナの五メートルほど真下で行われているアルゴと男たちの言い合いの内容は、エクストラスキルのクエストを教える教えないという問答のようだ。

忍者風の男たちにとって、<<体術>>スキルはよほど重要らしく、何度断られても諦めようとしなない。そのしつこさにアルゴもイライラしているのか、口調が険しさを増している。

キリトは放っておくとまずいと判断し、介入のチャンスを探ることにする。アスナにはメッセージで、戦いになりそうだったらアルゴと共に離脱しろと伝える。

<<体術>>の情報を知っている以上、彼らは間違いなくベータテスターだ。である以上、ある程度PVP対人戦に慣れていると言えるだろう。キリトもアルゴもそれ相応に経験はあるが、アスナは話が別だ。アルゴリズムによってある程度行動が決まっているモンスターと違い、プレイヤー相手の戦いは基本的に何が起こるか分からないからだ。

横目にアスナがこちらを睨んでいることがわかるが、キリトは気にせず下の様子を窺い続ける。直後、男たちの声量が上がり、応じてアルゴの声も大きくなった。

これはいよいよまずいな。アスナの方をチラと見て、彼女が頷いたのを確認し、キリトは5メートルの崖を一気に飛び降りた。

膝を曲げるように着地したキリトは、立ち上がり二人の男に向き直る。

「その辺にしとけ。圏外で女性プレイヤーを囲むなんて、PKか何か間違われても仕方ないぞ？」

キリトの後ろではアスナも上から降りてきて、アルゴの横に着地し

ている。

当然現れたキリトとアスナに、忍者風の二人は動揺しているようだ。

「そんなつもりはござらん！　しかし、我らはどうしてもクエストの情報が必要なんでござる！」

「左様！　あのエクストラスキルは我らが完成するためにどうしても必要なんでござる！」

忍者二人はさらに言い募る。確かに忍者ロールプレイにはくく体術>>が必須なのは理解できる。しかし、嫌と言っている相手に無理矢理要求をし、それを押し通そうとしているのは問題だ。しかも、その相手が自分の知人であるわけだから、黙っている訳にはいかない。「それでも強要しているのは間違いないだろう？　こいつは俺の知人なんでね、引いてくれないかな？」

キリトが背中に背負う片手直剣くくアニールブレード+6>>の柄に指を走らせる。それを見た忍者二人も右手をじりじりと背中の忍者刀に伸ばし始める。キリトから抜くつもりはない。しかし、背中にいるのは女性二人。相手が抜いた瞬間キリトも剣を抜く。そう覚悟した。

しかし、直後キリトは忍者の背後の岩陰からのそりと顔を出したくく牛>>に目を奪われた。くくトレンブリング・オックス>>、体長二メートルに達する体格を持つ、くくモーモーランド>>こと第二層の代表的なモンスターだ。その巨体から繰り出される突進がまともに直撃したら、キリトでも体力を一気にレッドまで持つて行かれるだろう。牛に気付かれるわけにはいかない。キリトは小声で言った。

「後ろ」

「その手はくわんでござる！」

忍者の声にこちらに気付いた牛が急に加速し突進してくる。もう問答を繰り返している暇はなかった。

「ッ！　左右に飛べえ！」

キリトの突然の叫びに咄嗟に反応した二人は、横に飛ぶことで牛の突進をギリギリで回避した。しかし、その突進の先にはキリトがお

り、その後ろにはアスナとアルゴがいる。キリトが避ければ二人に危険が及びかねない。キリトは直剣で身体をかばうように構える防衛姿勢を取り、正面から攻撃を受け止める選択をする。

「くっ……お……っ！」

衝撃で意識が飛びそうになる。筋力^{STR}を壁^{タンク}並みに強化しているキリトは、牛の突進をかううじて受け止めることができた。しかし、HPが一気にイエローになる。二回連続で受けければ、確実にHPは0になるだろう。

「キリト君！」

後ろからアスナの叫びが聞こえる。だが、止まっている暇はない。この手の突進型モンスターは、突進を一度回避ないし受け止めてしまえば真横がから空きになる。全力攻撃^{フルアタック}のチャンスなのだ。

「全力攻撃一本！ 一気に削れ！」

キリトの声に即座に反応したアスナとアルゴ、そして忍者の二人が側面と背後からソードスキルを叩き込む。そしてキリトも即座に牛の頭を受け流し、突進技<<ソニックリープ>>を当てつつ後方に離脱する。

「次の突進は受け止められない！ 全員回避に専念、突進を回避後再度全力攻撃^{フルアタック}で削り切るぞ！」

牛がこちらを向き、ターゲット指定されているであろうキリトに向かって再度突進してくる。しかし、一度余裕を持ってしまえば回避することは難しくくない。ターゲットを受けたキリトがジャンプで回避すると、牛はそのまま岩壁に突っ込んだ。牛が突っ込んだ壁にひびが入っていくのを見て、キリトは先ほど自分があれば受けとめたことを思い出し冷や汗が流れた。もし筋力^{STR}が足りなかったら、吹き飛ばされて一時行動不能^{タス}くらいはもらっていたかもしれない。岩をも砕く一撃とはまさにこれのことだろう。

先ほどの全力攻撃^{フルアタック}と岩に突っ込んだダメージによって、HPを大きく減らしていた牛が倒されるのはそれからすぐである。

やれやれと一息吐いたキリトはポーションを飲み、イエローまで

減った体力を回復させる。

体力の減りを改めて確認したキリトは、早急に〈武器防御〉を取る必要性があることを認識した。今後回避せずに攻撃を受け止めなければいけない事態が出てくるだろう。そのような時、皮装備で敏捷型のキリトに敵の攻撃を受け止めるのは少々荷が重すぎた。しかし常時発動型の〈武器防御〉があれば、同じ剣で受け止めるにしても、ダメージ量が軽減される。ソロならともかく、パーティーを組むのであれば特に、アスナに視線を向けようとして、

「剣士殿、危ういところ、助かったでござる」

そのまま視線は忍者の片割れに向かった。二人並んでこちらに頭を下げているのを見て、もう戦うことにはなるまいと判断したキリトは、剣を鞘に納めた。

「いや、構わない。……すまないが、もし恩を感じてくれてるなら今日は引いてくれないか。俺たちもアルゴに用があつてね。ちよいと急ぎたい理由もあるんだ」

「……承知したでござる。拙者は〈風魔忍軍〉のヨタロー、この者はイスケでござる。この借りはいずれ」

そう言つて、二人は町の方に戻っていく。

道理がわからない人間ではなさそうだ。少なくともしばらくはおとなしくしているだろうと判断し、キリトは自身の用件を片づけるためにアルゴの方を向こうとした。

しかし、背後から伸びてきた小さな二つの手が、キリトの身体を包み込んだ。

「……かつこつけすぎだよ、キリ坊」

今まで黙っていたアルゴの囁きは、普段の小憎たらしい声ではなかった。

オネーサン情報屋の掟を破つちやいそうダ、等と言つてぎゅつと抱き着いているアルゴ。そして左、具体的にはアスナの方からはSAOで描写されるわけがない殺気のようなものが発せられており、視線を向ければじとーつという効果音がついてもおかしくないほど剣呑なアスナの視線が突き刺さった。先ほどとは別の嫌な冷や汗が流れて

くるが、対女性スキルゼロ（と本人は思っている）のキリトには、この状況を打開する手段を考え付くことはできなかった。

これ以上こうしていると、アーちゃんに怒られちゃうなと言いアルゴがキリトを開放したのは、それからどれくらい経った頃であろうか。

キリトから離れたアルゴは次にアスナに近づき、今度はアスナをからかっているのだろう。何やら言われ肘でつんつんとつかれているアスナは、言われたことを恥ずかしがって否定しているようだが、先ほどの視線を思い出したキリトは、藪蛇を恐れて何か言うことも近づくこともできなかった。

「いやはや、たった一日でここまでとハ……末恐ろしいねキー坊。とりあえず、助けてくれてありがとナ。積もる話は街に戻りながらだな」

一通りアスナをからかって満足したのか、アルゴは普段の調子に戻ったようだ。

何が末恐ろしいのかはわからなかったが、アルゴの言うとおり、この場に長々と留まっているのはよろしくない。先ほどの牛が出てきても、この三名なら問題なく倒すことができるだろうが、キリトの目的はアルゴから情報を聞くことだ。決して牛狩りではない以上、この場に居続けるメリツトは無かった。

キリトはアルゴの言葉に頷き、それを見たアルゴが街に向かって歩き出す。キリトもそれに従い、アスナに「行こう」と声をかけようとしたが、ギロつとした視線を向けられ声をかけることはできず、街に戻る道中も一言も話すことはできなかった。しかしただ一人、アルゴだけはやたら上機嫌であった。

第八話

主街区<<ウルバス>>の外れ、路地裏の細道を右に左にと進んだ奥にあるとあるNPCレストランに、キリト達3人は腰を据えていた。人目につかないレストランが良いだろうということ、この店を選んだわけであるが、それだけがこのレストランの良い点ではない。この店には第一層で食べられるクリームパンをはるかに超える旨さを持つ、<<トレンブル・ショートケーキ>>という逸品が存在するのだ。尤も、そのお値段も味相応に逸品なので頻繁に食べられるものではないのだが。

「さて、早速情報交換といきたいところだが……先に言うことがある。大変な迷惑をかけたみたいだな、キー坊」

相変わらず情報が早いことだ。アルゴがキリトに向ける視線には、申し訳なさとか、心配とか、そんな感じの色がついているのがわかる。

「そしてさつきも助けてもらっタ。情報を何でも一つタダで売るヨ、アーちゃんにもナ」

「え、わたしもですか?」

「アーちゃんも助けに来てくれただろウ? それに……面白いネタももらったしナ」

驚いたアスナに当然と言った風のアルゴ。しかし面白いネタとはなんだろうか。少なくとも第二層に来てアルゴに会ってから、何か情報を渡したことはないのだが……。隣に掛けるアスナはアルゴのニヤリとした視線から目を逸らしている。この二人は先程から随分絡んでいるが、キリトにはその理由はさっぱりわからなかった。

「それで、何が聞きたいンダ? 第二層が解放されて早々にオレっちを呼び出すとは、重要なことなんだろウ?」

重要なこと。確かにそれは間違いない。しかし、先ほどからアスナとアルゴに置いてきぼりにされているキリトは、悪戯を思いつく。

「ああもちろん。情報屋アルゴが髭をつけてる理由を教えてください」

真面目そうな、真剣そうな顔を作り、キリトはベータテスト時代からの謎の理由をアルゴに要求した。キリトの言葉を聞いたアルゴは

一瞬驚いた顔を見せ、すぐに俯いた。その様子を見てキリトは思わずニヤリとする。普段からからかわれているのだ、たまに仕返ししたところで罰は当たるまい、と。

尤も、アルゴのカウンターによつてその目論見は粉々にされたわけだが。

「……わかつた。恥ずかしいけどキー坊になら、いいヨ。ちよつと待つてネ、今ペイントを取るから」

その言葉を聞いたキリトは固まってしまい、目の前で恥ずかしそうにしているアルゴをただ見ているしかなかった。しかし、キリトは隣から発せられる冷気で思考を回復させ、慌てて質問を<<体術>>のエクストラスキルに関してに切り替えるのだった。

キー坊の意気地なし、という言葉が聞こえてきて何かしら反論したい気持ちには駆られる。だが、隣に座る少女の不機嫌さはおそらく、いや間違ひなく危険域に達している。何故ここまで不機嫌なのかはキリトにはわからなかったが、隣から迫る身の危険から何も言わずに口を閉じるのだった。

第二層の東の端、そこにある岩山の上にく<<体術>>エクストラスキルを習得するためのクエストがあるということで、アスナはキリトと共に、先導してくれているアルゴに従いフィールドを進んでいた。

今現在、アスナの機嫌は極めて悪い。前を歩く少年、キリトに対してだけは。

自らキリトについて行くと決めて、忍者風の男二人に追われていたアルゴを助けたまではよかった。しかし、即座にコンビを組んだことがばれた挙句、からかわれる羽目になるとは思わなかった。彼がどう思っているかは別としても、確かに自分は彼の相棒であると決めたし、とある目標のためにキリトについて行くとも決めた。だから、アスナと彼の関係はそれ以上でもそれ以下でもないのだ、決して。

アスナの前ではアルゴとキリトが真面目な会話をしている。話の内容はボス戦の様子であったり、第二層クエストの情報のすり合わせであったりと極めて有用なものだ。しかし、先ほどアルゴがキリトに

抱き着いたことや、キリトがアルゴの髭を取らせようとしたことを思うと、何とも複雑な気分になってしまう。

この二人の方が、パートナーとして釣り合っているのではないか。今のアスナに知識がないことは重々承知だ。戦闘の面でもキリトとは格が違うし、恐らくアルゴにも及ばないだろう。この世界でソロプレイヤーとして動いているアルゴの実力が低いわけがないのだ。

アスナは自分の力不足が歯痒かった。しかし、アスナが邪魔というわけではなさそうなのはわかっている。あの時のありがとうという言葉は、自分のことが邪魔なら出てこないだろう。それに、本当に迷惑だと思われているなら態度に少しは出てくるはずだ。それに気づかないほどアスナは鈍感ではない。今はまだ大丈夫、でもこれから先はわからない。

そんなことにならないために、アスナは努力をするしかない。

先ほどキリトが<<体術>>のクエストの情報をアルゴに聞いた時、何があっても恨むなど言っていた。生き死に関わることでないことを確認したアスナに否はなかったが、それでも念押しされた辺りそれ相応の難易度なのだろう。

出発する前に、アスナはキリトから<<体術>>の有用性を説明してもらった。しかし彼も使うのは初めてだと言っている。ならば、今回の機会はチャンスだ。スタート地点がそこまで離れていないならば、少しでも彼より多くのことを掴み、有用な情報をアスナから提供していくことも可能だろう。

キリトやアルゴとすぐに肩を並べることはできない。だがいつか、自らを磨き、知識を蓄えた自分が彼らを助ける側に回りたい。そして、彼らの前に立ち先導できる側になるのだ。そのいつかを早く達成するために、アスナは目の前の障害に全力で当たり、壊すのだ。

その障害となる目の前にあるものが、例え破壊不能オブジェクト一歩手前の大岩であったとしても。

アルゴ曰く「アーにゃん」にされたアスナは、同じく「キリエもん」にされたキリトと共に、目の前に存在する大岩を眺めていた。アルゴ

の髭の理由が理解できたアスナは、目の前の岩をコンコンと叩いてみる。硬い。

この岩を拳で、足で、何なら頭を使ってもいいから徒手空拳で割れとのたまったクエストNPCのご老人。しかもクエストをキャンセルしようにも、メイン武器を取り上げられて街に戻ることにすらままならない。この周辺の森には例の牛さんが生息している。数こそ多くないものの、無手で対峙すれば極めて危険なのは間違いないかった。

圏外で腰に剣を差していない状況に、アスナは不安を覚える。アスナと共に在った<<ウィンドフルーレ>>は、アスナの身体を守るだけではなく、心をも守ってくれていたのだろう。しかし、このクエストを成功させることで習得できる<<体術>>は、このような武器のない状況に陥っても自らを守ることができるものだ。圏外で無手になることで初めて、アスナはキリトの言う有用性を実感するのだった。

取りあえず、固まっただけでも仕方ないからやってみようと、アスナは大岩の前で構える。頭突きは流石に厳しい。ならば拳か蹴りだ。アスナは恐らく威力が高いであろう蹴りを選択し、大岩の中心に回し蹴りを放った。

コーンという良い音が響き、それなりにいい打撃が入ったことは認識できた。しかし、蹴った部分を見てみるとヒビひとつはいつていない。

「これ何時間……いや、何日かかるかわからないわね……」

アスナの結果を見て、隣のキリトも大岩を殴ったが、結果はさして変わらなかったようだ。

「アルゴ、お前このクエストがクリアできないから髭が付きっぱなしだったんだな？」

「その通りサ。いやあ、ラッキーだったなキー坊。無料で一つという話だったガ、<<髭の理由>>と<<エクストラスキル>>両方の情報を得てしまったわけだ」

「いやハハハと笑うアルゴを見て、少々苛立ちを覚える。恨まない約束したが、文句の一つでも言いたくなるのは仕方ないだろう。隣の

キリトの表情を見るに、アスナを同じ考えなのは間違いあるまい。

「まいったな、下手したら第二層攻略に間に合わない可能性だってあるぞこれ。仮に間に合っても、その間レベリングできないんじゃないや攻略に参加できるかも怪しい」

キリトが頭を抱える。懸念はもつともだ。第二層がどれくらい期間で攻略されるかはわからなかったが、第一層ほどの期間がかかる訳がない。それなりの規模の攻略隊と、まとめ役が最初からいるのだ。長くても半月、下手すれば一週間ということもあり得るかもしれない。仮にこのクエストを三日で攻略できたとしても、その後の熟練度上げや武器強化などで攻略組に遅れるのは間違いなかった。

「こういう激やば難度のクエストは大抵抜け道があるはずなんだが……武器まで取り上げられちゃうと、移動すらできないしなあ」

抜け道。そういうものもあるのかと、アスナは感心した。クエストを受注すると武器を取り上げられる。つまりこの場から移動はほとんどできない。もしこのクエストに抜け道があるのなら、それはこの周辺に存在するということだ。

アスナは周辺を見渡す。

岩山の間にある開けた地形に多くの丸い岩が転がっており、その周囲を森が囲っている。街に戻るにはこの森を抜けなければならぬし、森にいるのは牛だけだ。

「まあそういうことで、たまに様子は見に来るから恨まないでくれヨ、キー坊。岩を砕く一撃目指して、アーちゃんと一緒に頑張るんだナ」
「岩を砕く一撃ね。冗談だけにしておしかなかったよ全く」

キリトが再び岩を殴る。ゴンという音がするが岩にダメージはほとんど入っていない。

岩を砕く一撃ねえ……アスナも向き返り、岩を撫でる。岩を砕くにはよほどの一撃が必要だ。アスナの細剣が放つ連撃ではなく、単純な破壊力を持った一発。それこそ、さつき戦った牛の突進のように、岩を砕くような……!?

瞬間、アスナの思考に電流が走った。

自分たちでは強力な一撃を撃てない。ならば別の何かに撃つても

らえばいいのだ。例えば、あの牛の突進とか——！

「アルゴさん！ その辺の牛を一匹引つ張って、ここに連れてくることって可能ですか!？」

「ン？ まあ、そりゃあ一発攻撃当ててここまで逃げてくれば可能だけど……アーちゃん今丸腰だろウ？ どうやって倒すんだ？ オレっち一人だとさすがに厳しいゾ」

アスナの質問に、疑問で返すアルゴ。急にモンスターを連れてこい等と言われればそりゃ疑問に思うであろう。しかし、今のアスナの脳内にはその疑問を解消できる理論が展開されていた。

「牛をこの岩にぶつけるんです！ さつき岩場で平原と戦ったとき、突進を回避されて岩に突っ込んだ牛にダメージが、そして岩にはひびが入ってました。それを利用すれば……!」

「！ すぐにつれてくるヨ！」

アスナの考えを理解したアルゴが、すぐに森に入ってしまった。

「すごいこと思いつくな君は……」

「抜け道があるかもって言ったのは君だし、あの牛と戦ってなければ思いつかなかったわ。つまり気づいたのは君のおかげ。あのNPCは頭も使っていいって言ってたでしょ？ つまり、モンスターの頭を使っただって、反則にはならないってことよ。よく考えられてるわね……」

キリトの感心したような言葉に、アスナは淡々と事実を述べた。

自分一人では抜け道なんてものに気付きすらしないし、アルゴを助けに行かなければ、つまりキリトと共に行動していなければ牛の突進など見ることもなかった。見なければ当然知識にないのだから、この発想をすることはできなかつただろう。

「アーちゃん！ 連れてきたヨおおおお助けえええエ!!」

アルゴが全力で逃げてきた。その後ろにはものすごい勢いで突進してくる牛の姿が見える。

逃げてきたアルゴがアスナの後ろに隠れる。結果当然のように、牛はアスナとアルゴに向かって突っ込んできた。

「ひいっ!」

アスナはギリギリで突進を回避する。その時着用していた赤いフーデットケープが突進にかすり、チツという音が鳴ったことで、アスナは冷や汗を流す。

——さつきキリト君はあっさり回避してたのに！

アスナが休む間もなく牛は向きを変え、再度アスナに向かって突進してくる。連れてきたのはアルゴなのに「どうしてわたしに！」と叫ぶ間もなくひたすら回避に全力を尽くす。

途中キリトがアスナの名前を叫び牛の気を引こうとして来るが、まるで意味なくひたすらアスナに突進を繰り返す。

「フオッフオッフ、察しがいいのう」

そんな時、岩の上に座っていたクエストNPCの仙人が突然言葉を発した。

察しがいいということは、牛に岩を割ってもらうのは間違いない。あとはいかに牛を誘導するかだ。

岩の前に立って同じ岩に何回も突っ込ませるのは極めて難しい。しかも一歩間違えばHP全損のリスクがあるのだ。余裕があるわけがない。

——まるで闘牛士にでもなった気分だわ……!?

闘牛。その単語が思いついた瞬間、アスナは赤いフーデットケープの片側を広げる。すると牛の視線が広げられた赤い布に釘付けになった。

「ははあん？」

正解を引き当てたらしい。アスナはフーデットケープを脱ぎ、身体の横に広げる。直後、牛はアスナの広げた赤い布目がけて突進、後ろにあった岩に激突して大きなひびが入った。

アスナとキリトは闘牛士にジョブチェンジし、無事に<<体術>>スキルの取得に成功した。

<<体術>>を無事取得し、武器を返してもらったキリトは背中に感じる重みに一息ついた。

デスゲームが始まって一か月、自分の身を守ってくれるのはこの剣

だけだった。クエストを受注して攻略するまでの大した時間ではなかったが、身を守る術がないことはキリトに一定の不安を覚えさせたのは事実だ。これからは武器を失っても<<体術>>を使うことで戦うことができるだろうが、体術用のナックルやクローと言った武器を剣と同時に装備することはできないし、そもそも<<体術>>は覚えただけだから熟練度が0だ。

キリトはこれからの行動を考える。

何よりも優先されるのはレベルと熟練度を上げることだ。これは、ひたすらフィールドのモンスターを狩り続けることで解決する。

問題は、どのモンスターを狩るかだ。

キリトの武器である<<アニールブレード>>はすでに+6であり、この階層では十分過ぎるほどの攻撃力を持つ。しかも、すでに+8まで強化可能な素材を確保している。防具に関しては、第一層ボスのラストアタックで得た<<コート・オブ・ミッドナイト>>が破格の防御力を持っているため、強化の必要がない。

つまり、キリトはこの階層で強化素材を無理に集める必要はなかった。

キリトはアスナに視線を向ける。

彼女の持つ<<ウィンドフルール>>は、引つ張れば第三層中盤までは通用する。コンピを組む以上、相棒の装備強化も重要だと判断したキリトは、第二層に存在する飛行型mob<<ウィンドワisp>>の乱獲を選択する。回避力の高いモンスターだが、細剣の強化素材も集められるし、何より<<体術>>スキルの良い練習になるはずだ。

街に帰る道中、キリトはまともなことをアスナに伝えた。一瞬考え込んだのち、すぐに了承してくれたので問題はないだろう。

街に着くとアルゴはクエストの情報でも仕入れてくると街の探索に向かったため、キリトとアスナは解毒ポーションを買い、窪地にある低い木立にpopする<<ウィンドワisp>>こと蜂を乱獲し始める。

蜂と呼ばれるだけあって、注意すべきはその尻の先にある毒針だ。人間の頭ほどの蜂が毒針をぶんぶん振り回していると考えると、現実

では反転からの全力ダッシュで間違いない。しかし、このアインクラッドでは最も小さな部類の昆虫型モンスターだ。

毒針攻撃を避けて、硬直しているところにクリティカル攻撃を当ててしまえばさくさく倒すことができるため、一体当たりの時間効率は極めて良く、経験値も中々おいしい。

問題はどこをどう見ても虫が苦手そうな相棒が戦闘できるかどうかであったが、「剣が当たるなら虫も狼も関係ない」とまっこと男らしい言葉をいただき、細剣での突きから<<体術>>の基本足技スキル<<弦月>>をスムーズに発動させて蜂をポリゴン片に変えていた。その時間効率は、下手すればキリトを上回っている可能性があった。それを見て、キリトも蜂がPOPするエフェクトに突進する。キリトとてベータテスターとしての意地がある。ビギナーにそう簡単に負けるわけにはいかないのだ。

そのまま日没まで狩りを続け、主街区<<ウルバス>>に戻る。熟練度の上がりも細剣強化のための素材の集まりも上々だ。少なくともフィールドボスの攻略戦前には<<ウィンドフルーレ>>の強化を上限まで上げることができるだろう。

早く素材を溜めることができれば、余った時間で牛を狩って肉や皮装備の強化素材を集めるのも悪くない。街にあるクエストも消化してしまわなければならない。やることは山ほどあるが、<<体術>>のクエストを短時間で終わらせることができたため、時間には余裕がある。

この時間の余裕は、アスナが抜け道を探し当ててくれたおかげだ。今日、アスナと共に行動し理解できたのは、間違いなくキリトがソロで動くより効率がいいということだ。アスナの理解力、発想力はキリトも及ぶことはないだろう。先ほど行っていた狩りの時も、キリトが何か教えるでもなく<<体術>>を今までの戦闘に組み込んでみせた。

キリトが初めてアスナと会ったとき、彼女は恐らく戦ったことがないビギナーだっただろう。それから約二週間、彼女はこの短い期間で

最前線まで追いつき、唯一の女性フロントランナーとして名を連ねた。

恐ろしいと、キリトは思う。何が恐ろしいか、彼女がどこまで進むことができるかわからないのが恐ろしい。このソードアート・オンラインのベータテストに参加して二週間経ったとき、自分は何をしていただろうか。最前線にいたのは確かだが、彼女が扱うような鋭い剣技を使っていただろうか。

自分は井の中の蛙だった。キリトは素直にそう思う。

今のフロントランナーの中では、上位の実力を持つている自信はある。だが、たった二週間でキリトは彼女に追いつかれようとしている。レベルという数値こそ今はキリトの方が上だろうが、それも大したアドバンテージにはなるまい。今後攻略が進むに連れて、今ある差はすぐ縮まり、いつか追い越されるだろう。

いつか必ず、自分が彼女の足を引っ張るときが来る。キリトはそう確信していた。

第二層の扉の前で、彼女は目標があるからキリトが嫌と言ってもついていくと言った。

嫌なわけがあるだろうか。誰もが目を奪われる美貌、その細い腕から放たれる流星の如き剣技、そして何より、キリトを見捨てずついてきてくれた心の温かさ。

彼女の邪魔になるわけにはいかない。いつか必ず、道が分かれる時が来るだろう。彼女はいつか皆の前に立ち、このアインクラッドの希望になる。その時に彼女に心配をかけずに、自分が一人でも大丈夫だと信じてもらうために……、

「ねえ、さっつきからずつと考え込んでるみたいだけど……何かあったの？」

アスナの声にはつと顔を上げる。随分と集中してしまっていたらしい。

「いや、明日はどうしようか考えていたんだ。明日もくくウインドワスプ>>を狩り続けてもいいけど、クエストの消化もしときたいからさ」

「……そう。ならいいわ」

横を歩いていたアスナには考え込んでいたことはバレバレだったようだ。心配してくれたのか声をかけてくれたのだろう。キリトの言葉に納得はしていないようだが、ごまかされてくれたのだろうか、アスナは再び前を向いた。

どうも自分の世界に入り込みすぎていたようだ。すでに日没後、ゲームのシステムアシストと星の光があるため視界が悪いわけではないが、それでも昼間より警戒は必要だろう。

モンスターは問題ない。キリトの<<索敵>>スキルに引つかかるからだ。しかし、プレイヤーは違う。スキルを鍛えたプレイヤーに夜間に潜まれれば、そう易々と見つけることはできない。今のところPKの噂は出てきていないが、不意打ちを食らえばキリトとて命の危険がある。まして、PVPなどやったことがないであろう隣の少女はなおさらだ。

残念なことに、MMORPGという世界では女性プレイヤーは狙われやすい。3D環境のゲームでも女性に対するハラズメントが起きるのだ。ならば自分の身体を動かすような、主観を持てるこの世界――VRMMOならばその危険はさらに増すだろう。特に、この横を歩いている少女はどう見ても美少女。女性プレイヤーがただでさえ少ないこの世界だ、標的にされるのは間違いないだろう。

自分一人ではないのだ。パーティーを組んだ以上、キリトにも彼女の命に対する責任が発生する。自分が死ねば、彼女が巻き添えになる可能性だってあるのだ。

彼女を殺さないために、自分が死ぬことは許されない。少なくとも、パーティーを組んでいる間は。

考え事など、宿に入ってからすればよいのだ。この世界の夜は長いからだ。

キリトは決意を新たに、周囲に警戒を向けた。

第九話

第二層は広い北部エリアと、狭い南部エリアに分かれており、その間を急流が流れる渓谷が走っている。

迷宮区は南部エリアの奥にあるため、北部にある主街区<<ウルバス>>から迷宮区に向かうにはその渓谷を横断する必要があった。

そして、その横断をするための唯一の吊り橋の前に、第二層フィールドボス<<ブルバス・バウ>>が鎮座している。第二層モーター天国を象徴するモンスター<<トレンブリング・オックス>>を巨大化させたそれは、その周囲に<<ウインドワスプ>>を待たせ、フィールドボスとの戦闘用に開かれたものであろう広場を闊歩かっぽしていた。

その広場のすぐ横にある崖の上に、フィールドボスの討伐レイドを組むためにプレイヤーたちが集結していた。キリトがアスナを伴って到着すると、その場の3分の1程度の人間から鋭い視線が向けられる。そして残りの者達のほとんどが視線を一瞬こちらに向けると、すぐにそらした。

「……アスナ、少し離れたほうが。」

「今さらでしょ。一緒にここに来た時点で仲間だと思われてるし、それが嫌ならそもそも一緒に来ないわよ。安心しなさい、足を引っ張り合うようなことなんてないだろうし」

キリトはアスナにもヘイトが向いていることを実感し離れるよう勧めるが、返答を聞いて口を閉ざす。確かに色々思うことはあったとしても戦闘中に足を引っ張られるようなことはあるまいと、周囲を見渡す。

第一層ボスの攻略時よりは少ないが、見覚えのある顔が二つのグループに分かれてまとまっている。片方は青、もう片方は緑の服を着ており、その上に鎧を装備していた。

第一層の攻略後、ディアベルの元にまとまっていた部隊は二つに分かれることになった。一つはリンド率いる<<ドラゴン・ナイツ・ブリゲード>>通称DKB。もう一つはキバオウ率いる<<アインクラッド解放隊>>通称ALS。DKBが青、ALSは緑をパーソナル

カラーとしており、色で統一された彼らはフロントプレイヤーの中でも存在感を放っている。

そしてもう一組、恐らくこの階層では最高クラスの武器で全身を固めた5人のパーティーが一つ。＜＜伝説の勇者たち＞＞と名乗る彼らは、そのプレイヤー名も伝説の勇者をモチーフにしているらしい。レベルは攻略レイド加入ギリギリだが、装備が素晴らしいということだ。今回参加になったとのことだ。

今回の攻略戦はフィールドボスをDKBとALS、そしてブレイブスが担当し、それ以外は＜＜ブルバス・バウ＞＞が倒されない限りpopし続けるという蜂を狩るという担当になっている。

リンドもキバオウも、キリトが話した限りでは特に問題のある人物ではなかった。レイドリーダーを張れる人物かどうかまではまだわからないが、彼らの周りの雰囲気を見る限り統率は取れているようだ。あれならば、戦闘中にバラバラになるようなことはないだろう。「ねえねえキリト君、あそこに鍛冶屋さんいるよ。生産の人がこんな前線に出向くことなんてあるのね」

アスナに服をくいくいと引つ張られ、指が向けられた方を見る。先ほどのブレイブスの一人が剣の強化を頼み、成功させたのだろう。プレイヤー鍛冶師の肩を叩き褒め称えている。

「確かにお得意様を掴むチャンスとはいえ、大したもんだなあ……。まあ何かしらの戦闘技能を取ってはいるんだろうけど」

何にせよ、戦場に出張してくれる鍛冶屋というのは貴重である。武器は基本的に金属なのだから、修理するには鍛冶屋が必要だ。前線に鍛冶屋がいることで街に戻る手間もなくなるし、武器を修理して即復帰ということも可能なのだから。

「おーい、そろそろ始めるでー」

キバオウの声だ。どうやら攻略を始めるらしい。

「やっとな。わたしたちも行きましょう」

「ああ……頼りにしてるぜ、相棒」

「ん」

キリトはアスナと拳を合わせる。

今回は取り巻き狩りだ。そこまで危険な事態にはならないだろうが、命がけなのは間違いない。キリトは思う、そういう戦場に赴くときに、命を預けることができる相手がいるのはいいものだ。

「そうだ。キリト君、どっちが蜂を多く狩れるか勝負しましょうよ！勝ったほうが今日の夕食とデザートおごりで！」

アスナがにっこりと笑いながら誘いをかけてくる。ひたすら蜂を狩り続けるのだ、集中力を切らさないためにも、そういった目的は必要だろう。キリトは否はないと、頷き返した。

ボスが倒れるまで pop し続ける蜂をひたすら乱獲する。同じモンスターを狩り続けるので、精神的な疲労がそこそこたまるのがこの乱獲という作業であったが、今日のキリトは気合いに満ち溢れていた。理由は攻略戦が始まる前にアスナが放った言葉である。

デザートのおごりと聞いて、アスナがどういふつもりなのかキリトは理解した。

<<トレンブル・ショートケーキ>>。

先日アルゴと情報交換した店にある、とつてもおいしく、とつても甘く、とつてもビッグなケーキのことだ。そしてお値段もとつても高い。

そのお値段は、キリトがこのボス攻略で得るであろうコルを全て使ってもギリギリ足りるかどうかというものだ。一日の努力全てがケーキ一つに消える。そんな悪夢を見たくないキリトは、己の全力をもって蜂狩りに勤しんでいた。

毒針攻撃を回避したキリトは、硬直で停止した蜂に片手剣ソードスキル<<バーチカルアーク>>を繰り出す。二回の斬撃がV字型に放たれ、体力を6割ほど削られた蜂が空中で一時行動不能したのを確認後、空いた左手から体術ソードスキル<<閃打>>を放つ。

キリトの筋力値によって一撃の威力が底上げされた<<閃打>>は、蜂の体力を削り切ってポリゴン片に変える。

本来ならもう一撃ソードスキルが必要になるが、今回は二発ともクリティカルになったため削り切ることができた。これ以上の効率な

どなかなか出せるはずはないのだが……。

キリトは背後で戦うアスナを見る。

彼女が繰り出す<<リニア>>が蜂の体力を5割少し削り、即座に<<弦月>>の追撃が行われてポリゴン片がまた一つ出来上がる。

明らかにキリトより狩るのが早い。

彼女は敏捷値を重視して上げており、その攻撃はクリティカルを出しやすい。さらに武器の<<ウィンドフルーレ>>は正確さと軽さの強化がなされているため、クリティカル率はさらに上がる。その上がつたクリティカル率は体術スキルにも反映されるため、ほぼ確実に二発ともクリティカルが入るのだ

キリトも敏捷値は上げているのだが、重視しているのは筋力のためどうしてもクリティカル率はアスナに及ばない。その分一撃が重いのだが、この<<ウィンドワisp>>というモンスターはキリトのダメージ量では相性が悪かった。

ほぼ確実に二発で倒せるアスナと、三発必要な時があるキリト。勝敗は明らかであった。

DKBとALSの面々は、少々硬いところはあったものの犠牲者なしでフィールドボスを撃破した。明日からは早速迷宮区の攻略が行われるだろう。

その景気づけとばかりに、キリトとアスナは主街区<<ウルバス>>まで戻り、普段より少々豪華な夕食を共にした。キリトのおごりか、キリトの心の中で流された涙の量は自身の小さな心を水没させたのか、笑顔を振りまいてくるのでよしとした。

食事の最後、運ばれてきた<<トレンブル・ショートケーキ>>はアスナの想像を超えた大きさだったのだろう。一瞬目を見張ったかと思うと、両手を頬に当てうつとりとしている。

交渉の結果キリトは三分の一をアスナからおすそ分けしていただくことに成功し、濃厚でありながらくどくないクリームの味に舌鼓を打った。

「…………おいしかった……」

「ベータテストの時より美味かったな……」

アスナが横で深々と溜息を吐いて囁いたが、気持ちもわかる。自分と同世代の、いやすべての年代の女性にとつて甘味というのは至高のものなのだろう。しかもこの世界に囚われて以来、間違いなく初めての真つ当なデザートだ。ベータ時代よりも明らかに美味しくなっていたそれは、キリトをも夢中にさせてしまったのだから。

それにと、キリトは自らのHPゲージに目を向ける。ステータス状態には四つ葉のクローバーを模った<<幸運判定ボーナス>>のバフが約15分の残り時間と共に点灯していた。これは間違いなくベータの時にはなかったものだ。アスナも気づいているのか視線を左上にやっっている。

「しかし、15分か……。さすがに街の中でこのバフがついても、モンスターを倒すまでには消えてるだろうしなあ」

キリトは頭をかく。このバフのいい使い道が思いつかなかった。落し物拾いなんてのは隣の細剣使いフェンサーさんが嫌がるだろうし、カジノのようなものは七層までない。いつそのこと隣の美少女にお付き合いでも申し込んでみるか……?」

「ねえ、キリト君付き合ってくれない?」

「…………ん!?」

「この子の強化に!」

アスナの言葉に一瞬遅れて反応したキリトは、続く言葉を聞いて脱力した。キリトとて青春真っ最中の14歳だ。思考と言葉がシンクロしたのだから、一瞬期待してしまつたのも無理ないだろう。

キリトはアスナに連れられ、<<ウルバス>>の東広場に向かっていた。

時刻は19時、プレイヤー達が一日の活動を終え酒屋や宿屋に入っていく時間帯だ。彼女の目的の人物がまだいるかどうかはわからなかったが、せつかくの幸運バフをただ無駄にするのももったいない。

東広場に着いたアスナが、広場の北東にカーペットを広げている小

柄な人物を発見する。

「すいません！ 強化お願いしたいんですけど、まだやってますか？」
「！ あ、あなたは……！ ええ、まだ大丈夫ですよ。いらっしやいませ」

アスナを見た目的の人物、プレイヤー初の鍛冶師であるネズハは一瞬驚いた表情を見せたが、すぐに営業スマイルに戻す。

——そりゃあ有名にもなるわなあ……。

キリトの隣に立つ少女はフロントランナーの紅一点。第一層の一件で彼女の素顔が晒されたため、美少女剣士として噂になっているのは間違いないだろう。

「武器の強化をお願いします！ 素材は持ち込みで、5分以内に！」
「間に合うから落ち着いて……」

バフの残り時間を気にして焦っている彼女を宥める。<<ウィンドフルール>>の+4から+5への強化だが、素材は十分集めておいたので、最大確率の95%まで成功率を上げることが可能だ。

素材と手数料を渡し、ネズハが金床を出して強化が始まる。

ネズハの表情は俯いているため見れないが、<<ウィンドフルール>>にハンマーを叩きつけるその雰囲気はまさに真剣そのものだ。

「ねえ、キリト君。あなたの幸運バフも貸してくれる？」

「貸せるもんなら貸したいけど……どうやって？」

ハンマーに打たれている<<ウィンドフルール>>を見ていたアスナの言葉に、キリトは聞き返してしまう。システムの自分のバフを譲るなんてできるのだろうか……。キリトは自身の持つ知識を検索するが、その情報は引つかからない。

「……こうやって」

キリトの思考は停止した。

キリトの左側に立っていた少女が、その右手でキリトの左手をギュツと握ってきたのだ。

「ア、アスナさん!？」

身体が硬直したキリトは、驚きでアスナの名前を呼ぶしかなかった。しかし、彼女はこちらを気にすることなく目の前で行われている

剣の強化を見続けている。

「……全部持ってつてくれ」

気の利いた言葉を思いつくほどのスキルがなかったキリトには、辛うじて一言絞り出すのが精いっぱいだった。

金床の光が徐々におさまっていくのを見て、そろそろ強化の工程が終わるのがわかる。

「ま、まあ……失敗しても強化値が下がるだけで、武器が壊れるわけではないし？」

アスナの失敗しても問題ないわという言葉とは裏腹に、キリトの左手に感じる圧力は先程よりも強い。

素直じゃないなあとキリトは思うが、口に出すことはしない。

事実、アスナの言うとおり強化が失敗しても強化値が下がるだけだし、例えこのままでも次の第三層中盤までは引っ張れるのだ。

強化が終わる。アスナもそれを察したのか、左手をぎゅつと握ってくる。

最後のハンマーが振り下ろされ、そこには無事強化に成功した<<ウインドフルーレ>>が残る……はずだった。

結果はまさに最悪と言っていいものだ。

刀身の根元が砕ける。済んだ金属音を響かせた後、アスナの愛剣――<<ウインドフルーレ>>は全体をポリゴン片として砕け散った。

<<ウインドフルーレ>>が砕け散った後のことを、宿屋のベツトの上でアスナは思い出していた。

隣に立っていた少年が鍛冶師に説明を求めていたが、自分は彼の左手を握り続けることしかできなかった。

話の内容は頭に入っただけでこなかったが、彼は納得できた説明を得たのか、アスナの右手を引き今日泊まる予定であった宿屋まで連れてきてくれた。

アスナの部屋まで付き添ってくれた後、去り際に彼は一言残して去って行った。その一言はアスナに安堵と、申し訳なさと、情けなさ

を同時に植え付けた。

「これは自惚れかもしれないけど……置いて行ったりしないからな」彼の言葉を聞き、部屋の扉が閉められた後、アスナは涙を抑えることができなかった。

ベッドの上で涙を流し、どれくらい経っただろうか。

——みつともない姿を見せてしまった。

アスナは枕に顔をうずめる。

自分からついて行くと行ったはずなのに、彼に心配をかけて、このままでは足手纏いになってしまう。

きつとひどい顔をしていたと思う。彼はあんなに自分の剣のことを気にかけてくれたのに、アスナはただ手を引かれることしかできなかった。

明日には新しい剣を探さないといけない。

こんな感情を引きずっているわけにはいかないのだ。例え転んだとしても、すぐに立ち上がって進まない。彼の横に立つために。彼の……、

「キリト君……」

声に出してしまった。

あの人は優しい。

自分より同じくらい歳の年齢なのに、他人に優しさを分け与える余裕を持っている。いつそ彼が大人だったら、甘えることができたかもしれないのに。

こんな精神が揺れている状態でモンスターの前に立つわけにはいかない。戦闘に集中できないものを後ろに抱えて戦うなんて、彼の命取りになりかねない。

明日までに気持ちを切り替える。これは絶対だ。

——だから……今日だけは少し落ち込もう。明日いつも通りに歩けるように。

アスナは視界の端にあるデジタル時計に目を向ける。時間はもうすぐ20時といたったところだ。ちよつと早いけど、今日はもう寝てしまおう。

仰向けになり、アスナは毛布を少し深くかぶった。

キリトは全力で走っていた。

アスナの剣を強化し始めたのは19時辺りだったはず。現在時刻は19時57分。操作は多いが十分に間に合う時間だ。

キリトはアスナの部屋の扉をノックし、「開けるぞ！」という声と共に開ける。

突然のことに声が出ないのかアスナが呆然とこちらを見ており、その眼尻には涙が浮いている。驚かせて申し訳ないとは思うが、流石に理由を説明する時間はない。

「アスナ、緊急事態だ！　すぐにウィンドウを可視モードにしてください！」

「キ、キリト君？　どうして？　わたし鍵かけたはずじゃ……」
「初期設定ではパーティーメンバーなら鍵開けられるんだ。ほら急いで！」

アスナの肩を掴み急いでくれと促す。そんなキリトに戸惑いながらも、アスナはウィンドウを可視モードにした。キリトは表示されたメニューから右手の装備品欄が設定なしであることを確認する。

キリトは即座にメニュー操作の指示を出し、本当に急いでいることが分かったのであろうアスナはそれを実行していく。

そして、アスナの「はわあ!？」という叫びと共に、全てのアイテムが実体化された。

アイテムが実体化され積み重なったのを見たキリトは、目的のものを発掘するため一番上に<<<軽いもの>>>が積み重なっている山をかき分けていく。

「ね、ねえ君……死にたいの……？　殺されたい人なの……？」
背後から物騒な言葉と気配が漂ってくるが、キリトは気にせず山をかき分ける。

ここで目の前の様々な誘惑に気を取られれば、本当に明日の朝日を拝めなくなる。それを理解しているキリトは、無心で山の奥に突き進み、そして目的の金属製のそれを右手で掴む。

そしてアスナの前に目的のもの、<<ウィンドフルーレ>>を突き出した。

「うそ……」

掠れた声を出した後、アスナが<<ウィンドフルーレ>>に手を伸ばす。剣を掴んだ手が震えている。キリトの右手にもその震えが伝わるが、彼女がしつかりと剣を持ったのを確認して手を離さず。

「あなたは……なんなのよ、もう……」

<<ウィンドフルーレ>>を抱え込んだアスナは、床に膝をつき涙を流している。それを見たキリトは後ろを向き、少女が落ち着くのを黙って待つのがだった。

この時のことを、本当にずっとずっと後になって、「キリト君に殺意を持ったのはあれが最初で最後かもね」とほわんほわんと笑いながら言われることになるのは、また別の話である。

床に散乱した下着やアイテムを格納し、寝間着から普段着に着替え、剣をしっかりと抱えて、アスナは再びベッドの上に戻った。

視界の端では、乙女の部屋に乱入し襲い掛かった黒髪の少年がじつとこちらを見て椅子に座っている。

「あのね」

アスナの言葉に、キリトがびくつとする。それを見て笑みが出そうになるが、真面目な口調を変えることのないように続ける。

「急に部屋に押し入られて、ベッドの上に押しさえつけられたけど、それは不問にするわ」

「お、押しさえつけてはいないんじゃないですか……す、すみません」

キリトの言い訳をアスナは睨んで黙らせる。

「まあ、いいの。あなたがわたしのために急いでたつてのは理解できたし」

「そ、それはよかった。本当に」

キリトが心からほっとしているのを見て、今度こそ笑みが出てしまう。それを見たのか、キリトが少し怪訝にしているが気にせず話を続けよう。アスナには言わなければならないことがあるのだ。

「あのね、わたしのために色々ありがとう。この剣のこともそうだし、その前の……置いて行かないって言ってくれたの、ちよつと嬉しかった」

アスナはキリトに素直な感謝を伝える。

一時は彼の隣にもう立てないのではないかと思った。でも、彼のおかげで剣を取り戻すことができた。この剣があればアスナは彼の背中を守ることができる。共に戦えるのだ。

アスナの言葉を聞いて、キリトの顔が赤く染まったのがわかる。

お礼を言われたくらいでそんなに恥ずかしがらなくてもいいのに、アスナは思う。

「その、アスナは俺についてきてくれるって言ってくれたし、アスナみたいなの……剣士と一緒にいると俺も……楽だし」

頭をかきながら言うキリトの顔はまだ赤い。

普段は頼りになるけど、この人は意外にかわいいのかもしれない。

男の人にかわいいなんて失礼かもしれないけど、アスナはクスリと笑った。

「あと、さっきのことで、話す必要があることがあるんだ。遅い時間だし、君の部屋で申し訳ないけど、話させてもらって構わないか？」

さっきのこととは、恐らく剣のことだろう。何故粉々になったはずの剣が、こうしてアスナの手の中にまだ存在するのか。何をされたのかは理解しているが、その仕組みはアスナにはわからなかった。だが、この少年はもうある程度察しがついているのだろう。

「ええ、大丈夫。夜はまだ長いわ。ゆっくり話してくださいな」

時間はまだ20時を過ぎたばかり。彼のおかげで気持ちの揺らぎもなくなった。だから聞こう、自分が何故詐欺にあったのかを。

第十話

第二層タランの村の名物、くくタラン饅頭くく。アルゴが差し入れついでに持ってきたそれによって引き起こされたクリームテロは、目の前の美少女の顔や衣服に白いクリームをべっとり付着させた。

青春真っ最中のキリト少年にとって、その光景は様々な感情を悶々とさせる光景だったのは間違いなく、思わず喉を鳴らしてしまったのも仕方ないだろう。横にいるアルゴの視線に気づかなければどうなっていたか。

アスナとアルゴの視線が普段より心なしか鋭いのを気のせいと割り切り、キリトは本題を話し始める。

鍛冶師ネズハが、強化によって武器が壊れたと言い張っていたのに、その壊れた筈の武器は今アスナの手元にある。そして、強化に使ったはずの素材や手数料のコルは戻ってきていない。

そしてアルゴの情報では、武器の強化による破壊は武器の強化可能回数が上限に達していること、所謂いわゆるエンド品であることが唯一の条件らしい。アスナのくくウィンドフルレくくは+4で、強化可能回数は6回。つまりあと2回余裕があるのだから、強化によって破壊されるわけがないのだ。

つまり、武器強化を騙かたった詐欺行為であることは間違いない。

強化を依頼された武器を、強化を行う最中に何らかの方法でエンド品と交換し、武器が壊れたという証明にするのだ。そして、手元には依頼者の武器と素材、手数料が残る。エンド品は無強化の同じ武器に比べてかなり安く取引されるので、差額を考えればかなりの儲けになることだろう。

「問題はその稼いだ金が何処に行っているかだが……」

「あの後フードットマントを着た四人組と会って、何か受け渡そうとしてたのは確認してるヨ。トラブルがあったようで慌ててたみたいだけどナ。その後は三々五々、鍛冶屋クンは安宿に直行だったヨ」

アスナのくくウィンドフルレくくがストレージに無かったから驚いたのだろう。しかし誰かに会っているというのは……。

「どうするキー坊？ オレっちのルートを使えば攻略組全体に強化詐欺の情報を流すことは可能だが」

「詐欺なのは間違いないだろうが、四人か。五人だと思ったんだがなあ……。とにかく今の時点で流すのはまずいだろうな。武器が戻ってくるならまだしも、もし金に変えられてたりしたら詐欺で奪われた武器は永遠に戻ってこない。その償いをさせるためにどうするかなんて……。わかりやすいからな」

「罰としてのPK……カ」

アルゴの言葉に無言で頷く。この世界でペナルティが与えられるのは、唯一ハラスメント違反のみだ。今回の強化詐欺のような、プレイヤー間の取引に対してのペナルティは存在しない。その罰の程度はプレイヤーに判断が任されているのだ。

「ねえ……PK……って……何？」

今まで黙っていたアスナが問う。

「……プレイヤーキルの略称。プレイヤーがプレイヤーを殺すこと。つまり、この場合は鍛冶師ネズハの処刑だ。強化詐欺によって武器を奪ったことを、命をもって償わさるってことだ」

「そんな……！ この世界で死んだら現実世界でも死ぬのよ!? それってつまり、人殺しじゃ……」

キリトが頷くと、アスナは顔を俯かせる。

例えくく処刑くくだろうが、人殺しなのは間違いないのだ。絶対に避けなければならぬことは間違いない。

「どのように詐欺をしているか突き止め、彼に罪を認めさせる。そして、その金をどこに流しているのかも吐かせる。そして取り返しのつく形で償いをさせる……」

「まあ、その方向で動くしかないナ……根回しはしておくヨ。じゃあ、オレっちも色々あたってみるサ。キー坊、アーちゃん、またナ」

アルゴが去っていくのを見送り、アスナがまだ俯いているのを確認して一息吐く。

どうにも精神的に疲れる話だ。普通のゲームならばどこぞの掲示板に晒し上げられ、騒がれる程度の話で済むはずなのだが。

「ねえキリト君……この剣は、どうして回収できたの？」

アスナの言葉に、そういえば説明していなかったなとキリトは思い出した。

「さっきやってもらった、<<全アイテムオブジェクト化>>。あれは一種の救済措置でね。装備中のアイテムを忘れてしまったり、取りに行けないような場所に落としてしまったときに使える技なんだ。装備していないアイテムは五分、装備中のアイテムは一時間の間だけ、オブジェクト化で回収が可能ってわけ」

「そうなの……だからあんなに急いでたのね」

そういうことと、キリトは頷く。アスナは俯いているため表情はわからないが、疲れているのは間違いないだろう。

フィールドボスと戦い、詐欺によってメイン武器を失い、挙句の果てには人殺しの話だ。

ゲームに慣れているキリトでさえ疲れを感じるのだ、ビギナーの彼女には中々きつい内容だったのではないだろうか。

「ああ、時間ギリギリだったからな。武器の替えはいくらでも効くのがこの世界だ。その<<ウインドフル>>も、最大値まで強化して第三層中盤までひっぱるのが精一杯。近いうちに変えなきゃならないのは事実だ。でも、メイン武器をあんな形で失うってのはやっぱりきついだろうから……間に合ってよかったよ」

アスナの顔がこちらを向く。その表情は驚きと、切なさが混ざったようなものだ。

「この剣とはずっと一緒にいけないのね……」

「二応、剣をインゴットに変えてそれを次の剣の素材に使うという手段はある。当然同じものではなくなるけど、剣の魂は引き継がれる……子供騙しって笑うかい？」

「ううん……きつとわたしはそうするわ。この剣はずっとわたしを助けてくれたもの、この子の魂を引き継いだ剣となら、わたしはずっと戦えるわ」

アスナが<<ウインドフル>>を抱きしめる。その表情は、先ほどとは違い少し笑みを浮かべているように見えた。

「少しは調子が戻ったようで何よりだよ。じゃあ、今日はゆっくり休むといい。明日からは迷宮区の攻略と、詐欺関連の調べものもしなきやならないからさ」

まだ21時を過ぎた所だが、これから何かをできるわけでもない。彼女の心はずいぶん揺さぶられたはずだ、そういう日は早く寝るに限るだろう。

キリトは立ち上がり扉に向かう。アスナが見送ってくれるのか立ち上がろうとするが、それを手で抑えてから扉を開ける。

「じゃあおやすみ、アスナ」

「うん。キリト君ありがとう、おやすみなさい」

扉が閉まる前、彼女は笑顔で軽く頭を下げた。

扉が閉まる。廊下に出たキリトはドアノブに手を掛けたまま、扉に頭をコツンと当てた。

「あの笑顔は、反則だよなあ……」

彼女の笑顔を見るだけで、疲れた心が癒される。

剣の回収が間に合ってよかったと、キリトは強く思った。もし剣を失っていれば、彼女の笑顔を見ることはできなかつただろうから。

「さて、かわいい笑顔も見れたし、明日も頑張りますか……!」

キリトは改めて部屋を取るために、フロントに向かう。

今更同じ宿で文句を言われることもあるまい。明日も共に行動するのだ、泊まる場所は近い場所がいいだろう。

フロントに向かうキリトの足取りはいつにも増して軽かった。

翌日、アスナとキリトは迷宮区の探索を開始した。

やたらと露出の高い牛男、<<レッサートーラス・ストライカー>>を初めて見たときは、あまりの恰好に少々動揺したものの、それ以外は特に問題なく攻略は進んでいた。

日が昇る直前に街を出発したため、アスナ達より先に迷宮区に挑んでいるパーティーは居なかつたようで、迷宮区の各所に置かれていた宝箱が手つかずになっていた。それを根こそぎ回収したことで本日の儲けが非常に大きくなることは確実だったが、目的は迷宮区のマッ

ピングである。

前を進むキリトの後ろを、アスナは少し離れて歩く。

普段は隣を歩くのでキリトがたまにこちらを窺うが、フードを深く被ったアスナはそれに反応せず黙々と歩き続けた。周囲への警戒もしつかりできているし、戦闘も集中できている。それを理解しているので、キリトもアスナに何も言っていない。

気まずい雰囲気なのは理解しているが、アスナは今、彼に顔を見られたくないのだ。

場面は昨日の夜まで遡る。^{さかのぼ}

原因はキリトとの話が終わり、彼が部屋を出てさあ寝るかと思ったときに、扉がコンと鳴ってから聞こえてきた言葉だ。

あまりにも直球なその言葉は、アスナの顔を赤面させるのに十分な威力を持っていた。

たまらずベットに体を放り出し、枕に顔をうずめる。先ほども同じことをしたが、その感情はまさに正反対だ。

彼は扉を閉めてから呟いた。つまり、独り言だったのだ。

でも、その独り言が自分に聞こえてしまっただ。

そして、独り言で嘘を言うはずなくなかって……。

——恥ずかしい。

ベットの上で足をパタパタとさせながら、アスナは先ほどの少年の言葉を、脳内でリピートしていた。

——あんな言葉は、言われ慣れてるはずなのに。

アスナの父の実家は、つまり結城の家は二百年の歴史を持つ名家だ。

地方銀行の経営に携わっているらしく、アスナも＜＜結城の娘＞＞としてパーティーやら何やらに顔を出す機会は多かった。

そのような場で、かわいいという言葉なんて何回も聞いてきたのだ。尤も、言葉とは裏腹に目は何か別のことを考えているような冷たい目で、幼いながらもアスナはそれが本心ではないことを理解できた。結城明日奈という存在を＜＜結城の娘＞＞としか見ていないの

だろう……この考えに辿り着いたのはいつ頃だっただろうか。

だが、あの少年は自分が<<結城の娘>>であることを知らない。知るわけがない。

この世界の、今ここにいるのは結城明日奈ではなく、ただのアスナなのだ。

彼は自分という、アスナという存在だけを見て言葉を発する。

だからだろうか、彼の言葉はアスナの心を大きく揺り動かす。

扉に隔たれていたから、彼の目がどんな色をしていたのかはわからない。

だが、今までアスナを見てきた人間たちと同じではないことは確信できる。

——今までとは違って、ちよつと嬉しいな……。

アスナは少年の顔を思い出して、クスリと笑ってから眠りに落ちた。

そして、場面は今に戻る。

昨夜、最後の最後に盛大に動揺させられた結果、朝になつてもそれはおさまることはなく、「おはようアスナ」といつもの顔で言ってきた少年にアスナは赤い顔で睨むしかできなかった。

その睨みが効いたのか、彼はこちらを気にしてはいるものの、迷宮区への道中に何か言ってくることはなかった。

彼からすれば、最後の言葉が聞こえていたと思っていけないのだから、まるで心当たりがないのだろう。時折頭をかきながら、悩んでいるような姿が見える。

その姿を見て申し訳なきを感じなくもないのだが、女性に簡単にかわいいなどという方が悪いのだとアスナは結論付けた。

迷宮区を歩きながら、キリトは背後を歩く少女のことを考えていた。

昨日色々あったものの、結果的に笑顔で一日を終わらせることができたのだから良しとしようと、いい気分でベットに入った。

しかし、次の日の朝キリトを出迎えたのは、赤い顔でこちらを睨んでくる少女の姿だった。何があつたのか聞こうとすると、すぐにフードを深く被ってしまい表情を窺うこともできない。

——さっぱりわからない……。

いや本当に、さっぱりわからない。

迷宮区への道中、そして迷宮区に入ってからアスナの態度は変わらない。かといって戦闘に影響があるのかということとそんなことはなく、キリトの足を引つ張るところかいつも以上の剣の冴えを見せている。相変わらず頼りになる相棒だと思うが、そのご機嫌を取る方法はキリトには思いつかない。

必要な会話には答えてくれるし、こちらを嫌っているような印象を受けることはないから問題ないのだろうか。

いや、このまま放置しておくべきではないだろうと、キリトは思う。パーティーを組んでいる以上、相手に思うことがあるのならば伝えておくべきだ。下手に放置してしまえば、命の危険を呼び込みかねない。

時刻を見れば、もうすぐ正午。朝一から迷宮に潜り込んでいるのだから、そろそろ食事休憩も必要だろう。

「アスナ、そろそろ一回休憩を入れよう。そろそろ昼食の時間にもちようどいいし」

後ろにいた赤ずきんちゃんやんが頷くのを確認し、近場の安全地帯である小部屋に入る。キリトはその隅に腰を下ろすと、一人分ほどの距離を空けてアスナも腰を下した。

キリトはストレッチから弁当として用意した、サンドイッチのようなものを取り出し口にする。横の少女も同様だ。味はお察しだが、何も食べれないよりははるかにマシだ。大した量は買ってきていないので、間もなくして食べ終わり、一息つく。

多少の満腹感を得た。少なくとも空腹で、戦闘中に気が散るということはないだろう。隣に視線をやれば、少女も食べ終わったらしい。ストレッチから出した飲み物を飲んで同様に一息ついている。

沈黙が流れる。

迷宮を歩いていた時は周囲を警戒する必要があったから気にならなかったが、安全地帯ではそんなことをする必要はない。だからだろうか、余計にこの雰囲気気になっちゃった。

黙っていても仕方がない、いつそ聞いてみようとかキリトはアスナに尋ねた。

「なあ、アスナ。その、今日の朝からなんか不機嫌みたいだけど、俺、何かしましたでしょうか……？」

途切れ途切れになってしまうのも、中途半端な敬語になってしまうのも、コミュニケーション下手に定評があるキリトには仕方がない。そう自分で言い聞かせる。質問できただけでも十分頑張ったのだ。

「……したわよ、昨日」

その言葉と共に、アスナが膝を抱えて体育座りをし、フードを指で引っ張り顔を隠した。彼女の表情は全く見えない。

はて、昨日何かしただろうか？

キリトは腕組みをして昨日のことを思い出すが、心当たりがなかった。いや確かに彼女を押し倒したり、泣かせたりはしたから、全く心当たりがないというわけではないのだが……いやむしろ、こうして並べてみれば大問題なのではないだろうか。

「……って、言ったじゃない」

「ん？」

「っ！ だから！ ……昨日、寝る前に、その、笑顔がかわいいって、言ったじゃない……」

その言葉を言い終えた後、アスナは膝に顔をうずめてしまった。

——俺が？ アスナに？ え、笑顔がかわいいって……？」

キリトは全力で思考を回転させる。

——寝る前？ 昨日部屋を出る前は剣をインゴットにする話をしたはず。その後……？」

瞬間、キリトの顔も沸騰したように赤くなる。

言った。確かに言った記憶があった。でもあれは間違いなく扉が閉まった後のはずだ。

「えっと、扉が閉まった後……だよな？ 聞こえてた……？」

アスナが頷くのを見て、思わず頭を抱える。

そして、その時のことを鮮明に思い出した。部屋の扉をノックすれば、十数秒間部屋の中に声を通るようになる。あの時キリトは扉に軽く頭をぶつけた。恐らくそれがノックとして認識されてしまったのだろう。

キリトの思考は完全に止まり、どう言い訳したら良いかわからなくなった。

「あー……その、つい、冗談で……」

キリトは頬をかきながら口にする。冗談、そう冗談なのだ。むしろそういうことにしないと他にどう言い訳すればいいのかわからない。

「冗談……だったの？」

そんな考えは、フードの奥のアスナの表情を見て吹き飛んだ。

こちらに顔を向けたアスナの表情は、顔を赤らめてはいるが、その^{はしほみいろ}榛色の瞳には悲しみを宿し、不安そうな顔をしている。そして、膝を抱える手には少し力が入っているのがわかる。

「冗談じゃ、ないです。本音、です……」

たまらずキリトは正直に答えた。

反則だ、とキリトは思う。

この仮想世界の表情というのは、わかりやすく作られているのは間違いない。だが、この美少女に悲しそうな表情を向けられて嘘をつける男がいるわけがない。少なくとも、キリトには無理だ。

「……そっか」

アスナが再び視線を前に向け口にした一言は、先ほどの不安そうな声色ではなかった。

こちらの答えに満足したのか、安心したような響きを持っていた。

何とももどかしい雰囲気が出る。何か言うべきなのかキリトは悩んだが、残念なことに言葉が頭に浮かぶことはなく、ただただ沈黙が流れ続けるのだった。

「……よしー」

キリトがどうしたものかと悩んでいると、その一言と共に先程まで体育座りで縮こまっていたアスナが立ち上がった。

「そろそろ行くっか、キリト君。あんまり休みすぎると、後ろから追いつかれちゃうかもしれないし」

アスナの手が差し出される。先ほどの会話から少し気恥ずかしさを感じつつも、その手を取ってキリトは立ち上がった。

いきなり話題が終わったことで思考は追いついてこない。だが、アスナの表情はいつも通りのものに戻っている。その心境を窺うことはできなかったが、少なくとも悪い方向には行っていないことはキリトにも理解できた。

安全地帯の小部屋から出ると、アスナはキリトの隣に並んだ。

キリトはびっくりしたようにアスナを見たが、顔を赤らめてから再び前を向く。

いつも通りの場所に戻っただけなのに、とアスナは軽く微笑む。食事の後、彼の質問に思わず答えてしまった。

恥ずかしいと思いつつ、言葉が出るのを止めることはできなかった。

そして、彼の言葉は冗談ではなく本音が出たのだと教えてくれた。きつと本気で言ってくれたのだろうとは思っていた。でも、もし本当に冗談だったら、多分怒るよりも悲しみの方が大きかったはずだ。

事実、彼が冗談と言った瞬間アスナの心は悲しみで覆われた。

迷宮区の中で精神状態を揺らしてしまえば、その先に何が待つかは言うに及ばずだ。

だから、どうしてこんなに悲しいと思ったのか、それを考えるのは今はやめておくことにした。

彼はアスナが求める答え通りのものをくれた。

今はそれだけで十分だろう。

アスナはキリトの隣を歩く。その間は、少しだけ狭くなっていた。

第十一話

キリト達がいる一階層下で、<<レッツサートーラス・ストライカー>>を攻撃している5人の男性プレイヤー。全身を現時点での最高峰の装備で固めた彼らは、中々の連携を見せて目の前の牛男を攻撃していく。

「ちぐはぐな人達ね」

アスナの言葉に、キリトは前を見たまま頷く。

彼ら<<伝説の勇者たち>>のレベルは攻略組でも最下層だ。しかしその装備によって、アスナの見立てで言うところの実レベル+3程度の底上げをして、攻略組の一員と認められた。見る限り連携もしつかりできている。この第二層のボス攻略にも、彼らは顔を出すことになるだろう。

連携は無難だから実戦経験はある、だがレベルは低くて装備は最高峰。

多くのゲーム、特にRPGという種類のゲームにとって、レベルと装備は比例するのが基本だ。このソードアート・オンラインもその基本から漏れなく、ラストアタックボーナスという一部の例外を除いて、レベルが上がるにつれて良い武器や防具を手に入れることができる。

だからこそ、ブレイブスは異質だった。

それこそ、第一層ボスのラストアタックを確保したキリトよりも良い装備を揃えながら、キリトよりもレベルは数段下なのだ。

つまり、彼らはその装備を手に入れたり、購入したりする金を得る経路ルートを持っているということだ。

そして現状、その経路は一つしか考えられなかった。

「彼らが脅してネズハに強化詐欺をさせているのか、ネズハが自ら貢いでいるのか……」

脅すにしてもそのネタが何なのかわからない。貢ぐにしてもそれがどれだけの意味があるのか。

普通のゲームならば、隣の美少女のようなプレイヤーにお金や装備

を買いでいいところを見せようという考えを持つプレイヤーが必ず出てくるが、果たして彼らが貢がれるほどの魅力を持っているのかどうか、キリトには判断できなかった。

「キリト君は、ブレイブスが強化詐欺に絡んでるって思ってるのね」「十中八九……な。金を稼ぐには狩りをするのが最も確実に早い。狩りをすればレベルが上がる。だが、そのレベルが彼らは上がっていない。何処からか装備やお金を提供してもらっていると考えるのが妥当だろうな」

「その提供される装備やお金はネズハが稼いでいるとして、強化中はどうやって武器をすり替えているのかしら。少なくともわたしは、あの時剣から目を離していないと思うのだけど……」

それが全てだ。

アルゴの情報からも、ネズハとブレイブスが絡んでいるのはほぼ間違いない。しかし、肝心の強化詐欺の方法がわからなかった。

それこそ一瞬で、ストレージに武器を交換できるようなスキルでもない限りは……。

「二つだけ、あるな。一瞬で武器を交換できるスキルが……」

キリトの言葉に、アスナはなんで早く言わないのという顔でこちらを見ている。

確かに一つだけあるのだが、このスキルを使うには一つの条件があった。それは、ソードマン戦闘職であることだ。

「武器強化modの一つに<<クイックチェンジ>>って言うスキルがある。事前に設定をしておくことで、ストレージ内の指定の武器を瞬時に装備できるってやつだ。だが、これは片手直剣や細剣みたいな、戦闘用武器スキルの熟練度が一定以上無いと使うことはできないんだ。彼は前線まで出張っていたから、何かしらの武器スキルを取っていてもおかしくはないが、こればかりはな……」

ネズハが武器スキルを取っているのか、これは何とも言えないだろう。

鍛冶のスキルを上げるにはそれ相応の素材や時間が必要だ。それ以外の時間で片手間に武器スキルを上げる程度では、この短期間に<

〈クイックチェンジ〉を習得するのは厳しいだろう。

「……アルゴさんと検討が必要ね。鍛冶師ネズハが戦闘職として動いていたのか。あとは、〈クイックチェンジ〉を実際に使っているところを見るか。ここら辺の確証がないと、下手に動けないわ

〈〈ビーター〉〉とそれについて行った少女。

このことがキリト達の動きを阻害していた。

一部の理解ある人間たちを除いて、キリトの信用は地の底だと言っている。

そんな人間が強化詐欺に関して間違った糾弾を行ってしまえば、矛先がこちらに向かってきかねないのだ。

「今日はもう10時間近く潜ってる。予定より少し早いけど一旦街に戻ろう。迷宮区からじゃメッセージの受信はできないから、アルゴと連絡を取るにも街に戻らないといけないし」

「それに、新たな被害者が出かねない……か。いいわ、今日は戻りましょうか」

キリトの提案をアスナが受け入れる。

獲得できた経験値やコルは十分なものだ、このまま明日ボス戦と言われても問題ないほどに準備はできている。

ならば、ボス攻略の可能性を上げるためにも、強化詐欺の問題を片づけるべきだろう。

キリトとアスナは眼下で勝鬨を上げているブレイブスを尻目に、迷宮区を後にした。

キリトは〈〈アニールブレイド〉〉をネズハに手渡す。

フルフェイス装備をして、顔を見られないようにしたキリトはこれからネズハが行う強化詐欺の現場を抑えるべく、自らの剣をじっと見つめていた。

〈〈クイックチェンジ〉〉が行われた際、武器は一瞬だが必ず点滅する。その瞬間を見ることができれば、キリトも〈〈クイックチェンジ〉〉を使用して壊れた筈の〈〈装備中の剣〉〉を取り出すことで、証拠を突きつけることができる。

そして、ネズハの露店を見下ろせる位置にアスナとアルゴが待機し、その一挙一動を監視している。

装備品と強化素材を確認したネズハが金床を取り出し、強化を行うためのエフェクトで光り輝く。その瞬間、金床の光よりはるかに小さい光がキリトの剣を包み、収まった。

うまい手を考えたものだ。

普通、目の前で金床が光り輝けばそちらに目が行くのは間違いない。その一瞬目が離れた瞬間に、クイックチェンジで武器を交換しているのだ。

ネズハの動きは続き、恐らくエンド品であるそれにハンマーが振り下ろされる。

真剣な表情でハンマーを振り下すネズハ。心の籠った、丁寧なつらおと槌音だ。それはまるで、これから壊れる武器への手向けであるかのよう

に。既定の回数が叩かれ、武器がエフェクトと共に破壊される。ネズハが土下座と共に謝罪をしてくるが、それを気に掛けることもなく、キリトは上で待機していたアスナを見る。領きを返すアスナを確認したのち、キリトは事前に設定していたクイックチェンジを発動させた。

右手には壊れた筈のアニールブレードが現れ、キリトはネズハに剣を突きつけた。それを見たネズハは一瞬硬直するが、観念したように膝に手を当て頂垂れた。

「署までご同行、願おうか」

ネズハは顔を上げることなく、頷いた。

ネズハの本来のプレイヤー名 Ne z h a が、ナーザという読み方であること、そしてそれが中国の封神演義に出てくる英雄ナタクであることをアルゴが突きつける。

ブレイブスとの関係も知られていると理解したネズハは、もはや抵抗する術はないと悟ったのか、淡々とすべてを話し出した。

自身がフルダイブ不適合によって遠近感が掴めないこと。

そんな自分を見捨てず、ブレイブスの仲間が自分の<<投剣>>熟練度上げに付き合ってくれたこと。<<投剣>>が実用的ではないスキルであることを知ったときには、すでにブレイブスと攻略組の間には取り返せないレベル差ができていたこと

そして、<<黒ポンチョの男>>から強化詐欺の手法を教えてもらったことを。

「これが全てです。でも、勘違いしないでください。これは僕自身のために、僕が判断し、僕が実行したことなんです。ブレイブスのみならず関係ありません。だから……」

「自殺する……か？」

キリトの言葉に、ネズハの動きが止まる。表情を見る限りそう続けようとしていたのだろう。

「……仕方ないでしょう。僕は<<フルダイブ不適合>>だ。戦闘で役に立たない。生産も、今回のことでもう手を出すことはできないでしょう。戦闘もできず、生産職にもつけない。なら、どうすればいいんです……！ はじまりの街で引きこもっている？ ……そんなことになるなら、ただ腐るのを待つくらいなら……！」

死んだ方がマシだ。

ネズハの吐き出すような言葉を聞いて、キリトは笑いを隠せなかった。

それを見たのか、ネズハが睨んでくるのを見てキリトは慌てて否定した。

「すまない、アンタのことを笑ったわけじゃないんだ。腐っていくぐらいなら死んだ方がマシ、そんな言葉をこの隣に座ってるお姉さんも言っていたもんでね」

その言葉に、ネズハが意外そうな顔でアスナを見ている。

隣に座っていたアスナが睨んでいるのが横目に見えるが、気にせずキリトは続けた。

「改めて聞くんが、アンタは<<投剣>>が使えるなら戦うことができるんだな？」

「……はい。でも、あれはメインスキルとしては役に立ちません。弾

数無制限の武器でもない限りは……」

キリトはストレージからある武器を取り出した。第二層迷宮区<<トーラス・リングハーラー>>という強敵がドロップするそれは、遠隔武器でありながら戻ってくるという性質を持つ武器だ。

「<<チャクラム>>。これがあれば残り弾数を気にすることなく、<<投剣>>スキルで戦うことができる。だが、これを使うには<<投剣>>とあるエクストラスキルが必要だ。……言いたいことはわかるな？」

ネズハが喉を鳴らす。その表情は緊張し、額には汗が流れている。これから何を言われているのかわかっているのだろう。

だが、キリトはそれを知っていてなお、あえて口にした。

「アインクラッド初の鍛冶師ネズハ。君は、鍛冶スキルを捨てる覚悟があるか？」

ネズハが震えながら俯く。

彼が結論を出すまでに、あまり時間はかからなかった。

翌日。

ネズハを<<体術>>のクエスト場所まで送っている最中、事件は起きた。

キリトとアスナ、そして何故かアルゴもついてきて4人で歩いていた時、ネズハの放った言葉にキリトとアスナは大いに動揺させられた。

「キリトさん、アスナさんとはいつからお付き合いされているんですか？」

その言葉を聞いた瞬間、アルゴと共に前を歩いていたアスナがぐるんとこちらを向き「つ、付き合ってません！」と大声で否定した。

——確かにそうだけど、そこまでムキにならんでもいいんじゃないかな……。

相棒によるクリティカルヒットが、キリトの心のHPゲージを減らした。

隣ではネズハが慌てて謝っている。

「す、すいません！ 誰もが知ってる噂でしたから、てつきり事実なのかと！」

「だ、誰もが知ってる……!?!」

誰もが知ってる噂、その言葉に驚愕したのかアスナの顔が真っ赤に染まる。

「お二人はいつも一緒にいますし、同じ宿屋に出入りしてる姿も大勢のプレイヤーに見られてますよ」

アスナが口をパクパクさせているが、言葉が出てこないようだ。

「他にも、ある晩にとあるプレイヤーがキリトさんの宿を訪ねたら、浴室から一糸纏わぬアスナさんが出てきたとか。そこで目撃されたスリーサイズや下着の色が高値で取引されているとか……」

間違いない、原因は奴だ。

キリトとアスナはアルゴを睨む。

ニヤハハハと乾いた笑いをこぼしているアルゴを見て、キリトは溜息を吐くだけで済ませるが、アスナはそれどころではないのだろう、無言で詰め寄っている。

「だ、大丈夫実際に売ってはいないカラ！ ほラ、アーちゃん今有名人だからサ！ 結構情報を欲しいって人が多いんだヨ！」

あーなるほどと、キリトは頭をかいた。

確かに、<<悪>>のビーターと攻略組随一の美少女プレイヤーがそんなことをしていれば、噂の一つや二つ出てきてもおかしくないだろう。キリトはともかく、アスナにとっては良い噂ではないのは間違いない。

仲間に思われたくないなら一緒にいないとは彼女の言葉だが、攻略に関する事ならともかく、こういった人間関係に関する事でも彼女に迷惑かけるのはいただけないだろう。事実、彼女は顔を赤くして怒っているのだし。

「なあアスナ、なんか迷惑かけてるみたいだし、今日からはせめて宿屋だけは別にしよう。気が利かなくてごめん」

同じパーティーなのだから問題ないと考えていたが、外から見ればそれだけではないように見えるのだろう。心配りが足りなかったと、

キリトは素直に謝罪した。

その言葉に多少は怒りが収まったのだろうか、こちらを向いたアスナの顔は赤みが取れていた。しかしその視線は鋭く、キリトを怯ませるには十分だった。

——まさかこんなに怒っているとは……。

キリトは恐怖を感じるが、それと同時に申し訳なさも感じた。

この怒りは尤もだと、キリトは思う。ただでさえ自分のエゴイズムに巻き込んでいるのだ。彼女は目標があるとは言っていたが、それはきつと戦闘や知識の面のものだろうし、それならば無理に街中でも共にいる必要はないのだ。

彼女にまた迷惑をかけてしまった。今度からは待ち合わせもワールドの手前とかにした方がいいだろう。

コミュニケーション下手の弊害がこんなところで出るとは。キリトは再び頭をかいた。

「ねえ、キリト君。あなた、またわたしに迷惑をかけたとか、そんなこと考えてるんじゃないでしょうね？」

アスナの言葉にキリトは視線を逸らした。

この少女はどうしてこうも鋭いのか。いや、自分が考えを顔に出しやすいだけなのだろうか。

そんなキリトの様子で確信したのか、こちらを見ていたアスナが溜息を吐いた。

「あのね、この間言ったでしょう。嫌なら最初から一緒にいないって。わたしは、自分の意思で、あなたとパーティーを組んでるの」

アスナはほとほと呆れたと言わんばかりの表情をしている。

「そういう噂が流れてるのには、その、ビックリしたけど、迷惑なら迷惑、嫌なら嫌ってちゃんと言います。確かに怒りはしたけど、それ以外に何も言っていないでしょう？ だから、今まで通りでいいんです！」

「キリト君の馬鹿！」という言葉と共に、アスナがまた歩き始めた。それを見ながら、キリトは溜息を一つ吐いた。

確かにその通りだ。迷惑だの嫌だのなんて本人が決めることだ。

所詮噂は噂。真実ではない。嘘の情報に一々気を揉んでいては、この世界でやっていけない。

前を歩くアスナの表情を見ることはできないが、キリトに呆れ果ているのは間違いないだろう。

あまり離れてはまずい。キリトもアスナを追って歩き始める。それを見て、アルゴとネズハもキリトと同様に歩き始めた。

「アルゴさん、あれで付き合っていないんですか？」

「付き合っていないヨ。今は、ネ」

後方でそんなやり取りが成されたことを、思考を曇らせているキリトには知る由もなかった。

その翌日午前、ボス部屋へのルートがマッピングされ、同日17時からマロメの村で攻略会議が行われた。

参加メンバーはDKB、ALSより3パーティーずつ。ブレイブスが1パーティー、その他ソロで1パーティー、総勢47名の大レイドだ。フルレイドには一人だけ足りなかったが、恐らく途中参加が一名いるであろうことをキリトは確信していた。

キリトとアスナは第二層攻略会議の会場となった酒場の入り口付近、会議参加者の最後尾で壁に寄りかかり話を聞いていた。DKBリーダーのリンドが、アルゴが配布した第二層ガイドブックを片手に基本戦術の説明を行っている。

レイドリーダーはDKBリーダーのリンド、次席がALSリーダーのキバオウと発表された。双方共に18人を率いるリーダーだ、反対が出ることもない。

しかし、問題はその後に起きた。

「DKB及びALSに所属する計6パーティーがボス攻撃、残りの2パーティーは取り巻き攻撃を担当する。ボス攻撃の指揮は僕とキバオウさんが執るが、取り巻き攻撃の指揮は……キリトさん、あなたにお願いしたい」

リンドの発言に参加者の視線が一斉にこちらを向き、完全に蚊帳の外に置かれていると思っていたキリトは固まる。しかし、隣に立つて

いたアスナに肘で小突かれることで思考を回復させた。

「……なんで俺が？」

辛うじてひねり出すことができたのはその言葉だけだった。隣のアスナが溜息を吐いているが、言葉が思いつかなかったのだから仕方ない。

「簡単さ。少なくとも一度、君はボスと戦ったことがあるだろう？」

「……なるほどな。取り巻き担当の人達に文句がなければ、引き受けるよ」

この中でベータテスターであることを公言しているのはキリトだけだ。知識がある、だから使う。非常にわかりやすい話だ。

「ということだが……、ブレイブスとエギルさん達は何か問題あるかな？ アスナさんは……聞くだけ野暮だな」

リンドが取り巻き担当の面々に問うが、ブレイブスからもキリトが参加するパーティー内からも文句は上がらなかった。聞くだけ野暮と言われたアスナを見ると鋭い視線で睨み返されたので、キリトは何も言わずに前を向いた。

「問題なさそうだな。じゃあ、編成はこれで終了だ。基本戦術はガイドブックの通りとして……キバオウさん、何かあるかな？」

リンドがキバオウに話を振る。派閥のリーダー同士ある程度のライバル関係にあると思っただが、どうやら二人はそれなりに協力体制を整えているようだ。

「そうやな。基本戦術はそれでいいとしても、さつきも言った通りこの場には一人ボスと実際に戦ったやつがおる。戦術のことも聞いた方がええんとちゃうか？ ……なあ、キリトはん」

キバオウの言葉に、再び参加者の視線がキリトに向けられる。

先ほどの話で終わりだと思っていたキリトは再び固まるが、すぐに横から肘で小突かれた。先ほどより力が強かった気がするのはいのせいだろう。

「あー、ガイドブックに書いてある以上のことは言えないんだが、一つだけ。最も注意するべき点は一時行動不能を伴うデバフ攻撃だ。これを二重に食らうと<<麻痺>>状態になる。だから各人、麻痺回復

のポーションは多めに持っていくべきだと思う。そして、必ず一つはポーチに入れておくこと。テストでは麻痺を貰ってすぐに回復できなかったプレイヤーは……

キリトはそこで言葉を止めた。

皆が息をのむ音が聞こえる。〈〈麻痺〉〉状態になってしまえば本当に何もできなくなる。手を少しずつ動かすことはできるが、メニユーウィンドウを開くことは難しい。すぐに取り出せるポーチにポーションが入っているかどうかで、生死が分かれることもあるだろう。

「デバフ攻撃の二段目を最優先で回避。ポーチに必ず麻痺回復ポーションやな。ポーションは使うたびにポーチに補充した方がええやろな」

キバオウのまともにキリトは頷いた。

「よし、共有すべき情報は以上だな。じゃあ、明日の集合は朝の10時。ボス戦は正午開始ということだ。今日は事前準備と鋭気を養ってくれ、解散！」

リンドの一言で、酒場は喧噪に包まれる。

キリトは酒場を見渡し、全体の士気が高いことを確認する。特にDKB・ALSの面々の士気は高いようだ。集団としてまとめられているなら、そう簡単に崩れることはないだろう。

「よう。明日はよろしく頼むぜ」

聞こえてきた声に顔を向けると、大斧使いの大柄な青年が立っていた。その後ろには3人の、これまた大柄なプレイヤー達が笑顔で立っている。

「あー、確か……エギルさん、だったな。こちらこそよろしく頼むよ。でもいいのか？ 〈〈ビーター〉〉の指揮に従うなんて」

キリトはエギルが差し出した手を掴み、握手する。大柄な体格にふさわしく、ガッチリと力強い握手だ。

「〈〈ビーター〉〉なんて呼んでるやつはごく一部のやつらしいねえんだ、構わないさ。むしろアンタと組めれば百人力だ、そっちのお姫さんともな」

エギルはニヤリとした表情でアスナを見ている。白い歯が光り、右手にはサムズアップ。この格好がこれほど似合う男は中々いないだろう。

それを見て、アスナがフードを取って軽く頭を下げている。こちらのパーティー内でのしがらみは無さそうだ。

しかし、もう片方のパーティー——ブレイブスはどうだろうか。キリトはブレイブスが集まっている方に視線を向ける。その視線に気づいたのか、そのうちの一人がキリトに向かって歩いてきた。

「ブレイブスのリーダー、オルランドである。お初にお目にかかるが、明日は宜しく頼む。君は確か二つ名で呼ばれているんだったな。えーと確か……」

「<<ブラッキ>>、俺たちはそう呼んでるぜ」

エギルが気を使ってくれたのだろうか、オルランドに<<ビーター>>と呼ばせることはなかった。

しかし<<ブラッキ>>とは。キリトは自分の服装を見る。

<<コート・オブ・ミッドナイト>>はその名の通り黒一色のロングコートだ。それ以外の服にしても、どうしても黒を選んでしまうキリトは、まさに<<ブラッキ>>だった。

「なるほど、確かに。では<<ブラッキ>>殿、ご安心めされい！

我ら<<伝説の勇者たち>>は恐れを知らぬ！ 取り巻きだろうがボスだろうが、我が宝剣デュランダルの錆にしてくれようぞ！」

片手剣<<スタウトブランド>>を抜いて、高く掲げ高笑いをしているオルランドに圧倒されつつも、協力体制は問題なさそうだとキリトは一息吐いた。

尤も、強化詐欺に関しては何ら解決はしていないが、少なくともボス戦の戦闘中に話題に出すことはしてはならないだろう。

よろしく頼むと、キリトはオルランドを握手を交わした。

第一層での戦いぶりを思い出す限り、エギル達4人の戦闘力は申し分ない。迷宮区でのブレイブスの戦いぶりも悪くなかった。

取り卷きを早期に排除することができれば、ボスに対峙しているDKBとALSの面々の援護も可能になるだろう。

一通り顔合わせを済ませたキリトは、アスナと共に酒場を出た。時刻はもうすぐ18時と言ったところか。日は落ちかけており、酒場前の通りはすでに街灯が点灯していた。マロメの村は最前線の街であるため、プレイヤーの人通りは少なく、ポツリポツリとNPCが歩いているだけだ。

ポーションの補充は終わっているし、武器・防具の修理も会議の前に済ませている。本来ならばそのまま酒場で食事でもしながらパーティーの面々と話でもするのだろうが、自分がいれば盛り上がれない人間もいるだろうからと先に帰ることにしたのだ。

アスナは問題ないだろうと残ることを勧めたが、彼女もあまり騒がしい場所は苦手なようで、キリト共に酒場を出るといふことだった。夕食には少し早いがどうするかとキリトが考えていると、左袖をクイクイと引かれた。

「ねえキリト君、夕食なんだけど……もしよければ、主街区まで戻ってあのケーキでも食べに行かない？」

アスナの言葉に、キリトは目を瞬かせた。

「それは構わないけど、なんでまた？ この村にもレストランはあるけど」

「うん。でもね、もしかしたら……最後の夕食になるかもしれないじゃない？ 少しでもおいしいもの食べれたらなって」

なるほどと、キリトは思う。

明日のボス戦、普段の狩りよりも命の危険は大きいのは間違いない。

それに、第一層では一人犠牲者が出ているのだ。次の犠牲者が誰になるのか、キリトやアスナになってもおかしい話ではない。それならば、美味しいものでも食べておこうと思うのは当然だろう。

アスナは目線を下げ、少し俯いているようにも見える。だが、気持ちにはわかる。言葉に出さずとも、キリトとて同じ気持ちを持っているのだ。

しかし、キリト一人ならば食べたいとは思っても移動の手間を考

え、結局適当な夕食を取って寝るだけだっただろう。だが、この少女がいてくれたことでキリトもそれを行動に移そうと思うことができる。

「ここから主街区まで片道30分と少しだし、ちよūdい腹ごしらえにもなるかもな。オーケー食べに行こうぜ、<<トレンブル・シヨートケーキ>>。割り勘でな！」

キリトの割り勘という言葉に、わかってるわよと答えるアスナ。顔には笑みが浮かんでいる。

あのケーキは確かに、死ぬ前にもう一度食べておきたいと思わせる一品だ。キリトにも文句はない。横を歩くアスナの足取りも軽くなり、いつもの定位置からキリトの前に出る。

その後ろ姿を見ながら、この一言だけは言っておかなければならぬだろうと、キリトはアスナを呼び止めた。

「アスナ」

「何？」

アスナがこちらを向く。第一層の頃と違い、その表情からは下向きな感情を感じない。だからこそ、伝えなければなるまい。

「最後になって、させないからな」

キリトは自分に言い聞かせるように言った。

それを聞いてアスナは一瞬目を見開いたが、すぐに表情が笑顔に戻る。

「そうだね。じゃあ勝利のための前夜祭ってことで！ ……ありがとう

ね、キリト君」

アスナの言葉に、キリトは頬をかいた。顔が赤くなっているだろうが、仕方あるまい。

最後になどさせない。そんな保証をできるほど強くない。だが、そう願うことはかまわないだろう。

「ほら、早く行くよキリト君！」

保証はできない。だが、それを求めて戦うことはできるのだから。

アスナの横に並ぶため、キリトは足取りを早めるのだった。

第十二話

巨大なハンマーによる三連撃。

第二層ボス取り巻きである<<ナト・ザ・カーネルトラス>>、通称ナト大佐が繰り出した連撃を大柄な四人の男達が武器で受け止める。そして三連撃の最後の一撃を武器で大きく弾き返したのを見て、キリトとアスナはその両横から、がら空きの胴体目がけて勢いよく飛び込んだ。

左からは細剣突進系五連撃技<<シューティングスター>>。

右からは片手剣連撃技<<バーチカル・アーク>>。

その全てが完璧にナト大佐の真っ青な胴体に吸い込まれ、三本あるHPゲージの内、三分の一ほど残っていた一本目のHPゲージを削り切る。

しかしその直後、高く打ち上げられたハンマーに稲妻が走る。

「<<ナミング>>来るぞ！ 総員後方にジャンプ！」

キリトの指示で、ナト大佐を囲んでいたキリト達G隊六名が後方に飛びあがる。

振り下ろされたハンマーは地面に大きく叩きつけられ、ハンマーから発生した細かいスパークが放射状に広がる。

皆と同様にジャンプしていたキリトは、スパークがぎりぎり届かない位置に着地する。左足のつま先にピリツとした感触が走るも、そのデバフ範囲からは完全に出ているため問題はない。

「行動停止十秒！ H隊前へ！」

動きが一時的に止まった瞬間を見逃さず、キリトは即座にスイッチの指示を出す。

その指示を受け、オルランドの掛け声と共にブレイブスの五名が前線に上がり、キリト達H隊六名はポーシヨンによる回復時間を得ることになる。

「順調ね」

もはや定位置となっているキリトの左側からのアスナの声に、キリトは「ああ」と頷きながら前線で戦っているブレイブスの動きを注視

する。

ボスの取り巻きであるナト大佐は攻撃力・HP共に通常の牛男の比ではないものの、その行動パターンは通常のそれとさして変わらず、トールラス族特有のデバフ付与特殊攻撃<<ナミング・インパクト>>にさえ気を付けていれば、特に手こずることのない相手であった。

事実、今戦っているブレイブスも体力を大きく減らすことなく攻撃を受け止めながらHPバーを削っている。この調子ならば、ナト大佐は大して時間はかからないだろう。よって、問題はあちらだ。

キリトはボス部屋の最奥部で交戦中の三十六名と、階層ボス<<バラン・ザ・ジェネラルトールラス>>、通称バラン將軍に視線を向けた。ナト大佐の約二倍、五メートル近くの体格を持つバラン將軍は、黄金のハンマーを前衛を受け持っているプレイヤーたちに振り下ろしている。

その足元で戦うプレイヤーたちの恐怖は想像を絶するだろう。振り下ろされるハンマーのヘッドだけでもプレイヤーより大きいのだ。当然その威力は極めて大きく、金属防具で盾持ちの前衛がすっかり防いで体力が目に見える程に減っているのがわかる。

救いは攻撃間隔が長いことだが、攻撃力が高いことだけがバラン將軍の恐ろしさではない。

大きく振り上げられたハンマーの打撃面にスパークが発生する。

それを見たレイドリーダーのリンドが即座に回避命令を出し、壁^{タンク}部隊も攻撃部隊^{アタッカー}も全力で距離を取る。

直後、地面に叩きつけられた黄金のハンマーからスパークが発生し、ナト大佐の<<ナミング>>の二倍近い範囲に電撃が走った。

バラン將軍の特殊技<<ナミング・デトーション>>。発生こそわかりやすいものの、その広大な範囲によつて的確な回避命令が出たにも拘らず、二名がそのデバフ効果範囲に取り残される。

<<デトーション>>による一時行動不能^{スタ}の効果時間は僅か三秒。しかし、ビルのような体格を持つ化け物の前で三秒も動けなくなるのは、本人にとってどれだけの恐怖だろうか。

必死の思いでその三秒を生き残っても、試練はまだ続く。

一時行動不能を食らうと確率で発生する武器落とし。そしてその落とした武器を拾いに行くと、二発連続の<<デーション>>が来る。二回連続でデバフを食らってしまえば、攻略会議で説明した通りに致命的な状態異常<<麻痺>>になってしまう。

自然回復で十分以上。当然待つていられないのでポジションを飲むことになるが、麻痺に陥った本人はポジションを飲むことすら覚束ないのだ。

幸い動くことができるプレイヤーが麻痺したプレイヤーを回収することで、 balan 將軍の追撃である踏み付けを回避できた。しかし、麻痺したプレイヤーは一纏めにされており、その数は五人になっていくようだ。

——やはり、ぶつつけ本番は難しいか。

キリトは再び、自らの担当であるナト大佐に顔を向ける。

まさに順調。POTローテが揺らぐことはなく、既にG隊の面々の体力はオールグリーンだ。

交戦中のブレイブスの面々も体力をイエローまで減らしている者はいない。時間的にはそろそろスイッチだろうが、それを行わなくても問題ないほどに安定していた。

「本隊はジリ貧だな、あれは」

エギルの言葉にキリトは頷く。

「ああ。だが、そろそろ攻撃パターンも把握できていく頃だし、態勢も整ってくると思うんだが……」

キリトは素早く答える。しかし、その楽観的推測はアスナによって否定された。

「麻痺している人間が多すぎるわ。あれだと一時撤退の指示が出たときに全員脱出は厳しいんじゃないかしら」

確かにその通りだ。麻痺したプレイヤーを動かすのに最低一名必要。つまり、麻痺した人数の二倍の人数がボス部屋から脱出するまでの遅滞戦闘から離脱することになる。

彼らが戦っているのはボス部屋の最奥部。移動距離を考えても、これ以上麻痺者が増えるのは危険が大きいだろう。

ここから大声を出せば指揮系統が乱れる危険がある。ならば、直接リンドに提言するしかあるまい。そのためにはここの指揮を一時誰かに預ける必要があるだろう。

キリトは咄嗟に判断する。指揮を預かれるほどの判断力や、戦況への理解力、そして視野を持つている人間がすぐ横にいるではないか。戦況は安定している、経験を積ませることが今ならできなのだ。

「アスナ、ここの指揮を一時君に預けたい……頼めるか？」

キリトの発言に、アスナの顔が驚愕で染まる。ちらとエギルの顔を見れば、彼は頷き返してきた。

「こっちの戦況は安定しているし、抜けるのは大した時間じゃない。それにエギルさんもいるからな、経験を積める時に積んでおくべきだ」

アスナは一瞬迷いを見せたが、すぐに決意をした表情で頷いた。

「よし・リンドに進言をするため、対ナト大佐の指揮を一時アスナに預ける！ すぐに戻るから、戦闘はこのまま頼む！ 三段目ゲージに気を付けて！」

了承の声がG・H隊から上がる。それを聞いてキリトはリンドに向かって駆け出した。

「指揮預かります！ <<ナミング>>クール時間解放まで残り二十秒！ G隊は規定通り左右展開、<<ナミング>>後のデイレイでスイッチします！」

後方から聞こえるアスナの指示は的確で簡潔だ。指揮を引き継いでも混乱することなく、即座に対応している。

剣術だけではない、恐らく彼女は皆の前に立つ素質がある。それを確信したキリトは、ボス戦中にも拘らず笑みを抑えきれなかった。

balan 将軍の正面、壁のプレイヤー達の更に後ろに二名のプレイヤーが立っている。

リンドとキバオウ。リンドは戦闘指揮を出し、キバオウがその隙間を細かい指示で埋めていく。

指揮に関しては二人共まとめ役として中々のものを見せているが、

撤退の頃合いを図るのはどんな人間でも難しいはずだ。まして、その判断にレイド全員の命がかかっているのだから。

「リンドさん」

キリトの声に、両名が振り向く。

リンドは一瞬だけナト大佐に視線を向けると、納得したようにキリトに尋ねた。

「そっちは順調みたいだな、どうしたんだ？」

「アスナからの提言だ。これ以上麻痺者が増えれば、一時撤退を考えたいとき全員脱出が厳しくなる。……一回仕切り直すべきじゃないか？」

リンドは麻痺者の人数、前衛の様子、そしてボスの体力を確認していく。それに釣られてキリトも同様に視線を動かす。 balan 將軍の体力は五段あるゲージの内、三本目が半分を切っている。

「残り五割だ、ここまで削って引く必要はあるだろうか……」

リンドが苦々しさを滲ませている。確かに、惜しいと思ってしまうのはわかる。体力が危険域に落ちた者もおおらず、与ダメージのペースも良い。このまま押しきれられる可能性は決して低くないのだ。

「ボスの対応は二班でいける。そのバックアップに二班。……もう一人麻痺者が出たら引く、それでどうやるか。麻痺者が六名、その支援に六名。大佐が倒されればさらに二班余裕ができる。一時撤退も十分に可能になるはずや」

キバオウが前衛から視線を逸らさずに言う。具体的な人数を出したそれは、キリトにもリンドにもわかりやすい。

「わかりやすい判断基準だ。……どうだろう、キリトさん」

リンドの言葉に一瞬だけ思考を巡らせ、頷いた。

リーダーとサブリーダーの認識が一致し、明確な判断が提示されたならば文句はない。

「了解。麻痺者があと一人出たら引く、だな。こっちも大佐の排除急ぐよ！ 聞き入れてくれてありがとう」

「逆に提言感謝だ」

「そっちは頼むで！」

キリトは二人に言葉を聞いて、ナト大佐に向かう。

動きやすいと、キリトは思う。完璧とは言えずとも、戦闘中に周辺からの意見を聞く能力が彼らにはある。彼らが健在ならば、攻略隊の面々も動きやすくなるだろう。キリトはリンドとキバオウの評価を大きく上方修正した。

ナト大佐の体力は残り四割といったところだろうか。そろそろ最後のゲージに突入するだろう。現在はG隊が攻撃中で、ブレイブスのH隊はポジションにより回復中だ。

アスナはそのG隊の最後尾、エギル達四人の背後で攻撃機会を窺いつつ、戦況の確認に努めていた。

アスナは自らの相棒パートナーから指揮を引き継いだ。本来ならば四人組のリーダーであるエギルや、ブレイブスのリーダーのオルランドが引き継ぐべきだ。しかし、代理は大した時間ではないこと、キリトからの直接の指定があったことでスムーズに指揮権の移譲がされた。

「パターンA！ 初撃左からの横薙ぎ来ます！ 左翼二名は防御、右翼二名は全力攻撃一本！」

体を捻じる様に振りかぶられたハンマーを見て、アスナは即座に指示を出す。

そして自身は、左二名の防御が抜ける可能性を想定して、前衛四名の中央にソードスキルを発動できる体勢を取る。

直後、ナト大佐が横薙ぎを繰り出す。

その強烈な一撃は、ブオンという風切り音と共に左にいた二名を襲うが、無事に攻撃を弾き返し、ナト大佐が大きく仰け反る。

そこにすかさず右の二名と、ハンマーの迎撃から攻撃に目的を切り替えたアスナがソードスキルを発動させた。

ナト大佐の二段目の体力ゲージが削られていく。しかし、ゲージの減りは二段目を削り切るまでに至らない。それを確認したアスナは続けて指示を出す。

「続いて右から横薙ぎ！ 右翼防御、左翼は単発攻撃！ これ入れるとゲージ三段目に入ります、特殊攻撃の突進に注意！」

「応ー」という声が前衛の四名から発せられた。アスナは一瞬後方にいるブレイブス五名を確認する。体力ゲージはオールグリーン、いつでもスイッチ可能だろう。

右からの横薙ぎに対応したG隊によって、体力ゲージは三段目に入った。すると、ナト大佐が突如猛々しい声を上げ、角をアスナ達に向け身を屈めた。ガイドブックの情報通り、突進が来るのは間違いない。

「ッ！ 突進くるわ！ 頭じゃなく尻尾の向きを見て！ その対角線上に来る！」

ぐるんと向きを変えたナト大佐が、前衛のエギルに向けて突っ込む。しかし、事前情報をしっかりと把握していたエギルは危なげなく回避。その背中に両手斧ソードスキル<<ワールウインド>>を叩き込んだ。そしてその奥から、黒づくめのプレイヤーが一人こちらに駆けてくるのが見える。

「スイッチー！」

反応したエギルが場所を開けると、黒づくめの剣士が<<ソニックリープ>>をクリティカルヒットさせ、そのままアスナ達に合流した。

「遅くなった！」

突進を回避された後強打を立て続けに叩き込まれたナト大佐は、状態異常の<<スタン>>を発生させ動きを止めている。それを見て、アスナは預かっていた指揮権をキリトに戻す。

「指揮戻します！」

「指揮受け取った！ 時間十分ある、総員フルアタック全力攻撃二本！ 一気に持っていくぞ！」

G班の六名による全力攻撃はナト大佐の体力を大きく削り、ついに最後の一本のイエローゾーンまで突入させた。フルアタックを成功させアスナ達が距離を取ると、ナト大佐の全身の色が紫に変わり、先ほど以上の声を上げて怒り狂っている。

「よし、スイッチだ！ ブレイブス前へ！ G隊は突進警戒しつつ回復だ！」

スイッチ指示で完全回復済みのブレイブスが駆けていく。このスイッチが最後のスイッチになる可能性が高いからだろう、ブレイブスは大声を上げながら突っ込んでいった。

「キリト君、それで向こうはどうなったの？」

アスナは一息つくことなく、キリトに説明を求める。

「あと一人麻痺したら撤退。ということで一致した。尤も、あれを見る限り問題はなさそうだが……」

アスナは部屋の奥に目を向ける。

麻痺者は先程から減って四人。前衛の体力ゲージも緑を維持しており、ボスの体力も最終ゲージに入っている。

ボス担当のプレイヤーたちが声を上げており、士気も高い。このままいけば攻略は時間の問題だろう。

「なあ、一ついいか？」

しかしエギルの言葉を聞いて、安心しかけていたアスナは寒気に襲われた。

「第一層は<<<君主>>>だったよな。だが……この第二層はなんで<<將軍>>>に格下げされてるんだ？」

部屋の奥から歓声上がる。

どうやらボスの体力がイエローゾーンに突入したらしい。

そして、それをきっかけとしたのか、部屋の中央の床が動き出す。声が出ない。

この部屋の中央、下からせり上がってきたであろうプレートの上に乗っていたそれは、六段のHPゲージを携え、アスナを、いや攻略レイド四十七名全員を希望から絶望へと叩き落とした。

<<<アステリオス・ザ・トールスキング>>>。

この階層、真のボス戦の始まりだった。

キリトは止まった思考を即座に回復させた。

ここにきて追加ボス。ならばやることはただ一つ、目の前の体力の少ない敵を倒し、頭数を減らすしかない。

「ッ！ G隊H隊フルアタック全力攻撃！ 防御不要！ 回避不要！ 頭数減らす

ぞ！」

キリトがナト大佐に突撃していく、それに一瞬遅れてアスナが、そしてG隊の面々が続く。

軽量装備のキリトは高く飛び上がることができる。キリトは全力ダッシュから二メートル近く飛び上がり、空中で<<スラント>>を発動、トールラス族の弱点である額に打ち込んだ。

弱点に強烈な一撃が入り、暴走モードに入っていたナト大佐の動きが止まる。

正面を受け持っていたブレイブスが各々最大の一撃を加え、それに続いて左右から駆け寄ったG隊の面々も攻撃を加える。

ナト大佐の体力は残り数ドット、しかし皆硬直で動くことができない。

ならばと、<<スラント>>の反動によってナト大佐の真上に浮き上がっていたキリトは空中で右足を動かし、あるスキルの発動モーションに移行する。

キリトの右足が光る。

ナト大佐の上空で発動された体術スキル<<弦月>>は、ナト大佐の額を真上から蹴り抜いた。

その強烈な一撃は体力ゲージを削り切り、ナト大佐はポリゴン片と なって消えた。

キリトはモーションで半回転することで仰向けになり、そのまま背中から床に叩きつけられる。

「キリト君！」

アスナの心配したような声。それを聞いて一瞬、キリトは一つの考えに囚われた。

——今ならば、この少女を離脱させることができる。

キリトは身体を起こし、アスナに視線を向ける。

こちらを見返したアスナの表情は硬い。だが、そのヘイゼルの瞳は戦意を失っていないかった。

目を瞑る。

彼女をあの場合に向かわせたくない。

だが、彼女がいなければキリトの背後を守るものは居ない。

「キリト君、行こう」

アスナがキリトに手を差し出した。

キリトはその手を掴み、立ち上がる。

左右を見れば、G隊H隊の面々が準備万端と並んでいる。そしてその視線はキリトに向いていた。

キリトは少々減ったHPゲージとラストアタックボーナスの表示に構うことなく、決意したように次の指示を出した。

「王が攻撃範囲に入るまでまだ時間がある、その間にG隊左、H隊右から突撃。 balan 將軍を打ち取るぞ！ 先ほどと同様に防御不要！

回避不要！ 何が何でも削り切る！ いくぞー！」

キリトの言葉を受け、全員が自らを鼓舞するように声を上げて部屋の奥に突っ込んでいく。

balan 將軍もすでに暴走モードに突入している。

体力はすでにレッド、全力攻撃を叩き込めれば十分に削り切れるはずだ。

ならば、今タゲを取っている前衛だけ残し、それ以外は王に向かわせるべきだ。

キリトは思考を全力で回転させ結論を出し、叫ぶ。

「ナト大佐排除！ G隊H隊は將軍に全力攻撃に移る！」

キリトの声に即座に反応したリンドは、全体に命令した。

「前衛、將軍のタゲ引きつけろ！ 攻撃隊は全力攻撃一本！ その後

G隊H隊にスイッチ！」

「攻撃が終わったらすぐに両翼に離脱や！ ポーション飲むの忘れたらあかんぞー！」

リンドに続きキバオウが指示を出す。

キリトはその二人の横を駆け抜け、壁のプレイヤーをジャンプで飛び越えた。ナト大佐はこれだけで弱点を狙えた。しかし、balan 將軍は体長五メートル。とてもじゃないが届かない。

——ならば……！

キリトは空中で剣を構え、突進技<<ソニックリープ>>を発動さ

せる。

キリトの身体は空中で加速し、 balan 將軍の額の中心を綺麗に捉える。

それから少し遅れて、同様に飛び上がったのだろうアスナのくくシューティングスターが、仰け反った balan 將軍の胴体に命中した。

その後、地上で G 隊 H 隊の一撃が入る。しかし、再び体力ゲージが一、二ドット残る。

「またかよ……！」

キリトはくく閃打の発動モーションに入る。その下ではアスナがくく弦月のモーションに入っている。

そして、突き上げられた蹴りと振り下ろされた拳が balan 將軍に吸い込まれ、將軍はポリゴン片と化した。

無事に將軍を倒した今、敵は王だけだ。指揮統制も取れている、交戦継続か撤退はリンドかキバオウが判断するとして、まずは王への対応が必要だろう。

空中で振り返り、王を視界に入れる。瞬間、キリトは目を疑った。

着地したキリトの背後、王が近づいてきていたが攻撃範囲にはまだ入っていない。だからこそ、王が上体をいっばいに反らせ、その胸部が膨らんでいることにキリトは驚愕した。

——遠隔攻撃！

まだ誰も王にダメージを与えていない以上、そのターゲットは最も近くの者達になる。王の正面にいたリンドとキバオウが最初のターゲットになつていただろう。しかし、彼ら二人と地上で攻撃に参加した者たちは、キバオウの指示で即座に左右に離脱している。

つまり、今この時遠隔攻撃の射線である王の正面に入っているのはラストアタックを取ったキリト。

そして、キリトの右に着地していた、王に背中を向けている細剣使いの少女だけだ。

「アスナ！ 右に飛べえ！」

キリトの声に咄嗟に反応したアスナが、床を蹴ろうとする。しか

し、着地の反動を受けたままなのか、その動きは重い。アスナが射線から逃れる前に間違いないく、王が放つだろう遠隔攻撃に呑み込まれる。

キリトはアスナに向け走る。

そして彼女の足が離れた直後、アスナに追いついたキリトはブレスから庇うように彼女を抱きかかえた。

「え？」

アスナの表情は驚愕、そして発せられた言葉は戸惑いを持っていた。

直後、キリトの視界は白色に染まった。

雷鳴のような衝撃音が部屋全体に轟く。

王の雷ブレスが直撃したキリトは、アスナと共に絡み合ったまま背中から地面に叩きつけられた。

ブレスの直撃により二人の体力はごっそりと削られ、アスナはイエロー、キリトはレッドゾーンまでHPが落ち込んでいた。そして、両者のHPゲージの横にはくく麻痺のアイコンが点灯している。

「王をあの二人に近づけるな！ 壁隊前へ！ ローテーションは將軍と同じで行くぞ！」

リンドの指示で前衛がターゲットを取ったのか、アスナの肩越しに見えていた王が止まったように見えた。

「すまねえ、オレとしたことすくが疎んじまった！」

続いて近づいてきたエギルが、キリトとアスナを抱えて壁際まで運ぶ。

「すま……ん」

「気にすんなー！ お前らは頑張りすぎだ、ちよつと休んでろ！」

隣り合うように壁際に座らせたキリトとアスナに、エギルは麻痺回復と体力回復のポーションを飲ませ、再び前線に戻っていった。

ポーションを飲んだことでキリトのHPゲージがじわじわ回復している。麻痺の状態異常も、後六〇秒もたてば回復するだろう。

キリトは一息吐くと、左に座っているアスナを見る。すると彼女も

こちらを見ていたのか、はしほみいろ榛色の瞳と視線が合った。

「ねえ……なんで、来たの？」

その問いは恐らく、キリトがなぜ回避せずに、彼女に駆け寄ったのかということだろう。

キリトは着地する直前には、王のブレス攻撃に気付いていた。即座に離脱すれば回避することができただろう。

キリトだけは。

「なんで……？」

再びの問い。

なぜあの時回避をせず、彼女を抱えるという選択をしたのか。自分に問いかけても、答えは出なかった。

「……わからない」

だからキリトは、その一言だけ口にした。

その答えを聞いたアスナが笑みを浮かべる。とてもきれいな、優しい笑みを浮かべたその理由はわからなかったが、彼女は震える右手を動かし、キリトの左手を握った。

そして、目を閉じると身体をキリトの左腕に預けてきた。

どうして彼女がこのような行動をとっているか、どうしてこのような状況になっているのかキリトにはわからない。だが、一つだけしたいことを見つけそれを実行する。

キリトは彼女に握られた左手に、軽く力を込めた。

第十三話

戦況は一転した。

来るだろうとは思っていた。

しかし、彼がこの階層攻略のキーパーソンになるとはだれが想像しただろうか。

「迷宮区の前で一人不安そうにしてたから連れてきた」とはアルゴの談で、ネズハの<<<投剣>>>とアルゴの<<<隠蔽>>>を巧みに利用し、高速で駆け抜けてきたらしい。

<<<投剣>>>と<<<体術>>>の複合によって使用することができなく<<<チャクラム>>>。

本来ナツクルとしても使うそれは、投擲すると使用者の手元に戻ってくるという性質を持っていた。

鍛冶師から純粹な戦闘職ソウドマンになったネズハは、トールラス王が身に着けている王冠の下、弱点である額に命中させることで、遠隔攻撃プラレクスの発生をことごとく潰している。

それによって、強力なただのトールラス族の一体と化した王の攻撃を、バラン將軍に対することで攻撃パターンに慣れた攻略レイドの面々が的確に捌いている。

未だ回復しきっていないHPゲージを視界の隅に置き、ボス部屋の壁に寄りかかりながら休憩していたキリトは、左腕に心地良い重さを感じつつそれを観戦していた。

尤も、それはある種の現実逃避、いや現実を直視することによる逃避なのは疑いない。

今キリトが置かれている状況は、ボス攻略の戦闘中でなければ盛大に狼狽えるか、カチコチに固まっていたことは間違いない。事実、キリトはボス戦闘という現実の問題を見続けることによって、心の動揺を抑えようとしているのだから。

アスナという、自らの相棒パートナーであり、自分が知る中で最も美しい女性だが、何故か自分の左腕に体を預け、目を閉じている。

しかも、電車の中で寝てしまった女性が隣に座っていた見知らぬ人に寄りかかってしまった、という類のものではない。

隣に座っている少女は間違はなく覚醒状態であり、彼女自らの意思で、隣に座っているのがキリトであるとしっかり理解しているのに、身体を預けてきたのだ。

アスナに問われたことを、キリトは改めて考えてみる。

トールラス王の雷ブレスが来る、それは着地前に理解していた。

着地してすぐに回避行動、横っ飛びなどをすればキリトはブレスの射線外に回避することができただろう。命がかかったこのゲームで、最優先するべきは自らの命。つまり、自らのHPゲージであることに他ならない。

あの時、キリトのHPゲージはグリーンであったが、限りなくイエローに近いグリーンだった。しかも、雷ブレスの直撃を食らえばどれくらいの体力を持っていかれるかわからない以上、必ず回避しなければならなかった。装甲が低めのキリトにとって、ボスの攻撃の直撃を食らえば一発で体力の半分が持つていかれる可能性は決して低くないのだ。

だが、キリトはアスナの元に走った。

結果的にキリトのHPはレッドまで落ち込んだものの、全損は避けることができた。

しかし、物の見事に五割近い体力を持つていかれ、麻痺の状態異常も点灯した。あのまま王の追撃を貰っていたら、黒鉄宮こくてつみやうの自分の名前に二重線が引かれていたであろうことは間違いない。そして、恐らくは自らの腕の中にいた少女の名前にも二重線が引かれていただろう。

少し考えれば分かることだ。

キリトは、自らの命のために、アスナを助けに行くべきではなかった。

しかし、身体は勝手にアスナの元に駆けつけた。

遠隔攻撃プレレスが来ると理解した瞬間、キリトが考えたことは彼女のことだ。

位置を確認し、指示を出し、抱えて飛んだ。

その時のキリトの頭の中には、自分の命のことなど欠片も存在しなかった。

その思考の全てが、アスナに対して向けられていた。

その理由が、キリトにはわからなかった。

徹底した利己主義を貫かなければ、このゲームを生き残ることなどできない。

だが、あの時のキリトは間違いなく、他者の為に動いた。

今までも、彼女の命を救ったことはある。

だがそれはあくまで、助けられるから助けただけだ。

助けることでキリトが失うものもなく、自らの生存には全く関係ない。

モンスターに囲まれた彼女を助けに入ったこともあったが、あれとて死ぬ可能性は低いと判断したからだ。キリトは徹底して、自分の命を最優先で動いてきた。

だが、先ほどの行動は性質が違う。

自らを盾にして、彼女をかばった。

自らが死ぬ可能性が低くないにも拘らず、その行動をとった。

死んでほしくないと思う。

隣にいてくれるのなら、可能な限り守ろうと思う。

だが、自分の命と引き換えにとまでは思っていなかったはずだ。

決してしてはいけない行動だ。

だが、身体は無意識にそれを選択し、その行動に対して後悔はなかった。

麻痺もしているし、体力はイエロー。だが、彼女は生きている。そのことに安堵した。

アスナは変わらず、キリトの左腕に体を預けている。

キリトもアスナも既に麻痺は回復している。動こうと思えば動けるのだ。

しかし、キリトもアスナも今の体勢を崩そうとしなかった。

キリトは、このソードアート・オンラインという世界の中で最も苛

烈な戦場の片隅で、自らの左手から伝わってくる熱によって、安らぎを感じている。

もしかしたら自分は、この安らぎを守るために、アスナの元に駆けたのかもしれない。

彼女の横にすることで、何故このような感情を得ることができなのか。それはキリトにはわからなかった。しかし、極めて好ましいものであることは事実だった。

右手から伝わってくる熱は、アスナの冷えた心を温めていく。

あの瞬間、アスナの心は間違いなく凍りついた。

バラン将軍に<<弦月>>をヒットさせ、その反動で大きく上に跳ね上がったアスナが着地した瞬間に、右に跳べと叫ばれた。何故かは問わなかった。自らの目標である彼の表情は、あまりに切迫していた。指示に従う理由は、それだけで十分だった。

高い位置からの着地の反動で、普段からは考えられないほどの力のない跳躍。

どのくらい跳べばいいのかわからない。だが、その時の全力で踏み切ったのは間違いはない。

アスナが飛んだ後、キリトがこちらに駆け寄ってきた。自分に跳べと言っておいて、何故彼はこちらに向かってくるのか、アスナにはわからなかった。

そして、アスナはキリトに抱きかかえられた。

アスナの思考は驚愕と困惑に染められた。彼の表情は必死そのもので、その表情を見てさらに困惑した。一体何が起きているのか、アスナにはわからなかったのだ。

直後、アスナはキリトと共に閃光に呑まれた。

アスナは彼に覆いかぶさるように倒れ込んだ。そこでやっと理解した。

自分はこの少年に守られたのだ。

それに気づいた瞬間、アスナの心は氷のように冷たくなった。

どんな攻撃を受けたかはわからないが、何かしらの遠隔攻撃を受け

たのは間違いない。

balan 将軍に攻撃を加える直前、自分たちの体力はグリーンだった。アスナの体力はイエローまでは落ちているものの、二割程度しか減らなかつた。しかし、自らをかばってくれた彼は体力を五割近く削られ、レッドゾーンまで減少していた。

アスナとキリトの防御力は大きく変わらなはずだ。つまり、本来ならアスナも五割近いダメージを受けていたに違いない。だが、キリトという障害物があつたため、ダメージ量が軽減されたのだろう。

アスナとキリトのHPゲージの横には麻痺の状態異常を示すアイコンが点灯している。

体を動かそうにも動けない。攻撃が放たれた方向を見ることもできず、キリトの上に覆い被さるように倒れ込んだまま、アスナは時間が過ぎるのを待つしかなかった。

その後、同じパーティーのエギルによって救出され、壁際に少年と並んで座らされた。

アスナは彼に聞く必要があつた。

どうしてあなただけでも避けなかつたのか。

どうして自分の元に駆けてきたのか。

どうして、わたしをかばつたのか。

アスナの何故という問いに、少年はわからないと答えた。その表情はごまかしているわけでもなく、本当にわからないのだという顔をしていた。

嬉しいと、同時に、優しい人と、アスナは笑顔になった。

感謝を言葉で述べるのは、少々恥ずかしかつた。しかもまだ戦闘中なのだから、この後何が起きるかわからない。

お礼を言うことは今すぐにはできないけれども、少なくともあなたのおかげでわたしは生きている。それを伝えるため、アスナはキリトの左手を握り、身を寄せた。

一体どれくらいそうしていただろうか。

麻痺はすでに解け、HPももうすぐ七割に届こうとしている。

ポーションの回復量から考えると、恐らく時間的には二、三分のことなのだろう。隣に座っているアスナの体力はすでに全快しており、あと一分もすれば、キリトも前線に戻っても支障がない体力まで回復するはずだ。

前線では王のHPゲージの一本目が削り切られようとしている。単体相手となったボスに対して、常に三班が対応し、それ以外のものが休めている状況。＜＜ナミング＞＞の回避も皆慣れたのかスムーズになされており、雷ブレスはネズハによる遠隔攻撃が完全に抑えている。

完全にパターンが確立されている。あとは暴走モード次第ではあるが、四十八名中三十名がバックアップに回れるこの状況ならば、そう簡単に崩れることはないだろう。

キリトの体力が八割を超えた。エギルには少し休んでいると言われたが、体力が回復しているのに休んでいては文句の一つも出てくるに違いない。

「アスナ、そろそろ行こうか」

キリトは左腕に寄りかかるアスナに声をかける。

「うん、そうね……」

キリトの声に目を開けたアスナが、身体を元に戻す。

左腕が軽くなり寂しさを感じるが、左手から感じる熱はまだ続いている。

「アスナ」

左手の力を緩める。それに気づいたアスナも右手の力を緩め、一度手をほどくとキリトは立ち上がった。

アスナも同様に立ち上がり、チラとキリトを見てから、ボスに向かい歩き出す。

「キリト君」

それに続こうとしていたキリトは、前を歩くアスナの声に再び足を止めた。

「ボス戦が終わったら、話したいことがあるの……聞いてくれる？」

「ああ、実は俺もあるんだ。話したいこと。……ボスを倒して、三層に

行つて、そこで話そう」

こちらを向かずにいうアスナの言葉に、キリトも同様の内容で答える。キリトもアスナに、アスナもキリトに話したいことがある。

内容は、なんとなくわかる気がした。恐らく彼女も、キリトの話したいことがわかつているかもしれない。だが、すべてはボス戦の後だ。

第三層に行けば時間の余裕ができる。

第二層の扉の前で話したように、ゆっくりと話すことができるだろう。

キリトの言葉に頷いたアスナが、再び歩き出す。キリトもそれに続いた。とにもかくにも、ボスを倒さなければ、何も話すことはできないのだから。

戦線復帰したキリトとアスナを待ち受けていたのは嫉妬に狂った男たちの声だった。

「ボス戦中にいちやつくとは……流石ブラツキー先生」

「噂はやっぱり本当だったのか……」

「リア充爆発」

「ボスよりあの黒いの倒した方がいいだろ……」

「いい情報が手に入つた。ありがとナ、アーちゃん」

攻略レイドの紅一点、美少女細剣使いフェンサーを少しの間ながら独占したことは、独り身の男たちの怒りを買うに十分だったのだろう。

同じパーティーのエギルも「休めつて言ったが、ご休憩つて意味じゃねえぞ」と笑いながら言ってきたので、先ほどの光景をしっかりと見られていたことを認識したキリトは顔を赤くする。軽口を叩く余裕があるのは良いことなのだが、その矛先が自分たちだとそうも言つてられない。

こんなに冷やかされてアスナは大丈夫だろうかと、キリトは定位置に戻つて再びフードを被っている彼女の表情を窺った。

「……」

アルゴにしつかりとからかわれたアスナの顔は真っ赤ではないに

しろ、そこそこの赤さだ。口元に力が入っているので、何か言いたいことがあるのだろうか我慢しているのだろう。

キリトの視線に気づいたのか、アスナがこちらを向く。その眼は中々の鋭さを持っており、藪蛇を恐れたキリトはサツと視線を逸らし、何事もなかったようにボスに視線を向けた。

戦況は順調。前衛の体力も万全。体力ゲージも二段目がもうすぐ五割といったところだ。

前衛がこれほど耐えることができるなら、POTローテの時間も十分だろう。指揮する側もかなり気が楽なはずだ。

キリトはその前衛の要を担っているブレイブスに視線を向ける。デバフ耐性がついた装備で、王のくくナミング>>をもものともせず、ひたすらに攻撃を加えている。強力な武器から繰り出される攻撃は、着実にボスの体力を削っていく。攻撃隊よりも壁隊の彼らの方がダメージ量が多いという時点で、その異質さがわかるだろう。

惜しいと、キリトは思う。

「結局戦線を支えているのは彼ら……カ」

アルゴの言葉に、頷く。

ブレイブスの面々は気持ちのいい奴らだった。共に戦うに申し分なく、十分な連携を取れる者たちだ。だからこそ惜しい。

このボス攻略が終わると同時に、彼らの攻略組での短い活躍は終わりを告げるのだから。

「B隊後退！ G隊前へ！」

リンドの指示と共に攻撃隊のスイッチが行われ、キリト達が王の左側から攻撃を開始する。

王の真正面でターゲットを取り続けているブレイブスは、体力はじわじわ削られているものの、その減少速度は他の壁部隊タンクとは比べ物にならないほど遅い。

一方、王の体力ゲージはキリト達が前衛に出ることで減少速度を加速させる。

この調子ならば、スイッチがあってもあと二回。それで、ボスの体力を削り切ることができるだろう。

「このまま終わると、癩ね」

別の攻撃隊にスイッチし、ポーションを飲んで一息ついてから、アスナが話しかけてきた。

確かに、このままでは王との戦いでいいところがまるでない。ネズハもブレイブスの一員だとすれば、戦線を支えているのもブレイブス、ブレスの妨害もブレイブスと、完全に良いところ取りされてしまう。「タイミングにもよるけど……少しだけ、抵抗してみるか」

「抵抗？」

キリトの言葉に疑問を浮かべたアスナがこちらを見る。

「と言っても、派手に見せるだけなんだけど」

キリトはにやりと笑うと、アスナのフードを少し持ち上げ、その奥の耳に囁いた。

「ふふ、乗ったわ」

キリトの提案を聞き、アスナはにっこりと笑うとフードを直した。アスナの答えにニヤリと笑う。スイッチのタイミングが良ければという条件が付くが、狙ってみるのも悪くないだろう。

しばらくして、機会は訪れた。

「G隊前進！ 終わらせてくれ！」

「なんや！ またあいつらに持つてかれるんか！」

リンドとキバオウの声に、G隊が前進する。

二人が狙うはただ一つ、ラストアタックボーナスだけだ。

王の体力は最終ゲージの残り一割を切っている。暴走モードに入りその攻撃は荒ぶりを見せているが、攻撃回数は多くなった分単調になった。

王の左側面に回ったキリトとアスナは接敵後即座にソードスキルを発動、一撃を与える。その後の腕の振り下しをスイッチで前に出たエギル達が受け止めた。右側面、そして正面でもソードスキルがヒットしており、王の体力は残り数ドットというところまで減っていく。

「よし、アスナいくぞ！」

「了解！」

決めるべき時が来た。

キリトはアスナに合図し、一気に王の真下に入り込む。そして二人は飛び上がり、全力の突き上げを王の喉仏に叩き込む。

弱点ではないものの、顔を突き上げるような一撃に王はたまらずノックバックする。そして、王の額が完全に無防備になった瞬間を狙い、突き上げられた王の顔近くまで飛んでいた二人は<<弦月>>を繰り出す。

王の足元では地上にいる者たちがソードスキルを繰り出している。そのおかげで王の体力は残り数ドット。しかし、空中に浮かんだキリトとアスナが、弱点に対して追撃を行えるわけがないと、誰もが思っただろう。だが二人はこのためにソードスキルを残しておいた。

空中で再び予備動作を取り、突進系ソードスキル<<ソニックリープ>>と<<シューティングスター>>を発動させる。

「これで！」

「終わりよー！」

二人の狙いは一つ。大きく仰け反った王の喉仏のその先、弱点である額に向かって、二人は空中で急加速した。強烈な一撃と神速の五連撃が王の喉仏を貫き、額に到達する。

直後、突然の登場で攻略隊を絶望に突き落とした<<アステリオス・ザ・トールラスキング>>は、大きな破裂音と共に、ポリゴン片となり爆散した。

第三層に向かう螺旋階段。

階層を繋ぐ塔の外周に設けられたそれを、アスナは塔にしっかりとくっつきながら歩いていった。

高いところが苦手というわけではない。だが、この階段は明らかに悪意があった。

高所でありながら外に露出しているため風が強い、それなのにこの階段には外周に手すりがないのだ。もし強風に煽られ落下死などしてしまつたら、先ほどまでの命がけの戦いはなんだったのかという話になる。

だからこそアスナはしっかりと塔に手をつきながら、絶対に離れないように階段をゆつくりと登っていた。そしてそれは前を歩く黒づくめの少年も同様だ。

本来ならばボス攻略に参加した者全員で、次の階層の転移門を^{アクティベート}有効化しに行くのだろう。しかし、今回は——いや、今回もというべきか——キリトとアスナが先行して第三層へ向かっている。

原因はボス攻略後に行われたブレイブスの糾弾、そしてその被害の補償の為の突発的オークションが開催されたためだ。

ボス戦攻略後、ネズハが自ら強化詐欺を告白したことで、当然のよう^うにその賠償を求める声が上がった。その流れでネズハの処刑までいきかけた所を、ブレイブスの面々が関与したと告白し、同様に裁きを受けると申し出たのだ。

ネズハ一人なら殺されていたかもしれない。しかし、一気に六人ものプレイヤーを処刑するわけにはいかず、リンドの判断によって金銭での賠償ということになり、彼らの装備や手持ちのコルなどを供出させた。

結果的に誰一人死者も出ることなく問題は解決した。しかし、攻略レイドの中で一人だけ、妙に責任を問う声を出し続けていたものをアスナはしっかりと記憶した。

何故ならその声は間違いなく、第一層ボスの攻略後に、今前を歩いている少年をくくビーターくくとして糾弾する原因となった男の声だからだ。

その男はALSに所属している。最終的にはキバオウに威圧されて口を閉じたが、今後もあいつた声を上げ続けるのであれば、キバオウやリンドにも一言伝えておいた方がいいかもしれない。尤も、彼らもすでに把握しているのであろうが。

アスナは目の前の少年を窺う。

黙々と階段を登っていくその後ろ姿を見ながら、アスナは先程の出来事を思い出す。

ネズハが処刑されようとしている時、アスナはそれを止めるべく剣に手を掛けようとした。しかし、アスナの隣で黙っていたキリトがそ

れに反応し、剣に手を掛ける寸前に右手を掴んだのだ。

「君は動くな」

「何故？ あなたはあれを黙って見てると言うの？」

アスナはキリトを睨んだ。

そして、その右手が背負われた剣に手が伸びていることに気づく。

「動くのは、＜＜ビーター＞＞の俺の仕事だ」

その言葉は重く、その表情はアスナを一瞬怯ませるほど冷たかった。

結局キリトが動く前にブレイブスが動いたことで、キリトが動く必要はなくなったが、その手が剣から離れるまでアスナは心を落ち着かせることができなかった。

＜＜ビーター＞＞の役割を、自分で納得した上でやっている、彼はそう言っていた。

しかしアスナは、それを少々疑問に思っていた。

彼は本当に納得しているのだろうか、自分のためにやっているのだろうか。

アスナはどうしても、彼が自己犠牲に走るきらいがある様に思えた。

＜＜ビーター＞＞の汚名も、ネズハの処刑を止めようとしていた時も、そして、自分をブレスから庇った時も。

彼は他者が動く前に自分が動く。自分のためという理由を盾に、誰にも反論させない。そして、結果的に自分を傷つける。

アスナは彼に助けられた身だ。自身の短慮が原因で彼に汚名を着せた事実もある。彼を助けることもあったが、それでも受けた恩を返すには程遠いだろう。

だからこそ、アスナは彼に聞きたいことがあった。

彼は恐らく、これからずっと同じような行動をしていくに違いない。

そのたびに彼は傷つき、疲弊し……いつの日か、擦り切れてしまうのだろう。

精神を壊した人間がこの世界でどうなるか、アスナは嫌と言うほど

理解していた。

彼が死ぬところなんて見たくない。

第一層で彼がアスナに言ったのと同じように、アスナもまたキリトに死んでほしくないのだから。

第三層へ繋がる扉が見える。

あれを開ければ、新エリアが目の前に広がっているだろう。

「よし、着いたな第三層。……この扉を開けて、景色を楽しんだら、少し話をしようか」

「……うん、そうだね」

アスナが話したいことがあるのと同じように、キリトも話したいことがあると言っていた。

その話の内容は、恐らく二人の関係に大きく影響するものだろう。

しかし、一度話しておかねばならないのだ。パートナーとして共に戦ったこの十日間、その決算をしなければならぬ。

キリトが扉を開く。

アスナはそれに続いて、第三層に足を踏み入れた。

第三層 第十四話

第三層のメインテーマは<<森>>だ。

しかもただの森ではない。ゲームに出てくる精霊の森のような、巨木が並びその枝葉の隙間から金色の光の筋が降り注ぐ幻想的な森。ゲームらしいと言えばゲームらしいが、実際に間近にそれを見ると、言葉を失うほどの感動を覚える。

「わあ……！」

キリトの後ろにいたアスナが駆け出した。

「凄い……！ この光景を見られただけでも、ここに来た価値があったわね……！」

目の前に広がる大森林を背景に、栗色の長髪を靡かせながらはしゃいでいる美少女。日本人離れた美貌を持つ少女が作り出した風景は、まるで妖精が踊ってるかのような幻想的な風景を作り出す。

「ああ、全くだ」

キリトはアスナの言葉に同意を示す。違う意味で言ったのだろうが、どちらにしても同意見なので問題ない。

この大森林も、はしゃぐ少女も、美しい光景であることには違いないのだから。

「アスナ」

ずっとこの光景を見ていたいと思う。だが、そうはいくまい。

キリトはアスナを呼ぶ。その声に反応して、アスナもキリトの傍に戻ってきた。

彼女の表情から笑顔は消え、少し硬くなっているように思う。

その表情を見て少し心が痛む。だが、言わなければならぬ。これ以上彼女を、自分に付き合わせるわけにはいかないのだから。

「アスナ、あの道を進むと分岐がある。右に進めばすぐに第三層主街区、左に進めば森が続いて、その先に村がある」

キリトの言葉の意図に気付いたのか、アスナは目を見開いてから俯

いた。右手で左袖を掴み、その掴んだ手には力が入っている。その姿を見て話をやめたい欲求に駆られるが、それを抑え付けて続ける。

「第二層ではすぐく世話になった。感謝しかない。でも……これ以上、俺に関わっていると、君の立場が悪くなる。変な噂も立っているし、それに……くくビーターくく」として動かなければならないこともある。だから」

キリトは一度言葉を止めた。

次の言葉は決定的な言葉だ。言えばそれで終わる。

必要なことだとキリトは心の中で言い聞かせる。そして、口にした。

「パーティーを、ここで解散したい」

目の前の少女がびくりと体を揺らした。

アスナは俯いたままで、その表情を窺うことはできない。もしかしたら、悲しんでいるのかもしれない。しかし、キリトはこうするしかなかった。

第二層のボス戦で、キリトは確信したのだ。

このアスナと言う少女は、アインクラッドの希望になると。

その剣術で敵を切り裂き、その頭脳はプレイヤーを導く。リンドやキバオウも中々の人物だろうと思う。だが、アスナは彼らにはない特別な才能を持っている。

カリスマだ。それも、天性のものを。

彼女は人を引きつけ、率いる才能がある。

状況判断力や理解力によってそつなく指揮をこなし、その戦闘力は先陣を切るに十分なものだ。

そして、彼女は美しい。彼女が前に立てば、誰もがその後ろに続くだろう。大人数での戦闘が基本となるボス戦において、それは何よりも重要なことだ。

彼女の才能は大人数の前に立ってその輝きを増す。だから、自分のような嫌われ者のソロプレイヤーの横に居てはならないのだ。

彼女と過ごした十日間は楽しかった。背中を任せることができる

人と共に戦うことで、迷宮区に潜っていようと安心感を得られた。

しかし、それでは駄目だ。

ゲームクリアという目標のために、キリトはこの少女と別れねばならない。それが今であるべきなのはわからない。だが、この少女と長く居続けてしまえば、キリトはきつとアスナに甘えてしまうだろう。

心は痛む。本音は自分にだってわかっている。しかし、キリトは沈黙を続けた。

「……わたし、邪魔だった？」

アスナは俯いているため、表情はわからない。しかし、声は震えている。

「逆だよ、アスナ。俺が、君の邪魔になる」

その悲しげな声に、キリトは即座に、感情を極力込めずに答えた。

アスナが顔を上げる。その表情は先程の声を同じように悲しげで、キリトは顔を背けた。

「……どうしてあなたが、わたしの邪魔になるの？」

「……君の才能は、集団に入ってこそ輝くものだと思う。個人で動けば戦闘力は上げることができる。でも、集団戦に肝心な連携や指揮能力といったものは鍛えることができない。俺と組んでいたら、君のその才能を潰してしまう。……それは、全プレイヤーへの背信だ。だから、今のうちに信頼できる人に、<<ビーター>>の俺みたいな人間じゃない、信用のある人に、ついて行って欲しいんだ」

背けた顔を戻し、キリトは理由を伝えた。

コンビでは限界がある。

連携や戦闘指揮の経験は、どうしても人数が多い集団に所属しなければ積むことができない。ボス攻略の基本は集団戦。ソロで攻略に参加することはできても、その役割はせいぜいが取り巻きの対処で、決して攻略の中央に配置されることはないのだ。

攻略隊に参加する人間は、クリアに対する思いが強い。ならば、きつとアスナもわかってくれるはずだ。

「……つまり、わたしはあなたの邪魔にはなっていないのね？」

アスナがじつとこちらを見ている。その表情は先程とは違い悲しさはない。

キリトはアスナの言葉に頷く。邪魔と思ったことなど一度もない。むしろ、感謝しかないのだ。第一層攻略後、キリトを見捨てずについでてくれたのは目の前の少女だけだったのだから。

「そう……。じゃあ答えるわ、イヤよ。わたしがあなたの邪魔になっているのなら、当然そうするわ。でも、そうじゃないならイヤ。パーティー解除されても勝手に歩いて行くわ」

アスナの答えに、キリトは戸惑った。

どう考えても解散する流れだった。しかし、キリトの思いとは裏腹に、アスナはそれを一蹴した。

「あなた第一層の時のこと忘れてるでしょう？ 混乱した場を収めて、ボス撃破まで指揮を執ったのは誰？ 第二層でわざわざわたしに指揮を預けて、経験を積ませてくれたのは誰？ 全部あなたじゃない！」

アスナが捲し立てる。その言葉の剣幕に、キリトはただただ黙るしかなかった。

「背信だとか、くくビーターくくだとか、そんなの関係ないわ！ そもそも！」

キリトはアスナに襟をつかまれ、ぐつと引き寄せられた。

キリトの目の前、アスナの表情は極めて真剣で、彼女の榛色はしばみいろの瞳には怒りが込められている。

「わたしが今一番信頼してるのはあなたなのよ！ わたしはわたしの意思で、あなたと一緒にいるの！」

キリトは目を見開いた。

頭が回らない。一番信頼している、その言葉は身を裂く思いでパーティーの解散を告げたキリトの心を温めた。しかし、何故彼女はここまでキリトを信頼してくれているのか。それを理解することはできなかった。

「わからないって顔してるわね。でも、それでいいわ。今はそんなことは重要じゃない」

アスナが一瞬だけ目を伏せ、襟を掴む手の力が緩められた。

彼女の視線が再び、キリトにまっすぐ向けられた。しかし、先ほどとは違いその瞳から怒りの色は消えていた。

「建前とかはなしに、あなた自身はわたしとパーティーを組んでいたのかどうか、それを聞かせてほしい」

アスナの顔は依然として近く、本来であれば恥ずかしさから顔を背けていたに違いない。しかし、彼女の真剣なその瞳から視線を外すことはできなかつた。

「俺は……」

嘘はつけない。

今嘘をつけば、彼女から得ていた信頼とやらはポリゴン片となつてバラバラになるのは間違いない。しかし、パーティー解散を告げたのはキリトからだ。簡単に撤回してしまえば、そんなに軽い気持ちで言ったのかと思われるだろう。

彼女の信頼が嬉しい。だが、彼女の迷惑になりたくない。

キリトは目を伏せた。アスナの瞳から逃げるように目を逸らした。しかし、それは許されなかつた。襟を掴んでいた手がキリトの頬に当てられ、無理矢理正面を向かされた。

「わたしは、本音を言つたわ。あなたも、言つて」

それが決定打だ。キリトの隠そうとした言葉がこぼれる。

「俺も、もう少し、一緒にいたいです……」

途切れ途切れで、声は小さいが、キリトは本音を口にした。

「そう……」

キリトの言葉にそう呟いた彼女は、キリトの頬から手を放した。

そして、キリトから少しだけ離れると後ろを向き、しゃがみこんだ。

「あ、あの、アスナさん……?」

「……ちよつと黙つてて」

アスナは手で顔を隠しているようだ。

キリトはアスナの突然の行動と急展開に狼狽えた。泣いているのかと思えば、そういうわけでもなさそうだ。そもそも今の流れで泣くわけがない。なら、これはどうということだろう。

わざわざ後ろを向いて顔を隠したということは、キリトに見られないくないということだ。このままではさっぱり訳がわからないが、黙ってと言われた以上、理由を聞くこともできない。

ならば理由は先程の会話にあるのだろうと、キリトは思い返す。

キリトの言葉を聞いたアスナの表情は悲しげだった。しかし、泣くほどのものではなかったはずだ。その後表情が険しくなり、怒られた。

信頼している、自分の意思で一緒にいる。

その言葉を思い返し、キリトは再び胸が熱くなる。

そして、本音を言えと言われて、一緒に居たいと言った。

そしてキリトは理解した。

なるほどと。

一緒にいると言われて、一緒にいたいと返したと。

その場にしゃがみこみ、赤くなった顔を手で隠す。

目の前の少女がどうしてこのような状態になったか、キリトは身をもって理解した。

第三層主街区<<ズームフト>>にはそのうち行く必要がある。しかし、転移門の有効化は後ろからくるであろう攻略隊の面々に任せることにした。

この第三層にはソードアート・オンライン初の大規模ストーリークエストが用意されている。キリトはそれを先行して攻略すべく、アスナと共に道の分岐を左に曲がり<<迷い霧の森>>を進んでいた。

この森に出現するモンスターは動物型、そしてトレント——樹木型のモンスターだ。

戦闘中に森の奥へ奥へと引きずり込もうとするため、交戦位置には常に注意が必要なものの、第二層で十分なレベリングをすることができたキリトとアスナには格下のモンスターとなっており、道中出現したモンスターはことごとくポリゴン片と化した。

そして、当初の目的であったストーリークエストの起点。<<

フォレスト
森 エルフ>>と<<黒ダークエルフ>>の戦いの場を発見、クエストの
説明を行いながらその様子を木陰から窺っていた。
「それで、キリト君はテストで<<黒ダークエルフ>>を選んだってこと
ね」

<<黒ダークエルフ>>側のNPCである美しく豊満な装甲を持つ美女
の剣士を見て、即座にテストで選んだ側がアスナにばれたキリトは、
横から険呑な視線を感じつつ戦いを窺っていた。

「まあ選択肢はないわよね。命がかかっているんだから、君がテスト
で選んだ側を受けるべきでしょう」

ダークエルフの側に加勢すると決定したキリトとアスナは、キリト
のカウントに合わせて戦いが行われている広場に入、フォレストエ
ルフの男性剣士に剣を向けた。

交戦するNPCは現在のキリト達のレベルでも格上であり、プレイ
ヤーは防戦に集中し体力がイエローまで減った時点で加勢した側の
NPCの自爆攻撃により相打ち。その遺言とアイテムを本拠地に届
けるとというのがテストでのクエストの内容だった。

しかし、何故かボス戦に挑むような表情でレイピアを構えフォレス
トエルフの剣士と対峙する相棒パートナー。

本来ならば三分程度でするはずのその戦いは、二十分後にアスナの
レイピアがフォレストエルフを貫き、ポリゴン片に変えるまで続くこ
とになった。

キリトとアスナの体力はギリギリであるがグリーンを維持してお
り、その横には「この後どうすれば」と言いたげなダークエルフのお
姉さんが立ち尽くしていたのであった。

<<キズメル>>と名乗ったダークエルフの剣士。

キリトはアスナは森を南に抜けた所にあるダークエルフの野営地
まで彼女に案内され、そこでクエストの進行を行った。キリトのレベ
ルは15、アスナは13と、この階層ではかなり高いことは間違いな
い。少なくともキリトはモンスター狩りよりもクエスト進行による
報酬の方が経験値を稼げるだろう。

黒エルフの司令官の天幕まで案内された二人は経験値とコル、そしてキリトは筋力が1上がる指輪を、アスナは敏捷値が1上がる指輪を手に入れ、続くクエストの受注を行う。

時刻は午後五時。

空を覆う次層の底は夕焼けに染まっている。このエルフの野営地は、クエストをある程度進行させるまで食事宿代無料、しかもお風呂付という素敵な場所だ。キズメルが主街区まで戻るなら<<呪い>>で戻せるぞと言ってくれたが、お風呂と言う単語に惹かれたのかキリトが止める間もなくここに留まるという返事をしたため、本日のパーティーの寝床は一つ屋根の下ということになった。

「ねえ君、知ってて止めなかったの……？」

「お風呂からの反応が早すぎて、止めることができませんでした」

「……仕方ないじゃない。お風呂入りたかつたんだもの……」

どう考えても自己責任だと判断したのだろう、キリトへの追及は一言で終わった。

キズメルに案内された天幕に入り、アスナの指定した<<国境線>>を厳守することを誓い、贅沢に敷かれたふかふかの毛皮に腰を下ろす。装備を解除し平服に着替えてから、キリトは一息吐いた。

——さすがに、ちよつと疲れた。

第二層のボス戦は激しい戦いだった。あの戦いが終わってからまだ数時間しか経っていない。ボス戦は普段の狩りの比ではない程に消耗する。それに続きあの森エルフも、格上相手の戦いだ。

張りつめていた気が緩んだからだろうか、すぐに眠気に襲われる。

「キリト君、キリト君」

しかし、国境線の向こうからかけられた声に意識が戻る。

キリトの横で同様に腰かけていたアスナは、キリトと同様に装備を解除し毛布に腰かけている。普段はロングブーツに隠されている白い足に視線を奪われそうになるが、キリトはその感情を無理矢理ねじ伏せた。

「やっぱり、外で寝てもらわうべきかしら」

しかし、目の前の聡い少女にはごまかしは無駄だったようで、冷た

い視線と共に放たれた一言にキリトは平身低頭するしかなかった。

「とにかく、寝る前にご飯とお風呂だけでも済ませちゃいましょう?」
「ああ、それにやりたいこともあるんだ。ここの鍛冶屋はスキルが高くてさ、それこそ最大まで強化してもいいし武器の更新をしてもいいぐらいには」

「武器の更新……か」

アスナは<<ウインドフルーレ>>をオブジェクト化して剣を抜き、その剣身を撫でるように触った。

「キリト君。この子は、この階層までしか通用しないのよね?」

「そうだな。最大強化まで引っ張っても、中盤が限界だろう。さつき森エルフとの戦いで、それは実感できたと思う」

キリトの言葉にアスナが頷く。

通常のモンスターを倒すにはまだ問題ない。だが、フィールドボス等の大物を相手にする場合、<<ウインドフルーレ>>は軽すぎた。一撃の威力が小さすぎて、クリティカルヒットをさせても火力が足りない。完全に剣が足を引っ張っている状況だ。

そして、それはキリトの<<アニールブレード>>にも同様のことが言えた。クエスト報酬としては破格の性能を持つこの剣だが、所詮第一層の装備だ。盾を持たないキリトの戦闘スタイル的に、武器だけは常に良いものに更新しなければならない。

「更新するか、ここで」

キリトも<<アニールブレード>>をオブジェクト化し、顔の前に掲げて黒く輝く剣身を見つめる。

強化を行えば、第四層まで使うことができる。しかし、使うことができるだけだ。

「うん。キリト君が教えてくれた、武器をインゴット化して次の武器の素材にする……武器の魂が受け継がれるかはわからないけど」

「そう思うのは自由だしな。それに、RPGでは武器は使い捨てるものだけど……この世界で戦ってきて、とてもじゃないけど使い捨てる気分にはならなくなったよ」

「うん。自分を守ってくれる、大事な、大切なものよね」

アスナの<<ウインドフルーレ>>に向ける視線は、武器に向けるものとは思えないほど優しいものだ。穏やかな表情で剣を見つめるその姿は、キリトを見とれさせるに十分な威力を持っていた。

「急に黙ってどうしたの、キリト君？」

キリトにジツと見つめられていることに気付いたのかアスナが疑問を投げかけてくるが、見とれてました等と言えるはずもなく首を振ってなんでもないとアピールするしかなかった。

キリトの心に「相変わらず変な人ね」という言葉の槍が刺さる三秒前のことである。

ダークエルフの野営地に設置されたお風呂。

大きな天幕の中に設置された湯壺には並々とお湯が溜まっており、二人で足を伸ばして入っても問題ないほどの大きさだった。

しかし、残念なことに数は一つである。

本来なら問題ない。

だが、アスナが今共に行動している相棒パートナーのことを考えると、様々な問題が出てきてしまうのだ。

「ねえ、キリト君」

「はい」

「信頼して、いいのよね？」

「はい、もちろんです」

隣から聞こえてくる機械的な返答に感情を感じられることはできない。しかし、今まで彼がそういったことをしたことは——一度だけあった気がしなくもないが——ないので、お先にどうぞという言葉に甘え、アスナは天幕の中に入った。

天幕の外、布一枚を隔てた先に彼がいるという事実はアスナの心に波を立てたものの、目の前の誘惑には勝てず衣類を解除し、湯壺に身を沈める。

全身がお湯の温かさで痺れ、今日一日の身体の疲れが取れていく感覚を覚える。

——身体の疲れか……この世界に、そんなものあるわけないのに。そう、実際の身体は寝たきりのはずだろうから、疲れ等感じているわけがない。だが、アスナは今確かに疲れが取れるという感覚を感じている。

現実ではないことはわかっている。しかし、第一層攻略の前夜初めてお風呂に入った時も、クリームパンやケーキを食べたときも、アスナは確かに幸せを感じていた。

この世界に囚われてから、絶対に経験することがなかったであろうことを毎日のように経験している。命がけの日々、それでも何故か楽しいと思えてしまう。

気兼ねなく話せる人がいる。共に食事をしてくれる人がいる。

これがどれだけ幸せなことなのか。経験して初めて理解することができた。現実に戻りたいのは間違いない。でも、幸せを知ってしまったわたしは、現実のあの生活に戻ることができのだろうか。アスナは天幕の入り口に目を向けた。

今日の昼の会話を思い出すと、顔が赤くなる。だが、仕方のないことだ。一緒に居たいなんて言うとは思わなかったし、言われるとも思わなかった。

利害関係の一致から共に行動している、と言う方がお互いにとって楽なのだ。少なくとも建前上はそのつもりでいようと思ったし、彼だってそうであつただろう。しかし、今日の会話で本音はそうではないことがお互いにばれてしまった。

アスナにとって彼と共に戦い、過ごすことは楽しいことであつたし、好ましいことでもあつた。だが彼にとってはどうなのだろうとは常に考えていた。だからこそ、今日のボス戦が終わったとき自らが邪魔でないかを聞くつもりだったのだ。

しかし、彼がアスナのことを邪魔とは思っていないとは確認できた。それに、彼の口から一緒に居たいとも言ってくれた。

嬉しい、と思う。

「ねえ、キリト君」

「は、はい！　なんででしょうか！」

だから、アスナは聞いてみたいと思った。

「もう少し一緒に居たいの、もう少しして……いつまで？」
彼はいつまで自分と一緒にいてくれるのだろう。

「……君が、俺を必要としなくなるまで、かな」

「じゃあ……ずっと必要だって言ったら、ずっと一緒にいてくれるの？」

沈黙が流れる。

彼の答えは聞こえてこない。

「ごめんね、変なこと聞いちゃった。聞かなかったことにして」
つまらない質問をしてしまった。

ずっと一緒にいるなんて、そんなこと言えるわけがない。そもそも明日の朝日を拝めるかもわからない世界なのだから。

答えが返ってこないことで感じた寂しさを、アスナはぐつと飲み込んだ。

第十五話

風呂が用意されている天幕の外、その入り口の前でキリトは座り込んで、入浴中であるアスナの護衛のようなものを行っていた。

じつと目を閉じ座り続けているキリトであるが、その心は大いに揺さぶられていた。

しゅわん、しゅわん、ちやぼん、はあ……、という四連撃はキリトの精神を大いに削りはしたものの、そのゲージを空っぽにするには至らなかった。

尤も、ゲージが空っぽになった後に起こるであろう事態は、視界の左上にあるもう一つのゲージを空っぽにすること疑いない。

今キリト達がいるダークエルフの野営地は<<圏外>>。クエスト進行時に発生する<<一時的空間>>であるため、パーティー外のプレイヤーと遭遇することはないものの、攻撃を受ければ当然のように体力は減っていく。

キリトは今入浴中の少女を犯罪者オレンジプレイヤーにしないためにも、天幕の中から聞こえてくる精神攻撃に耐え続ける必要があった。

日は完全に落ち、天幕の前に設けられたかがりび篝火が野営地を照らしている。その規模はさして大きいわけではないが、NPCが生活する天幕の他に、道具屋やプレイヤーの装備を修理するための店がしっかりと設置されている。

当分はここが拠点になるだろう。ベータテストの知識では、主街区<<ズムフト>>よりも腕のいいNPCがそろっているし、ポーション類もここで購入できるもので十分賄える。

問題は入浴中の少女と一つ屋根の下で泊まることになるわけだが、彼女がおいしいのだから気にする必要はないのだろう。

ふう、と一息吐く。

天幕の中から聞こえてくる精神攻撃は留まることを知らず、無理矢理別のことを考えていたキリトの頭に水音や機嫌の良さそうな鼻歌を届ける。

——辛いです。

キリトの現在の状況は、この一言に尽きた。

しかし、悶えるわけにもいかず、キリトは座禅のようなポーズをとることで精神の集中を行おうとするも、当然それは不可能であった。キリトに対する精神攻撃は、天幕の中からの問いかけがあるまでの二十分間、続くのであった。

午前二時。大体七時間は寝たことになるだろうか。

すぐ隣で寝ている相棒パートナーを起こさないように注意しつつ、キリトは身体を起こした。

細剣フェンサー使いの少女はぐっすりと眠れているようだが、その更に奥、天幕のストープの傍で寝ていた家主のキズメルがいないことに気付いたキリトは、物音を立てないように注意しつつ天幕を出た。

夕方に聞こえたエルフの兵士たちの声や鍛冶屋の鎚音つちおとは聞こえず、耳に届くのはかすかな虫の音だけだ。

さてキズメルはどこだろうかとキリトは周囲を見渡すも、動いているのは二人の歩哨だけ。

天幕の外の篝火かがりびはほとんど消されているため、天幕の中に入るわけにはいかないだろう。ならばと、キリトはこの野営地でまだ確認していない場所である、司令部天幕の更に裏手の空き地に向かった。

しかし、ベータテストの時はただの空き地であったそこには三つの墓標が並べられており、その墓標の一つの前に、キリトが探していた人物が座っていた。

「キリトか、すっかり休まないと明日が辛いぞ？」

すでにキリトに気付いていたのだろう。キズメルが肩越しに声をかけてきた。キリトは数秒迷ってから、キズメルの横まで進んだ。キズメルの前の墓標には<<T i l n e e>>という文字が刻まれているのがわかる。

「ティルネル……さん？」

「ああ、双子の妹だ。先月、この層での戦いで命を落とした」

その言葉は、キリトを困惑させた。

先月。つまりキリト達が第一層で戦っていた時に、キズメルの妹は

命を落としたということだ。

キズメルの妹のティルネルは薬師だったという。後方部隊で支援を行っていたが、森エルフの鷹使いに急襲され命を落とした。

困惑で立ち尽くしていたキリトに座るようすすめたキズメルは、地面に腰を掛けたキリトに革袋を差し出した。

その栓を開け一口呷り、革袋を返す。革袋を受け取ったキズメルは、曰く月涙草のワインであるらしいそれを、キズメルが目の前の墓標にかけていく。

あまりにも具体的な説明。そして、横の女性の表情と行動。

まるで本当にあつたかのように語られる出来事。今キリトが話しているダークエルフの剣士はNPCのはずだ。なのに、何故彼女の話に、このように感情を揺さぶられるのか。

城から隠して持ってきたのに、結局一口も飲ませてやれなかったと、キズメルが膝を抱えながら言った。

キリトにはもう、目の前の女性がNPCには見えなかった。

彼女は問いに定型文で答えるような、従来のNPCではない。この世界で生き、戦い、そしてその結果の妹の死を悼んでいる。それほどこからどう見ても、自分たちと同じ感情を持っているように思えた。

「ところで、昨日何かあったのか？ 食事の後天幕に戻ってきたとき、アスナと微妙な雰囲気の流れているように思えたが」

だからだろうか、彼女のこの問いに、キリトは素直に答えてしまった。

「昨日、アスナに『ずっと一緒にいてくれるの？』って聞かれたんだ。それに、俺は何も答えられなかった」

「……そうか」

そう、キリトは答えられなかった。

彼女の言うずっとがどういう意味を持つのかはわからない。ただ、それなりに踏み込んだ質問であることは間違いなかった。

彼女の言う目標が達成されるまで一緒にいるということなのか。それとも、これからパーティーを組み続け、共に戦い、クリアするその日まで一緒に居ようということなのか。

前者ならば、すぐに答えられた。しかし、もし後者ならば……。

「……人族も、厳しい戦いを続けていると聞く。我らと同じように、お前たちも明日生きていくかわからない。そのような状況に置かれていくのだろうか」

キズメルの言葉に、キリトは黙って頷いた。

明日生きているかわからない。茅場晶彦によって作り出されたデスゲームに囚われた者たちは、皆等しく死の淵に立っている。自らの力で進もうとしている者たち——特にキリトやアスナのように最前線に立ち続ける覚悟を持った者たちは、常に死と隣り合わせなのだ。だからこそ、ずっと一緒にいるという言葉に答えることはできない。

例え一緒に居たいと言っても、次の瞬間に離れ離れになる可能性がある。あるのだから。

「お前の考えも、何故答えられなかったかも大体は理解できる。だが……」

キズメルはそこで言葉を止め、キリトに視線を向けた。

その表情は真剣で、そして悲しげだった。

「伝えたいことは、伝えたいほうがいい。……伝えられなくなる、前に」
「そう……だな」

その通りだと、キリトは思う。

死んだ者に想いを伝えることはできない。どれだけ感謝したくても、どれだけ寂しいと言いたくても、それを伝えることはできないのだ。

それをキリトは身をもって理解していた。

「彼女と……アスナと出会って、まだ半月しか経ってないんだ」

たった半月。アスナと話すようになって、まだそれしか経っていない。

「でも、死なせたたくない。アスナは恩人なんだ。孤立する道を選んだ俺を見捨てることなく、ついてきてくれた。俺といれば不利益になるはずなのにな。……甘えかもしれないけど、一緒にいてほしい。だけど、彼女を守りきると言えるほど、俺は強くない」

キリトはアスナに救われた。自らのエゴで選んだ孤独から、無理矢理引つ張り出してくれた。

その恩を返すために、彼女が望む限り一緒にいたいと思う。しかし、彼女と共に在るということは、これからも彼女が死にそうになる場面を見続けるということだ。そして、その最期の瞬間を見ることにすらなるかもしれない。

そのような場面を作らせないための強さを、キリトは持っていない。かかった。

「……不器用なのだ、キリトは」

「あんまり、人付き合い得意じゃないんだ」

キズメルの言葉に、キリトは苦笑いで答えた。

どうしても、他人との距離感を掴むことができない。キリトは本音を口に出すことが苦手だった。自らが望むことを口にして、相手の迷惑になるのが嫌だった。

「強さが足りないのは仕方ない。だがそれでも、大切な人に大切だと行って罰が当たることではない。……アスナのことが大切なのだろうか？ キリト、お前はちゃんと伝えておけよ」

そう言って、キズメルが立ち上がる。

本来ならばキリトも立つべきなのだろうが、もう少しだけこうして座っていたい気分だった。

「大切……そう、アスナは大切な人……だな」

「ふふ、それでいい。ちゃんと伝えてやれよ。……私は天幕に戻る。まだワインが残っているから、これを飲み終わったら戻ってくるという」

キリトに革袋を渡し、キズメルが去っていく。

大切だと伝える。今すぐそれを言う勇気を、キリトは持てなかった。

情けないことだと、キリトは苦笑いする。

革袋の栓を開け、ワインを喉に流し込む。そこそこに強い酒精が喉を焼くが、咽むせるほどではない。ソードアート・オンラインで酒に酔うことはできないのだが、こういう気持ちの時に酒を飲むのは悪くな

い。

晩酌とはこういうものかと感慨に浸りつつ、キリトは革袋を傾けた。

天幕に戻ると、熟睡していたはずのアスナがフル装備で待っていた。

何事だろうとアスナを見ると、顔を真っ赤にして後ろを向いた。顔を手で覆っており、つい最近見たような格好だ。

その様子を見た——こちらも同様にフル装備の——キズメルがアスナに近寄り、コソコソと何か話している。

本当に何がなんだかさっぱりわからなかったが、問題は解決したらしい。

顔に赤さを残しつつも、アスナがこちらを向いた。

「キリト君、しっかり休めたから出発しましょう！　今は無性に暴れたい気分なの！」

物騒なお姉さんだと思う。

時刻は午後三時。夜はモンスターの強さが上がるため、本来ならばあまり活動するべき時間ではない。しかし、どうやらキズメルもついてきてくれるようだ。

ならば戦力的に問題はないと、ストーリークエスト第二幕＜＜毒蜘蛛討伐＞＞の攻略に向かった。

噛み付きによって＜＜毒＞＞の状態異常を与えてくる毒蜘蛛の巣に突入し、エルフの偵察兵の遺品を回収、キバオウ率いるALSのパーティーと遭遇しかけるアクシデントはあったものの、彼らを追いかけてきたダンジョンボスを撃破してクエスト要件を満たした。

「わたし、こういう天然系のダンジョン好きじゃないわ……。あの人もなんでもこんな場所に来たのかしら」

迷宮区などの人工的なダンジョンは各所に照明が設置されているためそれなりの明るさがあるものの、天然系のダンジョンは明かりがあってもせいぜいが固定された篝火^{かがりび}。この毒蜘蛛の巣では蛍光コケがかすかに光っている程度で基本的には暗い場所が多い。

必然明かりが必要になるため松明などを持ち込むことになるが、松明自体も装備品扱いになるために突発的な遭遇戦での対応が難しい。よって、クエストのキーポイントなどの理由がない限り天然系ダンジョンには入らないのが無難なのだ。

それでもALSの面々がこの場所に来た理由、それは<<ギルド結成クエスト>>に関連しているからだ。

「なるほどね。じゃあ下手に留まってる、ALSじゃなくてDKBの人たちとも会うことになりそうね。……面倒だから、さっさと戻りましょう」

キリトの説明を受けたアスナは心底面倒といった体だ。

尤もキリトも同じ意見であるため、早々に毒蜘蛛の巣を後にし野営地に戻った。

「派閥争いがあるのは、どこの種族も同じようだな」

「ってことは、やっぱりダークエルフにも?」

「ああ。私が所属している騎士団も色々とあってな。全く面倒なことだ」

帰還の道中、キズメルとアスナが種族内の派閥争いについて語っている後ろで、キリトは遠からず結成されるであろう二つのギルドについて考えていた。

キバオウが中心のALS——<<アインクラッド解放隊>>は、生存しているプレイヤー全員の底上げを狙う組織だ。一方、リンド率いるDKB——<<ドラゴンナイト・ブリゲード>>は攻略に主眼を置き、自己の強化に重点を置く組織だ。

遠からず、衝突するだろう。

キリトはそう確信していた。

思想があまりにも違いすぎる。手に入れた物を皆で分かち合うか、自己で確保するか。全体の生存という面ではALS、攻略という面ではDKB。どちらの言い分も正しいがゆえに、相容れない。キバオウとリンドの個人的な仲は悪くないようだが、組織のリーダーとしての話は別になるだろう。

——ベータテスターとビギナーの間の問題の次は、ギルド間の問題

か……。

キリトは溜息をついた。

人間三人いれば派閥ができるとは言いが、このゲームはどうも人間間の争いが多い気がしてならない。実際に命がかかっているのだから、ある程度シビアになるのは仕方ないとはいえた。

現状ALSとDKBの仲が悪いという話は出ていない。このまま上手くいってくれればよいのだが、もしダメなときは手段を講じる必要があるだろう。

一番簡単なのは、第三勢力になれるような集団ができることなのだが。

「ちよつとキリト君」

と、そこまで考えて、突如かけられたアスナからの言葉に思考を止める。

「溜息ついて難しい顔して、何が考えてたの？」

アスナは訝しげな表情をしている。

キリトは回答に迷った。そもそもがキリトの予想の話であるし、結論が仲良くして欲しいという本当につまらないものだ。

「キリト。下手に悩むよりは、話してみてもいいと思うぞ」

「そうよ。あなた一人で考えてたら沈んでいくタイプでしょ？ いいから話してみなさいな」

そう言われても、キリトは頬掻いた。

「いや、話すほどのことでもないんだがなあ……」

本当に大したことではないのであるが、どうやらこの返答は細剣フエンス使い様のお気に召さなかったらしい。アスナの表情が険しくなっていくのを感じ、キリトは咄嗟に冗談を口にした。

「い、いや、その、お嫁さんにするならどっちがいいかな……なんて……」

この世界にリセットボタンはない。

キリトは数秒前の自分を殴りたい衝動に駆られるも、それは当然不可能である。目の前の女性二人は片や顔がどんどん赤くなっており、片や「ふむ」と考え込んでいるようだ。

「な、何言ってるのよバカッ！」

「それは女王陛下のお許しがないと難しいな」

キズメルが何かしてくることはないと思っただが、<<リニア>>くらいは覚悟した。しかし、どうやら人生のリセットボタンを押されることはないようだ。

アスナは顔を赤くしたままずっと進んでいく。悪いことをしたなと思っただが、うやむやにできたのだから問題あるまい。いや、無くはないが、少なくとも今、ギルドがどうこうという必要はないのだから。

キズメルがこちらを見て、やれやれといった体で一息吐いたが、何も言わずにアスナを追って歩いていく。

プレイヤーの思惑を完全に見透かすNPC。恐ろしい。ひよつとして中に人でも入っているのではないかと思わないでもないが、自分たちの名前を伝えたときに発音の確認をしていたから、それはあるまい。

ベータテストとはあまりにも違う、いや、いつそ別物といつてもいいAIだ。

もうここまで来ると、ベータテストの時の知識がどれだけ通用するか怪しいものだ。

実際、既に前提条件が違っている。

キリトがベータテストでこのクエストを進めたとき、このキズメルと言う女剣士は最初の森エルフとの戦いで相打ちになるはずだった。しかし、正式サービスではこうしてパーティーを組み共にクエストを進めている。レベルこそキリトと同じ15ではあるが、彼女はエリートモンスター扱いのため実力はレベルよりはるかに上だ。

そのおかげで、コンビでもサクサクとクエストを進めることができるわけだが、これがこのクエストの正しい挙動なのかわからない。今後キリトがわからない展開にもなる可能性はある。

ストーリークエストはベータテストでは第九層までだった。正式サービスでも同じかどうかはわからないが、大きく変わることはないだろう。ならば彼女との付き合いは、長くても第九層までということ

だ。

——道が分かれるその時まで……なんて、格好つけすぎか。

彼女をどうしようという考えなどキリトにはない。

彼女は明らかにNPCを超え、個人的な感情を持っているかに思える。そして、キリトとアスナに対し好意的だ。ならば共に行動できる間はした方がいい。

まあこちらは焦って考える問題ではないだろうと結論付け、前を進む二人の後に続いた。

野営地でクエストの報告を行い、今までより容量の大きいベルトポーチを報酬として受け取った後、キズメルと一時別れたアスナはキリトと共に鍛冶屋の前に向かっていった。

本来睡眠をとる前に武器の更新を行う予定だったが、素材を十分に集めてからにしようということと毒蜘蛛討伐のクエストを先に行つた。

クエストを終え野営地に戻った頃には夜もすっかり明け、朝日が照らしている。当然NPCも動き出しており、鍛冶屋の天幕からも鎚音が聞こえてくる。

<<ウインドフル>>から次の武器へ。

今の武器をインゴットにして次の武器の素材にするという話をキリトから聞かなければ、この更新を渋ったに違いないだろう。

しかし、武器の強化が必須であることは理解していたし、アスナ自身も武器の貧弱さを自覚していた。

武器に魂が宿るかはわからない。だが、共に戦ったことはアスナ自身も覚えている。きっと次の武器も自分を助けられると信じて、アスナはエルフの鍛冶師に武器を預けた。

お願いしますと、相手がNPCだとわかっていてもあえて頭を下げた。それが今まで自分に尽くしてくれた武器への礼儀であり、またそれを扱ってもらう相手への礼儀だとも思ったからだ。

<<ウインドフル>>が>>炉に入れられ、インゴットに変わる。受け取ったそれを、狩りで得た素材と共に再び鍛冶師に渡して、武器

の作成が始まった。武器の作成は失敗することはないと事前に聞いていた。しかし、どういったものになるのか不安であったアスナは、再びバフを求めた。

「キリト君、バフ頂戴」

そう言つて、アスナはキリトの左手を握る。

右隣にいるキリトは一瞬だけアスナを見たものの、すぐに視線を鍛冶師に戻しアスナの右手を握り返してきた。何も言わずに握り返してくれたことにアスナは少しだけ笑みを浮かべるも、すぐに表情を戻した。

振り下ろされるハンマーの回数はどんどん増えていく。二十回、三十回と回数を重ねていくにつれ、右手に伝わる力が強くなる。

そして、四十回目振り下ろされた後、光が収まっていき白銀に輝く刀身を持つ細身の剣が姿を現した。

<<シバルリック・レイピア>>。強化可能回数がこの階層では脅威の十五回を誇るその武器は、鍛冶師の「良い剣だ」という言葉と共にアスナに手渡された。

<<ウインドフルーレ>>より明らかに重い。しかし、今のアスナにとってはまさにちょうど良いと思える重さだった。攻撃力や攻撃速度は<<ウインドフルーレ>>の比ではなく、間違いなくアスナのメインアーム主武器として頑張つてくれるだろう。

「メインアーム主武器完成おめでとう。<<ウインドフルーレ>>はきつと、その中で生きているとは思うんだけど……」

「うん、わたしもそう思う。……ありがとう。この子となら、きつとまた戦っていけるよ」

アスナはウインドウを操作し、<<シバルリック・レイピア>>を装備した。すると、右側から「おお……」という声上がる。視線をキリトに向ければ、腕を組み感心したようにアスナを見ていた。

「どうしたの、急に」

「いや、その……女の子にこんなこと言うのは失礼かもしれないんだけどさ……」

キリトが頬を掻きながら視線を逸らした。失礼ならば言わなければ

ばいいのにと思わないでもないが、ここで止められては逆に気になるとアスナは視線で続きを促した。

「えーっと、その剣だけど……すごく、似合ってます。はい」
言葉の意味を理解した瞬間、アスナの顔は赤くなった。

——この人は本当に、変な時に、急に素直になるんだから……。

本当に目の前の少年は、アスナの心を簡単に揺らす。

毒蜘蛛クエストに出発する前、キリトが天幕の外に出ていき、キズメルもないことに気付いたアスナはこっそりとキリトの後を追った。

追った先には墓場があり、悪いと思いつつも木の陰でこっそりと話を聞いていたが、その最後の一言はアスナを動揺させるに十分すぎる物だった。

直球過ぎた。余りにも直球過ぎた。

——何？ 何なの？ た、大切って、急に、そんな……。

嬉しいやら恥ずかしいやらでパンク寸前となったアスナは、混乱した思考のまま天幕に戻った。そして、何を思ったかいつも通りにしようと思つた結果、何故かフル装備で天幕の中に立っているという妙な状況になった。

先に戻ってきたキズメルにくすくすと笑われ、次いで戻ってきたキリトを見た瞬間に先ほどの彼の言葉を思い出してアスナの頭が再沸騰しかけるものの、キズメルの「あまり過剰に反応してはバレルぞ」という言葉に多少は冷静さを取り戻した。尤も、何かしていないとまた沸騰しかねないと判断したアスナは、戦いを望み若干キリトを怯えさせたのはご愛嬌であろうか。

「あ、ありがとう……。その、君も今更新するんでしょう？」

そういうわけで一旦治まったはずの恥ずかしさを隠そうと努力しつつ、アスナは話を進めた。

「ああ、ここで更新するよ。正直く＜アニールブレード＞も最大強化すれば第四層くらいまでは通用するんだ。だからもうちょっと先延ばしにしようかとは思ってたんだけど、ちょっと早めに強い武器を持っておきたいってのもあってさ。それに……君の武器を見て、俺も

武器の魂つてのを信じたいなつて」

キリトはアスナの腰に差されたレイピアに視線を向けた。それを見て、アスナは柄を軽く握る。

「そうね。実際にはそういったものはないのかもしれないけど、そう考えたほうが、剣のことを大切に思えると思うもの」

「大切……か。うん、そうだな」

その言葉で決心したのか、キリトが鍛冶師に剣を渡した。アスナ同様に頭を下げて剣を手渡したキリトを見て、軽い嬉しさを感じながら、アスナはキリトの横に立ちキリトの左袖を軽く引っ張った。

「ねえ、バフ……要る？」

アスナの言葉を聞いて、キリトが無言でアスナの右手を握ってくる。キリトの頬が赤くなっているのを横目で確認した後、アスナはキリトの左手を握り返した。

第十六話

武器の更新と強化を終えた後、キリトとアスナはエルフの野営地で朝食を取っていた。

アスナの腰には＋5まで強化された<<シバルリック・レイピア>>、そしてキリトの背には同様に＋5まで強化された<<ソード・オブ・サイレンス>>、<<沈黙の剣>>と銘打たれた剣がそれぞれ装備されている。

アスナの<<シバルリック・レイピア>>同様に強化可能回数十五回、その性能は第七層に至ってもまだ通用するレベルだ。

そして、第二層ボス取り巻きのナト大佐のラストアタックボーナスで得た＋10未満の強化の成功値を最大値まで上昇させる牛印の金属片を使用することで、エルフの鍛冶師は計10回の強化をことごとく成功させた。

この階層では最高レベルの武器を確保することができた二人は今後どうするかを話していた訳であるが、一通のメッセージが二人の行動を決めることになった。

毒蜘蛛のダンジョンからの帰り道、アルゴからの<<フレンド・メッセージ>>が送られてきており、ウィンドウを可視化しアスナにも見せる。

「へえ、第三層攻略会議の第一回目、今日の午後十七時から主街区<<ズムフト>>の広場で開催か」

「ああ、クエストの区切りもついているから参加するのもいいかなって。正直迷宮区への道も確保できてない状況で、どれだけの情報が出るかは疑問ではあるけど」

「確かに。でもブレイブスが抜けたから、編成面での話し合いにはなるかもしれないわね……。わたしは参加してもいいと思うけど、実際にどうするかはお任せするわ。クエストを進めたい気持ちもあるし」

アスナはどちらでも構わないという感じだ。ならば会議の参加ついでに、一度主街区に行ってみるのも悪くない。何せ二人は第三層についてから主街区に一度も行っていない。主街区<<ズムフト>>

は中々の景観を誇るし、攻略組との顔見せも重要だろう。

「じゃあ一度主街区に戻ろうか。今から戻れば宿屋で一休みしてから空いた時間で狩りもできるだろうし、武器の試し切りもしておきたいしな」

そう言つてキリトは剣の柄に手を這わせた。自らの武器の威力を熟知しなければ、戦闘時にできる判断の幅が狭まる。いきなりダンジョンボスに挑むのは無謀であるし、フィールドのモンスターで感覚を掴んでおく必要もあるだろう。

「了解、じゃあキズメルに一度話さないかね。……ところで、ちよつと聞きたいことがあるんだけど」

「ん？ 何？」

「この<<フレンド・メッセージ>>って何？ 普通のメッセージじゃないの？」

「ああ、なるほど」

このSAOの世界でメッセージを送る方法は、基本的に二つだ。一つは、相手のプレイヤーネームの綴りつづを正しく知っていれば送ることができる<<インスタント・メッセージ>>。もう一つはフレンド登録した相手に送ることができる<<フレンド・メッセージ>>だ

<<インスタント・メッセージ>>の送信はどこからでもできるが、受信は同じ層の街か屋外にいないければ届かない。一方<<フレンド・メッセージ>>はダンジョンや一時的マップでは受信できないものの、別の階層に居ても届くし文字数も多く打てる。

よつて頻繁にメッセージを遣り取りするプレイヤーならば、フレンド登録をしておくのが基本になる。自らの位置情報などが相手に伝わることになるため、信頼できる相手のみと言うのが基本にはなるのだが。

と言う旨の説明をアスナに行うと、何故か目線がどんどん険しくなってきた。

キリトからすれば基本的なシステムの説明を行ったただけで、何故機嫌が悪くなっているのかさっぱりわからなかったが、その疑問はアスナの言葉が解決した。

「キリト君は、アルゴさんとはフレンド登録するのに、パーティーメンバーのわたしとはしないのね」

「あつー。いや、そんなことはなくてですね！ アスナとはほら、いつでも話せるから必要なかったというか、その」

「ふうふううううううん。必要ないんだあ、そっかあ」

「まずい、とてもまずい。キリトの背中に冷や汗が伝う。」

目の前の麗しき細剣フェンサー使い様が完全に拗ねておられる。今日この後はキズメルがいなくなるため、アスナと二人きりだ。このままでは常に彼女の冷たい視線に晒され続けることになるだろう。

「あ、あのですね、アスナさん……」

「ふん、いいわよ別に。ほら、結論が出たんだから行きましょ」

そう言うと、アスナは立ち上がり食堂となっている天幕を出ていく。

咄嗟に手を伸ばしたキリトだが、見事に空を切り、その手は力なく下された。

やってしまった。確かにこれは気が利かなかつた。キリトは頭を抱えて、溜息をついた。

アスナは十分に信頼できる人だ。メッセージを一回でも送る機会があれば、受託されるかとはかくとしても、間違いなくフレンド登録の申請を行っていただろう。その必要性が無い程度に共に行動しているわけだが、登録しておいて損をすることは無い。謝った後に申請させてもらおうと、キリトはフレンド一覧画面を開く。

そして、その登録者リストの一番上を見てキリトはひゅつと息を呑んだ。

Keinクラインという名前はまだ白く、その人物が存命していることを表している。

——あいつ、元気にやつてるかな……。

このゲームで最初に知り合い、最初の友人になり、そして、最初に見捨てた人物。

野武士面の彼は仲間がいると言っていた。果たしてその仲間が何人なのかはわからないが、今も生きていくということはきつと上手く

やっているのだろう。

キリトはクラインの名前をタップし、フレンドメッセージのウィンドウを出そうとして、手を止めた。

元気にやっているか、それを聞きたいと思う。しかし、急に連絡されては彼の迷惑になるだろうし、キリトが<<ピーター>>であることもすでに知っているに違いない。フレンドを切られているわけではないから、メッセージを送ること自体は問題ないだろうが、いい気はしないだろう。

それに、今更コンタクトを取ったところで何かできるわけでもない。彼は仲間を見捨てることはできないだろうし、キリトも前に進み続けなければならぬのだ。その道が交わることは、当分ない。

キリトはフレンド一覧を閉じた後、背もたれにもたれかかり目を閉じた。

アスナとフレンド登録をしたとして、クラインと同じように迷惑になりはしないだろうか。

彼女は優しい人だ、迷惑等と言うまい。だが、もしその可能性が少しでもあるのだとすれば、フレンド登録などしないほうが良いのではないのだろうか。

「ちよつとキリト君！　いつまで座ってるの！」

アスナの声に、キリトは目を開けた。

どうやら考え込んでしまっていたようで、おかしく思ったアスナが呼びに来てくれたらしい。

アスナは何やっているのと言わんばかりにご立腹だ。不機嫌にされた拳句、待たされたのだ仕方あるまい。その姿に申し訳なさを感じ、「ごめん」と謝り、キリトは立ち上がった。

さあ行こうと言おうとした所で、キリトは動きを止めた。アスナがこちらをジッと見ている。不機嫌なのは間違いないが、待たされて怒っているような表情ではない。なにか、キリトの態度にむっとしてるような、そんな印象だ。

「君、また変なこと考えてたしよう？」

その言葉に、キリトはびくりと体を震わせた。

何故わかるのか、キリトはアスナに視線を向ける。

「君の顔見れば何となくわかるわ。君、感情が顔に出やすいって少し自覚した方がいいわよ」

そんなに自分はわかりやすいのかと、キリトは顔をぺたぺたと触る。確かにこのゲームで感情を隠すことは難しい。感情をゲーム側が読み取り、勝手に表情に表してしまおうからだ。

そんなキリトの様子を見て、アスナは溜息をついた。

「まあ、いいわ。わかりにくいよりはよっぽどマシだし。早く行きましょ、時間がもつたないわ」

アスナが再び天幕を出ていく。フレンドのことは何も言わなかった。ならば少々後回しにしておこう。キリトは開かれていたウィンドウを閉じて、後に続いた。

主街区への道中に交戦した狼型のモンスター<<ロアリング・ウルフ>>の厄介な点は、体力がイエローになると仲間を呼ぶ習性がある点だ。よって、体力をイエローギリギリまで削った後、そこから一気に削り切るという戦法を取る必要があったわけだが、武器を変えた落とし穴によって思わぬ苦戦をすることになった。

火力が大きすぎたのだ。

ソードスキルによつて簡単に体力を半減した狼の仲間呼びによつて、周辺からワラワラと集まってきた狼の集団。尤も狼が何匹現れても、合体したり、強い狼が出てくるわけでもなく、十分以上の時間がかかったものの、危なげなく対処することができた。

そんなハプニングもあったものの、二人は無事第三層主街区<<ズムフト>>に到着した。

<<ズムフト>>は極めて特異な街で、木でできた巨大な壁に作られた鑄鉄のゲートを通り抜けた先に、バオバブの巨大なお化けのような、直径三十メートルほどの樹が三本<<ゆえに>>の形でそびえており、その樹の中をくり抜く形で街が構成されている。三本の樹の中央には広場が存在し、今回攻略会議が開かれるのはその広場で間違いないだろう。

キリトの横ではアスナが眼を丸くして街を眺めているが、それは無理もないことだ。この光景は絶対に現実では見ることができない、仮想現実と言う作られた世界の中でしか見ることができないものだからだ。

そんな都会に出てきたお上りさんのような状態のアスナを引き連れ、広場の北側にある掲示板に向かう。そこには間違いなく、攻略会議午後五時からと掲示されていた。

「時間は間違いないみたいだし、少しだけ休んでから宿屋でちよつと仮眠をとって、それから補充とクレスト消化にしよう。昼過ぎくらいから始めれば十分間に合うだろうし」

「了解。じゃあおすすめの宿に案内してもらおうかしら」

「あいあい。条件は何がありますかね？」

ベットが上等、眺めがよい、周りが静か。

アスナの答えに他に何があるんだと思いつつ、キリトは南東の巨大バオバブに向かう。

樹の中は、その中央に螺旋階段が天井を貫いてそそり立っており、外周にはNPCの店が配置されている。

今回の目的地はその二十階。エレベーターがないので徒歩になるが、階段を登ることによる肉体的な疲れはないため、キリトとアスナはひよいひよいと階段を登っていく。

「ねえねえ、部屋はわたしが決めてもいい？」

アスナの言葉に頷く。この二十階の部屋の値段はそこそこ張るが、何泊もするわけではない。それこそちよつとした休憩程度だ。ならばそこまでお金もかからないし、好きな部屋を選んでもらっても問題ないだろう。

アスナは大規模施設の宿屋特有の、各階に設置されたNPCに話しかけ、真剣に部屋を選んでいく。

結果的に選んだのは南側のそこそこ良いお部屋。窓がしっかり備え付けられている、樹の外周の部屋だ。

【2038】というプレートが掲げられたドアを開ける。その部屋は外周である南側の壁が窓になっており、そこからは迷い霧の森をほ

ほぼ全て見渡せるほどの絶景が広がっていた。地上からの高さは約六十メートル。その高さによって広場からの騒音は聞こえることなく、ベットも上等だ。休憩だけというのには少々惜しい部屋なのは間違いないだろう。

部屋に入つてすぐに、窓に取りついたアスナが歓声を上げている。その様子に微笑ましきを感じながら、キリトも同様にアスナの隣に立って景色を見る。森はほとんど全て見渡せるし、その先の外周部まで視界に入る。一度は見ておくべき絶景であることに間違いはないだろう。

「凄いねキリト君、迷い霧の森が全部見えるよ。これは見ておいて損はないわね……」

「気に入つてもらえたようで良かったよ。こんな光景、現実で見るのは難しいだろうしなあ」

「そうね、少なくとも日本じゃ難しいかも。……なんというか、ちよつと複雑だわ」

「複雑？」

「ええ。こんな楽しい気持ちでこういう光景が見れるなら、この世界も悪くないって思っちゃった。全部作られたものだってわかつているのに」

そう言うアスナの横顔は、とても悲しげだ。

確かに、このゲームは自分たちから現実を奪い取った。目に見えるもの、感じる物は全てナーヴギアによって作り出された紛い物なのかもしれない。しかし、悪くないと思う感情は紛い物なのだろうか。「気持ちはわからなくもないよ。でも、悪くないでもいいんじゃないかなって思ってる。見たものや食べたものは全部作りものだけど、それに対して生まれた感情は作り物じゃないんじゃないかって」

「感情？」

「うん。俺の持論だけどき、この絶景を見てすごいって思ったし、アスナが楽しんできたなら嬉しいって思う。こういうプラスの感情を、無理に否定することはないかなって」

「そう……なのかしらね」

アスナの表情は複雑そうな色だ。

わからないでもない、でも完全に納得はできない。そんなところだろうか。

「無理に折り合いをつける必要はないと思う。でも、マイナスの感情ばかりだと辛くなるからさ。……俺は、あまり現実世界が好きじゃなかったから、こう考えていられるのかもしれないし」

キリトはかなり早い段階で折り合いをつけることができた。

現実世界で大切なものはもちろんある。帰りたいとも思っている。だが、キリトにとって仮想世界は自らの存在を肯定するための世界だった。寂しきで母親に似たNPCの前で泣いたこともある。だが、寂しいと思うことはあっても、この世界を嫌悪したことがあっただろうか。

キリトはこの世界を肯定してしまっている。だからこそ、精神的な余裕を持って活動できているのだろう。

アスナは無言のまま、窓の外を見続けている。

表情は相変わらずで、先ほど歓声を上げた時のような笑顔は見えない。

アスナの様子を見て、キリトも同様に窓の外に視線を向けた。

そう簡単に割り切れるものではないだろう。現実が大切であればあるほど、この世界のものが作り物に見えてしまう。今この世界で生きていくことを、認められなくなる。

だからこそ、キリトは待つ。

この場で結論を出せるわけがない。なら、彼女が思考を巡らせている間だけは傍にいようと思う。一人で考えていると、悪い方向に思考が進むのは間違いない問題なのだから。

結局どれくらいの時間そうしていただろう。

時間はあまり進んでいないから、きつと数分程度だったようにも思えるが、まあこういつたときの時間感覚など当てになるまい。何しろキリトはただぼーっと外を見ていただけなのだから。

隣に考え事をしている少女がいる以上、部屋をウロウロするわけにもいくまい。かといって休む以外にやることはないし、自分一人だけ

先に休むのも気が引けた。それならばと、彼女と同じように窓枠に寄りかかり頭を空っぽにして外を見ていた。

「まあ、すぐに結論が出る話ではないわよね」

「どうやら思考は終わったらしい。」

まさにアスナの言うとおり、すぐに結論を出せるわけがないのだ。「焦る必要はないさ。時間はたっぷりあるだろうし」

残念なことにな、と最後に付け加えるとアスナが苦笑した。

一か月と十日で二層。これから攻略のスピードは徐々に上がっていくのだろうが、それでも一層に一週間程度は見込まねばなるまい。単純計算で九十八週、二年だ。それだけあれば、いずれこの仮想世界との付き合い方にも折り合いがつけられるときが来るだろう。

「黙って付き合ってくれてありがと。じゃあ、とりあえず休みましようか。昼過ぎまでなら二時間ちよつとは休めるし、十分な休憩になるわ」

「ああ、仮眠するにはちようどいい時間だな」

現在、午前十時少し前。

深夜の三時頃から活動していたのだから、休憩にはちようどいい時間だ。

「じゃあ十二時に一階に集合……で……」

アスナの言葉が急に萎んでいく。

何事かと視線を向ければ、アスナが頭を抱えている。はて、一体何があったのだろうか。

「わたし、この部屋二人で取ったのよ。何も疑問に思わずに」

その言葉でキリトも全てを理解した。

確かにこの部屋は二人用だ。ベットが部屋の両側にしつかりと一個ずつ用意されている。キリトからすれば何の問題もないが、年頃の少女であるアスナには問題だろう。

「あー、俺別の部屋取ろうか……?」

「……大丈夫よ、野営地の天幕で同じ場所で寝てるじゃない。それにちよつと休憩するだけなんだから、もったいないわ」

確かにその通りだ。まあ彼女が良いというならば良いのだろうが、

キリトは一応聞いてみることにした。

「その、何で頭抱えてたの？」

「……君と一緒に部屋に入ることには何の疑問も、危機感も覚えなかった自分に呆れてるだけよ。フレンドでもない人と、しかも男の人と一緒にの部屋に入るなんて」

鋭い目線がキリトに向けられる。

確かに女性からすれば大問題に違いない。しかし、ここでフレンドのことを出してくるとは思わなかった。うやむやにできたと思っていたのはキリトだけだったらしい。

「あー、その、フレンドに関してはずすね……」

「まあ、フレンド登録するのは信頼できる人だけらしいし？ わたしは全く気にしてませんけど？」

これめっちゃ気にしてるやつですね、わかります。

まいったなと、キリトは頬を掻いた。

「その、迷惑にならないか？ 俺みたいなのとフレンドになっても、メリットないぞ？」

「……君の自己評価の低さには、驚きを通り越して呆れるわね」

アスナはやれやれと溜息をつく。

「わたしはその『俺みたいなの』人を一番信頼して、パーティー組んでるんですけどね？ 少なくともわたしは、君と一緒にいて迷惑と感じたことはないわ。だから、その……」

アスナがそこで言葉を止め、俯く。アスナの言葉ははつきりとしたものだ。ならば、キリトもそれに答えねばならないだろう。

「あー、アスナさん。その、フレンドの申請をしても、いいでしょうか」
キリトの言葉を聞いたアスナが顔を上げ、チラとこちらを見た後、頷く。

それを見たキリトはメニューを操作し、アスナにフレンドの申請を行った。アスナがYESを選択し、申請が了承される。そして、フレンドリストの一覧の一番下、三人目にAsunaの文字が追加された。

「じゃ、じゃあこれからよろしくな、アスナ」

「うん。よろしくね、キリト君」

視線が合う。フレンド登録をただけなのに、なぜか気恥ずかしくなったキリトは、頭を掻きながら視線を逸らした。横目でアスナを窺うと、どうやらあちらも同じ思いのようで、明後日の方向を向いている。

そして、アスナのその姿を見たキリトはくっくつと笑いだした。アスナも同様にくすくすと笑っている。

「ごめんなさい。何かキリト君の反応が面白くて……改めてよろしくね、キリト君」

「なんか気恥ずかしくなっちゃってな。……こちらこそ、よろしくアスナ」

キリトは右手を差し出し、アスナもそれに応じる。

パーティーを組んでからハイタッチすることはあれど、握手をしたのは初めてかもしれない。

「じゃあ、話も一区切りついたし、そろそろ休みましょうか。わたし、こっちのベット使わせてもらおうから」

アスナはそう言うと、部屋の東側のベットに腰掛け、装備を外していく。ケープ、グローブ、ブーツと外し終わった彼女は、両足に何も身に着けてない状態になっており、赤いスカートからすらつと伸びた白い足は思春期真っ盛りのキリトの眼には極めて毒だった。

アスナから視線を外したキリトも、アスナ同様に西側のベットに腰掛けて装備を外していく。腰を落ち着けると、やはり多少は疲れがあったのだろう、急に眠気がやってきた。朝は早かったし、ダンジョンボスと戦ったのだ、精神的に疲れていてもおかしくはないだろう。「あ、国境線はベットの間だからね。領土侵犯したら大変なことになるから注意してね」

「了解。ちなみに、大変なことってなんででしょうか」

キリトの問いに、アスナは無言で窓の方に視線を向けた。

——なるほど、よく理解できました。

絶対に領土侵犯を犯さないことを誓い、キリトはベットに体を横たえる。そして、そのまますぐにやってきた眠気に逆らわず、意識を手

放
し
た。
。

第十七話

休憩を終え、ポーションと食糧の補充を終えたキリトとアスナは、主街区で受けることができるクエストをことごとく受注し、その消化と共に主街区周辺での狩りを行っていた。

キリトのレベルは15、アスナは13であり、共にこの層の適正レベルを超えてはいるものの、クエストの経験値やコルを加味すれば十分な旨みがある。クエストの消化だけでもレベリングは可能であるが、やはり戦闘が重視されるこのゲームでは狩りの重要性は極めて高い。

同じレベルでも、クエストをメインにあげたレベルと狩りをメインに上げたレベルでは実戦経験に大きく差が出る。最前線に立つ二人にとって、実戦経験を積むためにも狩り重視のレベリングになるのは必然であった。

実戦経験——プレイヤースキルとも呼ばれるそれは多くのオンラインゲームで重要なものであるが、このソードアート・オンラインという自らの身体を動かすゲームにおいては、プレイヤースキルの有無が生死に直結する。危険を感じるとる感性、咄嗟の判断力などはどうしても実戦においてしか鍛えることができないのだから。

受注したクエストは七つ。その全てを四時間ほどかけて達成した二人は主街区で報告を行う。モンスター討伐の経験値とクエストの報酬によって、キリトはレベル16に、アスナはなんと15と二つレベルを上げることができた。

その後、会議の時間まで酒場で軽い祝杯を上げたのち、二人は会議場所である主街区広場に向かう。時刻は午後十七時十分前。すでに多くの見知ったプレイヤーが集まっており、知り合いの一通り声をかけた二人は、定位置である会議場の端にそろって腰掛けた。

壇上にはいつもの二人が上がっており、会議の開始と共にギルドの正式結成の報告、メンバーの紹介、加入条件の発表などが行われた。そして、発行されたアルゴの情報本を元に次の街へは明日の夕方までに、この階層を六日後の十二月二十一日までに突破するという目標が

掲げられた。

迷宮区への道もまだ開拓できていないのに随分と立派な目標を掲げたものだと思っただが、第二層を十日で突破したのだ。第三層もペー
ス良く突破して、勢いをつけたいということなのだろう。ギルドに入
っていない者たちにも目標と期限を提示し、それに合わせるように
動けと言ったところだろうか。

「攻略自体の具体的な内容は無しか……狩りでもしてた方が有意義
だったかしら」

「まあ、想定範囲だったってことで」

正直に言えば、日程に関しては後々アルゴから聞くだけでもいい。
だが、攻略会議に参加することで自分たちはボス戦に参加しますよと
言う意思表示にもなる。無意味ということはないだろう。

リーダーのリンドが会議の終了を告げると、広場に喧騒が戻る。

そしてキリト達も広場から出るためと立ち上がりうとしたとき、前
からかけられた声に足を止めた。

「キリトさん、アスナさん、少しいいだろうか。話したいことがあるん
だが」

声をかけてきたのはリンド、その横にはキバオウが立っている。D
KBとALSのリーダー直々の声かけとは珍しい。

「ああ、大丈夫だけど……アスナもいいか？」

左側にいたアスナが頷く。それを確認したリンドが、言葉を続け
た。

「実はギルドに関しての話があるんだ。その……君たち二人はDKB
かALS、どちらかのギルドに加入するつもりはあるだろうか？」

リンドの言葉に、キリトはなぜこの場が持たれたかを理解した。

キリトの予想通り、どうやら勢力争いのようなものが起きているの
だろう。そして、それをこの二人は良く思っていないということだ。

「あー、なるほど。俺は一応、当分はギルドに加入する予定はないけど
……」

「……わたしも。彼とコンビを組んでいるから、ギルドに入る予定は
ないわね」

キリトとアスナの言葉に、リンドが安堵の溜息をつく。その横でキバオウがやれやれといった顔をしているのを見て、どうやらその亀裂は結構深いものなのだろうとキリトは想像した。

「……やっぱり、あんま仲良くないのか？ DKBとALS」

「気づいとったんか、キリトはん。……あんたの言う通りや。バラバラになるのを防ぐために二つに分けたつもりが、逆に溝を深くしてもうた。全く、面倒なことや」

「どちらが攻略隊を引っ張っていかで結構ね……。適度な競争ならいいんだが、足の引っ張り合いになったら目も当てられない。まあ、君たちにした質問もそれが理由なんだが……」

リンドがそこで一旦言葉を切り、済まなそうな表情で続ける。

「君たちがギルドに加入する場合、二人を別々に……。一人をALS、もう一人をDKBにというのがお願いするつもりだったんだ。君たち二人の実力は攻略隊内でも突出しているし、二人とも同じギルドに入ってしまうと勢力の均衡が崩れかねない」

「コンビだからなあ。このゲームは少人数の方がどうしても経験値効率は良くなるし……。まあ、安心してくれ。ギルドってのはあんまり得意じゃなくてさ、当分入るつもりはないよ」

キリトの言葉を聞いて、リンドはキバオウに視線をやり、キバオウが頷いたのを見てから自身も頷いた。

「わかった。これからも迷惑をかけると思うが、よろしく頼むよ。もし君たちがギルドを作ることがあれば言ってくれ、その時は力になるう。第三勢力ができるのは、現状では望ましいからな」

ではこれで、とリンドが軽く頭を下げ、キバオウと共に各々のギルドメンバーの元に戻っていった。

「随分と丁寧だったわね、あの二人」

「そうだな。まあ、向こうがああいう態度で接してくれるなら、こつちだって協力はやぶさかじやないさ。攻略組の分裂だけは、絶対に避けなきゃならないしな」

「うん。現段階で、攻略組の主流は彼らだもの。彼ら抜きでのボス攻略は現実的でない以上、ある程度は気を使う必要はあるでしょうね」

DKBとALS二つのギルドで、合計三十六名をボス攻略に投入する。ブレイブスが第二層で脱落した以上、それ以外のプレイヤーはキリトとアスナ、そしてエギル達の六名しかいない。現段階でのボス攻略は完全に二大ギルドに依存しているのが実情だ。

フィールドボスや迷宮区の攻略は彼らがメインになって行う。ならば、その脇道となるストーリークエストのような大規模なクエストは間違いなく手薄になる。キリトがエルフクエを優先して進めている理由は、大ギルドと狩場やクエスト攻略でバツティングしないというのが理由の一つだった。

攻略会議が終わり補給やクエスト消化も済んでいる以上、もはや主街区に用はない。

キリトはアスナを伴い広場を後にした。目標はダークエルフ野营地。攻略隊が動き出したならば、キリト達も急がねばならないのだ。第三層に存在するストーリークエスト全十章の内、まだ第二章までしか攻略していないのだから。

野营地でキズメルを再びパーティーに迎えたキリト達は、死んだ偵察兵への供物を集める第三章<<手向けの花>>、偵察兵の救助を行う第四章<<緊急指令>>、救助した偽物の偵察兵を排除する第五章<<消えた兵士>>の攻略を行い、同時進行で主街区の残りのクエストを終わらせるべく森でモンスターを狩り続ける等、非常に慌ただしい日々を送っていた。

そのおかげでキリトは17、アスナは16とレベルがすっかり上がったが、この第三層ではこれが限界だ。特にキリトに至っては、フィールドのモンスターを相手にすると適正レベルで倒した時に得る経験値の半分程度しか得ることが出来なくなっている。クエストを絡めない限りレベルアップは難しいだろう。

そうして戦い面をしつかりと充実させたキリトとアスナは、本日用われたフィールドボス攻略戦を危なげなく終え、野营地で一時の休息を取っていた。

アスナの精神攻撃をしつかりと耐え抜き、食事をとった二人は身体

を休めるためキズメルの天幕に足を向けた。どうやらキズメル自身は何かしかの用で留守にしているようだが、事前に留守の時でも使つてよいと許可をもらつていたため、部屋着に着替えた二人は遠慮なく毛皮の上に腰を下ろした。

第六章の〈〈潜入〉〉はその名の通り潜入クエストだ。ベータテストでは〈〈隠蔽〉〉スキルを持ったプレイヤーが一人で森エルフのキャンプに潜入し、クリア条件の〈〈命令書〉〉を奪取すると言うのが基本の攻略法だ。だから日が落ちるまで一時休憩して、その頃には戻ってくるであろうキズメルと合流してからクエストを進行させる旨をアスナに伝える。

「一人で潜入つて、流石に危険すぎない？ テストとは違うんだし、一緒に رفتった方が……」

「うーん、確かにその危険はあるんだが……。アスナは〈〈隠蔽〉〉持つてないだろ？ そうなると、逆に見つかる危険上がりそうだしなあ」

「……そうよね。ごめんなさい」

申し訳なさそうに謝るアスナに、気にしないでくれと告げる。

キリトはソロで動くことを前提としているスキル編成のため、こういった潜入ミッションが苦手ではないのだ。一方アスナは一般的な戦闘職のスキル構成だ。〈〈片手用細剣〉〉、〈〈体術〉〉、そして恐らく〈〈疾走〉〉。高速戦闘を旨とするアスナにとっては何れも相性のいいスキルだろう。これで〈〈軽業〉〉を取ってしまえば、攻撃面では万全な動きができるはずだ。

しかし、隣に腰掛けている細剣フエンサー使いの少女は、暇な時間を見つけては糸と針を取り出してチクチクと布を縫っている。何処からどう見ても生産スキルの〈〈裁縫〉〉であり、戦闘職の彼女に必要なものとは思えなかった。他人のスキルへの口出しはタブーだが、何故彼女が〈〈裁縫〉〉を取ったのか正直気になる

今も会話が少し止まったため、第二層で確保した牛の皮を加工している。作っている物は恐らくグローブか何かであろうか。目は真剣だが、楽しそうに手を動かしているアスナを見て、キリトは疑問に

思ったことを口に出してみた。

「なあアスナ。楽しそうにしてるけど、なんでまた<<裁縫>>なんだ？」

キリトの言葉に手を止めたアスナは、顎に指を当てしばし考えてから答えた。

「第二層って布系の素材がいっぱい取れたじゃない？ だから、なんとなく……かな？ 意外と楽しいし、普段着る服程度なら熟練度低くても作れたし、やっぱり服はいろいろと持っておきたいから」

アスナの言葉になるほど、キリトは頷いた。

キリトの普段着など一着しかないし、下着も balan 將軍のラストアタックボーナスで獲得したトランクスト、別に二枚程度しかもっていない。しかし、やはり女性プレイヤーは着る物に気を使うのだろう。素材を狩りで得ることができるのならば、自分で作ったほうが安上がりだし、好きなものを作れていいのかもしれない。

今度自分の着る物も作ってもらおうかとキリトは考えたが、その考えはアスナの次の言葉にバツサリと切られた。

「あ、そうだキリト君。相談があるんだけど、<<裁縫>>の代わりに何かスキル取るとしたら何がいいかな？」

「え？ <<裁縫>>切るの？」

「ううん。実はね、こんなものがあるの」

アスナはそう言って、アイテムストレージから小さい小瓶を取り出した。

<<カレス・オーの水晶瓶>>と名付けられたその瓶には少しだけ液体が入っており、「説明文読んでみて」とのアスナの言葉に瓶をタップし、説明ウインドウを表示させる。

そこには、<<この瓶には、スキルスロットに設定中の各種スキルの熟練度を保存することができます>>と書かれていた。

「はっ。」

キリトは絶句した。

レアアイテムなんてレベルのものではない。このゲームの根幹を崩しかねないアイテムだ。

現在のキリトとアスナのスキルスロットは四つ。つまり、スキルを同時に四つまでしか育成することができないのだ。スキルスロットはレベル20になれば一つ増え、あとは10上がるごとに一個ずつ増えていく。しかし、このアイテムがあれば常に設定しておくことができないうことにはあれど、育成するスキルを実質一つ増やせるとい

キリトの驚きの顔が余程面白かったのか、アスナはくすくすと笑っている。

彼女曰く、気づいたらストレージの中にあつた。場所からして、キズメルと倒した森エルフからのドロップだろうとのことだ。

「とりあえず今は<<索敵>>を入れてるんだけど、なんか上がりにくいよね。それに効果もいまいち実感できないし……。だから、何がいいか聞いてみようと思って」

なるほどと、キリトは腕を組んだ。

確かに今の状況では、アスナの<<索敵>>は上がりくいだろう。すぐ側にそれ以上に高い<<索敵>>を持つキリトがいるのだから。将来的に取っても良いスキルだが、優先度はそこまで高くないのは間違いない。

ならばと、キリトはいくつかの選択肢を口にする。

「<<疾走>>は恐らく取ってるだろうから、攻撃面なら<<軽業>>、防御面なら防具系のスキルかなあ。<<武器防御>>や<<戦闘時回復>>も優先度は高め。あとは、それこそさつき話題になった<<隠蔽>>も選択肢に入ってくるだろうな」

「……結構多いのね、おすすめのス��。あと良く分かったわね、<<疾走>>取ってるって」

「まあベータの経験でな。今挙げた中でもお勧めなのは、防具系と<<武器防御>>。どちらも即座に効果が出るからね。他のやつはどうしても効果を実感するまでに時間がかかるし。育成のために早めに取っておきたいけど、やっぱ序盤は効果優先になるかなあ」

「うーん、なるほどなあ……」

悩ましいのか、アスナがキリトと同じように腕を組み、左手を顎に

当てて考え込んでいる。

必然、アスナのとある部分が強調されるためキリトはそこに視線を奪われることになったが、アスナは目を閉じて考えているため気づかれることはなかった。

「ねえ、キリト君は次何を取るの?」

「俺? 俺は<<武器防御>>かな。防具はこのまま皮装備で行く予定だから、その次は<<戦闘時回復>>、<<疾走>>と続けようとは思ってる」

「そうよね、正直防御系欲しいわよね……。あまり重い防具は装備したくないけど、布装備なんて紙みたいなものだし……」

「<<軽金属装備>>取って胴体とか靴だけ装備するってのも悪くないかもな。やっぱ、ある程度防御力あると戦闘安定するしなあ」

「そうね……<<軽金属装備>>取ろうかしら。正直防御低すぎて不安だったってのはあるから……」

アスナの気持ちは痛いほど理解できる。

キリトもアスナも敵の攻撃を回避しながら戦うスタイルだ。しかし、どうしても回避できない状況に陥る可能性もあるのだ。少なくとも、敵の強撃で一時行動不能^{スタ}まではもっていかれない程度の防御力は確保しておきたい。

「じゃあ、お勧めは<<ブレストプレート>>だな。重すぎず、軟^{やわ}すぎず、第一層からの売ってる防具だけど、この階層なら鉄板の装備に間違いない。もし靴とか腕とかも装備するなら……確か、第四層にそこそこのいい装備がNPC売りされてたはずだよ」

「じゃあそれまではドロップの皮装備だね……。ありがとうキリト君、相談に乗ってくれて」

「いやいや、お役に立てたなら何よりさ」

持っている知識も役に立てなければ宝の持ち腐れだ。特にスキルの話などは会話に上る機会がほとんど無い。ベータテスターによる情報提供はされているものの、スキル構成が生死に関わる情報である以上、どうしても無駄になってしまいがちだ。ならば、せっかく聞いてきてくれたのだから遠慮なく知識を使わせてもらうのが一番だろ

う。

そして、知識と言う面でこの件に関しては重要なことが一つある。

「アスナ。その水晶瓶だけど、俺以外に誰かに話した？」

アスナが首を横に振る。それを見て、よかったとキリトは一息吐いた。

「アスナ、その水晶瓶はあまりにも強力過ぎる。極めて有用な情報だし、隠し続ける必要はない。けど情報を流せばその発信元が君ということに気付く人間が出てくるかもしれないし、トラブルの原因にもなりかねない。だから、君の安全を考えてアルゴに伝えるのは少し待った方がいいと思う」

「……わたしの安全のため？」

キリトは頷く。

この世界には、プレイヤーが持つているアイテムを無理矢理奪い取る<<手段>>がある。対人戦の練習を積んでいない今、彼女をそのような事態に巻き込むことは極力避けねばならないだろう。

アスナはじつとこちらを見ている。そして、しばらくして視線を逸らし、口元を動かしした。

「君が言うなら、そうするわ」

納得してもらえたことに、キリトは安堵する。

しかし、アスナは何故か俯いており、その表情を窺うことはできなかった。

「……ごめんなさい。君に頼ってばかりね、わたし」

アスナはその体勢のまま、謝罪を口にする。

相変わらずその表情を窺うことはできないが、少なくとも笑顔ではないのだろう。どのような意図で彼女がこの謝罪を口にしたのかはわからないが、少なくとも謝罪を受ける謂れいわをキリトは持っていなかった。

「君が謝るようなことはなかったと思うんだけど……」

キリトの言葉に、アスナは首を振った。

「ううん。キリト君にいろんなことを教えてもらってるけど、わたしが代わりに何かを教えられたことなんてないもの。ホント、頼って

ばっかり」

ベータテスターとしての知識を持つている以上、ビギナーである彼女より知識量が上なのは事実だ。教えるという点では、キリトがアスナに教えるというのが基本になるだろう。その逆というのは、現状よほどのことがない限りないだろうし、またキリトもそれを求めている。

「うーん。むしろ知識があるからこそその落とし穴つてあるからさ、そういう点に気付いてもらえてるから、逆に助かってるんだけど……」
「そう……なのかな？」

キリトは頷く。

知らないからこそ、客観的に見ることができるのだ。思い込みによつて起きた事故で死んだベータテスターは多い。当然キリトにとつても、そういうった事故は今後起こり得ることだ。だからこそ、キリトの横にいてくれる彼女の存在は貴重だった。

「少なくとも俺は、アスナが謝る程頼りっぱなしになっているとは思えない。むしろ、こつちが頼りすぎてるんじゃないかって思うくらいだ。それに、その、結構理想的なんだ、今の状況って」

「理想的？」

「ああ。すごく効率的って言えばいいのかな。クエストも狩りもソロじゃ比べ物にならないペースで消化できてるし、戦闘も安定してる。それは君がいるからで、俺一人じゃもつと大変だったと思う。だから、謝らないでほしい。むしろ、感謝しなさいぐらい言ってもいいと思うよ」

コンビで狩りを行えば、簡単に考えて経験値やコルは二分される。しかし、アスナと狩りは間違いなく、キリトがソロで狩る時の二倍以上の効率があった。今のキリトにとつて、戦闘やレベリングと言う面において彼女とのコンビを解散してソロで動くメリットは皆無だ。キリトはアスナと組むことで、間違いなく大きなメリットを得ている。だからこそ、彼女に謝ってほしくはなかった。

「そっか……。ごめんさい、君の足を引っ張ってるんじゃないかって、ちよつと不安になつてたの。ありがとね、話聞いてくれて」

「気にしなくていいよ。俺だって不安になることがある。でも、隣に誰かいればその不安を話すこともできるからさ」

「そうだね。やっぱり、聞いてもらえると楽になるもんね」

この世界で気軽に話すことができる相手というのは得難い。信頼できる相手ならばなおさらだ。

こちらを向いたアスナの表情に硬さはない。

「じゃあ、今度キリト君が不安になったら、わたしに話してね？」

「ああ、その時は遠慮なく話させてもらおうさ。……頼りにしてるよ、アスナ」

「うん」

右こぶしをコツンと合わせる。

同時に、アスナに笑顔が戻る。キリトも自分が笑顔になってることを自覚した。

常にこうして笑い合えるわけではない。不安になることもあるだろうし、動揺するときだってあるだろう。しかし、彼女が隣にいればきつとまた笑うことができるはずだと、キリトは感じていた。

第十八話

潜入任務を単独で行おうと考えていたキリトであったが、野営地を出てすぐに届いたアルゴからのメッセージによって、その方針の変更を余儀なくされていた。

DKBとALS共にエルフクエを一気に進めている。双方のギルドにベータテスターらしきプレイヤーが加入し、クエストの情報を提供している。そして、エルフクエを利用しギルド間の対立を煽っている可能性がある。

双方共に本日第六章の攻略を行う予定で、今夜二つのギルドが森の中でぶつかり合う可能性が高かった。

ギルド間の争い、つまりプレイヤー同士の争いだ。

対人戦闘が起こる可能性が低いと判断したキリトは、アスナとキズメル、そして緊急で参加したアルゴと共にクエストの目的地である森エルフのキャンプまで足を運んでいた。

キリトが先行し、何事もなければキャンプの裏にある潜入ポイントからそのままキャンプに潜入する。その場合、残る三名はキャンプの外で待機する。

しかし、キリトの潜入前に何かしらの妨害があった場合、キリトがそれに対処し残る三名がキャンプに突入、可能ならこっそり、不可能なら潜入ポイントからの奇襲によって力づくでの指令書奪取を行う。

そして、妨害に対してキリト一人では対処できないと判断した場合は、全員で妨害に対応した後、正面突破による指令書奪取を試みる。

以上がキリトが考えた対処案だった。

この案にアルゴとキズメルは無言で頷いたが、ただ一人、 positioning にいたアスナだけが心配そうな視線をキリトに向けていた。キリト自身の役割はハッキリ言って困だ。危険度が一番高いのは間違いない。しかし、それでもアスナが視線を向けるだけで何も言わないのは、それが最適だと理解しているからだろう。

もし妨害があつた場合、それはプレイヤーによるものである可能性が高い。つまり、対人戦闘になりえるということだ。である以上、役割を担えるのはキリトしかない。

それに、今回はアスナ自身も対人戦に巻き込まれる可能性がある。その可能性を潰すことができない以上、万全を期すためにキズメルと、わざわざアルゴまで呼び出してアスナに付けたのだ。

それをしっかりと理解しているのか、アルゴも何の文句も言わずにキリトに合流した。「キー坊はアーちゃんに甘々だねえ」と合流早々に言われ、それを聞いたキズメルにもニヤニヤと笑われることになるが、下手に返せば藪蛇になるとわかつていたキリトはぐつと黙って歩き続けた。

やはりと言うべきか、キャンプへの潜入口の手前でキリトとはある人物と遭遇した。

森エルフのキャンプ——もはや砦と言つていい大きさではあるが——を取り囲む木造の壁に沿って流れる川。その河原を歩いていたキリトは、嫌な気配を感じ河原に沿って配置されている茂みのある一点を見つめる。そして、勘が当たったのか茂みに隠蔽ハイディングしていたプレイヤーを看破リベールすることに成功した。

不意打ちを受けることこそなかったものの、対人戦闘が避けられな

いと確信したキリトは右手を剣の柄に掛けつつ、茂みを注視する。「いやー、この距離で看破リベールされるとは思いませんでしたよー。流石攻略組最強と呼ばれるだけではありませんね、キリトさん」

鎖頭巾コイフと鱗片鎧スケイルアーマーを身に着けたMorteモルテという名の片手剣使いは、飄々とした口調でキリトに話しかけてくる。その口調に少年のよ

うな無邪気さと共に、わざとらしさを感じキリトは顔をしかめた。「あんだ、DKBの<<モルテ>>だよな。待ち伏せとはご苦労なことだ。……リンダの指示か？」

「情報早いですねえ、さすがキリトさん。今回の独断ですよお！<<ビーター>>じゃないと、このクエストの抜け道なんてわかりませんからねえ」

「つてことは、アンタもベータテスターつてことか」

モルテがベータテスターであると認めた。アルゴの情報はいいよ、信憑性を増していく。ならば、無用な駆け引きは不要とキリトは本題を口にした。

「無駄な駆け引きはやめよう。あんたは、クエストの攻略を進める俺を止める気があるのか、ないのか、どっちだ？」

「せっかちですねえ。止める気がないとこんなところに隠蔽ハイディングしてませんよお」

「そりやそうだ。だが、アンタを無視して進むこともできるわけだが、その時はどうするんだ？」

「そうなたら仕方ありませんねえ。自分、歌が結構得意なんですよお。ここで一曲披露しちゃう？　みたいなの？」

「……M P Kを仕掛けるつもりなのか」

このモルテというプレイヤーは、PKに対しての忌避感がまったくない。ここで背後関係を確認しておかないと、間違いなく攻略組の害になるだろう。

こいつは危険だ。キリトは柄を握る右手に力を込めた。

「やだなあ、落ち着いてくださいよお。自分をお願いしたいのは、クエストの進行を一日だけ遅らせてほしいだけなんですよお。でもでもお、キリトさんは素直にお願い聞いてくれないうすよねえ。ですからあ……」

モルテが左腰に差された剣を抜く。黒く光る剣身。それは間違いない、キリトが先日まで使っていた<<アニールブレード>>だ。

「ベータ時代と同じく<<決闘>>で決めましょうかあ。と言ってもお、ベータ時代の<<完全決着モード>>は使えませんか、<<半減決着モード>>ですけどねえ」

ウインドウがポップアップし、そこには<<Morteから決闘が申し込まれました>>と書かれている。それを見たキリトは、やれやれといった体でモルテに条件を伝えた。

「いいだろう。俺が勝ったらアンタが帰る。アンタが勝ったら俺が帰る。これでいいんだな？」

モルテが頷くのを見て、キリトは<<半減決着モード>>を選択しYESを押す。それと同時に決闘までのカウントダウンが始まり、数字が減っていく。

「ここで大きい音を出すとアンタも都合が悪いだろう？ カウントはまだある、場所を変えよう」

この場で大きい音を立てては、例えモルテに勝ったとしても意味がない。それに、砦の中から森エルフたちが出てくる可能性もある。

そして何より、予定通り潜入するアスナ達に気付かれるわけにはいかない。

キリトは川の上流に向かって歩き出す。これから命のやり取りをする相手に対し躊躇わずに背中を見せることで、注意をこちらに引きつける。間違っても周囲の索敵などをされてはいけないのだ。

「……余裕ですねえ、キリトさん。これから戦うつのに、さすが攻略組最強は違いますねえ」

後ろから聞こえた声は、先ほどと同じように飄々とした声であるが僅かに苛立ちを含んでいるように感じた。どうやら誘導は成功しているらしい。

——こっちは大丈夫だ。……アスナ、気をつけるよ。

キリトは心の中でアスナの無事を祈りつつ、前を見たままキリトは歩き続けた。

DKBの六名、ALSの十二名、合計十八名のプレイヤーが森エルフのキャンプが消え去ったことに啞然としているのを見下ろしながら、アスナは一言、冷たい口調で言い放った。

「悪いけど、このクエストはわたしたちがクリアしましたから、他を当たってくださいる？」

潜入ポイントに潜伏していたモルテをキリトが予定通り釣り出した後、アスナはアルゴ、キズメルと共に森エルフのキャンプに無事潜入することができた。突入直前に、キズメルが腰の曲刀を抜き放ち「吶喊を開始する」等と言い出したので、アルゴと二人で盛大に焦りはしたものの、すぐに冗談だと返され、二人で抗議する間もなくキズメ

ルが潜入ポイントである木の枝から飛び降りた。

アルゴ、アスナもすぐに続き、見回りの衛兵を回避しつつすでに就寝中の司令官の天幕に侵入、目的の<<指令書>>を奪取した。心配されていた戦闘など起こる気配もなく、三人は無事に脱出。直後にキャンプが緑の光となって消えていき、その直後丘の下で消えたキャンプを見上げている二大ギルドのメンバーを見つけたのだ。アスナはキズメルに少し下がっているように頼み、アルゴと共に丘の上に立った。

アルゴの事前情報通り、二つのギルドは今日この場で衝突するように仕向けられていたらしい。しかもご丁寧に片方が一パーティー、もう片方が二パーティー。もしこの場で戦端が開かれてしまえば、どうあがいてもALSが勝つような状況を設定している。

なぜALS側が勝つように仕向けられていたのかはわからない。だが、手を出しやすくするためという意味もあるのだろう。

ここまで用意周到とは思わなかったと、アスナは溜息を一つついた。

「アスナはん、それに<<鼠>>もか。……あんたらも、DKBと同じくこのクエストの報酬がボス攻略に必須って聞いて、急いで進めとつたんか」

「……えっ、そうなの?」

「……あん? 知らんかったんか?」

キバオウの言葉にアスナは首をかしげ、そのアスナの返答にキバオウも首をかしげた。

アスナは横に立っていたアルゴを見る。すると、それに応えるようにアルゴはこちらを向いて首を振った。どうやらアルゴもその情報は知らないらしい。

「少なくともわたしは、キリト君からは何も聞いてないわね。そんな重要な情報なら隠すことはないと思うのだけど……」

「オレっちもその情報は知らないナ。少なくともベータの時点では、そんな情報が出たって聞いたことはないゾ」

「横から口を挟むようだが、先ほども言った通りDKBのメンバーも

誰一人その情報を知らなかった。一体どこからそんな情報が出たん
だ？」

アスナ達が話しかける前に言い争いでもしていたのだろうか、どう
やらその時に話題が出たのだろう。アスナとアルゴに続いてリンド
も情報を知らないと表明した。

「……一体どういうことなんや。アンタらは口を揃えて情報を知らん
て言う。正直な話、リンドはんだけだったらこっちを騙しにかかっ
るかと思うたが」

「騙してなどいない。本当に知らなかったんだ。俺たちはこのクエス
トは実入りがいいと聞いたから、一パーティーで進めていたんだ。も
う一度聞く。キバオウさん、クエスト報酬がボス攻略に必須だなんて
誰から聞いたんだ？」

リンドがキバオウに比較的強い態度で問いかける。彼らの話を聞
くに、騙した騙してないという無益な問答があったのだろう。一方的
に詰め寄られ、圧力を感じていたのは間違いないDKBの方だ。だか
らこそ、これだけ強く出ているのかもしれない。

「……それは言えん」

「それは通用しないぞ。せめて誰がこんな情報をばらまいたのか確認
できないことには……」

キバオウの言葉に、リンドがさらに詰め寄る。それにDKBのメン
バーが乗っかる形でALSを非難したことで、ALS側からも反論が
飛ぶ。両陣営の面々の視線が段々と強いものになってきているのを
見て、アスナはどう対応するか悩んだ。ALSからすればアスナはD
KBの肩を持つていると見られている。かと言って、この状況でAL
Sに加担する正当な理由を持っていなかった。

アスナの躊躇いをよそに、ギルド間の言い争いは激しさを増してい
く。横にいるアルゴも自分が口を出すのはまずいと感じているのだ
ろう。沈黙を貫いているが、その表情に焦りを見て取れる。

両陣営間のボルテージが増していき、このままでは両陣営間で戦い
が起きかねない程に熱を帯びていた。しかし、一人のプレイヤーの登
場でその言い争いはピタリと止まることになる。

「よう、こんなところで騒いで何やってんの」

集団の更に奥、丘の下から現れたのは自らの相棒。黒づくめのキリトが体力ゲージを少々減らした状態で立っていた。

どうやら間に合ったようだ、キリトは心の中で一息吐いた。

キリトの視線の先では、二大ギルドに所属する計十八名のプレイヤーが固まっております、その先にアスナとアルゴの姿があった。

「姿が見えんと思つたら、別行動しとつたんか。……HPが減ってるみたいやが、ジブン何しとつたんや」

「ちよつとすぐそこで決闘しててね。そいつの名前が、アンタたちの疑問を解決すると思うぜ」

「はあ？ 急に出てきて何言つてんのや！ しかも決闘デュエルやと？ あんた、圏外で対人戦やつとつたちゆうことやないか！」

キリトの飄々とした態度に苛立ったのか、キバオウの口調は激しい。

しかし、それを気にすることなくキリトは言葉を続けた。

「モルテ……そいつが、俺が戦つてた相手の名前だよ」

「なんやと……!?!」

「ばかな……!」

キバオウとリンドは同時に驚愕した。さらに、二人の周囲に立つギルドの面々もざわついてるのが見て取れた。

「今はDKBだったかな？ そして、その前はALS……まさか片手剣と片手斧両方を使いこなすとは思わなくてね、ちよつと……いや、かなり危なかったよ。尤も、二つの武器を使いこなしたからこそ、疑われずに二つのギルドに入り込むことができたんだろうけど」

そこで言葉を止め歩き出したキリトは、DKBとALSのちよつと真ん中、それぞれの先頭に立っていたリンドとキバオウの間に立つと、話を続けた。

「あんた達はここに誘い出されたってことだ。今日、ここでぶつかり合うように仕向けられた上でな。結局モルテ氏は何も言わずに逃げたから何故そんなことをしたかはわからず仕舞いだけど、そう

「いう動きがあつたつてことだけは事実だし、ここで無理に争う必要はないんじゃないかな？」

キリトの言葉を聞き、両陣営は静まり返った。モルテという人物の存在、そして誘い出されたという可能性、この二つの否定することのできない話が両陣営の動きを止めていた。しかし、ALSのとある人物によってその沈黙は破られた。

「嘘言つてんじゃないやねえ！ こいつフカシてんですよキバオウさん！ そのモルテつてやつとホントに戦ったかわからないじゃねえか！

俺たちをここで帰らせて、自分だけクエスト攻略するつもりなんだ！

<<<ビーター>>なんて信じられるかよ！」

「黙つとれや、ジヨー」

第一層、そして第二層のボス攻略後に聞いたキンキン声を、キバオウが黙らせた。しかし、両陣営のメンバーはその発言でざわつき始めており、聞こえる限りではキリトの懐疑的な声の方が多いように思えた。

「キリトさん、争う必要はないと言ったな？ それはつまり、DKBとALS双方、もしくは片方にクエストの進行を中止しろということか？」

リンドの質問に、キリトは首を振って否定した。

「いや、そういう訳じゃないよ。この場は引いてもらうためにこのキャンプは俺たちがもらったけど、また別の場所にキャンプがpopするだろうし、そつちでクリアすればいいんじゃないか？ じゃんけんか何かで先にやる方決めて、残りは主街区のクエストなり迷宮区のマッピングなりすれば時間の無駄にもならないだろうし」

キリトの言葉に、リンドは意外そうな顔をした。視線をキバオウに移すと、こちらにもリンドと同じような顔をしている。各ギルドメンバーもぽかんとした表情だ。別におかしいことを言つたつもりはないのだがと、キリトは首をかしげた。

キャンプ地の再出現には大して時間がかからないし、狩りをしてればあつという間に過ぎる程度の時間なのだから。しかし、キリトの話で何故か毒気を抜かれたらしく、キバオウが覇気のない声でキリトに

問いかけた。

「なあ、キリトはん。あんた、このエルフクエの報酬がボス攻略に必須って話聞いたことあるか？」

「え、そうなの？」

キバオウの言葉にキリトは心当たりがなく、丘の上にいるアルゴに視線を向ける。するとアルゴは首を横に振っている。どうやら彼女も知らないらしい。

「俺は知らないし、アルゴも知らないみたいだけど……なるほど、そんな話があつたから急いでクエスト進めてたのか」

「あー、うん、もうええわ。リンドはん、ちよつとええか」

「ああ……」

キバオウは頭を掻きながら、リンドは溜息をつきながら近寄っていく。どうやら二人で話し合うらしい。

ならばこの間にと、キリトはアスナ達と合流するために丘を登っていく。どうやら向こうも同じことを考えたようで、丘の中腹の少し上くらいで三人は合流した。

「キズメルは？」

「何かあつたときの隠し札として丘の上に隠れてもらってたんだけど、君のおかげでその必要もなくなりそうね」

君のおかげという言葉とは裏腹に、アスナの視線は何故か鋭い。

その理由を聞くべくアルゴに視線を向けるも、「ニヤハハハ……」としか返ってこず、キリトは首をかしげるのだった。

その後すぐに話し合いは合意を見たのかリンドの声が丘下から響き、キリト達は視線を向けた。

「結論から言うと、DKBとALSは双方共にエルフクエストから手を引く。DKBは実入りが良いと聞いてクエストを進めていたが、迷宮区の探索にシフトする。同様に、ALSは報酬がボス攻略に必須ということでクエストを進めていたが、その真偽が怪しくなったためDKB同様に迷宮区の攻略を行うということになった」

「ええ？ それは少しもつたいくないか？」

「その気持ちはある。だが、俺たちはあくまで階層攻略が目的だから

な。迷宮区の攻略の方が重要度は高いと判断した。それに両陣営の対立を煽っている者がいるという可能性も排除できない。今後再びこのような事態が起きないとも限らないしな。しかし、クエスト報酬の効果の検証は必要だ。それをキリトさん達に任せたい」

リンドの提案は、元々エルフクエを攻略しようとしていたキリトにとっては受け入れやすいものだ。キリトはアスナに視線を向け、彼女が頷くのを確認してから答えた。

「俺たちはそれで構わない。元々そのつもりだったしな。……今日は十九日で、ボス攻略は確か二十一日だったな？　なら二十日の夕方までにクエストを消化して結果を報告するよ。それで構わないか？」

「了解した。では二十日の夕方に攻略会議を開くので、そこで報告してもらおうということだ」

今後の方針は固まった。キリトはこれから残り四章を超特急で終わらせる事を強いられたが、目的だった二大ギルドの衝突を防ぐことができたのだ、問題ないとみていいだろう。

DKBとALSの面々が去っていく。それを見て、キリトはようやく緊張を解くことができた。

「派閥争いというのは、どの種族でも厄介なものだな」

いつの間にか近くまで来て居たキズメルにギョツと驚きつつ、その言葉は全くもってその通りだと同意する。

「どうしようもなくなったらキズメルに出てきてもらって、力ずくでもって覚悟してたのに……。キリト君のド正論が完全に毒気を抜いちやっただわね」

「ソロならともかく、パーティーなら正面突破した方が早いしなあ。正直クエスト放棄するのは予想外だったけど……。まあ、結果的に衝突を防ぐことができたから良かったんじゃないか」

「結果が良ければ全てよし、と言うわけでもないがナ。キー坊、モルテとやりあったんだらウ？　どんな印象だった？」

「あー、そうだな……」

キリトはアスナに一瞬視線を向ける。

ここで話すと彼女に無用な心配をかける気がしなくもない。正直

な所、モルテとの戦いはキリトが想像した以上に危険な戦いになった。事が起きる前にアスナは随分と自分を心配してくれていたようだったから、彼女の前で戦闘の状況を詳しく話すべきか少々迷う。

「ああ、メッセージの方が都合がよければそれでも構わないガ」

キリトの逡巡を感じ取ったのかアルゴが別の選択肢を出してくれるが、キリトは一瞬だけ考えてから答えた。

「……いや、言葉じゃないと伝わらないものもあるかな。何と云うか……不気味だったからな、アイツは。野営地に戻りながら話そう、クエストの消化も進めなきゃならないしな」

「剣と斧を同等に使いこなし、さらにキリトと同レベルの使い手とは。器用な者もいるものだな」

近衛騎士キズメルの驚きは尤もだ。剣と斧ではリーチも違えば戦い方も全く異なる。それぞれの熟練度はキリトの片手剣よりは劣るだろうが、両方を実戦で使用できるほどの修練を積んでいるということなのだから、その戦闘経験値は凄まじいものがあるだろう。

「片手剣と盾だけならどうにでもなったんだけどな。剣を弾いて勝負を決めたにいったときに片手斧のソードスキル……確か<<ダブル・クリーブ>>だったかな……それを食らって、一気に五割近くまで削られたよ」

「おい、まさか<<半減決着モード>>で戦ったのか?」

キリトが頷くと、アルゴの表情が強張った。

「キー坊にしては迂闊だったナ。確かにベータでは<<完全決着>>が基本だったから、そうなるのもわからなくもないガ……」

「ああ、迂闊だった。もしその状態でこっちの体力を五割強減らせるソードスキルを食らっていたら……死んでただろうな。しかも、モルテはオレンジにならずに、だ」

「決闘デュエルを使った合法PK……カ」

この世界のプレイヤーに表示されるカーソルは緑色だ。しかし、他のプレイヤーを攻撃した場合そのカーソルの色がオレンジ色に変わ

る。多くのMMORPGで設定されている犯罪者プレイヤーというやつだ。その状態で街に入れば衛兵から追いかけられるし、NPCによつては取引してもらえないこともある。よつて、PKを志向するプレイヤーは自らのカーソルがオレンジにならないようにMPKやそれ以外の合法的な手段を使ってPKを考える。

今回の決闘デュエルによるPKは、まさにその合法的手段と言えた。

「体力が削られて改めてあいつと対峙した時、正直ぞつとしたよ。あいつは完全にこちらを殺す気で戦っていた。目がな……恐ろしく冷たい目をしていたよ、まるで狩人が獲物を見るような、そんな感じの眼をな」

あの時のキリトは、モルテにとって完全に獲物だったに違いない。あと一撃入れれば勝てるのに、キリトは命を懸けることを強いられた。最終的には盾を<<閃打>>で弾き、その隙に攻撃を入れることでキリトが勝利したものの、一步間違えば……体術で盾を弾ききれなければ、キリトはポリゴン片となっていたことは疑いようがない。

「オレたちは主街区に戻るヨ。この情報はすぐにも全体に伝えないと危険デュエルだ。決闘を行う場合は必ず<<初撃決着>>でということを知らないと、下手な犠牲者が出かねない」

「ああ、それは俺からも頼むよ。少なくとも、そういうPKの方法があるということを伝えるだけでも、犠牲者は減らせるはずだ」

「ここからは情報屋の仕事だナ。じゃア、途中で悪いけどここゴブキー坊、アーちゃん、またナ。ダークエルフのお姉さんも、また機会があればよろしくナ」

そう言い残し、アルゴは主街区の方向へと走つていった。敏捷にガン振りしている彼女のことだ、十五分もあれば主街区に着くだろう。

「面白いな、あの者は。人族の密偵なりわいのようなものか？」

「あー、大体そんな感じ。情報の売買なりわいを生業なりわいにしててね、懇意なりわいにしてるんだ」

「なるほどな。しかし、随分と親しいようだったが……あまり感心せんぞ、キリト」

「いやいや、そういうのじゃないから」

キズメルはすぐに「冗談だ」と言ったが、その顔は明らかに面白がっている。どうも彼女にはからかわれることが多いような気がしてならない。困ったもんだとキリトはアスナに視線を向けるが、彼女はフードを被ったまま俯いている。会話にも参加してこなかったし、何か調子でも悪いのだろうか、キリトは声をかけた。

「アスナ、何かあった？」

「あ、ううん、ちよつと考え事してただけ」

「……そうか？ 何か心配あったら言えよ？」

「うん、ありがとう」

アスナが前を進むキズメルの横に並ぶ。

確かに考え込む必要がある類の話であったことは間違いない。何しろPKの話だ。第二層でネズハの処刑云々の話が出てきたときにも、アスナは大きく動揺していた。デスゲームでのPK、つまりは殺人だ。その危険が明確に出てきたのだから、不安の一つも覚えておかしくないだろう。

しかし、そのような話が出てきてもアスナは攻略をやめることはないだろうから、PKに備えて対人戦闘の練習をする必要があるだろう。どこかで時間を作って、一度しっかりと戦い方を教え込む。そして、キリト自身も鍛え直す。殺意を向けられたことは今回が初めてではない。だが、直接の対人戦闘によって命の危機を感じたのは初めてだった。

アスナと共に行動している時にプレイヤーから狙われたら、キリトの死はすなわちアスナの死と同義になる。それだけは絶対に避けない。絶対に彼女を死なせるわけにはいかない。そして、自分も死にたくはない。

攻略隊でもそのうちPKに対する脅威を感じる者たちが出てくるはずだ。ならばその者たちと対人練習の場を作ってみるか、キリトは当てになりそうな面々の名前をリストアップしていった。

とにかく時間がない。

エルフクエ残りの四章を二十一日の十七時、約四十時間でクリアす

ると約束してしまったキリトはひたすらに森の中を駆け回った。

第七章<<蝶採集>>、第八章<<西の霊樹>>、第九章<<追跡>>、第十章<<秘鍵奪還>>。

偵察用の蝶を石で叩き落とし、エルフクエの最重要キーアイテムの<<秘鍵>>を別の層に運ぼうとするも襲撃者に奪われ、その襲撃者を追撃し、襲撃者である<<フォールン・エルフ>>が潜伏している巨大ダンジョンを攻略する

以上の流れを怒涛の勢いで攻略し、何とか二十一日の正午前には全てのクエストを終わらせることができた。

<<秘鍵>>を自ら届けるために第四層へ向かうというキズメルとの別れはあったものの、第四層でまた会おうという約束を交わし、無事に野営地に帰還したキリトとアスナ。

報告を司令官に行い報酬を受け取ると、それまでNPC的な態度を貫いていたダークエルフの司令官が急に人間らしい態度に変わり、「天柱の守護獣は毒を用いる。この野営地で毒消しを十分に用意していくと良い」という情報を提供してくれた。

キリトはアスナと共に野営地で解毒POTを買い込み、この情報を攻略会議で提供。攻略のためのキーアイテムの存在はなく、至極当たり前のアドバイスだったため会議場は一瞬騒然となるも、キバオウの一喝によって静寂が取り戻され、リンドによって解毒POTを補充しておくようにとの指示が出された。

そして翌日、第三層ボス<<ネリウス・ジ・イビルトレント>>は広範囲の毒化スキルを頻繁に発動させたが、事前情報を得ていた攻略組の解毒POTが枯渇することはなく、戦闘時間五十三分、犠牲者なしで撃破された。

第一層、第二層に比べあつけない撃破であったが、攻略が波に乗ってきているとの表れであろう。また、今回は攻略後にケチがつくことはなく、皆歓喜のうちに帰還の途に就いた。

そして、相変わらずラストアタックボーナスをしっかりと確保したキリトは、「同時に攻撃したのになんで君にラストアタックがいくの!？」とご機嫌斜めなアスナに置いて行かれぬよう、第四層への螺旋階

段を慌てて登って行った。

第四層

第十九話

これまでの階層は、ベータテストからの大きな変更は無かった。

クエストの内容、NPCの数、モンスターの行動等、差異はあれど決定的な違いというものは存在せず、キリトの持つベータテストの知識はほとんどの部分で正式サービスでも通用しており、それこそがキリトの効率的な攻略を成り立たせる要因と言えた。

キリトの知る第四層のメインテーマは<<涸れ谷>>であった。

からからに乾いた峡谷が蜘蛛の巣のように走り回り、プレイヤーはその峡谷の底、砂漠のように乾いた砂の大地を歩き回る。主街区も砂漠の中に存在する街のようなもので、あまりに見所が無くクエストを消化して早々に後にしたのを覚えている。

しかし、第四層に繋がる扉を開けたキリトの前には、キリトの知る第四層とは全く異なる光景が広がっていた。

第三層ボス攻略成功の連絡をアルゴに送ったキリトは、改めて周囲を見渡す。三層と四層を繋ぐ階段の出口はちよつとした島のようなものになっており、ベータテストでは何もなかった峡谷には水が満ち溢れ、当然この島の周囲も水に囲まれている。

ベータテスト時代の主街区は峡谷の底を歩いて行った先にあり、もし位置関係が変わっていないのであれば、主街区に行くためにはどうしてもこの水に満ち溢れた峡谷を泳いで行かなければならない。

ソードアートのオンラインにおける水泳は、現実世界の水泳と少々感覚が異なる。

装備が水に濡れば重量を増して動きにくくなるし、身体の使い方がかなり違う。最低でも一時間は練習したいところだし、例え練習したとしても溺れる可能性が無くなるわけでもない。頭まで水に浸かってしまえば体力が減っていき、空っぽになれば当然溺死ということになる。キリトならばともかく、経験が無い人間をここから主街区まで泳がせるのは厳しいものがあるだろう。

「アスナさん、SAOで泳いだ経験は？」

「……ないわ」

何故か左腕で体を隠すような仕草をした細剣使いフエンスサーさんを見つづつ、キリトは目の前の川を見て頭を掻いた。岸边に近寄り滔々とうとうと流れる水を覗き込むと、流れは中々に急で水深は恐らく二メートル程はあるだろう事がわかる。キリトと同じくらいの身長であるアスナでは間違いなく足がつかないし、そもそもこの流れで水泳の練習をするのは不可能だ。

横に立っているアスナもそれがわかったのだろう。水面に写る榛色はしほみいろの瞳には困惑の色が浮かんでいる。

「仕方ないわね。わたしは三層に戻って水泳の練習してくるから、その間にキリト君は主街区に泳いで向かう。泳げるようになったらわたしも転移門で四層に行くわ」

当然のように導き出された答えをアスナが告げる。

確かにそれが一番いいかもしれない。しかし、どうせ二時間後には転移門は有効化されるのだから焦る必要はないというのも事実。それならばと、キリトは心の中に浮かんだあることをアスナに提案する。

「なあ、アスナ。泳ぎの練習手伝おうか？」

「それ、断られるってわかってて言ってるでしょう？」

アスナの即答に、キリトは頷く。彼女はキリトの足を引っ張るつもりはないと常々言っているし、そもそも自分のせいで有効化が遅れることを彼女が是とするわけもなかった。

しかし、今回のキリトはアスナを氣遣って手伝うと言ったわけではない。何故か頭の中で閃いてしまった、とあるイベントを実行するために申し出たのだ。

「いや。女の子の水泳の練習を手伝うって、なんか楽しそうだなーと思ひましてですね」

「き、急に何言い出すのよバカッ！」

当然の如く飛んできた罵倒を受け止め、今度は両腕で身体を隠しているアスナに謝罪しつつ、キリトは周囲に視線を動かす。

今二人が置かれている状況は、<<水泳>>持ち等の実際に泳い
ことがないプレイヤー以外には詰みだ。ここで練習できない以上、戻
るといふ選択肢しか取れない。ならばこれがゲームである以上、泳い
だことがなくても進むことができる何かがあるはずに違いない。

今キリトがいる島は差し渡し三十メートル程で、往還階段のある東
屋以外には広葉樹が生えているだけだ。つまり、あの広葉樹に何かあ
る可能性があるときリトは木の下へと駆け出す。

「ちよ、ちよつときリト君！」

後ろから聞こえる戸惑いの声を気にせず木の真下まで走った後、上
を見上げる。すると直径五十センチはある木の梢付近に、ドーナツ型
の不思議な形をした色とりどりの木の実がなっていることを確認で
きた。

「あら、美味しそうね。食べるなら黄色いのか赤いのがおいしそう」

確かに、食べるなら青や緑よりはアスナの言う色の方がいいだろ
う。しかし、恐らくあれは食べ物ではない。ほぼ間違いない、泳ぎを
補助してくれるアレに違いない。

何とか木の実を落とそうと木を揺すっても、まるで落ちてくる気配
がない。業を煮やしたキリトが木の幹に<<閃打>>を叩き込み、
ダークエルフ陣営なのに木を殴るとは何事かとアスナに怒られたも
の、しつかりと木の実を二個確保する。

ドーナツ型の木の実にはハタがついており、その部分を啜えたキリ
トは思いつきり息を吹き込む。ポーン！ という破裂音と共に一
メートルほどに膨らんだそれをみて、アスナは茫然と、ただ一言だけ
呟いた。

「……浮き輪？」

後続の攻略組に向けてメモを残したキリトは、装備重量を軽くする
ために剣や防具を解除していく。第二層の balan 將軍からドロップ
したトランクス一枚となり、そのお尻の部分に描かれた牛マークを見
て盛大に笑われるというアクシデントはあったものの、アスナが大笑
いする貴重な姿を見れたので不問にする。

「アスナも装備解除した方がいいぞ。浮き輪があるとはいえ、流石にそのままだと危険だと思う」

「うう、わかってる。わかってるんだけど……」

「あー、うん、今回ばかりはちよつとどうしようもないですね……」
うーつ、と唸るアスナには申し訳ないが、装備解除せずに水に入ればまともに動くことができないのは間違いない。男の前で下着姿になるなど年頃の女性にはそりゃあ抵抗があるに違いないだろうが、命には代えられない。水着でも用意しておけば良かったのだろうか、こんな状況になることなど思いつくはずがない。

と、そこで水着という単語にキリトが閃く。

「裁縫持ってるんだから、水着でも作ればいいんじゃないか？」

キリトの言葉にアスナが一瞬動きを止めるが、その後すぐに首を横に振った。

「作ってる間に攻略組の人たちが来ちゃうもの。あの人達に見られるのは、ちよつと……」

確かに、あまりもたもたしていると男が増える。そうなった場合、攻略組紅一点のアスナに視線が集中するのは間違いないし、キリトとしてもそれは面白くない。

溜息を一つついたアスナは東屋を一瞥し誰も来ていないのを確認した後、こちらに背中を向け装備を解除していく。レイピア、ケープ、アーマー類、ベストと消滅していき、レザースカートがストレージに格納されたところで、背を向けていたアスナがこちらに向き直る。

残った白いチュニツクは前後の丈が長いため下着こそ見えないものの、そこから伸びるすらつと長く白い手足の破壊力はキリトを赤面させるに十分だった。

「……何をじろじろ見ているのかしら？」

頬をほんのりと赤く染めたアスナがジトーツつとした目をこちらに向けている。アスナからサツと目線を外したキリトは、浮き輪を頭から被ると水辺に近寄り水の温度を確認した。

現実世界の日付は十二月二十一日。真冬と言って間違いない日付であったが、どうやらこの世界の気候とはリンクしていないようで、

冷たさと感じるものの動きを鈍らせるほどではなかった。ゆっくりと水に入り流れの速さも確認したキリトは、これなら問題ないとアスナに合図する。それを見て、アスナも浮き輪を被り慎重に水に入ってきた。

その瞬間、水に濡れたチュニツクが半透過エフェクトを発生させる。

当人は気づいていないのか、「なんか懐かしい感じー」とご機嫌な様子で水面にぶかぶかと浮いている。ここで指摘すれば藪蛇になると判断したキリトは真面目な表情を作りつつ、アスナの胴体と浮き輪の間に左手を突っ込み抱えこむ。突然の行動にアスナは一瞬固まったものの、すぐに意図を察したのか右手を同様にキリトの浮き輪に差し込んだ。

お互いに体を安定させた二人は、流れに逆らわないように軽くバタ足しつつ移動を開始する。途中サメのようなヒレが突如として背後に現れ有名なパニック映画のBGMが脳内に流れるが、上陸後にサメのようなヒレを持ったオタマジャクシであったことが判明。

アスナが自らの服の状態に気づき、ダメージが入らないギリギリの膝蹴りがキリトに直撃するまで、二人は砂浜にへたり込んでいた。

「わあ………！　綺麗な街………！」

主街区のゲートへと辿り着いたアスナが、テンション五割増しのはしゃぎ声を上げる。ベータテスト時代は砂に覆われた地味な街であったが、正式サービスによって追加された<<水路>>^{チャネル}によって、第四層主街区<<ロービア>>は素晴らしい景観を生み出していた

正方形の石壁の中央にある広場に転移門が設置されている。広場から四方に延びる水路によって正方形は四つに分断、整理され、建物の色も白で統一されているため、その景観はあたかも湖に浮かぶ白亜の都という趣だ。

「キリト君、早く来て！　ゴンドラがいっぱいあるよ！　素敵、ヴェネツィアみたい！」

アスナのテンションは上がりっぱなしのようで、町全体を眺めてい

たキリトを急かしつつ、自らは水路の近くまで駆けていく。ゲートをくぐってすぐ、街の北部の船着き場でじつくりとゴンドラを検分していたアスナが、「これが良い！」とアイボリーホワイトの二人乗りゴンドラを指差す。船頭に料金の五十コルを払い主街区広場まで行くように頼むと、ゆつくりとメインチャネルを南下していく。

舳先へさきに立つアスナがフードを外し、歓声を上げながらキョロキョロと周囲を見渡している。現実世界のイタリア北部ヴェネツィアではゴンドラでの観光ができるということは、キリトもテレビなどで見たことがあり知識として知っている。目の前ではしゃいでいる少女が実際に行ったことがあるかどうかはわからないが、ずいぶんとお気に召したようだ。

「あんまりはしゃいで、落ちるなよー」

「わかってるわよー」

口調こそ怒っているものの、その表情は満面の笑顔だ。普段はクールな雰囲気フエンサイの細剣サイ使用さんの、年相応と言っただろう無邪気な姿に笑みをこぼしつつ、キリトは情報を得るために船頭——ゴンドリエーレというそうだ——に質問をする。

船頭が言うにはこのゴンドラでは町の外まで行くことはできないらしい。ならば他の船ならどうかと聞くと、答えられないと返ってきた。

——一休みした後は、情報収集を優先だな。

情報収集の依頼を出すべくアルゴへのメッセージを打ち、ちようど送信し終えた頃にゴンドラが中央広場の南側にある船着き場に到着した。

船から降り、ゴンドラが北に戻っていくのを見送ったキリトは、何ともあれ転移門を開通させなくてはと先に降りていたアスナの方に振り向く。

するとその目の前で、アスナは瞳にお星さまをキラキラさせながら言った。

「すつごく、楽しかった！」

「……それはよかった」

「また乗ろうねー！」

クールでシニカルでミステリアスな細剣使いフェンサーの様は、この街の景観とゴンドラによって完全に普段の雰囲気忘れてしまったらしい。瞳はキラキラ輝いており、尻尾があればぶんぶんと振っていることは間違いないほどにご機嫌だ。

アスナのその様子を見て、キリトは現実世界にいる妹の存在を思い出す。

ここ数年はキリトが一方的に拒絶したせいで疎遠になってしまったが、幼いころは仲が良く一緒に遊んでいた。好奇心旺盛なキリトの妹は面白そうなのがあるともう一度やろうと、キリトによくせがんだものだ。

そんな妹の面影を目の前の少女に見たキリトは、「また後でな」とアスナの頭をポンポンと撫でた。その動作はキリトにとつて懐かしく慣れた動作であり、ごく自然に、当たり前のように行われた。

「あ……………」

頭を撫でられぽかんとしていたアスナの顔が急に真っ赤になったかと思うと、ぼつという効果音を立てて後ろを向いた。どうやら恥ずかしかつたらしく、アスナは両手で頬を押さえている。

そういえばこんな反応をされたこともあったなあと、キリトは苦笑いしながら後ろを向いたアスナの頭をぽんと撫でつつ、自らは転移門に近づく。ともかくにも転移門の有効化をしなければならぬ。時刻は午後二時過ぎ。ボスが倒されてからそろそろ一時間が経過しようとしている。下の階層の転移門の前では多くのプレイヤーたちが、有効化を今か今かと待っているに違いない。

この景観を見れば間違いなく〈街開き〉は大騒ぎになるだろう。有効化したらすぐに逃げるところを探さないと頭の中で考えつつ、キリトは転移門に手を伸ばした。

中央広場の外周部に佇む小さな宿屋の一室、そのソファに座っているアスナは、同様に座っている黒髪の少年を前に顔を上げることができないでいた。

問題となったのはつい先程、主街区に入りゴンドラで中央広場まで移動した時のことだ。街の景観に感動し、憧れていたゴンドラに乗るという経験をしたアスナは、その楽しさと嬉しさのあまりどうやら完全に自分を見失っていたらしい。

——まさか、キリト君に……な、撫でられるなんて……。

確かに、普段の自分を忘れ本来の好奇心旺盛さが出てしまったことは否定しない。現実での夢が思わぬ形で叶ってしまい、嬉しさのあまりはしやぎすぎてしまったことも事実だ。それでも、それでもと、アスナはそつと視線を上げ対面に座っているキリトを窺う。

すると、キリトがそれに気づいたのか頬を掻きながら困った表情をしているのが窺える。

困らせている、それは理解している。

しかし、仕方ないではないか。目の前の少年がお兄ちゃんに見えたなどと、言えるわけがない。

アスナには少々歳の離れた兄がいる。

既に社会人である兄は基本的に海外での勤務が多いため、普段会うことはほとんどなかった。それでも兄妹仲は良好で、両親に甘える機会を得ることができなかったアスナにとって、唯一甘えることができる家族だった。

まだ自宅で共に住んでいた時、幼いころから勉強や習い事などで自分の時間をほとんど作れなかったアスナであるが、ちよつとした時間を見つけては遊んでもらい、また兄もアスナを気遣って顔を見せに来てくれた。

アスナが中学に上がる頃には就職し、会う機会は減ってしまった。それでも、たまに会うことがあるとアスナを気遣い、笑いかけ、出かける前には必ず頭を撫でてくれた。両親が多忙で、また厳格であるため距離を感じていたアスナにとって、兄だけが家族の親愛の情を感じさせてくれる存在だったのだ。

その兄とも、このゲームに囚われたことでもう会うことはできないだろうと思っていた。

無論、今のアスナは簡単に死ぬつもりなどない。努力し、前に進み、

現実世界になんとかして帰ってやろうという気概を持つことができている。だが、この世界が気概だけで生き残ることができるほど甘い世界ではないということもまた、アスナは理解している。

ナーヴギアを購入してきたのは兄だった。

厳格な家庭で育ってきた兄がどういった経緯でS A Oに興味を持ったのかはわからない。それでも、正式サービス開始の日に出張が重なってしまい、随分と残念がっていたことを覚えている。

兄がそんなに楽しみにしているなら、自分も体験してみたい。

明確には思い出せないものの、恐らくそんな軽い気持ちで、アスナはあの日ナーヴギアを被ったのではないだろうか。

兄に対して恨みだとか、怒りだとかを感じてはいない。アスナがある日から二週間も宿屋に籠り続けて感じていたのは、両親に見捨てられるかもしれないという不安。そして何よりも、家族にもう会えないかもしれないという寂しさであった。

寂しい。アスナは、いや目の前の少年も、恐らくこの世界のプレイヤーほぼ全てが寂しいと感じているに違いない。

だからこそ、先ほどの彼の行動は衝撃的だった。

女性の頭を簡単に撫でるなど許されるものではない。事実彼以外の男性であったならば、アスナは細剣を抜き水の中に叩き落とすか、ハラメントコードで黒鉄宮こくてつぎやうに送っていたに違いないだろう。

だが、それを行ったのが自分が信頼を置いている少年で、撫でられた瞬間に見た彼の表情から下心等感じなくて、まるで現実世界で兄が撫でてくれた時のように自然で、安心感を得られてしまつて。

あの時彼が自分に向けてくれた感情は、親愛の情に間違いない。それに気づいた瞬間に、アスナの脳内は完全にパンクした。

この世界で絶対に得ることができないと思っていた感情を目の前の少年から与えられ、それにどう対応していいかわからず、ただただ赤面し後ろを向くのが精一杯だった。

そんな嬉しさと恥ずかしさが盛大に混ざり合った感情を五分や十分で抑えることなどできるはずもなく、完全に思考が停止したアスナはキリトに手を引かれながら宿屋に移動し、部屋に入ってから赤面

したまま俯くことしかできなかった。

「あー、その、……アスナさん？」

キリトの声に、アスナはびくりと体を震わせる。

部屋に入ってからこの方会話などしていないし、そもそも何を話せばいいのかわからなかった。

「その、気軽に頭撫でちゃって、ごめんな？ イヤ、だったよな？」

アスナは首を振る。

嫌ではない。びつくりしただけだ。恥ずかしかったただけだ。

アスナは無言で否定し、少しでも視線を上げる。こちらを見たキリトはガシガシと頭をかいており、どうすりゃいいんだと悩んでいるように見えた。これ以上はこちらから話さなければどうしようもないだろう。

「……あのね、びつくりしたの」

「……はい」

「急に頭撫でられて、恥ずかしくて」

「……ごめん」

再びの謝罪にアスナも再び首を振った。

謝ってほしいわけではないし、糾弾するつもりもないのだ。

「嫌じゃなかったの。ただ、キリト君すごく自然に撫でたから、お兄ちゃんみたいだなって思っちゃって……」

アスナの言葉に、キリトが息を？んだように見えた。

「現実でも兄がいたから、ちよつと思いつちやっただけ。頭撫でもらえて嬉しくて、でもキリト君だったから恥ずかしくて……」

そこで一旦区切り、アスナは意を決して顔を上げキリトを見る。

「固まっちゃって、ごめんなさい。でも、次にするときは、事前に言うてからに……」

してもらえると、と続けるつもりであったが恥ずかしさが勝ってしまい、結局最後まで言うことができなかった。手を握ったり握られたりというのは、第二層のボス戦以来何度かあった。しかし、今回はそこから急激にランクアップしてしまった感がある。

恥ずかしさで、再びアスナは俯いた。

顔が熱を持っているから、赤くなっていることは間違いないだろう。結局同じ状態に戻ってしまったが、完全に感情に振り回されている今のアスナにはどうしようもできなかった。

「あ、アスナさん。それは、その、また撫でてもいい、ってことですか、ね？」

キリトの問いに、こくと頷く。

キリトの表情を窺えば、顔が赤く染まっている。自分が随分と恥ずかしいことを言っている自覚はある。しかし、彼によって寂しさを一時的にでも忘れることができたのだ。アスナは、この気持ちに逆らうことができなかった。

「その、俺も現実に妹がいたから、こんなこともあったなあって思い出しちゃってさ。不快じゃないみたいで、安心しました。……また、することがあるかもしれないけど、今度は、気を付けます……」

アスナは無言のまま、再び頷いた。

彼にも妹がいるということは、アスナ同様に寂しい思いをしていたに違いない。ならばこれはwin-winなのだ。決して自分だけが望んでいるわけではないのだと、アスナは自分にそう言い聞かせる。

ソファの対面同士に座っている二人は顔を真っ赤に染めたまま俯いている。

結局、今後の行動方針のミーティングを始めることができたのは、時計の針が四分の一ほど回った後であった。

第二十話

第四層主街区<<ロービア>>では、その構造上ゴンドラでの移動が基本となる。

中央の転移門広場を除けば、正方形の市街は東西南北に走るメインチャネルによって大きく四つの区画に分かれている。右上には公園や広場、劇場などの観光エリア。右下に各種商店がある商業エリア。左下には大小の宿屋が集まる宿泊エリア。そして、左上にはNPCの住居が存在する下町エリア。

これらのエリアの何処に行くにも、ゴンドラに乗らなければスムーズな移動はできない。浮き輪を使って泳いで移動するという手段があるものの、街中で一々装備を解除するのは面倒の極みだ。

つまり、このロービアの街は交通の便が極めて悪い街だった。

普段であればゴンドラの数に不足することはないのでだろう。しかし、本日は<<街開き>>である。下層から多くのプレイヤーが新たな武器や防具のため、観光のために押し寄せた。それによって割を食うのは最前線で活動するプレイヤーである。レベリング、クエスト消化のために迅速な移動をしたくとも、下層から押し寄せたプレイヤーによってゴンドラが独占され、順番待ちをしなければならなかった。

——俺たちは、おまえら一般プレイヤーを解放するために戦っているんだ。優先されて当然だろう。

宿屋の二階、休憩のためにとった部屋の窓から転移門広場を見渡していたキリトに、そんな言葉が聞こえてくる。言葉の主はハフナーという名の、DKBのサブリーダーだ。横入りした金属鎧の五人組が、大型のゴンドラに乗って移動していく。横入りされた側は言い返すことなくそれを見ていたが、当然いい感情を持つわけがない。

——ビギナーとベータテスターの次は、一般プレイヤーと攻略組の亀裂なんて、勘弁してくれよ……？

観光気分ののんびりとしたプレイヤーたちに、時間がすべての攻略組が付き合ってられるかという気持ちはわからなくもない。だが、今は一般プレイヤーであっても、いつかは攻略組として登ってきてもら

わなければならぬのだ。

今現在の攻略組主力、四十二名がいつまでも生きていられる保証などない。フィールドボス戦、迷宮区攻略、階層ボス戦そのどれもが命がけだ。現在は順調だが、いつか必ず死者が出る。その時にその損害を穴埋めするのは、一般プレイヤーの上位層の人間に違いないのだから。

厄介ごとの気配を感じ、そこからくる溜息を飲み込んだあとキリトは現在時刻を確認する。

約束の午後六時まであと三分しかない。装備を整えたキリトは部屋を出ると、待ち合わせ場所の一階の喫茶店に入る。やはりというべきかそこにはアスナの姿があり、いつものクールな雰囲気を取り戻しているように見えた。

「お待ちせしました」

そう言いながら、キリトはアスナが座っていた対面の椅子に腰掛け、軽く頭を下げる。

「まだ待ち合わせの時間前よ」

約三時間ぶりに再会したアスナの様子は随分とサツパリとしたものだ。休憩前に真っ赤になって「お兄ちゃんみたい」等とキリトに言ってきた少女と同じ人物とは到底思えないが、下手に引きずられると気まづくならない。彼女の切り替えの早さに感謝しつつ、キリトは彼女が滑らせてきた喫茶店のメニューを覗き込む。

「魚介系が多いなあ。俺はここで食べちゃってもいいけど、どうする？」

「うーん……。せっかく綺麗な街だし、屋台で何か買って食べたいな」「了解。んじゃ、外出てみますか」

宿屋を出て周りを窺えば、転移門の東側に屋台が五、六軒並んでいるのが見えた。本格的なものを食べるなら南東の商業地区に行くべきだろうが、ゴンドラに並ぶ列はかなりの長さだ。

「あれに並ぶのはちよっと手間ね」

「同感。じゃあ、あそこの屋台にするか」

アスナが頷き、二人は屋台の前に向かう。どうやら夕飯になりそう

なものは、魚フライと野菜サラダのセット、シーフードピザ、魚と香草のパニーニくらいか。その全ての料理の最後に、ようなもの、という言葉がつくのはご愛嬌だろう。

「俺はパニーニにしようかな。アスナはどうする?」

「同じもので」

了解と、アスナにベンチの確保を頼んだキリトは屋台でパニーニを二つ購入する。十二コルという値段の割に匂いは良く、期待できそうだ。

「お待たせ、オゴリです」

そう言って、キリトはアスナの隣に腰を下ろす。

アスナは黙ってパニーニを受け取るが、その表情には疑問が浮かんでいる。

「ああ、まあ、さっきの迷惑料? 的な?」

「ふーん……」

アスナは何とも複雑そうな表情で手渡されたパニーニを見ていたが、突然ニヤリとした笑みを浮かべた後、キリトに向き直り満面の笑顔で一言、

「ありがとう、お兄ちゃん」

語尾に音符が付くような声で、ニーツコリと笑いながら言った。

「んな?! な?! な?!」

女神のような笑顔で放たれたその言葉に、キリトの顔は瞬時に沸騰した。

動揺のあまり持っていたパニーニを落としそうになるが、何回かお手玉し地面五センチのところまでギリギリキャッチに成功する。急になんてこと言うのだこのお嬢さんとは隣を見れば、口に手を当てて肩を、いや身体全体を震わせている。笑いをこらえていることに疑いがないが、どうやら限界を超えたらしい。

「ふっ……くっ……ふっ、あは、あはははは!!」

目尻に涙を浮かべ、こちらを指さしながら大声で笑っている。紛うことなき爆笑である。ゴンドラに並んでいる人が何事かとこちらを見ているが、普段は視線を気にする細剣^{フェンサー}使いさんも、今はそれどころ

ではないらしい。

「顔……真っ赤……ふふっ、あははは！ お腹痛い……！ 腹筋無いのにお腹痛い……！」

それだけ笑えば腹も痛くなるでしょうよと、決して口に出すことはできないので脳内で発した後、キリトは手に持っていたパニーニに八つ当たりする。

がつつと齧り付き半分ほどキリトが食べ進んだところで、アスナの笑いはようやく収まったらしく、まだ目尻に涙を浮かべお腹を押しさえているもののその様子が落ち着いてきた。

「ごめんなさい、オゴリって言うから、こつちも何か言わないといけな
いかなって」

「いつ俺がネタ振りしたんですかねえ……。とにかくフード被ってお
けよ、結構注目されてたぞ？」

「嘘!？」と言う声に無言で頷くと、リニアアの如き速さでフードを
被ったアスナは、改めてパニーニに齧り付いた。

「あ、おいしい」

そう、このパニーニは美味しいのだ。香ばしくグリルされた魚と、
ハーブの香りがするトマトソースが、ふっくらパリッと焼かれた薄焼
きパンにはさまれている。現実世界で食べたそれと比べてもそんな
なく、中々の再現度と言つていいだろう。

挟まれているのが照り焼きソースで焼かれた肉だったらもつと良
いのだがと心の中で思いつつ、キリトも再びパニーニを齧ろうとし
て、

「人が必死で情報集めてたつてのニ、自分はアーちゃんとイチャつき
ながら食事とハ……いいご身分だなア？ キー坊」

突如として背後から掛けられた声に、飛び上がった。

「……相変わらず見事な隠蔽ハントイングだな、アルゴ」

「まだまだだナ、キー坊。ところでお兄ちゃんとハ……斜め上だが、随
分と仲良くなったみたいだな？」

「きつ、聞いてたんですか!? あれは違います! アルゴさんの聞き
間違えです!」

どうやら会話は筒抜けだったらしい。アスナが声を大にして否定しているが、動揺したアスナなどアルゴの敵ではないだろう。

「しっかし、アーちゃんいいの力？ 兄妹だと色んなことできないんだゾ？」

「い、色んなことって……色んなことってなんですか!? キリト君とそんなことするわけないじゃないですか！」

「おや？ そんなことって、アーちゃん一体どんなことを想像したんだイ？」

「そつ、それは……っ！」

アスナはプルプルと震えており、フードから少しだけ見える顔は真っ赤になっているようだ。色々と突っ込みたい部分もあるが、流石にそろそろ助け船を出さないと圏内とはいえ悲しい事件が起きかねない。

「それでアルゴ、情報は揃ったのか？」

「もちろんだよ。ただ、今回は超特急だったからナー。健気なアルゴさんを労って、ゴハンくらい奢ってくれてもいいと思うナー。オイラ、チーズたっぷりピザが食べたいナー」

「……ちよつと待ってろ」

チーズを限界までマシマシにしたシーフードピザはアルゴのお気に召したようで、満足げな表情で食べ始めたアルゴを見つつ、キリトも自分のパニーニを消化した。

アルゴに依頼した情報である、クエストのキーNPCの場所を確認したキリトは、ベータテストでは存在しなかったクエストNPCに当たりをつけた。

場所は北西の居住エリア。当然移動のためにはゴンドラが必要であったが、列の人数は夕飯時になっても減るどころか増える一方だ。どうにかして泳がずに移動する方法はないものかと、キリトはゴンドラが行き交うメインチャネルを見つつ思考を走らせる。

アルゴはピザを食べ終えて早々に「クエストの情報が揃ったら買うヨ」と言い残し去っていたため、隣には先ほどと変わらずアスナが

座っている。そのアスナに視線を向ければ、どうやら彼女もキリトと同じようにメインチャネルに視線を走らせている。

「せめて水路が飛び越えられる程度の幅だったら、わざわざゴンドラに乗らなくてもいいのに。楽しいけれど、あの列に並ぶのはさすがに手間よね」

メインチャネルの横幅はおよそ二十メートルほどあるだろう。恐らくどれだけAGIを上げたとしても、何らかの足場がない限りは向こう岸まで届くことはないだろう。逆に言えば、足場があれば届くかもしれないということなのだが。

「あつ」

そこでキリトは思いついてしまった。

足場ならあるではないか。先ほどからメインチャネルを行き交っている、屋根つきのアレが。

「アスナ、こっちきて」

座っていたアスナの手を引いて広場北側の岸壁まで小走りで移動し、岸壁ギリギリで止まったキリトは左右を見てゴンドラがちょうど交差する位置を確認する。

「あつ、嫌な予感」

「流石、察しがいい」

「……スタントマンになった記憶はないんだけどね」

キリトがにやりと笑い、それを見たアスナが溜息を一つつくもそれ以上は何も言わずに、助走ができるように岸壁から距離を取る。運の良いことに左右からは十二人乗りであろう巨大なゴンドラが進んできている。

二人はタイミングを計り右から来たゴンドラに飛び乗り、勢いそのままに左から来ていたゴンドラ、そして対岸へと思いつきりジャンプする。ゴンドラの乗客からは何故か歓声が上がっているが、キリトはそれどころではなかった。

対岸までの距離が意外と遠い。キリトよりAGIが高いアスナは無難に対岸に着地していたが、ジャンプの飛距離がギリギリ足りなかったキリトは岸壁に何とか、ようやっとという体で手を掛けること

ができた。

「何やってるの、早く上がってきなさいな」

岸壁の上のアスナがキリトに手を差し伸べてくる。しかし、ゴンドラの乗客が何故歓声を上げたのか、キリトは視界に入ったものによって理解できた。

「あつ、白……」

ピタ、とアスナの手が止まり、立ち上がったアスナがスカートを押しさえて後ずさる。

「……早く上がって、そこに立ちなさい」

「はっ」

口は災いの元である。キリトは岩壁を登り、アスナが指差した通りの中央に立つ。この後の展開をキリトは何となく予想できた。しかし、逆らうことはできない。今はただだ、死刑執行人たる彼女の言葉に従うのみだ。フードを被り俯いているため表情を窺うことはできないが、さぞや怒り狂っているに違いない。圏外であればキリトも止める理由を見つけることができただろうが、残念なことにはここは圏内だった。

正面に立つアスナがくくシバルリック・レイピアを抜き放つ。銀色に輝くその剣は、色とりどりの街灯によって照らされた白亜の街を背景にしてもなお存在感を放っていた。構えは間違いなくクリニアアへのそれだ。圏内ではダメージが入らない代わりに衝撃を受けることになる。キリトの後方はしっかりと地面になっているため、十メートルや二十メートル吹っ飛ばされても問題ないだろう。キリト以外には。

「キリト君の、バカー……!!!」

アスナの剣にソードスキルの光が発生した直後、主街区くくロービアへの閃光が走った。

一度中央広場から出てしまえばゴンドラを確保することはたやすい。どんな水路でも流しのゴンドラがやってくるため、二人乗りのゴ

ドラを確保したキリトとアスナは目的地の座標を船頭に伝える。ゴンドラが動き出すと、途端に機嫌を直したミニスカ細剣使いさんが触先^{へびさき}ではしゃぎだす。夜の居住区を船で移動するというのは中々に趣深いもので、アスナ同様にキリトも周囲の風景を楽しむことができた。

「あつ、あそこの家売り物みたい！」

アスナが指差す方を見れば、小さな二階建ての小屋のドアに<<For Sale>>と書かれた木札が下げられている。家自体はい家で、一人や二人で住む分には十分な大きさだろう。しかし、プレイヤーハウスというのは大抵それなりの値段がする。この街の移動の間を考えても、拠点とするには不向きかもしれない。

「いずれ買うことができるかもしれないけど、この場所はちよつとなあ。いい家なのは間違いないさそうだが……」

「うん。もし買うとしたら、湖が見える普通の家がいいな……」

湖畔の家という言葉をも、キリトは自らの脳内に少々深めに刻み込んでおく。プレイヤーハウスというのはどうしても高価で、家具や移動の間を考えると転移門や商店に近い宿屋の方が安価で便利なのは間違いない。しかし、この世界でも帰る場所があるという意識を作ることができるのは、貴重なことなのかもしれない。

先ほどの言葉を最後に前を向いたアスナ。フードを外しているため、彼女の茶色の長髪が風に流れてそれは美しい光景だが、彼女の雰囲気ははしゃいでいた時と違い少々切なげだ。家、という言葉で現実世界のことを思い出してしまったのだろう。今日第四層に来てから、現実世界のことを思い出す機会が多かったし、少しくらいは感傷に浸るのも悪くないだろう。

キリトは無言のままアスナの背中を見つめっていると、船が目的地である一軒の家の前に止まる。中にはクエストNPCの印である<<！>>を頭上に付けた老人が、揺り椅子に腰かけてパイプを吸いながら酒瓶を傾けていた。

ロモロという名の老人から提示されたクエストの名前は<<昔日^{せきじつ}の船匠^{せんしやう}>>。

この街の船に関するものは水運ギルドに独占されたため、船が作れなくなっていたこの船大工の老人は、船を作ってほしくば材料を集めてこいという。間違いなく収集系のクエストだ。

必要なものを集めるために何回も往復させられるこの手のクエストは面倒なことこの上ないが、この街での自由な移動手段を得ることができるし、自分の船ならば恐らく町の外まで移動することが可能に違いない。

その旨をアスナに説明した後、必要最低限の素材を集めようとキリトは提案する。しかし、彼女はそれを即座に却下した。

——あのおじいさんは最高の船を造りたがっているに違いない。ならば、妥協せずに最高の素材を集めるべき。

収集系のクエストによくある、最高の結果はあるけど目指すのは自由という選択肢に、アスナは完全に嵌^{はま}ってしまったらしい。気持ちはわからなくもないし、キリトとしてそういったコレクター的な要素をコンプリートしたいという考えはある。

しかし、このゲームは体力を全損すれば死ぬ。わざわざ死ぬ危険を冒してまで、最高の結果を目指す訳にはいかない。妥協案として、アスナに対して自分が引けと言ったら必ず引くという確約を取った後、二人は最高の船を作るべく素材集めを開始した。

ハメートルルを超えるツノの生えたヌシ熊——マグナテリウム——は、ベータテストで六人パーティーを何度も返り討ちにしたほどの強敵であり、この階層では最高クラスの武器を持っている二人でも苦戦は免れなかった。マグナテリウムが放つ火炎ブレスと突進攻撃は、ともに食らえば二人の体力を全損させるレベルの威力を持っていたに違いない。

しかし、その突進攻撃を利用し大木に突っ込ませることで、最高級の木材を確保することに成功。四十分の時間をかけてマグナテリウム自体の討伐も達成し、最高級の脂、爪、毛皮を確保した二人は、口モロに材料を届けた。

最高の船を作るから待っていると言い残し、工房に繋がっているであろうエレベータに口モロは消えていく。それを見届けたキリトは

ぐーつと腕や背中筋を伸ばした。中々にハードな戦闘を終えたキリトは明確な疲れを感じており、どうやらそれは左に立つアスナも同様らしい。

「ごめん、ちょっと休んでもいいかな？」

アスナの言葉に頷いて部屋を見渡すが、ベッドのようなものはない。休むならロモロが座っていた暖炉の前に置かれた揺り椅子か、テーブルの側に何個かある丸椅子、もしくは床ということになるだろう。

キリトは揺り椅子に近づき、背もたれを後ろから持つと軽く揺らしてみよう。クッションが敷かれた揺り椅子は中々に寝心地がよさそうだ。

「アスナ、よければこれ使おうといい。俺は野営セット持つてるからその辺の床でも問題ないし」

「えっ……でも……」

アスナは揺り椅子、床、キリト順に視線を移動させた。揺り椅子で寝るのはキリトに申し訳ないけど、床で寝る勇気もないと言ったところだろうか。キレイ好きなアスナには床で寝るのはさすがに躊躇われるだろう。一方キリトはどこで寝ても十分に休めるシステム外スキルを持っていると自負しているから、問題はないのだ。

「どうぞ」

「……じゃあ、遠慮なく……」

アスナが揺り椅子に腰掛けるのを見てから、キリトは装備その他を解除し寝間着になる。同様にアスナも装備を解除していくが、スツと揺り椅子の端ギリギリに腰かけたかと思うと、キリトを見上げながら空いたスペースをぼんぼんと叩く。

「詰めて横向きになら一緒に寝れそうだから、君も使ったら？」

目の前の少女は、キリトを国境線を超えたら地上二十階の窓から放り投げようとした人物である。その人からまさか、同じ椅子で寝ようなどという言葉が出てくるとは思わず、キリトは驚愕によって動きが止まる。アスナはキリトの様子をじつと見ていたが、動かなくなつたキリトに呆れたように溜息を一つついてから椅子のアウトサイドに

身体を向けた。

「じゃあ、先に休むわね。空いた場所は、使うも使わないもご自由に」
こちらに背中を向けたアスナは、その言葉を最後に沈黙する。

耳を澄ませれば、余程に疲れていたのだろうか既に小さい寝息が聞こえてくる。

キリトの身体から力が抜け、ふっと笑みが浮かぶ。

長い一日だった。時刻は日付が変わり午前一時。途中三時間ほどの休憩を取ったとはいえ、第三層のボスを倒しこの階層に上がってき
てまだ半日だ。その半日で、随分と相棒たる彼女の新しい姿を見れた
気がする。ゴンドラに乗りはしゃいでいる姿、頭を撫でた後真っ赤に
なっている姿、そして今安らかに眠っている姿は、普段はクールな雰
囲気の彼女からは想像もできない年相応のものであるように見えた。

——きつと、これが本来のアスナなんだろうな。

アスナは常に周囲の視線を集める。彼女の容姿の良さは男女問わずに人を引きつけるだろうし、少し話せばとても理知的な人物である
こともすぐに理解できる。極めて魅力的な女性であることは間違いない。
これは間違いなくアスナの長所であるが、同時に彼女にとつては休む暇が
無いという悩みの種になっているのかもしれないと、キリトはぼんやりとした
頭で考えた。

揺り椅子の背もたれに手を掛け、軽く揺らしてみよう。すると、既に
眠りに落ちていたであろうアスナの身体がこちら側に倒れてきた。
キリトはストレージから毛布を取り出し、アスナが起きないようにそつと
掛けた後、テーブルの傍にあつた丸椅子を揺り椅子の横まで持ってきて腰を
下ろす。

「お疲れ、アスナ」

背もたれに再び手を掛け、ゆっくりと揺らしていく。すると、アス
ナの寝顔に子供のようなあどけない笑顔が宿る。何か夢でも見ているの
だろうか、キリトはそつとアスナの頭を撫でる。

「良い夢を」

キリトは再び揺り椅子を揺らし始める。聞こえるのは部屋の奥にある暖炉の
パチパチという木の燃える音と、アスナの小さい寝息だけ

だ。暖炉の炎が二人を照らす。その光のせいだろうか、アスナの顔に
少しだけ朱が差したことに、キリトが気づくことはなかった。

第二十一話

東の空から顔を出した太陽によって赤く照らされ、建物の色が白で統一された白亜の街は昼間のそれより暖かく感じる。

水面に輝く太陽と、水路両横の白い壁に反射した光を右手を目の上にかざすことで遮りながら、アスナは自らのものになったゴンドラ——テイルネル号——で西のメインチャネルを街の中央部に向けて進んでいた。

船匠せんしやうの老人ロモロに渡した最高級の素材は、全長七メートル、幅一・三メートルの二人乗りのゴンドラとして生まれ変わった。最高級の名にふさわしい逸品と言っていいこのテイルネル号を初めて見たとき、アスナは心の高揚を隠すことができなかつた。

船体は艶やかな光沢のアイボリーホワイト、船縁ふなべりや船首飾りは深みのあるフォレストグリーン、座席は革張りで宿屋にある椅子よりも明らかに座り心地が良い。

これを作ってくれたロモロも、受け取りの際に「満足のいく船造りができた」とあごひげをさすりながら満足そうに語っていた。

残念なことに船を操作するゴンドリエーレが操船など経験したことがないであろう黒の少年であるため、乗り心地は最高級とはいかずにも昨日乗ったNPCが船頭のゴンドラよりは若干揺れが大きいようにも思える。それでもアスナが楽しむには十分で、両手を広げて風を感じながら船の後方で櫂かいを動かしているキリトに聞こえるように声を上げる。

「気持ちいいー！ このまま町の外まで行こうよ！」

「も、もうちょっと操船の練習させてもらってもいいですかね！ このままだと事故る。マジで事故る」

キリトの操船は確かに覚束おぼつかない。やってるうちに慣れると思わなくもないが、ロモロにも事故には注意しろと言われたばかりだ。本当はこのまま川下りで行きたいところだったが、テイルネル号を壊すわけにもいかないし、町の外にはモンスターも出るだろうから練習には向かないだろう。ならば仕方ないと、アスナは街の水路を回ろうと提

案しキリトが同意する。

「何にせよ夕方には町の外まで行かないといけないしき、もう少しだけ付き合ってください」

「うん。ゴンドラに乗ってるの楽しいから、多少時間かかってもかまわないわよ?。」

<<昔日の船匠>>は船を作るだけのクエストではないとわかったのは、船を受け取った後もクエストの達成メッセージが出なかったからだ。船匠せんしやうのロモロが廃業する原因となった、水運ギルドによって素材が独占された理由を語ってくれることはなかったが、夕方に南東エリアから出航する木箱を積んだ大型船を追えという目的が提示された。荒事になるという一文付きで。

戦闘ということになれば当然船の上で戦うことになるだろうし、船同士で戦う可能性すらある。

その根拠となったのは、このティルネル号の船首水線下に取り付けられた衝角の存在だ。マグナテリウムの角を素材として作られたそれは完全に戦闘用の装備で、船のオプションとしての衝角が実装されている以上、船をぶつけてダメージ与えるような機会があると思えない。

船首に取り付けられた衝角を活用するには敵に正面からぶつかる必要があるため、どうしても操船の技術がある程度は必要になるのだった。

それを理解しているのであろう、キリトは至極真面目に操船を行っている。しかし、慎重にか権を動かしながらも時々ふわとあくびをしているのを見て、果たして練習になっているのだろうかとアスナは不安になる。

「ちよつと、そんなに眠いなら先に休憩してもいいんじゃないの?。」

「ん? ー、そうだなあ……。夕方までは時間あるし、その方がいいかなあ……。」

どうやら余程眠いのだろう、キリトの返答からは出航時にあった緊張が失せている。確かに、操船とはいえ前進かしているだけならか権を動かす必要はないのだから眠くなるのも分かる。だが、これから時間が

進めばメインチャネルを行き交うゴンドラも増えるだろうし、衝角なんていう危ないものがついているこの船は下手に他の船にぶつかるわけにはいかないのだ。圈内であるから船が沈む可能性はまずないだろうが、居眠り運転がよろしいことではないのは間違いない。

「その方がいいわよ、絶対」

「じゃあ、先に一休みしますか……」

アスナの勧めにキリトは素直に頷き、宿屋に向かうと決まったことで多少気が抜けたのか再びあくびをする。ゴンドラは水上を進んでいる以上ある程度の揺れがあり、その揺れがまた絶妙に眠りを誘う揺れなのだ。ロモロの家で三時間程度の休憩を取ることができたとはいえ、昨日のハードなスケジュールを考えるととても十分な休憩時間とは言えない。必然、アスナも睡魔に襲われて頭がふらふらと揺れてくる。

休憩を取れたアスナでさえこの状況なのだから、キリトの状態は推して知るべしというものだ。

どうやら船ができるまでの三時間、キリトはアスナが使っていた揺り椅子をずっと揺らしていたらしい。どうして寝なかつたのかと言いたい気持ちもあるが、本来キリトと半分ずつ使う予定だった揺り椅子を独占してしまったのは自分である以上、怒るのはどう考えても理不尽な話だろう。もちろん、アスナとて寝返りを打つたのに気付いてすぐに起きようとした。しかし、それを止めたのは彼の行動が原因だ。

毛布を掛けるだけならまだいいが、あんな優しい声色で囁かれて頭を撫でられたら起きれるわけがないではないか。あの時アスナの顔は間違いなく赤くなっていたし、口元も緩んでいたに違いない。動揺を上回る安らぎと嬉しさを感じてしまったのだからそれは仕方ないにしても、そんな大胆な行動を取った少年が平然としていることにアスナは納得がいかなかった。

自分はゴンドラに意識を全力で向けて思い出さないようにしているというのに、問題の少年はまるで何もなかったかのように操船練習中だ。

女性にとつて頭を撫でられる、髪を触られるというのは非常に重大な出来事であるはずなのだが、彼の様子を見ていると本当にそうなのかと自分の認識が揺らぎそうになる。別に彼に撫でられるのが嫌なわけではないけども、こうまで平然とされると嬉しいやら恥ずかしいやらで盛大に揺さぶられている自分が馬鹿らしくなるではないか。恨み言の一つもぶつきたくなるが、起きていたことも気にしていることもばれてしまう。そうなる何故寝たふりをしていたのか説明しないといけなくなるため、こちらからは何も言えない。完全に手詰まりの状態であった。

——なんか、ものすごく悔しい。

結局できることはキリトを睨みつけることしかなく、中央広場の船着き場に着くまでの数分間、アスナは悔しさを視線に込め続けることでキリトを怯えさせ続けた。

中央広場の船着き場にテイルネル号を係留したキリトは、迷っていたことを相談すべくアスナに声をかけようとしたのだが、ここまで移動する途中に急に不機嫌になった彼女を前に尻込んでいた。思い当たることは精々が居眠り運転寸前の状態でゴンドラを操船していたくらいだが、その程度で彼女が不機嫌になるとも思えない。

「……何？」

怖い。とても怖い。何が怖いって目が怖い。

アスナから向けられる視線の鋭さに冷や汗を流すキリトであったが、話の内容は二人で決めるべき内容だ。

「い、いや、船が作れるって情報をアルゴに送ろうか迷っててさ……」
「……まだクエストの途中だけど、中途半端に情報出しても意味がなくない？」

「んー、それはそうなんだけどさ。次の街に移動するには必ず自分の船が必要な感じだし、この先のクエストをやるやらないは別としても、船を作れるって情報だけは流してもいいかなと思ってさ」

少なくとも船があれば迷宮区に近づける。単純に攻略だけを考え

るならば、船を作ってしまったえばそれ以上は不要という考え方もできる。自分たちの船はすでに完成しているし、素材を口モロに渡してから完成するまでに三時間という時間がかかることから、早めに情報を流すに越したことはない。キリト達は一隻でもいいが、攻略を担うDKBやALSは複数隻の船が必要になることは間違いないのだから。「ん、じゃあ休憩する前にアルゴさんに情報送っちゃいませよ。……先にエギルさん達にも情報流しちゃう？ あの人達もボス戦参加するだろうし、ギルドの人たちより先に作ってもらったほうが揉め事も無さそうだけど」

「あー、そうするか。じゃあ、アスナはそっちにメッセージ打ってくれ。俺はアルゴに送っとくよ」

数分の後、メッセージを送り終えた二人は昨日休憩を取った宿屋へと向かうべく、転移門広場を横切る。アルゴからの返信はまだ来ないが、本日中には間違いなく道具屋に情報が載ったガイドブックが設置されることになるだろう。

「ちよつと長めに休憩取りましようか。何時集合にする？」

「あー、十時……いや、十一時で……。ふわわ……」

「今からだと五時間か……。わたしはいいけど、君はそれで疲れ取れそう？ もう少し伸ばしてもいいんじゃない？」

完全に気が抜けたせいか、今までのものより大きな欠伸をしてしまう。涙目になりつつ横を見れば、アスナが心配げな顔でこちらを見ている。キリトの眠気は完全に自業自得だというのに、それでも心配してくれるアスナに感謝しつつ軽口を叩く。

「大丈夫大丈夫。まあ、時間に遅れたら叩き起こしてください」

「遅れるの前提なら伸ばせばいいじゃないの、全く」

彼女の心配そうな表情はあまり見たくないのだ。アスナの表情が心配から呆れに変わるのを見て満足しつつ、二人は宿屋の中に入った。

<<ロービア>>の南東エリアは様々な商店が水路に軒を連ねる商業エリアだ。

NPCのゴンドラで移動する場合は、一回一回降りせねばならないしその度に料金がかかるため事前にある程度目星をつけて移動せねばならなかった。しかし、ティルネル号という自分たちのゴンドラを持った今、寄り道はし放題だ。船を停泊させて陳列棚を覗いてみたり、気になる店があれば棧橋に船を止めて店内に入ったりとしていれば時間はあつという間に過ぎていく。

小物やアクセサリー類を売っている商店にはアスナも目がないように、瞳をキラキラと輝かせながらウインドウショッピングを楽しんでいた。これもまたアスナの本来の姿なんだろうなあと、後ろから見守りつつキリトも陳列棚に目を向ける。その品揃えは水の街らしいと言わなければならない、アクアマリンやサファイアといったゲームでは水属性が与えられるような宝石が用いられたアクセサリーが多く、その効果もAGIやDEXの補正がかかるものがほとんどだ。

キリトは視界の端にある現在時刻に視線を向ける。十二月二十二日午後一時。明後日には世間ではスパイスの効いた揚げ鳥とケーキを食べる日になる。この世界でクリスマスと言う概念があるかどうかはわからないし、そもそもこの階層は砂浜でヤシの実にストローを刺して飲んでいる方が様になる程度には南国的な世界観だ。せめて雪の一つでも降ってくればとは思いますが、この気温ではそれを望むべくもない。

確かにクリスマスと言うには雰囲気はない。だが、世話になってくる相棒にプレゼントするくらいなら許されるだろう。指輪はエルフクエの報酬ですでに一つ装備しているし、買うならネックレスかイヤリングだろうか。

キリトは視線をアスナ、自らの所持金、目の前の陳列棚の順に動かしていく。

キリトの所持金はこの階層にしては破格の六桁に近いコルが貯まっていた。キリトがメインで装備している皮装備はドロップ品が手に入りやすいし、フィールドボスや階層ボスのラストアタックボーンナスによって数層上のステータスを持った装備も確保している。武器や防具の強化素材は狩りで手に入るため、実質的にコルを使う機会

が消耗品の購入と手数料その他程度に限られる。軽金属装備を取ったアスナは防具の更新をしていかねばならないが、キリトは防具に金をかける必要が現状ないため、資金面でかなり余裕が生まれるのであった。

ラストアタックやドロップ品はアスナの協力なくして確保できない。パーティーとは共助共援である以上、キリトだけが得をしてはいけないのだ。

キリトは再びアスナに視線を向けた後、陳列棚に戻して商品の価格を確認していく。

目を付けたのは雫型のサファイアの飾りが付いたイヤリング。性能はAGI+5。値段はアスナがもらったクエスト報酬の指輪の効果は、確かAGI+1だったはずだ。値段は一万コルをちよつと超えるくらいで、強化済の軽金属装備を一部位くらいは買えるかもしれないが、クリスマスプレゼントに「鋼鉄製プレストプレート」の+6です、受け取ってください」等と言われるのは流石に嫌だろう。性能優先のキリトとて微妙な気分になるのは間違いない。

それに、せつかくのプレゼントだ。頻繁に変えねばならない防具よりも、長く使ってもらえる物の方が良いだろう。このイヤリングをアスナが気に入るかどうかは不安ではあったが、イヤリングを装備したアスナを頭の中で軽く思い浮かべ、まあ似合うだろうと判断する。アスナがこちらを見ていないのを確認してから、陳列棚をタップし売買ウィンドウを出して目的のイヤリングを購入する。チャリオンという音と共にキリトの所持金から代金が引かれ、ストレージにイヤリングが収納される。

やるべきことが終わり、さてとアスナに目を向ければ相変わらず陳列棚の前をウロウロとしている。その様子は随分と熱心に見えたが、何かを買おうとしているようには見えない。

「アスナー、そろそろいいかー?」

「あ、うん、今いく」

店を出て棧橋に係留したテイルネル号に乗り込んだ後、前の座席で周囲を見渡しているアスナに疑問に思ったことを投げかける。

「なあ、アスナ。随分と熱心に見てたけど、ああいう宝石系が好きなのか？」

キリトの質問にアスナは一瞬キョトンとしたが、すぐにふふっと笑って答えた。

「うん。女の子は誰でも……とは言わないけど、アクセサリーが好きな人は多いんじゃないかな。宝石自体にはそれほど興味はないんだけど……青い宝石って綺麗だから、結構好きなのよ」

なるほどとキリトが頷くと、アスナは「見る分にはだけどね」と最後に付け加えた。

どうやらサファイアはアスナの好みではあるらしい。ならば、サファイアのイヤリングはプレゼントとしては及第点にはなるだろう。安心したキリトはホッと一息ついた後、先ほどふと思いついたことを口に出す。

「そういえばアスナ、防具の更新はしなくていいの？　<<軽金属装備>>取ったんだし、スタテッドとかプレーテッドの部位をもう少し増やした方がいいと思うんだが」

「ああ、そういえばキリト君、お勧めの防具屋が第四層にあるって言うてたわよね。ちょっと行ってみてもいい？」

第三層のエルフ野営地でスキルの相談をされたとき、確かにその話をした記憶がある。その時は青銅製のブレストプレートのみを購入するに止めたが、今回の防具更新では可能な限り全体を一新してしまわなければならない。皮が土台になっていても、金属部分が多少増えるだけで防御力が上がるのがゲームと言うものなのだから。

「ああ、もちろん。防具屋の近くにおすすめのレストランもあるからさ、防具の更新終わったらついでに昼飯にしよう」

ベータの頃に食べた蟹グラタンは絶品だったし、貝の蒸し煮も肉厚でとてもおいしかった。少なくとも魚介系の料理は外れることはないだろう。思考を食事に切り替えたキリトはゴンドラを操作しつつ、その味を思い出していた。

鋼鉄製のブレストプレート、鋼板を左右に縫い付けたレザースカ―

ト、平らなりベツトを打ち込んだグローブとブーツ。一新された装備は重量を抑えつつ、防御力を大幅に向上させた。ほぼ全ての防具を更新したのは初めてのためどうしても新しく買った装備に目がいつてしまう。

「随分と気に入ったみたいだな？」

「うん。金属の防具ってあんまり好きじゃなかったけど、いざ装備してみるとやっぱり安心できるわね」

防御力の数値はもちろんのことだが、やはり見た目の面でも金属の防具というのは頼りになる。目の前の黒い人は全身皮装備だが、そんなことを思ったりはしないのだろうか。

「キリト君は金属防具装備しようと思わないの？ 装備して初めて思ったけど、皮装備だけってちよつと不安にならない？」

「んー。ラストアタックボーナスの防具を強化すると、下手な金属装備よりも防御力出るからなあ。ただ、数値はともかく耐性面が不安なのは事実だな。特に行動不能耐性は皮装備じゃどうしようもない所はあるけど、こればかりはな」

確かに彼の防御の数値は、金属装備をしているアスナよりも高いから驚きだ。全身がレアドロップで固められているが、その中でも<<肩>>部位の<<コート・オブ・ミッドナイト>>はフル強化され、この階層で販売されているプレート装備よりも高い防御力を持っている。布装備が主要金属防具より性能がいい時点で、階層ボスのラストアタックボーナスの異常さがよくわかるだろう。

アスナはほとんどの防具の更新を行ったが、やはりと言うべきかキリトはその必要はないらしい。

ならばこの近くにあるお勧めのレストランに向かおうと、キリトを促す。しかし、店を出た直後に聞こえたキリトの「そういえば」という声に足を止め、視線を向ける。

「金属防具あまり好きじゃないって言ってたけど、何か理由でもあるのか？ 重くて動きにくくなるってのは確かにあると思うけど」

「物理的に重いつてもあるけど、それよりは心の面で……かな」

「心の面？」

「うん。君は笑っちゃうかもしれないけど……聞いてくれる？」

アスナの言葉にキリトが頷くが、本当につまらない理由だ。他人が聞けば、命がかかっているのに何を言っているんだと言いたくなるに違いない。だがそれでも、当時のアスナには譲れない理由だった。

「はじまりの街の宿屋に籠っていた時ね、完全に部屋に引きこもっているわけじゃなくて、パンを買うための外出だけはしていたの。その時に、金属装備をしている人をたまに見かけたんだけど、それを見て思っちゃったのよね。すごく、この世界に馴染んでるなあって」

はじまりの街は中世く近世の大都市をモチーフにして作られている。そのせいか、ヨーロッパの騎士が身に着けていたような金属製の鎧が風景にマッチしていた。

「いやだな、って思ったの。この世界に馴染みたくなんてない。わたしの本当の世界は、現実世界なんだって。……意地のようなものだったんだと思う。だから、わたしは皮装備にしたの。皮のジャケットとかなら現実にもあるし。本当に、つまらない理由。でも、自分には大切なことだった」

アスナが話し始めてから、目の前の少年は一言も発していない。それでも視線はこちらを向いていて、しっかりと聞いてくれているのがよくわかる。

「考えが変わったきつかけは第二層のボス戦でブレスを受けたとき。あの時は君が庇ってくれたけど、君の体力が赤くなっているのを見て、ゾツとしたわ。わたしがキリト君を殺しかけた。もしわたしの防御力が高かったら君は庇わずに回避を選択できたんじゃないかって」
「アスナ、それは……」

キリトが何か言おうとしたが、首を横に振ってそれを抑える。そんなことない、アスナに責任はないと彼は言うだろう。確かにあの時、アスナを庇った理由はわからないと彼は言った。恐らくそれは事実なのだと思う。だが、彼にその行動を取らせた原因は間違いなく自分にあるのだ。自分がトールラス王をしつかりと警戒していれば、遠隔攻撃を受けても問題ない程度の防御力があれば、彼は自分の命を懸けず

に済んだかもしれないのだから。

「君とパーティーを組んでいたけれど、わたしは本当の意味でパーティーを組んでいなかった。自らの準備不足はパーティーメンバーの命を危険に晒すつてことを、わたしはあの時まで理解できていなかった。それから理性と意地の板挟み。頭ではわかっているのに心が拒否した。まあそれも、第三層の主街区で同じ部屋で休憩したときに君が解決してくれたんだけど」

無理に否定する必要はない、無理に折り合いをつける必要はない。その言葉を聞いて、アスナはこの世界のことを一か零かで考えるのをやめた。例えば金属で全身を覆ったとしても、この世界の住人になるわけではないのだと考えるようにした。

この世界に馴染む必要はない。だが、やるべきことはやろう。自分のために、そして自分を助けてくれた彼のために。

話を一旦区切ったアスナは、本当に面倒な人間だなと自嘲する。アスナの表情は間違いなく苦々しくなっているに違いない。

「金属防具一つ装備するのにこんな理由が必要なんて、馬鹿らしいわよね。ごめんなさい、つまらない話をしてしまつて」

苦笑いと共に、こんな話を真剣に聞いてくれていたキリトに謝罪した。結局は大事なものを失いかけるまで意地を張り続けてしまったという話なのだ。なんと愚かなことだろうと、アスナは顔を俯かせる。

「……つまらない話なんかじゃなかったよ。少なくとも、俺には」

お互いに無言な時間が十秒ほど続いた後に発せられたキリトの声は、アスナの自嘲を否定するものだった。

「その、今の話の内容だとき、君が自分を強化することに、俺が少しは力になれたつてことでもいいのかな？」

力になつたところではない。凝り固まつた価値観を変えてくれた張本人だ。だというのに、恐る恐る顔を上げたアスナの眼に入ってきた彼の表情は不安げで、言葉もたどたどしい。急に変わったキリトの様子に驚きつつアスナが頷きで返すと、それにホツとしたのかキリトの不安そうな表情が柔らかい微笑に変わる。

「なら、良かったよ。ベータテストの知識以外で、君の力になれているなら、良かった」

その言葉からは彼が安堵していることを感じとれる。だが、アスナは疑問に思った。彼が不安になるような話をしたつもりはない。むしろ、彼に対して感謝を伝えることができる内容だったはずだ。一体どのような理由から、彼は不安を感じたのだろうか。

「……君は、いつもわたしを助けてくれてるよ」

こう返すのが精一杯だ。

何か誤解をされている気がしてならない。だが残念なことに、アスナは彼が不安になった理由の見当をつけることができなかつた。

第二十二話

アツアツの蟹肉山盛りのグラタンをスプーンいっぱいに掬い、頬張る。

現実世界で出来立てのグラタンを口の中に放り込めば、口の中がやけどを通り越して爛ただれる可能性すらあるだろう。しかし、このソードアート・オンラインの世界では口の中を火傷する心配はない。蟹肉とクリームが生み出した旨みと、その旨みを損なわない程度の温かさが口の中を埋め尽くす。

相棒が言うとおおり、この蟹グラタンはアスナの味覚を十分に満足させる味だった。もぐもぐくんと飲み込んだ後、ふうと一息吐いて一言。

「幸せ……」

アスナの様子をテーブルの向かい側から見ていた少年が苦笑いをしている。確かにちよつとはしたなかつたかもしれないが、今のアスナにはどうでもよいのだ。昨日の晩御飯にパニーニを齧ってからも食べていない。腹ペコなアスナにとって最も重要なのは、目の前の蟹グラタンを口の中に放り込む作業に違いなかった。

「結構当たりだろ？ このレストラン」

キリトの言葉に大きく頷く。

料理の味もさることながら、このレストランは街中の隠れ家といった造りで、アスナにとっては珍しくまた好ましい雰囲気だった。

「ベータの時は疑問に思ってたんだ。周りにはからっからの砂漠なのに、なんで魚介中心のメニューなんだろうって。その疑問がやっと解けたよ」

肉厚の貝——ハマグリに似ている——を口に入れたキリトの表情がほにやりとした笑顔になる。一緒に歩いているときや戦っているときは年上のような凛々しい雰囲気なのに、ご飯を食べているときはとても幼く見える。その笑顔は女性から見てもかわいいと思えるものでアスナの顔が熱を持ちそうになるが、蟹グラタンを頬張ることでごまかすことに成功する。しかし、彼が無防備な笑顔になるのも無理

はない。本当に美味しいのだから。

蟹グラタンはもうすぐ半分食べ終わる。その後は、貝の蒸し煮だ。レストランに入る前にキリトからおすすめのメニユーは蟹グラタンと貝の蒸し煮だと聞いていた。流石に一人で二品を食べるには量が多いため、どちらにするべきかとメニユーを見て唸っていたアスナに、一個ずつ頼んでシェアしようとしてキリトが提案してくれた。持つべきものは優しい相棒だわあとありがたくその提案に乗り、蟹グラタンを半分おいしく食べ終えたアスナの前には同様に半分ほど残された貝の蒸し煮が置かれている。

自分が食べていた蟹グラタンはキリトの前に置かれ、たった今スプーンで掬ったキリトが一口目を頬張ろうとしているところだ。よし自分も食べようとアスナも貝の蒸し煮をスプーンで掬ったが、そこでアスナは気づいてしまった。

自分は今、とても大胆なことをしているのではないかと。

アスナは目線を下に向ける。そこには美味しそうな貝の蒸し煮がある。

アスナは目線を正面に向ける。そこには美味しそうにグラタンを咀嚼している相棒の姿が。

再びアスナは目線を下に向ける。そこには先ほどまで彼が食べていた貝の蒸し煮がある。

ボツとアスナの顔が沸騰する。

これは、これはどう考えてもあれではないか。大変なことをしてしまったという焦りと、それに気づいてしまったことによる恥ずかしさで、アスナの思考がぐるぐると回転しだす。

「アスナ？ 急に固まってどうした？」

その言葉にはっとして視線を向ければ、キリトが怪訝そうな顔をしている。手を前で振りながら「な、なんでもない」と答えるが、どうやら彼の不審を除くには不足だったらしく、目線が動くことはなかった。

「そ、その……」

「その？」

「……っ！ やっぱりなんでもない！」

そう、なんでもないのだ。そういうことにしておくしかないのだ。

——間接キスだなんて、言えるわけないでしょう！

シエアすると言ったのは彼だが、様子を見るにこのような意図があつたようには思えない。つまり、気にしているのはアスナだけということだ。自分だけが気にしているなんてばれたら、恥ずかしいどころの話ではない。穴があつたら潜りたくなってしまふ。

目の前では、追及を諦めたのかキリトが再びおいしそうに蟹グラタンを食べ始めた。自分がこんなに動揺しているというのに、何故この男は平然としているのか。彼にとつて自分は間接キスなど気にする必要のない相手ということなのか。

それはそれで複雑だ。文句の一つでも言いたくなるが、口に出せば間違いなく藪蛇だ。

今の自分はさぞ恨めしそうな顔をしているに違いない。その表情を彼に見せるのも悔しくなってきた。アスナは視線を下げる。アスナの持つスプーンの上にはぷりっぷりの肉厚の貝が乗っており、「はやく食べて」とこちらを誘惑している。

意を決して、アスナは貝を頬張る。おいしい。

先ほどまでの恥ずかしさはどこへやら、貝の旨みを感じたことによる幸福感が脳内を支配する。食い気は色気に勝ることを、アスナは身を持って知つたのだつた。

先程まで顔を赤くしたり、こちらを睨んだり、幸せそうな顔になつたりと随分とせわしない表情をしていたが、食事を終えたことで彼女の百面相は終わりを告げたらしい。食後の満腹感と幸福感に包まれ、一緒に頼んでいたワインを飲みながら、キリトはアスナの様子を観察していた。

ここが現実世界であつたなら未成年がワインとは何事かと怒る人もいるのであろうが、この仮想世界では未成年飲酒を咎める法律は存在しない。現実世界では十四歳のキリトがワインやビールを頼んだところで何の差支えもないのであつた。残念なことに飲酒による酪

酩酊感を得ることはできないため、ベータテストでは成人したプレイヤールから「酔えない酒に何の意味があるんだ」という苦情が出たと聞いたことがあるが、楽しむ分には十分ということそのまま実装されたのだろう。

——酒もいいけど、ジンジャーエールとかコーラも飲みたいよなあ……。

現実世界ではポピュラーだった飲み物が、この世界には存在しない。未成年のキリトにとっては、やはり酒よりも飲み慣れた炭酸飲料が飲みたいと思うのは仕方のないことだろう。上層に行けば出てくる可能性もあるし、なるべく早い段階で出てきてほしいものだと思うつつ、ワイングラスを傾ける。

空になったワイングラスをテーブルに置いた後、対面に座っているアスナに視線を向ければ、彼女の前にはすでに空のグラスが置かれていた。食事中とは違い完全に普段の自分を取り戻したようで、クールな雰囲気フェンサーの細剣使いさんの表情に戻っていた。

その様子を見て、キリトの親譲りの悪戯心が疼く。最終的に怒られるだろうが、これは突ついていい話だ。この質問をしたらきつと楽しいことになるに違いないと直感的に感じたキリトは、顔がにやけそうになるのを全力で抑えながらアスナに問いかけた。

「なあ、アスナ。さっき कोरोコロと表情が変わってたけど、一体何考えてたんだ？」

「な、なっ!? なんでもないって言ったじゃない!」

涼しげな顔が一瞬で真っ赤になる。

これほど動揺するアスナを見るのは珍しいなと笑みがこぼれそうになるが、ここで笑ってしまっただけは意味がない。キリトは暗めな表情を作り、追い討ちをかける。

「いや、なんかこつち睨んでただろ? 食事時に睨まれるって余程だからさ、何か気に障ることしたかかって」

「ち、ちがっ! そんなことないわよ! ただ……」

キリトの言葉を即座に否定したアスナであったが、やはり躊躇いがあるのか顔を赤く染めたまま俯かせる。

「ただ？ 嫌なことじゃないんだったら、言ってほしい」

「……うう……」

キリトが促すと、小さい声で唸る。

普段はおつかないクールなお姉さんであるが、意外と攻められると弱いことをキリトは最近知ることができた。随分とかわいらしい姿だったが、アスナはそれから黙り込んでしまう。アルゴにからかわれていた時はひたすらに怒るだけだったが、キリトにからかわれるのはどうやら勝手が違うらしい。怒らせる前に切り上げよう、キリトはそう判断した。

「……そんなに言いにくいことだと思わなかったよ。からかってごめん」

第四層来て彼女との距離が近づいた気がしたせいで、どうやら調子に乗ってしまったのだろう。からかうつもりで本当に不快感を与えてしまつては元も子もない。謝罪をしつつ軽く頭を下げ、チラとアスナを窺つて見るがやはり彼女は黙り込んだままだ。これは本格的に怒らせてしまったのかもしれない。彼女が何か言うのを待つべきか、それとも話題を終わらせるために移動しようと言うべきかキリトは悩む。そのキリトの逡巡^{しゆんじゆん}を察してかどうかはわからないが、先に動いたのはアスナだった。

「………か………つたの」

「えっ？」

ポソリと、アスナが呟いた。上手く聞き取れ無かったキリトは思わず聞き返してしまつたが、それによって指先をもじもじとさせはじめ、先ほどよりも強烈なかわいさを発揮したアスナの姿に、キリトの思考が一瞬飛びそうになる。

「だから、恥ずかしかつたの。男の人と食べ物をシェアするなんて、その……」

「あー……なるほど」

しかし、続けられたアスナの言葉に飛びかけた思考は一瞬で正常に戻される。

どちらを頼むか悩んでいたアスナに、半分ずつ食べようと提案した

のはキリトだ。アスナも喜んでいたら問題ないと思っていたし、キリトもそういう意図があったわけではない。だが、キリトとアスナは間違いない年頃の男女なわけで、キリトはともかくアスナからすれば看過できない事態だろう。それでも、キリトが気にせず食べているのを見て、優しい彼女は嫌々ながらも食べてくれたに違いない。

自分の気の利かなさに腹が立つ。これはもうひたすらに謝るしかない、キリトは頭をがりがりと掻いた後、深々と頭を下げた。

「あまりにも不躰ぶしつけだった。逆に気を使わせてしまつてごめん、嫌だったよな？」

「べ、別に嫌だなんて言っていないじゃない。謝る必要なんかないわよ……」

「そ、そうですか？」

こくと頷いたアスナは、顔を赤く染めてはいても確かに嫌悪感を出してはいない。

確かに、この仮想世界で食べかけだの使いまわしだのを気にしても意味がない。床に落としたお饅頭が三秒経つまで汚れない世界なのだから。

キリトの気が利かなかつたのは事実であるが、アスナ自身が嫌ではないと言っている以上、キリトが気にしすぎるのは逆に悪いだろう。そもそも、彼女が恥ずかしいと主張していたのは料理をシェアするという行動であつて、キリトが気にしてしまったことは特に問題視していなかったのだ。

「今度からは俺も気を付けるよ。次にこういうときがあれば、取り皿か何かももらえるか聞いてみようぜ。……そろそろ行こうか。大型船とやらを探す時間だつて必要だしな」

「……だから、別に嫌じゃないつて言ってるんだけど……。まあ、いいわ。行きましようか」

立ち上がったキリトにアスナも続く。ちらとアスナに視線を向ければ、先ほどまで赤かった顔は冷静沈着な細剣フエンスサー使いの顔に戻っている。買い物や食事という楽しむべき時間は終わった。これから始まるのはこの世界の本質、命を懸けた争い事の時間なのだ。

件の大型船を発見したのは午後四時半頃のことだ。十五メートルほどはある青みがかった黒に塗られたその大型船には、シートがかけられた多くの木箱が載せられていた。十人乗りの観光用ゴンドラよりも大きいというのに、乗員はNPCが四名だけで全員が武装しているのが見て取れる。積み荷を終えたのだろう大型船は南東エリアから出航し、それを見失わないようキリトとアスナはティルネル号である程度の距離を保ちながら追跡を開始した。

ティルネル号は鮮やかな白と緑で塗られた優美な船だ。カラーリングは緑十字をモチーフとしており、名前の由来となったダークエルフのお姉さんキズメルの妹、ティルネル氏の職業である薬師から連想したものだっらしい。衛生や薬の代名詞と言うだけあって、白と緑のカラーリングはとても清潔感があり見栄え良いものであったが、今回ばかりはこの色を選んだことを後悔するしかない。

時刻は夕方となりあたりは暗くなってきたとはいえ、白い船体はどうしても目立つ。船頭たるキリトは初の圏外航行を気にする暇もなく、ひたすらに大型船との適切な距離を保つことに苦心し続けた。

前を進む大型船はその巨体のわりに俊敏な動きを見せ、細い天然水路やその突き当たりにあった滝をもともせず航行した。当然キリトもそれに続くわけだが、滝をくぐった直後に出現した差し渡し四メートルはあるであろう大型の蟹型モンスター<<スカットル・クラブ>>との戦闘になり、足止めを受けている間に大型船を見失ってしまった。

最初の蟹を倒したのが午後六時、そして現在、時刻は日付が変わり十二月二十三日午前零時過ぎだ。水路が張り巡らされたこの水没ダンジョンは、キリトの予想を大きく超え極めて巨大だった。大型船の手がかりを見つけることは未だにできず、休憩を挟みながらであるとはいえ、ゴンドラでの水路を移動や戦闘、水路の途中途中にある扉の先の探索と丸々六時間も続けていれば、流石に集中力が続かなくなってくる。

街に戻るといふ選択肢もそろそろ出てくる頃であるが、舳先へさきに立つて接敵したスカトル・クラブをレイピアで突ついている相棒の動きは鈍っていない。だが、その覇気は少しだけ衰えているように思えた。

それでも持ち前の俊敏さは健在で、大きなハサミによる攻撃を屈みこむことで回避し、逆にその隙を上段突き<<ストリーク>>で追撃し大きくノックバックさせる。相手が行動不能の状態で距離が開けば後は簡単だ。キリトは全力で櫂かいを前に倒し、無防備となった蟹の腹に船首に取り付けられた衝角を突き刺す。火炎熊マグナテリオスの角で作られた衝角によるラムアタックの威力は強烈で、刺された所から発生する高熱は水棲モンスターの弱点らしく、半分ほど残っていたHPはあっけなく削り切られた。

四メートルもの巨体がポリゴン片に変わった後、ドロップした蟹の脚肉や爪肉を何とも複雑そうな顔で見ながら、アスナは一言呟いた。「この蟹肉だけは、プレイヤーに絶対売らない」

気持ちはわかる。これからあの蟹グラタンを食べる時は、必ずスカトル・クラブの姿が思い浮かぶようになるだろう。それでも、美味しいものは美味しいのだ。

「グラタン美味しかったじゃないか。料理持ちが増えれば蟹饅頭とか蟹焼売とか食べられるようになるぞきつと」

「……食べたくなるからやめていただけるかしら？」

間違いなく美味しいに違いない。食事を取ってからすでに十時間近く、空腹感も中々のものになってきており、いっそドロップした蟹肉を焼いて食べたいと思う程度には腹ペコだ。残念なことに相棒が全力で拒否するだろうからできないのだが。

ふうと溜息を一つついたキリトは、マップから現在地を確認する。ダンジョンの全体像はいまだ不明だが、もうそろそろ中枢部に到着しそうな雰囲気だ。蟹肉の味を頭を振ることで思考の中から追い出し、キリトは船を微速前進させた。

アスナの左手がサツと上がり、静止せよという意味だと判断したキリトは水路の右側にあった小さい船着き場に船を止める。水路の奥

に広い空間があり、そこから人の声が聞こえてくると伝えてきたのはそれからすぐのことだ。

アスナの視線は水路の奥に向けられているが、残念なことにここから奥をはつきりと窺うことはできない。船着き場からは階段が伸びており、その先には扉が一つ。今までもこのような扉をいくつも見てきており、その都度奥を確認していったが大抵はクエストに関係ない枝道で、その奥には錆びた武具のようなお宝とは言えない物が入った宝箱が置かれているだけだった。

重要度から考えれば間違いなく水路の奥の広間が格段に上のはずだ。しかし、キリトは妙にその右の扉が気になった。

「アスナ、奥の広間も気になるけど、先に扉を確認しよう」

キリトの言葉に、アスナは意外そうな顔をこちらに向けた。

「扉の奥なんて、どうせ枝道か何かでしょ？ 明らかに広間の方が重要そうじゃない？」

「ああ、それには同意する。でも、この水路は一本道だ。広間で不測の事態があつた場合に、あの扉の先に逃げ込まなきゃならない可能性もある。退路の確認はしておくべきだと思う」

なるほど、とアスナが頷く。それを同意と見たキリトは船首に収められていた舳もやい綱を引っ張り出し、先に船着き場へと飛び移っていたアスナに渡す。ティルネル号を係留したアスナは階段を登り、扉を音を立てぬようそっと引く。中は脇道ではなく広めの部屋となっており、壁際には様々な物品が置かれていたが、残念なことに宝箱のようなものは見つからなかった。

キリトは<<索敵>>により部屋の中を確認するも、敵の気配も見当たらない。モンスターがpopしないとは限らないが、咄嗟に逃げ込んでも問題ない部屋であると判断しても良いだろう。

「キリト君、これ見て。この布、普通の布じゃなさそうよ」

キリトが索敵による警戒をしている間に、部屋の奥へと進んでいたアスナが一枚の布を抱えて戻ってくる。布と言うには少々大きすぎるサイズのそれは、銀色がかった灰色をしており明らかに普通の布ではない。表面を軽く叩き、表示されたプロパティ・ウィンドウに書か

れた説明文を読んだキリトは驚きで思わず声を上げた。

「おいおい。何だこの布、この存在自体が隠蔽ハイディングが必要ですよって言うようなもんじゃないか」

「<<アルギロの薄布>>と銘打たれたそれは、水中で暮らす蜘蛛の糸を用いて織られ、周囲を水で囲まれた場所ならばおおつた物を見えなくするという代物だった。

「まーたスニーキング系なの？ わたし、ホントこの手のクエスト苦手だわ」

アスナの表情はまさになんかという感じだ。

確かに気持ちはわかる。潜入系のクエストは正面突破も可能だが敵が強力なことが多いし、素直に潜入しても見つかったら敵に囲まれるような状況に置かれることが多いのだ。単純なモンスター討伐のクエストよりも、その難易度は高い。

「まあ、今回は<<隠蔽>>スキルの必要がないだけマシってことで。この布を被せておけば、ティルネル号が見つかることはないってことだし」

「布があるだけマシ、か。まあいいわ、この布以外には目立った物はなしし広間に行きましょう？」

ティルネル号に戻り、広間手前まで足を進めた二人が見たのは積み荷の木箱を受け取るフォールンエルフ達の姿だった。ロービアに帰還するであろう大型船をアルギロの薄布を被ることでやり過ごした後、フォールンエルフ達が木箱を持って広間中央にある扉の奥へと入っていくのを確認する。

クエストウィンドウを確認すれば、更新の表示は出ていない。どうやら木箱の中身をしっかりと確認しないといけないようだ。一つの区切りだと判断したキリトは、アスナに自分の考えを伝える。

「エルフクエに繋がっているとはな。木箱の中身を確認しないとまずいことになりそうだ。正直、ここで一旦区切って街に帰るのはありだと思っけど……どうする？ アスナ、疲れてるだろ？」

「……うん、そうね。ちよつとだけ疲労感を感じてる。でも、もう一度ここまで来るのはさすがに手間だわ。わたしはこのまま行けると思

うけど、キリト君から見てわたしは無理そう?」

素直に疲れがあると申告したアスナを見て、キリトは思わず笑顔がこぼれる。自分の状態が悪いということ伝えるのは勇気が必要だし、信頼できない相手には言えるものではない。

「いや、俺も大丈夫だと思う。しっかりと隠れていけば、でかい戦闘になるようなクエストでもなさそうだしな。……じゃあ、このまま続行ってことで。もうひと頑張りしましょうか」

キリトから見てもアスナが無理をしているようには見えない。自分の状態も悪くはないし、このままクエストを進めるべきだろう。アスナがしっかりと頷くのを確認し、キリトはティルネル号を広間中央の棧橋に横付けした。係留されたゴンドラは破壊不能になるため、奥に進んでいる間に帰る手段がなくなるということはないだろうが、念を入れるべく先ほど手に入れたアルギロの薄布で覆う。

「よし、じゃあスニーキング開始だ。迅速に、慎重に、で」

キリトは頑丈そうに見える鉄扉を慎重に開けていく。物音は聞こえない。

三センチほど開いたところでギギという金属が擦れる嫌な音が響くが、潤滑スプリーの類は持っていないため、キリトはさらに慎重に扉を開ける。ようやくできた隙間から覗けば、二十メートルほど通路が続き、奥では左右に分かれている。通路の中ほどにはこちらに背を向けたエルフの番兵がいるが、奥へと歩いて行っており、そのうちの右の通路へと姿を消していった。

番兵ならば巡回しているに違いない。ならば必ず戻ってくる。そう判断したキリトは、扉を人が通れる分だけ開けた後、アスナと共に通路へと飛び込んだ。

第二十三話

エルフ番兵の巡回を上手くやり過ぎし、下層への下り階段を見つけたのは午前二時近くになったのことだった。

街に帰るころには空も明るくなっていることだろう。完全に睡眠時間が不規則になっていくがこればかりは仕方あるまい。朝焼けの風景を想像してしまい、思わず出そうになった欠伸をかみ殺した後、キリトは下の様子を窺ってみるが暗さでどうにもはつきりとしない。

「二本道だし行くしかないんでしょうけど……眠いの？」

「どうやら噛み殺した欠伸はアスナにばればれだったらしい。キリトはうんむと素直に頷く。

「ロモロさんのところで寝ないからよ。まあ、揺り椅子を占拠したのはわたしなんだけど、起こしてくればよかったじゃない」

「いや、すぐよく寝てたから起こすのも忍びなくてさ」

「元々長く眠れないタチなんだけど、確かにあの時はぐっすり寝れたわね……」

エルフ野营地やロモロの家では随分ぐっすり寝ていた気がしたが、普段はそうでもないらしい。睡眠不足によってアスナが動きを落としていたのは第一層の迷宮区で会った時だけで、パーティーを組むようになったからは見たことがない。問題ないと言いたいが、疲労というものは蓄積されていくものだ。機会があれば、早いうちに寝れない理由を聞いてみたほうがいいのかもしれない。

「まあ、ぐっすり寝れるならそれに越したことはないな。……止まっても仕方がないし、行くか」

階段を下りて下層へ進むと、すぐに目的のものが見えてきた。

大きな倉庫になっていと思うれる部屋の左右に運ばれてきたであろう木箱が置いてあり、部屋の奥に頑丈そうな二枚扉が。そして、その両横に先ほどの番兵よりも少し格が高いであろう衛兵らしき二体のフォールンエルフが立っていた。

キリトが今いる位置から倉庫に入ろうとすれば、間違いなく衛兵の視界に入ってしまうだろう。交戦したとしても負けることはまずな

いだろうが、増援が来る可能性を考えるとやはり戦うのは避けたい。

「どうするの？　このままじゃここに足止めになるけど」

「うーん……」

アスナの言うとおり、完全に足止めされた形だ。倉庫の入り口は衛兵の視界の中に入っている以上、どうにかして視線を逸らした後に、近くの木箱の影まで走り込むしかないだろう。

「ちよつとやり方は古臭いけど、やってみるか……？」

キリトは足元に落ちていた小石を拾い、背後にいたアスナにちらと視線を向けた。頷きが返ってくるのを見た後、キリトは右側の木箱に向けて拾った小石を投げる。カランカランという音が倉庫に響き、その音を聞いた衛兵が二人して右側に移動した隙に、二人は左側の木箱の影まで一気に駆けた。

衛兵に気付かれていないことを木箱から顔を出して確認した後、重めの蓋をそつと開けて中を覗き込む。何も入っていない。二人は顔を見合わせた後再び中を覗き込むが、やはり何も入っていなかった。隣の木箱も、さらに隣の木箱も同様に中身は空だ。

「どういうこと……？　もう中身は持ち出されたのかしら？」

「そう考えるのが妥当だとは思うけど……」

確認するはずの木箱の中身がない以上、完全に手詰まりだ。

キリトとアスナは二人して頭を悩ませるが、当然の如くいい案は思いつかない。キリトは手がかりがない以上この場から離脱するべきかとアスナに提案しようとした。しかし、部屋の奥から扉の開く音が、次いで少なくとも七、八人の靴音が聞こえてきた。

——やばい……！

キリトのゲーム勘が叫ぶ。これは動かないと必ずマズい事態になると。

キリトは即座に目の前の箱の蓋を開けると、「中へ」とアスナに囁く。緊迫した雰囲気を感じたアスナは素直に中に入り、キリトも同様に中に入った後、五ミリほど隙間を開けて蓋を閉める。

「ひゃっ……!?　ちよ、ちよつと……」

アスナが驚いたように声を出す、キリトは口元に指を立ててそれ

を制する。右手からは心地よい柔らかさが伝わってくる気がしたが、それに構っている暇はない。バレたら間違はなく面倒なことになるが、必要な情報を得ることができる可能性が極めて高いのだ。

細長い視界から見えるのは、ハンマーを持った職人風の大男。そして、金属の鎧と深紅のマントを身に着けた長身瘦躯ちようしんそうくのエルフらしい男だった。残りの男は恐らくマントの男のお付なのだろう、戦士風の装備をしている。

ハンマーの男は<<エドゥー>>という名のフォールン・エルヴン・フォアマン。マントの男は<<ノルツアー>>という名のフォールン・エルヴン・ジェネラルと表示されている。驚くべきは<<ノルツアー>>で、視線をフォーカスしカラーカーソルを表示させれば真っ黒。つまり、完全な格上であることがわかる。戦闘になれば確実に負けることを理解し、キリトの身体が強張る。

「んんっ……」

キリトが緊張したことを雰囲気で察したららしいアスナが、籠った声と共にびくりと跳ねるのを感じる。不安に感じているだろうアスナの様子も気になるが、外を見ているのがキリトだけである以上視線を逸らすわけにはいかなかった。

フォールンエルフ達は一か所に固まって会話をしており、本日の荷揚げで木箱の予定数が集まり組み上げは五日後に完了するということらしい。何を組み上げているのかという情報が出てこないことに苛立ちを感じ、直後再びびくりとしたアスナに右肩を掴まれるが、キリトは構わずに視線を外に向け続ける。

ノルツアーが「頼んだぞ」とエドゥーの腕を叩き、それに頷いたエドゥーを見て満足げな顔をしている。もっと詳しい話を聞きたいが、どうやら進行の報告だけで終わりのようだ。

——まいったな。具体的な情報がまるで無いぞ。

こちらからはモーションを起こせない以上、彼らが話した情報のみで判断するしかないが、その情報があまりにも少ないことにキリトは溜息をつきたくなる。会話の終わったノルツアーは扉の奥へと戻って、それを追うことは恐らくできないだろう。その後には多少無理をし

てでも倉庫の中を調べるべきかとキリトは思考を巡らせていたが、奥に戻ると考えていたノルツアーの視線が不意にキリト達が隠れている木箱に向けられた。

瞬間、キリトの背筋が凍る。

視界ができるように持ち上げていた蓋を閉じる。この状況は下手をすれば戦闘になりかねない。見つかったと確信するまではこちらから動くことはないが、いざ戦闘となればカーソルが真つ黒なノルツアーとお付の戦士が複数人だ。勝つことは恐らく不可能に近い。ならば、木箱から飛び出て進んできた道をひたすらに駆け抜けて逃げられないだろう。

コツ、コツと焦らすように足音が近づいてくる。動揺しているだろうアスナに視線を向ければ、口を手で押さえたまま目尻に涙を浮かべており、どうやらかなりの恐怖を感じていることがわかる。

足の速さはアスナの方が上だ。ならばアスナだけでも何とかと、いつでも飛び出せるようぐつと身体に力を入れる。

「……！……！」

アスナが涙目のままかぶりを振るが、キリトは大丈夫という意思を視線で送る。それが伝わったかどうかはわからないが、アスナの動きが止まり、同時に近づいていた足音も止まる。恐らく木箱から三メートルほどのところだろうか。

ノルツアーが唐突に未だエルフ族の禁忌に縛られていることに嘆き、追加の情報だと確信したキリトは耳を澄ませる。

人族からこの倉庫にある資材を購入していること。すべての秘鍵^{ひけん}を手に入れ聖堂の扉を開き、人族の最後の魔法を消し去るのが目的であること。そして、第一の秘鍵^{ひけん}を奪還する作戦を建てているということだ。

全てを語り終えた後、無数の足音が遠ざかり大きな扉が閉まる音がある。木箱の外からは人の気配が感じられなくなり、行動が自由になったはずなのだが、キリトの身体は動くことはなかった。

第一の秘鍵^{ひけん}とは、キリト達が第三層で奪い返したものだろう。つまり、フォールンエルフ達はダークエルフに対して再び襲撃計画を立て

ているのかもしれない。聖堂や秘鍵ひけんという単語はベータテストでも出てきたが、その情報量や具体的な単語の多さはキリトの知るベータテストのそれとは比較にならない。また、人族の魔法というものがどういうものかはわからなかったが、人族というだけあってプレイヤーに影響する可能性もある。

「ねえ……」

嫌な予感がする。具体的に何が危ないのかはわからないが、キリトの勘がそう言っている。項うなじの後ろ当たりがチリチリとしており、こういったときのキリトの勘が外れることはなかった。

「キリト君……」

とにかくキャンペーンクエストに関連があることは明らかである以上、ダークエルフの拠点に行く必要があるだろう。確かフィールドボスを倒した後に行ける村の先にあつたはずだ。ならば、フィールドボスを倒した後そのまま拠点まで移動してしまうのがいいかもしれない。

「キリト君つてば……」

と、そこでアスナから呼びかけられていたことに気付く。声は少々震えており、視線を向ければアスナは先程の涙目のままこちらを見ている。

「ごめん。大丈夫か？ 怖かったよな……？」

クールな彼女が涙目になるなど珍しい。落ち着かせようとキリトは自由になる左手でそつとアスナの頭を撫でる。彼女が怖がるのも仕方ないだろう。外を見ていたキリトと違い、アスナは何が起こっているかを確認できないのだ。パーティーメンバーが身体を強張らせるほどの緊張をしているのに、自分だけが何もわからなければ不安や恐怖を感じるのは間違いない。

どうやら落ち着いてきたらしい、アスナのぼーとした視線がこちらに向けられている。木箱の中は暗いためよくはわからなかったが、若干顔が赤くなっているようにも見えた。

「……………！ って違うわよつ。君、いつまでこんなことしてるつもりなの？」

しかし、どうやらキリトとアスナの考えていることは違つたらしい。はっとしたアスナの視線は一瞬で険しくなり、キリトに抗議の声を上げる。はて、こんなこととはなんだろうとキリトは何気なく自身の右側に視線を向け、自らの右手がとんでもないことになっていることを確認した。

「しゅみやっ……!」

謝罪になつていない謝罪の声を上げ、アスナのブレストプレートとチュニツクの間に潜り込んでいた右手をキリトは慌てて抜こうとする。

「ひゃあっ! ちょ、ちよつと、乱暴にするのやめてよお……」

しかし、抜こうとした右手に力が入つたらしく、もにゅもにゅという弾力に富んだとても柔らかい感触が右手に伝わつたと同時にアスナが切なげな声を上げる。その声とアスナの涙目の視線にキリトの緊張は一瞬でマックスになり、聞こえるはずのない心臓の鼓動がバクバクとキリトの耳に届く。これ以上は失敗できないと、キリトは右手を器用に折りたたみ鎧の横から抜くことに成功した。

——た、大変なことをしてしまつた……!

緊張で紅潮していたであろう顔は真つ青になつているだろう。今ここでハラスメント防止コードによつて黒鉄宮送りこくてつきゆうにされても何の文句も言えない。

「あ、アスナ、ごめん。悪気はなかつたんだ……」

「……………」

今キリトにできることはひたすらに謝罪をし、目の前の少女に慈悲を乞うことだけだつた。両手の手のひらを合わせ頭を下げる。しかし、キリトの謝罪を受けてもアスナは無言で、チラと目を開ければ胸元を両手でギユツと押さえているアスナの姿が見えた。

「あ、あの、アスナさん……?」

「……わざとだつたら、放り出すところだつたわ」

キリトはぶんぶんと頭を振ってわざとではないとアピールする。そのキリトの様子に呆れたのか、アスナは溜息一つついたがそれ以上は何も言つてこなかつた。どうやらこのゲーム最大のピンチは何と

か潜り抜けることができたらしい。

アスナの視線はレーザーの如く鋭いが、その視線から逃れるべくキリトは再び木箱の蓋を開ける。衛兵の視線が怖いが、音を立てぬように人が出れる程度の隙間を開け先にアスナを脱出させた後、キリトも側板をまたいで外に出る。

衛兵の動きを見てこちらに気付いてないのを確認し、やれやれと一息つくときリトは改めて見える範囲の倉庫を見渡す。ノルツアールと話していたエドゥーはフォアマン、つまり職人だ。問題はそのフォアマンが何を作ろうとしているかだが……。

「ねえ、どうする？　ここの木箱を一つずつ見ていくなんてさすがに現実的じゃないわよ？」

キリトと同じように倉庫を見渡していたアスナが、ずずいと顔を突き出してくる。先ほどは涙目だったが、発せられた声と表情は真剣なものだ。キリトは頷くと、同様に真剣な声で答える。

「木箱の数は少なくとも五十以上だ。フルパーティーでも全部確認しようとするれば一人当たり最低八、九個。アスナの言うとおりの現実的じゃない。流石に全部確認しろってことはないだろう……恐らく全部空箱だと思う」

「そう仮定すると、どういうことかしら。まさか木箱自体が『資材』って訳ないだろうし……」

アスナの言葉に、キリトの脳内のパズルがパチーンとはまる。そして、同時になるほどと納得する。

「アスナ、ちよつと静かにしてくれ」

キリトはそう言って耳を澄ませる。この倉庫にいるのはキリト達二人と衛兵が二人のみ。当然話し声などなく、キリト達が話すのをやめると完全に静まり返るはずだった。しかし、どこからか、恐らく方向からして扉の奥から何かを叩く音が聞こえてくる。

——間違いな、槌音だ。

キリトの考えは当たっていたらしい。この倉庫に積まれた木箱は全て木材として使われるのだろう。そして、この層でこれほど多くの木材を使うものなど一つしかない。

「アスナ、この倉庫の『資材』は全て、船の材料だ」

キリトの突拍子もない言葉にアスナは目を丸くして驚いたようだったが、一瞬考え込んだ後「なるほど」と呟いた。

「この層で移動するには船がいる。当然、誰かを襲撃するにもね。何故木箱という形で木材を購入していたかはわからないけど、エルフ族の禁忌とやらが絡んでるんでしょうね」

「恐らく、そうだと思う。……欲しい情報は手に入ったし、脱出しよう」

小石を投げることで衛兵の視線を再び逸らし、倉庫から脱出したキリト達は駆け足で通路を移動していく。疲労の蓄積によって気が抜けていたせいが入り口近くの番兵に見つかるといいうハプニングがあったものの、無事に船着き場までたどり着き、交戦する前に出航することができた。

ティルネル号に被せていたアルギロの薄布は耐久値ギリギリまで削られていたものの、無事にその役目を果たした。帰還した後にアスナに裁縫スキルで修復してもらえばまだまだ使うことができるだろう。

帰り道にも蟹や亀と何度か戦うことになったが、ティルネル号のバーニング・チャージ（ラムアタック）で蹴散らして無事にダンジョンを脱出。同時にクエスト更新の音が響き、「手に入れた情報を、しかるべき相手に伝えろ」という目的に更新された。

しかるべき相手とは何とも抽象的で判断に困る。ロモロか、水運ギルドの人間か、はたまた他の誰かなのか見当がつかなかったが、疲れた頭で気が抜けた状態とあってはまともな考えなど浮かぶ訳もない。街に帰って休んでから考えようというキリトの提案をアスナが全面的に受け入れる。いま二人に必要なのは、休息以外の何物でもないのだ。

ロービアの街に帰還したときには時刻は二十三日午前三時半になっていた。主街区広場まで戻るのが煩わしく、街を歩いてすぐの南東エリアにある、宿泊中にゴンドラを泊めておける小屋が併設された

小体こていな宿屋を新たな拠点に選んだ。

部屋に入って早々にアスナがベットに倒れ込み、キリトもへたり込むように揺り椅子に腰を下ろす。脳がスイッチを切れと命令してくるが、このまま寝るわけにはいかない。少なくとも本日の探索の情報を記憶が新しいうちにするべきだろう。

「アスナー？ ミーティングできるかー？」

反応はない。どうやら完全に落ちてしまったらしい。

音を立てないようにベットに近寄れば、枕に顔を埋めたまま完全に静止している。しかも、枕の前方にメニユーウィンドウを出したままだ。声をかけるべきかと思ったが、寝つきが悪いと言っていた割にくっすりと寝ている彼女を起こすのは忍びない。

数瞬考えた後、キリトはアスナの右手を掴み何度か上から下にフリック操作を行い、三回目の挑戦でウィンドウを消すことに成功する。

右手をそつと元の位置に戻したキリトは、自らも寝るべく隣の自分の部屋に向かおうと扉に足を向けた。しかし、もう一度アスナの状態を見た後、メニユーから毛布を取り出して起こさないようにそつと被せる。ベットには当然備え付けの毛布があるが、アスナはその上で寝てしまっていて動かすことはできない。風邪というバツトステータスがこの世界にあるかどうかはわからないが、暖かくするに越したことはないだろう。

「おやすみ、アスナ。またあとでな」

毛布がアスナにしつかりと被さっていることを確認した後、キリトは極力音を立てずに部屋を出た。

目を覚まして時計を確認すれば、時刻は午前十一時半を過ぎた所だ。アルゴに必要な最低限の情報提供を行った後、ベットに潜り込んだのは午前四時少し前であったから、たつぷり七時間以上は寝たことになる。ベットから身体を起こし身支度——と言うほど立派なものではないが——を整えたキリトは、昨日できなかった相談をすべく隣室のアスナの元を訪れたがノックをしても反応がない。すでに一階に

降りているのかとも考えたが、その場合律儀な彼女ならばメッセージの一つも寄越しているはずだろう。

躊躇いつつも、こうしていても仕方ないとキリトはドアを開ける。アスナの姿はすぐに見つかり、身体を横に向けキリトが掛けた毛布を抱え込むように寝ていた。遠目から見てもわかる彼女のあどけない寝顔に、キリトは心がほっこりとする。しかし、寝顔を無断で見続けるのは失礼だろうと、キリトは揺り椅子を窓際まで運び腰掛けた。ゆるらと揺れながら窓の外を見れば、幸運なことに窓は水路側に作られていたようで、ゴンドラに乗ったプレイヤーたちが行き交っているのが見て取れた。

恐らくは商業地区の武具屋やレストランなどに向かっているのだろう彼らをぼーっと見ていると、再び睡魔が襲ってくる。たつぷりと寝た筈なのだが、揺り椅子と窓から差す暖かな日差しは眠気を誘うには十分だったらしい。

本来ならばアスナを起こしてミーティングを行うべきだ。しかし、心身共に疲れ切っているアスナを無理矢理起こすのは忍びない。同じ部屋にキリトがいれば驚くだろうが、逆に彼女が起きればすぐに起こしてもらえらるだろう。アルゴから受け取った情報では、本日開催されるフィールドボスの攻略会議は十七時からだ。ならばどうせ時間は空くのだし、レベルも十分に上がっているのだからたまにはゆっくりしても問題ないはずだ。

ふわわ、と欠伸を一つしてからキリトは力を抜いて揺り椅子に身体を預ける。もし自分の家を買うことがあれば、必ず揺り椅子は購入しようと思ひやりした頭で考えてから、キリトは再び意識を手放した。

明るさと暖かさを感じ、アスナは目を覚ました。

寝起きでぼんやりとしているのが疲れは感じない。時間が経てば頭もはつきりとして来るだろう。「んう……っ」と声にならない声を出し縮こまった身体を伸ばした後、掛かっていた毛布を握ったまま身体を起こす。視界の端にある時計を見れば、時刻は午後零時半過ぎを示している。宿屋に着いたのが午前三時半だったはずだから、どうやら

九時間も寝てしまったらしい。道理で頭も身体もスツキリしては
はずだと、アスナは思考を巡らし始め、固まった。

「九時間!」

アスナは思わず立ち上がった。どうやらとんでもなく長い時間寝
てしまっていたらしい。足元に毛布が落ちるが、それを気にすること
なくメニューを開きメツセージを確認する。九時間も寝ていれば当
然キリトが先に起きているに違いない。ならば寝ている自分を見て
メツセージを送ってきてもおかしくないと思ったが、未読のメツセー
ジは一通も無かった。

彼も疲れていたしまだ寝ているのかもしれないと、足元に落ちた毛
布を拾いベットに腰を下す。そういえば何で毛布が掛かっているん
だろうと、アスナは寝る前の記憶を検索するが、残念なことに部屋に
入った瞬間に意識が飛んでいたため思い出せない。こうしてベット
に寝ているということは自分でここまで移動したのだろうか、毛布を
被って寝た記憶はないし、事実備え付けられた毛布はアスナの身体
の下にあった。つまり、この毛布はこの部屋の物ではないということに
なる。

そこまで考えて、アスナは掛けられていた毛布をぎゅっと抱きしめ
た。この部屋のものでないならば、この部屋に入れる誰かのものだ。
自分以外でこの部屋に入れるのは一人だけで、アスナはこの毛布に見
覚えもあった。

——キリト君……。

ベットの上に倒れ込んだ自分を見て、わざわざ毛布を掛けてくれた
のだろう。アスナは毛布に顔を埋め、キリトのことを思う。

——優しいな……。ホント、甘えてばかり……。

彼の優しさを感じたことによる安堵感と、また甘えてしまったとい
う罪悪感がアスナの心を占めていく。

記憶が飛ぶ前に、キリトと一緒に部屋に入ってきたことは覚えてい
る。恐らくミーティングでもしようと思ったのではないだろうか。
彼は睡魔に負けずにそれを優先しようとしていたのに、アスナは自分
に負けてベットに倒れ込んだ。その事実がアスナの心を締め付ける。

何故自分はこうなのだろう。彼に迷惑を掛けたくない、役に立ちたいと思っているのに、結果的に彼に甘えてしまっている。しかも、これでは駄目だとわかっているのに、今の状況に安堵し嬉しく思っている。

自制心には自信があった。現実でのアスナは自分を常に律してきたし、それに伴う結果も出してきたつもりだった。それなのに彼の前では何故か甘えが前面に出てしまう。

なんと情けないと涙がこぼれそうになるが、いつまでもうだうだとしてはいられなかった。キリトと相談しなければ、昨日のことも今日のことも何も決められないと、アスナは再び立ち上がる。

とにかく隣の部屋に行こうと、アスナはそこで初めて部屋の全体を視界に入れ、固まった。

窓際に置かれた揺り椅子の上で、今アスナが会おうと思っていた少年が目を閉じていたのだ。

「……………!?!」

声を出さなかったのはアスナのファインプレーと言うべきだろう。

物音を立てないようそつと揺り椅子に近づき、斜め上からキリトの寝顔を窺う。きい、きいと小さい音を立てて揺れている揺り椅子の上で寝ている彼の表情は、普段よりも幼さを感じさせた。この状況に、アスナは顔を紅潮させると同時に理解する。

恐らく彼は自分を起こしに来たのだろう。しかし、自分がまだ寝ているのを見て起こすよりも待機することを選んだのだと。

揺り椅子の横に移動し、背もたれを掴んで軽く揺らしてみる。ロモロの家では立場が逆だった。つまり、自分は彼に寝顔を見続けられていたのだろう、今の自分が彼の寝顔を見ているように。

それに思い至り、アスナの顔がさらに熱を持ったように感じる。

なぜ彼がロモロの家で寝なかつたのかわからなかつたが、こうして逆の立場になってみると理解できた。信頼できない人間の傍で寝ることなどできない。つまり、寝顔を見られるということは信頼されているということに違いないのだ。

自分の顔は間違いなく笑顔になっているに違いない。それほどに、

アスナはこの状況に嬉しさを感じていた。迷惑をかけているに違いない、困っているに違いないのに、彼はこうして自分に無防備な姿を見せてくれている。

残念なことに彼の寝ている姿を長々と見ていることはできない。アスナの睡眠時間が長すぎたせいで、今日やることに制限が出てしまっているのだ。これ以上時間を無駄にすることはできなかった。それでもと、アスナは思う。

——もう少しだけ、こうしていたい。

アスナは手に持っていた毛布をそつとキリトに掛けた後、その場にしゃがんで揺り椅子を揺らす。

あと五分だけ。

頭の中でそう決めたアスナは、椅子を揺らしながらキリトの寝顔を見続けた。

第二十四話

ゆさゆさと揺さぶられる感覚に意識が覚醒する。寝る前には掛けられていなかったはずの毛布が身体に掛けられており、目を開ければ明るい陽射しが窓から差し込んできている。左肩には誰かの手が置かれていたようだ。

「おはよう、キリト君」

左上から聞こえる目覚めの挨拶。ふわふわとした頭に届く彼女の穏やかな声は、キリトの意識を活性化させるのを助けた。

——ああ、そうか。アスナの部屋で寝てたんだっけか。

未だぼんやりとしている目をこすり視界をはつきりとさせた後、彼女がいるであろう方向を見上げ、キリトもまた挨拶を返す。

「おはよう、アスナ。よく眠れた？」

「うん。疲れなんて全く感じないくらいスッキリしてる。……ごめんなさい。こんなに長く寝ちゃって」

現在時刻はもうすぐ午後一時といったところか。アスナが何時頃に起きたかはわからないが、そう長い時間は経ってしまい。恐らくは十二時半頃には起きていたのではないだろうか。キリトが起きたのは十一時半であったことを考えれば、長く寝てしまったと謝られるほどの時間をキリトは待たされていない。そもそも、自分も二度寝に勤しんでいたのだから。

「謝る必要はないよ。俺も起きたの十一時半だったし、ご覧の通り二度寝してたからさ。あ、そうだ、毛布ありがとな」

「それはこっちのセリフなんだけど？ この前といい、今日といい、君ってホント優しいわよね」

「そうか？ 人が目の前で何も被らずに寝てて、手元に毛布があれば誰だってやると思うけどなあ」

毛布をストレージにしまい、揺り椅子から立ち上がる。ぐーっと全身の筋を伸ばせば、二度寝する前よりも身体が軽くなっていることを感じる。この世界に肉体の疲労を計測するようなステータスはキリトが知る限り無いはずであるが、睡眠前と後では明らかに身体の動き

に差が出る。恐らくは休息を取ったことよって脳の活動が活性化されるのだろうが、もしかしたら隠しステータスのようなものがあるのかもしれない。

「よし、じゃあ行動開始としますか。アスナはもう身支度できてる？」
揺り椅子の横に立っていたアスナに向き直り準備が良いか聞けば、すぐに頷きが返ってくる。昨日彼女は着替えることなくベットに突っ伏したから、当然と言えば当然だろう。

「じゃあ、まずはミーティングといきたいところだけど……先に飯でいいかな？ 胃袋が悲鳴を上げそうだ」

「うん、わたしもお腹ペコペコ。ミーティングは食事しながらにしましょう？」

食事とミーティングで一時間として、十七時から行われる攻略会議には三時間ほど余裕がある。フィールドボスを攻略すればそのまま次の街に向かうことになるだろうし、攻略会議の前の時間を使ってフィールドボスの偵察を行えばいい感じに時間が潰せるだろう。無論アスナに相談しなければならぬだろうが、反論が出ることはあるまい。

じゃあ行こうかとアスナに声をかけ、キリトは扉に向かう。昨日無理をした分、今日は比較的ゆつたりとした一日になりそうだ。攻略を急ぐ必要があるが、周り足並みを整える必要は当然あるし、毎日毎日無理な攻略をする必要はないのだ。

—— 後ろの細剣^{フェンサー}使いさんは、これを言ったら怒るかもだけど。

「何怠けたこと言ってるの！」と怒り出す彼女の姿が目に見れば、思わず苦笑いがこぼれる。今の表情をアスナに見られれば、また変なことを考えてると疑われかねない。キリトはいつもより少々足早に、宿屋の一階へと足を進めた。

本日のランチに白身魚の香草焼きを選んだアスナであったが、注文を終えたというのにメニューを見ながらまだ悩んでいる。どうやら追加で頼みたいものがあるようで、チラとこちらに視線を向けメニューに戻し、またチラとこちらに向ける。

「ね、ねえ、キリト君。蟹グラタン……半分食べてくれる？」

昨日アスナがダンジョンでスカットル・クラブからドロップした蟹肉を複雑そうな目で見ていたのをキリトは思い出す。味は極めていいが、あの見た目の蟹から拾ったものを口に入れていいのか。恐らくそんな葛藤をメニューを見ながらしていたのだろうが、どうやら勝ったのは見栄よりも食欲だったらしい。

キリトも空腹であったし、何なら二品頼んでもいいかなーと考えていたところだったため、アスナの提案に否はない。キリトが領けば、アスナの表情がパアツと笑顔になりNPCに追加注文を行う。最近気づいたことであるが、彼女は意外と食いしん坊な所がある。美味しいものを食べるためにここにいる訳じゃないと言っていたが、食事を楽しめる余裕が持てるようになったのは良いことに違いない。

だが、とキリトは目の前でニコニコしているアスナを見ながら一つの疑問を浮かべる。昨日ここで料理を半分ずつ分け合った時、目の前の少女は顔を赤くして恥ずかしそうにしていた。それなのに今日は彼女からはんぶんこしようと言ってくるとは、一体どういう風の吹き回しだろうか。

「なあ、アスナ。昨日の今日だけど、いいのか？ 取り皿ぐらいは貰ったほうが……」

下手をすれば藪蛇であるが、アスナが恥ずかしいと思うならそれは避けたい。キリトは躊躇いつつもアスナにお伺いを立ててみた。

「ああ、いいわよ別に。キリト君は気にしないでしょ？ わたしも、もうキリト君ならいいやつて」

「あ、そ、そう？」

コクリと頷いたアスナがグラスの水を飲むのを見つつ、キリトは何とも複雑な気持ちになった。想像していた答えとは全く違う、あっけらかんとしたアスナの言葉。自分が気にしないのは事実だが、キリト君ならいいやつとはどういうことだろう。それほど親しくなったことを喜ばばいいのか、恥ずかしいと思うことすら馬鹿らしいと思われるのをおぼろげに感じるのか。

心の中にもやもやとした感情が生まれるが、それがどういった方向

性を持っているのかキリトには判断できなかった。間違いなく彼女の発言が原因なのだろうが、意図を聞いてみようにもどうという理由で聞いていいかわからない。

キリトの視界には料理を持ったNPCがこちらに向かって来ているのが見てとれる。食事の前に結論の出なさそうな会話を振るものばかりらしい話だろう。グラスの水を一口飲むことで、キリトは気持ちを落ち着けた。

NPCのレストランでは、料理の待ち時間はほとんど無しに運ばれてくる。給仕NPCの手が足りてないときはその限りではないが、昼時も少し過ぎたあたりに入店したのでキリトとアスナ以外の客の影は見えない。そもそもが隠れ家的なレストランであるからプレイヤーの数は少ないし、これからクエストの情報の話をするので都合が良い。

頼んだ料理がテーブルに並べられていき、キリトの目の前に置かれたイカと魚が入ったパエリアから発せられた匂いがふわりと漂ってくる。早速食べようとスプーンで一掬いし口に運ぼうとした直前、目の前に座るアスナの視線がパエリアに向けられているのはつきりと確認する。

パエリアの皿をテーブル中央に向けて軽くずらす。すると、アスナの顔がパツと笑顔になりスプーンでパエリアを一掬いし、もぐもぐと食べる。

——なんか、かわいいなあ……。

ニコニコとしているアスナを見て、心がほっこりと暖かくなるのを感じた。静かに黙々と食べるより笑いながら食事をしたい。この世界で一人になり団らんというものを感じることはできないと思ってしたが、アスナとの食事は楽しみと癒しをキリトに与えてくれた。命がけの戦いで精神をすり減らしながらも前に進まなければならぬキリトにとって、彼女との食事の時間は間違いなく貴重な時間になっている。

一人では決して得ることができなかった時間を与えてくれたアスナに感謝してから、キリトも自らのスプーンを動かし始めた。

情報の整理はスムーズに終わることができた。造船クエストからエルフのキャンペーンクエストに繋がることをアルゴに伝えるべきかどうかというのが一番の議論になったが、DKBもALSもキャンペーンクエストを第三層で放棄している。ならば、続くクエストの難易度が極めて高いと知れば無理に進めることはないだろうから、現段階で知る限りの情報を伝えてしまったほうが良いということになった。

アルゴへのメッセージを作成し送信した後、レストランを出た二人はフィールドボスの存在する第四層のほぼ中央に位置する火山の火口に向かう。ベータテストでは大地の裂け目からマグマが見えるような灼熱の空間だったそこは、正式サービスでは満々と水をたたえたカルデラ湖になっており、その中央部を二つの頭を持った巨大な大亀がスイスイと泳いでいた。

<<双頭の古代亀>>と名付けられたそれは、その名の通り頭を二つ持つ大亀だ。キリトは權かゐを倒してテイルネル号で静かに近づいてみると、即座に反応したアーケロンがこちらに向かってくる。動きがあまり早くないのを確認したキリトは、アスナに合図してから亀に接近していく。

すると、今まで別々の方向を向いていた二つの頭が急にテイルネル号を捉える。直後、キリトの項がチリチリとし出した。

「右に旋回するぞー！」

キリトは叫びながらあらんかぎりの力で權かゐを倒し、全速で右に回頭、アーケロンの正面から離脱する。そして数秒後、旋回する前にテイルネル号がいた場所目がけて、アーケロンが猛烈な加速による突撃を繰り出していった。

「あ、あんなの直撃したらひとたまりもないわよ!？」

急旋回による遠心力を船首の縁へりに掴まって耐えていたアスナが、目を一杯に見開いて叫ぶ。

水没ダンジョンを攻略中に、モンスターがプレイヤーではなくテイルネル号に対して攻撃を行うということがあった。確認してみれば、

ゴンドラにも耐久力があり船着き場などに係留している時は破壊不能オブリエクトになるが、こうして航行している時に攻撃を受ければ耐久力にダメージが入る。当然耐久力が0になれば船は破壊されてしまうだろう。

船を破壊されれば、重い装備を纏ったまま水に放り出されることになる。浮き輪を持つていいるとはいえ、突撃による衝撃を受けた状態で咄嗟に装備できるかと言われると難しいものがある。

ありがたいことに突撃自体はしっかりと注意しておけば回避しやすいので、これだけを注意しておけば問題ないはずだ。

「頭が同じ方向を向いてから突撃発生までに結構時間あるから何とかなると思う！ 今度は近づいて近接攻撃のパターンも見よう！」
「了解！」

キリトはテイルネル号をアーケロンに近づける。キリトが操船を担当しているため、攻撃や防御は全てアスナに任せなければならなかったが、それに関してキリトは全く不安を持っていなかった。彼女は自分の命を預けるに値するだけの努力をしているし、実力を持っているのだから。

接近したアーケロンは噛み付き攻撃やヒレで水面を叩くといった攻撃をしてくるが、近接攻撃の威力は大したことがなく、アスナの細剣によるパライでも十分過ぎるほどに弾き返せることが分かった。最終ゲージの暴走モードになればどのような攻撃をしてくるかは分からないが、少なくともそれまでは突撃のみを注意していれば問題なさそうだ。

そう結論付けたキリトとアスナは、カルデラ湖を離脱し主街区へと帰還した。主街区で修理や補充を行い少々休憩を入れた後、そろそろ十七時というところで会場である北東エリアの広場へと向かう。

開始ギリギリ前に無事に広場に到着した二人は、いつも通り会場の端に腰を下ろす。広場の中央にはすでにリンドとキバオウが立っており、キリト達が広場に入ってきた時には視線をこちらに向けたものの、その後は前を向いて開始時間を待っていた。

午後十七時となり、会議が開始される。参加しているのは見慣れた

面々であるが、四、五名見たことがない顔が加わっているのがわかった。

「第四層フィールドボスだが、ベータテストとあまりにも環境が違うため、当然と言わなければならない。フィールドボス自体にも変更があった。ベータでは火山の火口の傍にでかい亀が居座っていたらしいが、正式サービスでは火口がカルデラ湖となっており、ボス自体も変更されている」

会議の前にアルゴに送った情報をリンドがそのまま読み上げた。こうして攻略会議が開かれているということは、DKBもALSも攻略組全員が乗る船を調達する目途が立っているということだ。しかし一隻作るのに三時間かかるため、一隻分の材料を集める度に口モロに船を作ってもらわなければならない。恐らく会議が終わった後も彼らは船の材料集めに奔走するのだろう。

アーケロンの突撃に対する注意と、転覆した際の対応についての周知が行われ、攻略会議は一時間かからずに解散することになった。階層ボスならばもう少しかかるのだろうが、今回はフィールドボスだ。初のレイドでの水上戦闘であるから多少戸惑いはあるかもしれないが、まずはやってみなければどうしようもないところがある。

フィールドボスの攻略は明日二十四日の午後三時から。出発は午後二時過ぎになるだろう。ならば、今日これからの時間と明日の午前中は主街区のクエスト消化ができそうだ。フィールドボス戦の前にレベルが一つ上がればいいなあと思っていると、厚いプレート製の鎧を着こんだ男が一人、DKBの集団の中からこちらに向かってくるのが見えた。

「あの、アスナさん。ちょっと時間いいだろうか」

DKBの前衛パーティーの一人、確かシヴァタという名前だったはずだ。高い身長に短髪と、正しくスポーツマンといった体の彼は、ちらとキリトに視線をやってからアスナに声をかける。言葉的にはアスナだけに用がある感じだ。

隣に座っているアスナを見れば、彼女もこちらに視線を向けている。恐らく自分には聞かせたくない話なのだろう。

「じゃあ、先に行ってるよ」

キリトは立ち上がり、広場の外へと足を向ける。後ろからシヴァタの「すまんな」という声が聞こえたので、背中越しに左手をひらひらと振り気にするなという意思を表示する。二人が何を話すかはわからないが、パーティーを組むには相手への気遣いも大事なのだ。

広場のすぐ近くの船着き場に留めたティルネル号に乗り込み、普段アスナが座っていない船尾側に付けられた椅子に腰を下ろしたキリトは何をする訳でもなくぼーっと水路を見る。大きな観光用ゴンドラや、複数名のプレイヤーが乗ったゴンドラが行き交っているが、稀に仲が良さそうな男女二人が乗った二人用のゴンドラが水路を進んでいる。北東エリアは劇場や公園などの観光できる場所が多いため、彼らのようなカップルのデートスポットとしてはもってこいなのだろう。

——デートかあ……。

女性に対する興味はあまり強くなかったキリトではあるが、人並みには女性とのお付き合いというものに憧れを抱いていた。現実世界でのキリトはパソコンおたくの根暗な人間という自覚があったし、周囲の人間にもそう思われていただろう。当然女性との関わりなどなく、この仮想世界でも女性と関わることなどほとんどないと考えていた。

しかし、何の運命の因果かわからないが、キリトはこの世界でも最上級の美貌を持つ少女とコンビを組んでいる。彼女の美しい点など上げようと思えばいくらでも上げることができるだろうし、そこから辺で一度でもアスナの姿を見たことがある男に聞けば、魅力的な点を長々と語ってくれるに違いない。美しいだの、綺麗だのといった言葉がぼろぼろと出てくるのだろうが、最近キリトは彼女の別の面の魅力にも気づき始めていた。

珍しいものを見てはしゃいだり、普段から考えられないような大笑いをしたり、意外と食いしん坊だったり、普段の姿を見れば想像のできないものをキリトは何度も見ることができている。クールでミステリアスな少女は、年相応の子供っぽい一面も持っていた。

その姿を見たことがあるのは、キリトと精々がアルゴくらいだ。そのことに若干の優越感を感じるが、キリトは先程の、恐らくこんなことを考えることになってしまった原因の出来事を思い浮かべ、溜息をつく。

シヴァタというプレイヤーは、キリトが知っている限りサバサバとした、他人に嫌味を感じさせない男だ。外見も男らしく、学校等に通えばある程度女子生徒から人気が出そうな容姿をしている。DKBの中でもそれなりの位置にいるのは、実力も当然だが、やはり外見や性格によるものもあるのだろう。人に慕われるには、やはり外見というのは重要なポイントなのだ。

そこまで考えて、キリトは自分の姿を見る。真っ黒だ。

日も落ちてきており、辺りはどんどん暗くなっていく。そんな中でキリトのように黒い服で全身を揃えていれば、存在感などたちまち無くなるだろう。顔は悲しいことに女顔で、かっこいいというには程遠い。身長も低く、とてもではないが頼れる男性とは言えないだろう。

キリトは再び溜息をつく。明日はクリスマスだ。その前日に男性が女性に声をかけるなど、用件は一つしかあるまい。現段階でアスナが明日の予定を入れるかどうかはわからないが、キリトを外させたということとはそういうことなのだろう。予定では主街区に戻らずそのまま次の村に行くつもりだったが、主街区に戻って一晩明かすことになるかもしれない。多くのMMORPGで採用されているクリスマスイベントの一つでもあれば、一人でも時間を潰せそうなものなのだが……。

もう何を考えても溜息が出る。なんと情けないことだろうか。

コンビを組んでいる女性が他の男とクリスマスを過ごすというのは、何とも複雑な気持ちにさせられる。女性経験が豊富であれば、彼女を引き留めることもできようが、残念なことにキリトにはそれが成せるだけの知識も度胸も存在しなかった。

アスナに対して恋愛感情があるわけではないはずだ。しかし、こういった状況に陥れば、この程度の葛藤は誰しもがするものではないだろうか。

——プレゼント、無駄になったかなあ……？

他にそういった関係の人間がいるのなら、キリトから贈られたアクセサリーなど喜ばれまい。自分が付けることもできるのだが、それはそれでとてもむなししい思いを味わうことになるだろう。

結局、キリトにはアスナがどのような選択をしたのか知るまでは何もできず、彼女がテイルネル号に戻ってくるまでの数分間を悶々と過ごす羽目になった。

シヴァアタ氏との会話は少々長くなってしまい、アスナは気持ち早足でキリトの待つテイルネル号へ向かっていた。

DKBとALSが合同でクリスマスパーティーを開くので、ぜひ参加して欲しいと誘われたのはシヴァアタが初めてではなかった。フィールドボスの偵察のために主街区を出る前からピコンピコンと何度もメッセージの受信音が鳴っており、内容はその全てがクリスマスパーティーやるので参加してくれというものだった。

クリスマスというものにはいい思い出はない。現実世界のクリスマスは、いつも通りの夕食にケーキがついたものを一人で食べ、自室の机の上に母親が参考書が置いてあるというものだ。同級生たちはクリスマスを楽しみにしてたが、終ぞアスナはその感覚を味わうことができなかった。

しかし、今はクリスマスに対する印象は少しだけ違った。この世界に來た当初はそもそも明日のことを考えることすら難しかったが、今では大分余裕ができてきたように思える。食事も、風呂も、この目に映す風景もアスナは楽しめるようになってきた。それも全ては隣に立ってくれている少年のおかげだと思っている。

彼がクリスマスのことを話題にすることは無かった。常に事実を見据え続ける彼は、日々を生きるのに必死なこの世界で、クリスマスなどという行事に現を抜かすなど馬鹿らしいと考えているのかもしれない。それでも、もし、叶うなら、大したものでもなくとも、彼とクリスマスを祝いたいと思ってしまった。

——そんなことしてる場合じゃないのはわかっている。でも……。

何も無いだろうということは理解していた。明日、アスナはキリトと共にフィールドボスを倒し、次の街へと拠点を移す。ボスの討伐は午後からだから午前中は時間が空くが、恐らく主街区のクエストを消化するために走り回ることになるはずだ。クリスマスらしさを感じられることなど、きつと一つもない。

寂しいと思ってしまうのは、アスナの心が弱くなってしまっているからだろうか。この階層に来てから、アスナはキリトに甘えっぱなしだった。無論、戦闘面で迷惑をかけたとは思っていないが、精神面では完全に彼に寄りかかっていたと言っている。

船着き場に辿り着き、ティルネル号の上で座っている彼の姿が見えた。水路を眺めながら何かを考えているように見える彼の横顔はとても大人びている。

聞いてみようか、迷う。

クリスマスパーティーの参加は断った。

そもそもシヴァアタ氏が直接声をかけてきたのは、参加要請と同時にキリトへの謝罪を頼むためだったのだ。ラストアタックを取り続ける彼への嫉妬から、＜＜ビーター＞＞を参加させたくない強く主張した者がいたらしい。

クリスマスパーティーには参加できない。ならば自分と……。

そこまで考えて、アスナは首を振った。言えば、彼は快く受け入れてくれるだろう。しかしそれは、たった一日であれ彼の歩みを止めることになってしまう。ただでさえ甘えていると自覚しているアスナに、それは許容できなかった。

クリスマスくらいゆつくりしようとは言えない。でも、プレゼントを贈るくらいは許されるはずだ。

装備品やアイテムといったものは望まないだろう。そもそも彼の装備品は一級品だし、アイテムは消費してしまえばそれで終わりだ。可能なら、形に残るものを渡したい。

——裁縫スキルで、何か作れないか見てみようかな。

裁縫スキルで作れるものならば、重量的にも軽いし、使い続けることができるはずだ。幸運なことに材料となる布地はある程度確保し

ている。贈るものさえ決まってしまうえば、装備制作でパツと作ってしまふことができる。

何を作るかはまだわからないが、喜んでくれると嬉しい。寂しさが少し軽くなるのを感じつつ、アスナはテイルネル号の上で待つキリトの元に向かった。

第二十五話

夜間のモンスターは昼間に湧く同種のモンスターよりもレベルが若干高く設定されており、モンスター討伐によるレベリングを旨とする攻略組の者達には格好の経験値稼ぎの時間と言える。キリトもアスナもこの階層でこれ以上のレベリングは厳しくなりつつあったが、主街区の討伐系クエストの報酬と合わせればそれなりの効率で稼ぐことができる。

時刻は十二月二十三日午後十一時。フィールドボス攻略会議の終了から五時間かけて主街区のクエストを片っ端から受注し消化していき、キリトはレベル19、アスナは18と、この階層でこれ以上は厳しいと言える程度には自身の強化に成功していた。十分な成果を上げ満足した二人は拠点にしている南東エリアの宿屋へと戻り、一階ロビーに設置されたソファアに腰を下ろしてミーティングを行っていたが、笑顔のアスナと対照的にキリトは自分の表情が冴えないものであることを自覚していた。

今キリトの悩みの種になっているのは明日の予定だ。主街区のクエストも消化し終えたためこの街で行うべきことが完全に無くなっている。フィールドボス戦の出発は午後二時過ぎであるから、明日の午前中はフリーの時間となることが確定していた。本来ならば開いた時間は全てレベリングに費やすべきなのだが、昼の時間帯に主街区東の森で狩りをしたところで碌なレベリングにならない。かといって、水没ダンジョンまで向かうには移動時間も含めると大した時間狩りができないし、その後に控えているフィールドボス戦の前にテイルネル号の耐久値を削るのはよろしくないだろう。

第一層ボス戦の前々日からパーティーを組んできた二人は、ここまでの約三週間を全力で駆け抜けてきた。朝起きて狩りをして、クエストを消化し、短い時間の休憩を挟んでまた狩りに行く。誰がどう見てもハードスケジュールであったのだから、偶然できた半日の空き時間を休息のために使うのは何も問題がない。しかし、明日の日付は十二月二十四日。日本人ならば誰もが知っているであろうビッグイベン

トの日付であることが、キリトを悩ませる。

思い浮かぶのはD K Bのシヴァアタに声を掛けられていたアスナの姿。リンド以外のD K Bのメンバーから直接、しかも二人きりで話したいと言われることなど今までなかった。これが示していることは、D K Bというギルドからの話ではなくアスナ個人への話であるということだ。

パーティーを組んでいるとはいえ、いや、パーティーを組んでいるからこそ、個人的な話に対して突っ込むのは良くないだろう。ならば、明日は自由行動ということにして我関せずの態度を貫くべきだろうか。それはキリトにとって一番楽な結論であったが、現実的な問題が理由となって却下される。

——いや、駄目だな。午前中はともかく、フィールドボス戦の後のことは決めておかないとどうしようもない。

ティルネル号は一隻しかない。午前中はどうにでもなるが、フィールドボス討伐後の選択肢が主街区に戻るか次の街へ向かうかの二つしかない。クリスマスアの予定ならばメインは夜の時間だろう。つまり、どうしてもアスナの明日の予定をこの場で聞いておく必要がある。た。

攻略会議後に感じていたもやもやとした感情が、再びキリトの心を占める。聞くべきだが、聞きたくない。しかし、聞かなければどうしようもない。キリトが対面に座るアスナに視線を向けると、黙り込んだキリトを訝しく思っていたのだろうか、窺うような目でこちらを見ている。

結局、この話題から逃げることはできないのだ。パーティーメンバーならば明日の予定を聞くことは何の問題もない。これは必要なことだとキリトは自分に言い聞かせると共に、もやもやとしている自分の心に発破をかける。

「あ、アスナさん。相談したいことが、あります」

「……どうしたのよ、急に改まって。黙ったかと思えばそんな怖い顔で」

どうやら表情が強張っていたらしいが、今更どうしようもない。

「その、今日主街区のクエスト全部終わらせちゃったからさ、明日やる
ことがないんだ。だから、フィールドボス戦の集合までは自由に過ご
すとして、ボス戦の後なんだけど」

「……………」

そこで一度話を区切ると、アスナは無言で続きを促すようにこちら
を見ている。その視線を受けながら、キリトは極力感情を抑えて肝心
の質問をアスナに問いかけた。

「明日の夜、何か予定入ってますかね？ その、アスナに予定があるな
ら、主街区に戻ろうと思うんだけど……………」

キリトの言葉は、質問ではなく確認に近い。明日の夜、目の前の彼
女は自分以外の誰かとクリスマスマスを過ごすはずだ。言葉にしたこと
で、キリトの想像でしかなかった光景に現実感が伴い、もやもやとし
た感情が黒く濁っていくように感じる。自分の大切な相棒がたった
一日でも他人の横に立つという事実。ここで初めて、キリトは自らの
感情がどういふものであるかに気付いた。

恐らく、自分は嫉妬しているのだ。

アスナが自分以外の者の隣に立つ姿など見たくない。その光景を
想像するだけでも腹が立つ。自分に手を差し伸べてくれた彼女を誰
にも渡したくない。

そんな黒い感情が、キリトの心の中に沸々と沸き上がってきた。

しかし、それを表に出すことは許されない。自らを信頼してついて
きてくれる彼女に、自分の醜い姿は見せたくないのだ。キリトは
拳をぐっと握り締め、自らの黒い感情が表情に、言葉に出ることを抑
える。

こちらを見ているアスナは、じつとこちらを見たままキリトの質問
に答えていない。予定はある、じゃあ主街区に戻ろう。これだけの会
話を行うためだけに、キリトの精神は悲鳴を上げている。雰囲気能耐
えかね、キリトはアスナから視線を外した。

会話が終わってさえくれれば、キリトは彼女に無様な姿を見せるこ
となく部屋に籠れるのだ。頼むから早く言ってくれと、心から願う。

「…………君、本当に何も聞いてないの？」

やっと発せられたアスナの言葉に、即座に頷く。そうだ、何も聞いていないのだ。だから早く……。

——んん？

急に話が変わったように感じたキリトは、ばつと音がする勢いでアスナを見る。するとなんてかわいそうなのこの人、という視線がこちらに向けられている。

何かが、おかしい。

やれやれといった体で溜息をつき首を横に振ったアスナを見ながら、キリトは急激な流れの変化についていけず只々ぽかんとする他なかった。

「あのね、明日フィールドボスを倒した後に二大ギルド合同でクリスマスパーティーを開くのよ」

「……は？」

「確かに、キリト君を誘えないから謝っておいてくれとはシヴァアタさんに言われたけど……。まさか、本当に誰からも話を聞いてないとは思わなかったわ」

「……………」

くりすますぱーちい。言葉が出ない。開いた口が塞がらない。今まで自分が悩んできたのは一体何だったのだろうか。

散々思い悩んでいた会議後の会話の内容は、まさにキリトの見当違いだ。キリトが思い描いていたような会話の風景は吹っ飛び、新たにシヴァアタがアスナに頭を下げている光景が思い浮かぶ。

なんと、なんと馬鹿らしい。

考えてみればすぐにわかることだった。そういった目的で声をかけるなら、あんな大勢の人がいる場所でするわけがないではないか。攻略組内にアスナのファンは多いはずだ。誰かが二人きりで話したなどと声をかければ、間違いなく視線が向けられるなり邪魔が入るなりするに違いない。それなのに何もなかったということは、あの場でシヴァアタがアスナに声をかけるのは全員が知っていたということだ。

キリトの身体が横に倒れ、ソファーに沈む。そんなキリトの様子を

見たアスナのかわいそうなものを見る視線を一身に受けることになったが、キリトは全身から気力が抜けていくのを止めることができなかつた。

目の前でだらんとソファアに横たわり涙を流している相棒の姿を見て、アスナは溜息をつくのを抑えることができなかつた。誘えないから謝つといってくれとは確かに言われたが、まさか誰からも連絡が回っていないとは。

——もしかして、キリト君つてわたしの予想以上に嫌われてるのかしら……?」

いや、そんなことはないはずだと、アスナはすぐに自らの考えを否定する。

本当に嫌われているのなら謝っておいてくれ等と言われない。少なくとも両ギルドの幹部からキリトに対しての文句を聞いたことはないし、彼に不穏な視線を向けるのは極一部だ。ならば、今回は本当に偶然誰からもメツセージを貰えなかつたということなのだろう。

——とは言え、この状態を見るとなんか可哀相よね……。

余りの光景に笑いの一つも出そうなものだが、さめざめと泣いている姿は普段とは違いとて幼く見えて、母性本能をくすぐられるというか、よしよしと慰めてしまいたくなる。精神を持ち直した後のキリトのリアクションを想像するとそれはそれで楽しそうではあるのだが、本題はそこではない。キリトから問われたのは明日の予定だ。

「話を戻すけど、明日の予定は何も入ってないわよ。というか、今まで君が行動管理をしてきたんだから、わたしが勝手に予定を入れるわけないでしょう」

むくりとキリトが起き上がる。どうやら平常運航に戻ったようで、横になっていた時は流れていた涙はすでに止まっており、随分と器用なものだとアスナは何故か感心してしまう。

「クリスマスパーティー、行かないのか?」

「行かないわ。だから、明日主街区に戻る必要はないわよ」

パーティーの参加自体は既に断りを入れている。多くの人から連

絡を貰っていたため申し訳ないとは思うが、その全てが男性プレイヤーからのものであるし、一人だけ主街区に戻るということができない以上、キリトとコンビを組んでいる自分には参加の選択肢がなかった。

「……俺に気兼ねしてるなら、その、気にしなくていいんだぞ？　アスナが参加するってなればパーティーも盛り上がるだろうしき、クリスマスぐらい攻略を忘れても……」

だというのに、目の前の少年は自分を気遣って参加しろと言ってきた。この流れになることはアスナもわかっていた。わかっていたが、それでもアスナはいら立ちを隠すことができない。

「わたしは参加しないって言ってるのに、君はそんなに参加させたいわけ？　もしかして、明日誰かと過ごす予定でもあるの？」

「な、ないない！　そんなのない！」

勢いで明日予定があるんじゃないかと吹っかけてしまったが、もしここであるなどと言われたらアスナは盛大に動揺したに違いない。首を横にぶんぶんと振りながら否定する彼の姿にアスナは内心ほっとするが、それを表情に出すことなく続ける。

「なら、いいじゃない。そもそも、大げさなパーティーとかあまり好きじゃないの。だから、ボス戦が終わったらそのまま次の街に行く、それでいいわよね？」

確認の形を取っているが、これは決定だ。キリトとてクリスマスパーティーの話を書かなければこう言っていただろう。しかし、彼は未だ申し訳なさそうな顔をしている。本当に行かなくていいのか、自分のせいで行くと言えないんじゃないか、恐らくはそんなことを考えているに違いない。

「……納得して無さそうね？」

アスナの言葉にキリトがすつと視線を逸らした。目の前の少年は他人を気遣うことができる優しい人だが、時折妙に自虐的になる。君のせいでは無いと言っているのに、自分のせいだと思ひ込むのだ。

こういう時彼にはごまかしがきかない。ならばと、実に恥ずかしい本音を言わされることに恨みがましい気持ちになりながら、極力感情

を抑えて一言放つ。

「……君が一緒じゃないなら、参加しても意味ないでしょう」

結局はこれに尽きる。彼のいないパーティーに参加したところで楽しめるわけがない。そもそも、彼が一緒じゃないならクリスマスを祝う必要などないのだ。だというのに、彼はどうしてそれをわかってくれないのだろう。

ぽかんとしているキリトの顔が見えるが、パーティーに関してこれ以上のことを言うつもりはない。ソファアの背もたれに背中を預け、目を瞑り、腕を組み、ついでに足も組んでしまう。キリトが納得するまではこの体勢を崩さない。数秒、いや十秒ほど経ってから薄らと目を開けてみれば、キリトが少々顔を赤くして頬を掻きながらちらちらとこちらを窺っているが、それに構うことなく再び目を瞑る。

「わ、わかりました。じゃあ、明日ボス戦が終わったら、そのまま次の村に行くということ……」

少しだけ目を開け流し目でキリトを見れば、観念したように膝に手を当て軽く頭が下がっている。

「最初からそう言っていればいいのよ、全く」

背もたれから身体を起こして体勢を戻せば、頭を上げたキリトと目が合った。彼の黒い瞳がこちらを向いており、安堵の色が浮かんでいるのがわかる。

視線が合うことは特に珍しいことではない。彼にとつては不本意なこととは思うが、二人の身長は大して変わらない。並んで歩いているときに話をするため横を向けば自然と目は合うものだ。だからこそ、今彼と視線が交差している状況は極めて不自然な状況と言えた。

十秒、二十秒とじつと見つめ合っている。普段なら精々二、三秒程度の時間で視線が外れるというのに、何故かこの時だけは視線が合い続けた。何となく、何となくではあるがこうなっている理由は理解できる。お互いに、次に何を話すべきかがわかっているからだ。

クリスマスパーティーの話はボス戦の後、つまり午後の話だ。では、丸々と時間が空いている午前中はどうするのだろうか。彼とパーティーを組んで以来、初めてと言っていい大きな空白時間。普通の日

ならば適当に素材集めでもしようかと誘っていたに違いないが、偶然にクリスマススイブというイベントの日に重なったのだ。いつもとは違うことをしたい。そう考えてもおかしくないはずだ。

どちらが先に口を開くかはまだわからない。だが、もし叶うなら彼から、自分が望んでいることを口にして欲しい。そんなことを考えながら視線は合い続け、時間は進んでいく。恐らく一分ほど経ったころであろうか、結局我慢できなくなったのはアスナの方だった。外した視線が斜め下に向き、膝の上に置いていた手に力が入りグツと握られる。

「明日の、午前中のことだけど、さ」

「……うん」

素直になれど、頭の中で声上がる。先ほどは素直になれたのだ、今度だって素直になれるはずだと、脳内の自分が叫んでいる。彼から言ってもらえなかったのは仕方ない。でも、自分から言うことができれば望みは叶う。たった半日なのだから、自分がしたいように動いてもいいじゃないか。彼は予定がないと言っていたのだから、少しくらい甘えても問題ないはずだ。

心を決めたアスナは自らの望みを声に出そうとして、止まった。

甘え、という言葉がどうしてもアスナの行動にブレーキをかける。今までだって散々甘えてきているのに、まだ自分は彼に寄りかかっているのか。たった半日、されど半日だ。やることはないと言いつても、それは前進ができないということであって、やるべきことがないわけではない。半日あれば素材集めでも、情報収集でも、ドロップ品の取引だって行うことができるのだ。アスナが望んでいるもののために時間を使うなど、彼にとつてはデメリット以外の何物でもない。

これは、一方的に利益を享受している自分から言えることではない。彼が望んで初めて実行に移せる類のものだ。彼が今無言ということとは、それを望んでいないということなのだ。アスナはそう考えることで、自分の心の声を抑え付けた。

胸が痛む。ただのアバターであるはずのこの身体に心臓などないはずなのに、きゅつと胸が締め付けられる。

キリトという少年と共に行動することは、現実世界に戻るために前に進み続けたいアスナにとって最善手であるはずだ。それは現在のアスナのレベルが証明しているし、感情面でも自暴自棄であった自分に前に進むための希望を示してくれた。彼が自分を支えてくれるように、自分も彼の進む道を支えたい。この世界で多くの人と会う機会があつたが、一緒に居たい、隣に居たいと思うのはキリトだけだ。それなのに、今アスナはどうしてもキリトから離れたいと思つていた。

一秒ごとに胸の痛みが強くなっていき、同時に何故かわからないが悲しみも感じる。早くこの場から離れないと、自分を抑えきれなくなる。そう感じたアスナは、普段よりかなり早い口調で言葉を発した。

「自由行動つてことで。わたし、眠くなつたから寝るね、おやすみ」
必要最低限のことだけ伝え立ち上がったアスナは、早足で階段へと向かう。

「アスナ！」

後ろから自分を呼ぶ声が聞こえてくるが、構うことなく階段を登っていく。早足のまま廊下を歩き、二階にある自室に戻ったアスナは部屋の隅にあるベットに腰を下ろした後、部屋着に着替える。身体に纏っていた鎧が消えると同時に、心に纏っていた鎧も脱いでしまったらしい。いつの間にか目尻に浮かんでいた涙をそのままに、アスナはベットの上で体育座りの姿勢を取った後、膝に顔を埋める。

——どうしてこんなに弱くなつてしまつたんだろう。

あんな行動をすれば彼に迷惑をかけるのはわかつていのに、なんと情けないことなのか。目尻から涙が落ちるのを止めることができなかつた。今日はこのまま寝てしまおう。クリスマスプレゼントは明日の午前中に作ればいいし、寝ればいつも通りの自分になれるはずだ。ベットの足元に置かれている毛布の下に足を入れ横になるべく身体を倒そうとした時、コンコンとノック音が鳴り、扉から聞きなれた少年の声が響く。

「ごめんアスナ、まだ話があるんだ。入ってもいいかな？」

アスナの様子を見て追いかけてきてくれたのだろうが、正直に言つて今会いたいとは思えない。しかし、拒否するという選択肢はない。アスナは自らの状態を確認する。

部屋着になつてはいるがおかしな点はないはずだ。足を毛布から抜きベツトに腰掛けるような体勢に戻した後、「入っていいよ」と答えると扉が開き、恐る恐るといった感じで部屋に入ってきたキリトの視線がアスナに向けられる。するとキリトは頬を掻きながら一瞬視線を逸らしたが、すぐにこちらに向き直つた。

「明日のことで話したいことがあつてさ、座つてもいいかな？」

その問いに頷くと、キリトは備え付けられた椅子をベツトの近くまで持つてきてから座り、真剣な表情を作つた後すぐに話し始めた。

「夜も遅いから単刀直入に話すけどさ、明日の午前中アスナに予定がないなら……少し、観光でもしないか？　ここまで駆け足だったから、まだ見れてないところも多いと思うし、いい機会かなと思うんだけど」

その言葉はアスナの欲しかったものに相違なく、喜びがアスナの心に沸きあがる。ロビーにいたときにこの言葉を聞くことができたなら、満面の笑顔——が素直に出せるかどうかはわからないが——と共に頷いていたに違いない。今頃ベツトの上でクリスマスプレゼントは何にしようかと、鼻歌交じりにウインドウを操作していただろう。

しかし、今のアスナには一つの疑念が生まれていた。この言葉は、自分が無理矢理言わせてしまったものではないのかと。頷いてしまえと心の中のアスナは言うが、もし無理をさせているならという考えが少しでも浮かんでしまった以上、素直に受け取ることができなかった。

「わたしも、そうできたらなつて思つてたから、キリト君から言つてもらえるのは嬉しいよ。でも、キリト君無理……してない？」

窺うようにキリトを見れば、頬を掻きながら「やつぱりなー」と気まずそうに口になっている。やはり無理を言わせたのかと思つたが、続けられた言葉にそれは否定された。

「あー、してないよ、全くしてない。ホントはさつき言おうと思つてた

んだけど、その、どうも気恥ずかしくてさ……。あと、十秒あれば、言えてたと思います、はい」

「あ、そ、そうなんだ……」

キリトの表情から嘘をついているようには見えない。なら、本当にもう少しあの状態が続いていたら口に出ていたのだろう。どうやら、この状況が作り出されたのは我慢できずに席を立ってしまった自分のせいらしい。

「ということですね、明日、どうでしょうか？」

「……うん、願いますわ。クリスマスイブだし、少しくらい攻略から離れてもいいわよね……?」

「ああ。ネットゲーム……というにはちよっとハードに過ぎるけど、こういうイベントの日は楽しまなきゃ損だ。もしかしたら雪でも降るかもしれないぞ?」

「雪……か。確かに、十二月なら降ってもおかしくないわよね。この階層はどう見ても南国系だけど」

現実世界ならば雪の一つも降っておかしくない季節であったが、この第四層は元々が砂漠エリアというだけあって、気候は温暖でどちらかと言えば雪よりもスコールの方が似合いそうな風景だ。しかし、そんな場所であつても雪が降ってほしいなあと思うのは、実に日本人らしい思考なのかもしれない。

「まあ、実際に降るかどうかは明日……いや、もう今日か……のお楽しみってことで」

時刻を見ればすでに十二月二十四日になっていた。メリークリスマスというべきなのかもしれないが、それは明日に取っておくべきだろう。

「ふふ。じゃあ、明日雪もそうだけど……エスコート、楽しみにしてるわね?」

「それはあまり期待しないでもいいな……。明日は午後一時にはこの階層に戻って準備するとして、集合は……八時でいいかな?」

今からならば八時間程度ある。問題ないと、アスナは頷いた。

「じゃあそういうことで。俺も部屋に戻るよ……おやすみ、アスナ」

「うん。おやすみ、キリト君」

自室に戻るキリトを扉の前で見送った後、アスナはベットの前まで戻りそのままボンと正面からベットに飛び込んだ。

顔を枕にギュツと押し付ける。何だかんだとあつたとはいえ、アスナが望む通りの展開になった。今自分の顔は間違はなく真っ赤になっっているに違いない。クリスマスを彼と過ごせるということも嬉しいが、それ以上に彼が自分と同じように考えてくれていたことが嬉しいのだ。

足をパタパタと動かし、沸きあがる感情を必死に抑える。このまま眠ってしまいたいとも思ってしまうが、やらなければならないことはそこそこにあるのだ。

「よしー」

声と共にがばっと起き上がり、アスナはメニューウインドウを開く。〈〈カレス・オーの水晶瓶〉〉を取り出して裁縫スキルをセットした後、裁縫用具と様々な色の布をストレージからオブジェクト化した裁縫スキルを選択する。アスナの裁縫熟練度は50を少し超えた程度ではあるが、普段着るような服や小物に関しては熟練度に関係なく作成することができる。無論複雑なデザインや相応の性能のものを作するためにはそれに応じた熟練度が必要となるとはいえ、着回しするには困らない程度の服を片手間のスキルで揃えられるのは裁縫スキルのメリットと言えるだろう。

作成できるものの一覧や、デザインの覧を見ながら、どんなものがキリトに似合うかと頭の中で想像しながら選んでいく。何しろキリトに渡す初めてのプレゼントであるし、それも手作りとなると現実世界を通じても初めての経験になるかもしれない。スキル熟練度が低いのは仕方ないにしても、出来る範囲の中で最善を尽くしたい。

アスナは鼻歌を歌いながら、作成物・デザインをポンポンと変更していき完成予想図を確認していく。ある程度時間がかかるとは想定していたが、やり始めてみると止まらないし、中々決まらない。だが、こういった楽しいことで寝る前の時間を使えるのはとても有意義なことだろう。結局、アスナの部屋の明かりが消えたのは午前二時を過

ぎた辺りであった。

第二十六話

待ち合わせ時間の午前八時まであと五分程だろうか。南東エリアの子体こていな宿屋の一階に降りたキリトはロビーに備え付けられているソファアを確認するが、珍しいことにまだ誰も座っていない。普段であればしつかりものの少女がすでに待機しているのが常であったが、どうやら今日は自分の方が早かったらしい。

ローテーブルを挟むように設置されているソファアの片側に深く腰掛けたキリトは、ふわわとあくびをしながら両腕をグツと持ち上げ筋を伸ばす。この身体は仮想世界のアバターであるというのに、現実世界で習慣づけられたことは自然と行ってしまうらしい。もはや不思議とも思わなくなったルーチンワークをこなした後、目をこすりながら扉の横にある窓に目を向ければ、照明が暗めの室内へ暖かい日差しが差し込んでいる。残念なことにホワイトクリスマスとはいかなかったようであるが、これから行うことを考えれば雪よりも晴れの方が望ましいだろう。

昨日寝る前に考えた本日の行動ルートを頭の中で確認しつつ、キリトは視線をちらと階段に向ける。今日行うことはそろそろあの階段から降りてくるであろう少女との観光ツアーだ。攻略と自己強化のために常に効率的な行動を意識し続けたキリト達にとって景色や観光名所などの確認は二の次で、NPCの話や情報誌などから得た知識を持つてはいても実際に確認したことはないという場所は意外と多かった。ならば今後何かの役に立つかもしれないという場所は意外と多かったのだから少し後ろを振り返ってみようというのが本日の建前だ。

クリスマスイブに観光名所を男女二人組が歩いていれば、誰がどう見てもデートだろと総突っ込みを受けそうなものだが、それを気にしだしてしまうと女性経験が皆無のキリトは挙動不審になることは間違いない。そうなってしまうえば隣を歩くであろう少女に恥をかかせることになると、キリトは今日のツアーを攻略の一環と思いつまむことで冷静な自分を保とうとしていた。それがどこまで続くかどうかは、キリト自身にとっても甚はなはだ疑問ではあったが。

大丈夫だ、クールになればと自己暗示をかけているキリトの耳に、階段から誰かが降りてくる音が聞こえてくる。時刻を確認すればもうすぐ午前八時だ。時間ぎりぎりとは珍しいなーと思いつつ階段に目を向ければ、赤いフーデットケープにレザースカートといつも通りの恰好をした相棒の少女が、普段より気持ち早足でこちらに向かってくるのが見えた。

「よう、アスナ。おはよう」

「お、おはよう、キリト君」

普段通り軽く手を上げて挨拶したキリトに、普段通りの挨拶を返してくるアスナ。しかし、普段通りなのは言葉だけで、クールな表情がにっこりとした笑顔になっており顔はほんのりと赤く染められている。朝一の強烈な一撃は冷静さを保つための体力ゲージをギリギリ削ぎ落とすが、今日は彼女にこの過酷な仮想世界を少しでも楽しんでもらうことが目的なのだ。負けるわけにはいかんと、心の中で頬をパンと張り気合いを入れ直す。

「よし、じゃあ行こうか。まずは朝食だな」

「うん。今日はエスコート……よろしくね?」

首をコテンと横に傾げてにっこりと、今日はどうやらアスナの笑顔がバーゲンセール状態らしい。クエストやら狩りならまだしもエスコートとはまた何とも難しいことを望んでらっしゃるが、誘ったのはこちらからなのだから出来る限りのことはせねばなるまい。それに頑張った分だけこの笑顔を見れると思えば安いものだ。

とにかく移動しようと、ティルネル号で水路に漕ぎ出す。相変わらずゴンドラに乗るとご機嫌になるようで、船首側の席に座ったアスナは周囲に笑顔を振りまいている。フードを外しているため艶やかな栗色の長髪が風に流れ、陽光を反射してキラキラと輝いている。第三層の大森林を背景にした時にも思ったことだが、彼女の髪が流れている時の姿はどうにも幻想的で一種の絵画のようだ。背景こそ違えど、日本人離れした彼女の容姿はいかにもヨーロッパ的なこのロービアの街に実にマッチしており、それを独り占めできているこの状況に多少の優越感を感じる。

「ねえキリト君、今日はどこに連れてつてくれるの?」

枝道の水路からメインチャネルに出た所で、アスナが髪を右手で押さえながらこちらに聞いてくる。

「ああ、実は今日のはじまりの街を中心に回ろうと思ってるんだ」

「はじまりの街?」

キリトの言葉が余程意外だったのだろうか、アスナが眼を丸くしている。どうやら驚かすことには成功したらしい。

「ああ。多分だけどき、アスナがはじまりの街に居た頃って観光する余裕とか無かったと思うんだよ。あそこは美味しいカフェとかレストランも多いし、結構見て回れる場所もあるんだ。二人で歩くならちよūdいかなって」

「確かに、必要なお店以外は目に入らなかったな。レベル上がったらずぐに移動しちゃったし……。こうして考えると一番見て回ってない街かもしれないよ、はじまりの街」

はじまりの街周辺に出るモンスターはレベル3もあれば簡単に狩れてしまう。レベル3など一日あれば簡単になってしまうし、更なるレベリングを行うためには当然次の街へ行かねばならない。この世界で進むことを選んだプレイヤーたちにとって、はじまりの街は正^ましく始まりであつて、ただの通過点でしかないのだ。

アスナは進み始めるのが遅かったとはいえ、それまでは宿屋に籠りきりだったと聞いている。当時の精神状況を考えればとても観光などを考えつくまい。彼女の言葉を聞いて、はじまりの街を選択したのは正解だったと、キリトは内心ホツとする。

「もう見飽きてるってことはなさそうで安心したよ。一応はじまりの街が見終わった後の予定も考えてあるけどさ、それは次の機会でもいいし、ゆっくりと見回ろう」

キリトの言葉にアスナは笑顔で頷くが、すぐに笑顔が崩れ何とも複雑そうな表情に変わっていく。その様子を見て何か暗い過去の、地雷を踏んでしまったのだろうかキリトは慌てるが、アスナの考えていたことは違ったらしい。

「……キリト君、随分手馴れてるね?　もしかして、デートの経験、結

構ある……?」

「でっ……いい、いや、ない! 断じてない! これが初めてです!」

非常に重要な単語が出た気がするが、それどころではないと急な追及を慌てて否定する。両手は権かゐの操作で塞がっているため、首をぶんぶんと左右に振ることでのその意思を示す。

「そっかそっか、なら良かった」

クスクスと笑い出したアスナを見て、キリトは瞬時に謀られたと悟る。それがどうにも悔しくなり、反撃すべくキリトもアスナから出た言葉を追及する。

「でもいいんですか、アスナさん? デートだなんて言っちゃって」

自分が言った言葉とはいえ、慌てて否定するに違いない。キリトはニヤリとした笑みと共にアスナに問うが、アスナの反応はキリトの想定とは全く違うものだった。

「……デート、じゃないの? そっか、そう思ってたのはわたしだけだったんだね……」

こちらに向けられたアスナの表情は寂しげで、選択肢を間違えたことをキリトは自覚する。そういう雰囲気を出してはアスナが嫌がると思っていたし、自分も冷静でいられるかどうか不安だった。しかし、彼女がそのつもりでいてくれるならキリトも素直に自分の心に従うべきだろう。この後楽しむためにも、アスナの不安はこの場で取り除いておくべきだ。

「いや……。デートって思ってくれてるなら、その、俺は嬉しいよ」

自分を隣で支えてくれていた彼女が、今日の事を好意的に捉えてくれているならそれはとても嬉しいし、ありがたいことだと思う。キリトは務めて真剣に、真面目な声で本心を伝える。すると、アスナは一瞬顔を俯かせた後クスクスと笑い始めた。瞬間、自分がかかわれたことを悟る。

「なっ、ひ、ひどいぞ! そのからかい方は!」

「だ、だってキリト君、すごい真面目な顔で言うんだもの」

余程面白かったのだろうか、手を口に当てて目尻には涙が浮かんでいる。こちらは大真面目に勇気を振り絞って本心と言ったというの

にこの展開は中々に酷い。もつと怒るべきなのか、いつそいじけてしまふべきか迷ったが、アスナの「でもね」という言葉とその後が続けられた、恐らく彼女の本心によって思考を止められる。

「わたしも、デートの方が嬉しいかな」

頬を赤らめてはにかみつつ笑う彼女の姿に、キリトは「そっか」と一言返すのが精一杯だった。どうにも気恥ずかしくなりキリトは無言になってしまふが、それはアスナも同じよう顔色を赤くしたまま街並みを見ている。結局、次に視線が合うのは転移門ではじまりの街に移動してからの事だった。

はじまりの街は第一層の最南端の外壁に沿うように位置し、直径一キロの半円状の城壁に囲まれる形で存在している街だ。第四層まで解放された現在でも最大の街として存在感を誇っており、多くのプレイヤーの拠点として利用されていた。

しかし、その町の規模に比してはじまりの街の転移門広場はキリトの予想に反して閑散としている。他の層の転移門広場は多くの人が集まる憩いの場として設計されており、屋台やベンチなどが設置されていた。当然このはじまりの街の転移門広場も円形の広場が石畳で舗装され花壇やベンチが円形に並べられているので、景観からしてこのようなイベントの日には多くのプレイヤーが集まってもおかしくはないはずだった。しかし、転移門から移動してきた人、これから移動する人は足早にこの広場を去っていく。

恐らくは、この場で起こった出来事が脳裏に焼き付いているのだ。この転移門広場はゲームの開始時にSAOがテストゲームであると宣言された場所だ。あれから一月半経ったとはいえ、あの絶望の記憶は早々に消し去れるものではない。この場所に留まろうとする人がほとんどいないのは仕方のないことなのかもしれない。

しかし、あくまで留まろうとする人が少ないだけであって、人通りは極めて多い。今キリトとアスナは転移門の真ん前という最も人通りが多い場所におり、本日の日付や男女ペアということもあって極めて多くの視線が注がれている。この状況にキリトは落ち着かなくな

り、左に立つアスナも同じようで「うう、フード被りたい……」という小さい声が聞こえてきた。どうにも人見知りの気がある二人であつたが、今日のプランは人目を気にしてはどうしようもない。そもそも、人目を気にするならクリスマススイブに男女二人で出歩くなというものだろう。

今日はエスコートを頼まれたのだし、アスナの顔がフードで隠されてはキリトの楽しみが半減する。一度やると決めたなら、一々恥ずかしがっても仕方がない。むしろ見せつけてやればいいのだと、腹を据えたキリトは隣に立つアスナの右手をそつと握る。バツという音が聞こえるほどのすごい勢いでアスナの首がこちらを向いたが、今のキリトはその程度では動揺しない。

「さつきも言った通り、まずは朝食にしよう。お勧めのレストランもあるけど、軽く見て回って良さそうな場所に入るのもいいかもしれないな。……じゃあ、行こうか」

「う、うん……」

顔を真っ赤に染めたアスナ。周囲から刺さる視線。しかし、気にしない。例え後々悶え苦しむことになっても、今はアスナをエスコートすることに集中するのだ。アスナの手を握った左手を軽く引き、キリトは商業区の方へ足を進めた。元々歩調は合っていたから問題ないが、周囲を見渡しながら歩けるよう今日はいつもより少しだけ歩みを遅くする。これくらい速度でどうかたと隣を確認すれば、アスナは顔を沸騰させたまま俯かせている。嫌がられてはいないだろうが、手を握るのは流石にまずかつたようだ。

「アスナ？ その、恥ずかしいなら、手、離すけど……」

ぶんぶんと首が左右に振られ、左手に感じていた力が強くなる。恥ずかしがりながらもギュツと手を握ってくる美少女。普段の鋭い視線や雰囲気はどこへやら、この世界でもトップクラスの实力を持つフエンスァー細剣使いの様は、とてつもない可愛さを放つ生き物にジョブチェンジしていた。

「キリト君、急に、ずるい……」

そのセリフはこちらが言いたいくらいだと、キリトは若干回転数が

上がっている頭の中で眩く。アスナの様子は現状観光どころではなさそうだが、彼女がこの状態を望んでいるのだから仕方がない。自分を律することに長けた細剣使いフェンサー様のことだ、その内普段の自分を取り戻すだろう。それまでゆつくりと待っていればいいのだ。

二人はのんびりとした歩調でレストランの固まる商業区画へと歩いていく。アスナが顔の赤みを残しつつも、会話が成立するまで復活したのは、商業区画に入る直前の事だった。

はじまりの街で売られている食べ物のグレードの幅は、一コルで食べることができる黒パンを売る屋台から、一食十萬コルもするようなフルコースまでと他の街に比べてかなり広い。武器屋に道具屋、宿屋の類も他の街に比べて充実しているの、恐らく全てのプレイヤーがこの街を拠点とできるよう設計されているのだろう。その中でも人気の場所であるレストラン街は、朝食の時間帯も相まって既に多くのプレイヤーたちが足を運んでいた。

「人は多いだろうと思っていたけど、ここまでとは思わなかったわ」「今生き残ってる八千人の内、半分以上はこの街にいるだろうしなあ。ちやうど朝食の時間だし、もたもたしてると埋まっちまいそうだし」

キリトの知る安くて旨い店はどうやらこの町に住むプレイヤーにとっても人気のようで、外から見てもほとんど埋まっているように見える。この状態ならばじっくりと歩きながら考えるより、パツと店を決めて入ってしまったほうがいいだろう。アスナがどうするのという視線を送ってくるが、キリトは事前に予定していた店へと足を向けた。

商業区の主街路に面した石で作られた三階建ての建物の最上階にあるレストランは、入って左側の窓際に茶色の四角いテーブルが数個置かれただけのこじんまりとしたものだ。店内の雰囲気は洒落たレストランというよりもバーという方が似合っているだろうか。入口の右側にはバーカウンターのようなのが設置されているから、朝よりも夜の方が雰囲気には合っているのかもしれない。

キリトとアスナは窓際に並べられた五つのテーブルの内、中央の

テーブルを選び腰を下ろす。商業エリアには三階建ての建物は珍しくないが、この建物の通りを挟んで向かい側の建物は二階建てのため、窓から見える景色は比較的開けている。

「この街のレストランはどこもざわついてるのかと思ったけど、結構落ち着いた雰囲気のある場所もあるのね。ここもベータテストの時に？」
「ああ。値段もお手頃だからさ、エリアボスを倒した後に何回かここで一杯やってたんだ。お勧めは肉系かサンドイッチ系。飲み物は果物酒が結構いけるよ」

キリトはローストビーフのようなものを、アスナはクラブハウスサンドを選び、飲み物はチェリー酒を二つ頼む。キリト達以外に客はいないため程なくして料理が運ばれてくる。乾杯の後一口食べたサンドイッチの味はどうやら合格点を貰えたらしい。

「やっぱり、見た目と味がある程度一致してるって重要よね……」

「ホントな。この店は肉が肉の味をしてるから、かなり貴重だと思うよ……」

この世界のNPCレストランで出されるほぼすべての料理が、その見た目と現実世界で知っている味とが一致しない。そこその金を出せばそんなことが無くなるというのは経験上分かっているのだが、高級なレストランというのは主街区に精々一つしかなく、その層で稼げる日々の稼ぎの半分近い金額がメニューに設定されていたりする。当然利用者などほとんどおらず、普通のプレイヤー達は屋台や普通のレストランで食事をとることになるわけだが、店を選び間違えると悲惨なことになるのだ。

外見がクリームまんでは味はイチゴ大福のタラン饅頭などまだいい方で、ひどいものでは見た目がポークステーキなのに味が砂糖水に漬け込まれたゴムのようなものであったり、メロンのような見た目の果物がなぜか激辛だったり、極めてえげつない設定がされているものが多い。味覚エンジンの設定を間違っているとは思えないのだが、正式サービスでも変更がなかったと聞いているのでこれは仕様ということになる。

美味しい食事は精神状態を良好なものに保つために重要なもので

あるため、各町の美味しいレストランの情報は比較的高値で取引されていた。情報屋の生業とするアルゴには毎日のようにレストラン情報を尋ねるメッセージが届いていることだろう。

「でも意外ね。このレストランなら満席になってもおかしくないのに、わたしたち以外に誰もいないなんて」

頬張っていたクラブハウスサンドを飲み込んだアスナが、当然であろう疑問を口にする。この店は値段の割に味がいい。これがもう少し上の層にあれば癒しを求めてこの店に駆け込んでくるプレイヤーは多いに違いないのだが、残念なことにはここははじまりの街だった。「最前線で稼いでる俺たちには大した金額じゃないけど、ここを拠点にしているプレイヤーだと手が出しにくいんだよな、この値段」

「なるほど。この街の周辺じゃ稼げるコルも少ないもんね」

キリトが頼んだ料理と酒を合わせても五百コルを少し超えるくらいだ。普段の食事よりは高いとはいえ、今の二人にとっては無理のない金額だと言っている。しかし、この街の周辺に出現するモンスターを一体倒して得られる金額は大体三十コルがいいところだ。そうすると、一食に五百コルを使うというのは現実的ではないだろう。レベルが上がれば狩れる数が増えるとはいえ元々の金額が小さいし、ポーションなどの消耗品、武具の修理や更新には食事とは比にならない金額のコルがかかる。となると、はじまりの街を拠点としているプレイヤーにとって、この店は敷居が高いと思われるも仕方のないことだろう。

「おいしいものを食べるためにも稼がなきゃいけない……か。現実世界でも同じとはいえ、結構残酷よね」

「二コルの黒パンで腹を満たすことはできても、味覚的な満足は得られないだろうしな。生き残るって意味ではこの街に閉じこもるのもいいかもしれないけど、味のしない黒パンと硬いベッドでいつになるかわからないゲームクリアを待ち続けるのは結構きついことだと思うよ」

「うん。わたしも死の恐怖から最初はそうしてたけど……やっぱりね、死んでいくのよ人間的に。怖い夢を見るということ以外、何も刺

激を受けないんだもの。でも、そういう生活をしてたからこそ感動したのかも、あのお風呂とクリームパンには」

アスナは外に視線を向けながら懐かしそうに語った。確かにクリームパンを差し出した記憶がある。あれは確か第一層ボス攻略の前日だっただろうか。

「あの日、この世界に来て初めてお風呂に入って、甘いものを食べて……。ああ、わたし生きてるんだって思ったの。まだ全部を受け入れたわけじゃないけど、この世界を現実だって思えるようになってきたきっかけは間違いなくあの出来事ね」

キリトは第三層主街区の宿屋での会話を思い出す。あの時、アスナはこの世界も悪くないと思ったことが複雑だと言っていた。それから精々一週間しか経っていないのだから、その認識が大きく変化した訳ではないはずだ。しかし、第四層での彼女の様子を見る限り、楽しいことは楽しいと素直に思えるようになってきているように思える。もしそれに自分が少しでも貢献できているなら素直に嬉しいことだ。「こうして考えてみると、わたしが前を向けるようになったのはやっぱりキリト君のおかげなのよね」

「別に意図してやったわけじゃないんだけどなあ」

「それでも、よ。理由はどうあれ、結果的にわたしの助けになってるのは間違いのないもの。その内お礼するから、何かして欲しいこと考えておいてね？」

して欲しいことと言われ一瞬よこしま邪な考えが思いつかなかったわけではないが、うっかり口に出せば視界に閃光が走るの疑いがない。コクリと頷いた後ローストビーフのようなものを片づけるべく手を動かす。薄く切られた肉を一枚口に放り込み、鳥肉のような味にする肉の味を堪能しつつキリトは考える。

これからも隣にいて欲しい、なんて言ったらアスナはどういう反応をするだろうか。

対人関係が極めて苦手だと自負しているキリトでも、アスナが自分を嫌っていないということくらいはわかる。少なくとも嫌な顔をされることはないだろうし、もしかしたら彼女がキリトの想像以上に自

分に対して好意的で、二つ返事で領いてくれるのかもしれない。

そうであったならどれだけいいだろうかとは思ってしまう。

昨日の攻略会議が終わった後からクリスマスパーティーの事実を聞くまで、終ついぞ消化できなかったあのもやもやとした感情は間違いなく嫉妬だった。結果的に勘違いであったとはいえ、アスナが声をかけられたということに自分が嫉妬したという事実は消えるわけではない。

彼女の隣に自分以外の人間がいるのは嫌だ。その場所は俺のものだと声を大にして叫びたくなるほどの独占欲。

現実世界で他人との関わりを避けていた自分が、仮想世界でこのような感情を抱くことになるとは考えもしなかった。しかし、一度気づいてしまえば当然のことだったとも思ってしまう。

初めて会った時、まだお互いの名前も知らなかったというのに彼女の笑顔に目を奪われた。脳裏に焼き付いたその笑顔を、同時に伝えられた心からの感謝の言葉を思い出す度に、キリトは名も知らぬ少女のことが気になって落ち着かなくなった。ずっと前を見続けたつもりだったが、視線の先には常に彼女がいたのだ。

「キリト君、どうしたの？ 急に黙って」

アスナの言葉で思考の海に沈んでいた意識が戻っていく。こうして改めて意識してしまうと気恥ずかしくなってしまうが、今日とはとにかく冷静に落ち着いていこうと決めたのだ。朝一から直撃し続けている彼女の可愛さにゴリゴリと防御が削られているが、今のところはなんとか冷静さを保つことはできている。

「いやあ、おいしそうに食べるなあと思ってさ」

「なっ!?! し、仕方ないじゃない！ まともなサンドイッチなんて久々だし……」

顔を赤くして怒る、意外に食いしん坊なアスナの姿に思わず笑みがこぼれた。この世界で彼女のこのような無邪気な姿を知っているのは自分だけだ。そのことはキリトに優越感を、そして虚むなしさを覚えさせる。

彼女を独占しているのに、手を伸ばすことはできない。身体が触れ

合うことはあっても、心を触れ合わせることができない。失うと決まっているのに、それを欲してしまっている。何とも無益な話だと思う。

近い将来、アスナはキリトの手を離れ自分の翼で羽ばたく時が来るだろう。キリトの役目はその時を少しでも早めること。自ら持つ知識や戦闘技術、この世界で戦い抜くための全てを彼女に教える。それはアスナが生き残るために、現実世界への帰還を達成するために絶対に必要なことだ。

全力は尽くす。彼女が死ぬところなど見たくないから、自らの全力をもって彼女を引き上げる。

閃光のように走る剣術、全ての人間の眼を引き寄せる容姿、そして、この人ならばと思わせる可能性。多くの人間がそれに気づいた時、彼女は皆の前に立ち進んでいく。だが、その時自分は一体どの位置にいるのだろうか。

自分の力では彼女の隣に立ち続けることはできない。でもせめて背中ぐらいは支えていたい、彼女が進む道の露払いぐらいはしたい。相棒という関係ではなくなったとしても、彼女の視界に入れる程度には自分を高めたいとキリトは願った。

食事を終えレストラン街を軽く見回った後、通りの各所に存在する屋台を覗き見ながら目的地であるらしい公園へと足を向ける。はじまりの街の通りは街の規模の割に細く、メインストリートを除けば精々が片側一車線の道路と同じ程度の幅といったところだろうか。そんな道幅であるから通りを行き交う人の顔はよく見えるし、どのような表情をしているかがわかる。

自分たち二人はどうやらそこそこに注目を集めているようで、女性プレイヤーからは好奇の視線が、男性プレイヤーからは敵意を含む視線が向けられているように思えた。それがなんとも恥ずかしく、アスナは纏っている深紅のフーデットケープのフードを被りたい衝動に駆られてしまうが、それをしてしまうと隣で自分をエスコートしてくれている少年に申し訳が立たない。

チラと隣に立つキリトに顔を向ければ、こちらに気付いたのか「どうした？」と聞いてくる。それに首を横に振りながら「なんでもない」と答え前を向けば、同様にキリトも前を向く。どうにも、気恥ずかしい。

食事をしているときは何でもなかったというのに、こうして二人で並んで歩いているとどうしても顔が熱を持ってしまいが、それも仕方ないとは思う。アスナの右手、普段ならば腰に下げられているレイピアを持つその手が、今は相棒の少年の左手を握っていた。同世代の男性の手を握るなど当然アスナには初めてのことと、同い年ぐらいの男女が手を繋いでいればそれがどういった関係に見えるかも理解している。

恥ずかしい、でも、嫌ではない。

誰よりも前に行くこのキリトという少年の隣に、自分が立っていると認識されている。もちろん周囲はそういう意味の視線を向けていないことはわかっている。だが、その事実が今のアスナには嬉しかった。

手をしっかりと握りながら通りを歩いていく。はじまりの街は大雑把には区画整理がされているようだが、その内部は細道が入り組んでおり初めて歩く場所ならば道に迷う者も出るかもしれない。しかし、彼の脳内にはしっかりとした地図が展開されているようで、迷うことなく進んでいる。

「ねえ、キリト君。ベータの時にこの街も結構探索したりしたの？」
「ああ、SAOベータテストの目玉の街だったからなあ。隅から隅とまではいかないけど大体のところはな。……正式サービスじゃ初日にはこの街を出てたから、大きな変更点がなくて今日は助かってるよ」

初日にはこの街を出たという言葉が、アスナに彼との差を感じさせる。自分が恐怖で宿屋に籠ると決めたとき、この人は既に前に向けて走り出していた。その後の無茶なレベリングによってアスナのレベルは18とキリトと一つの差まで縮まってはいるが、レベル差だけでは測れない実力差が存在している。絶対にありえないことであろう

が、もし彼と本気で剣を合わせることがあるとしたら、地に伏すことになるのは間違いない。アスナの方だろう。

「遠いなあ……」

ポロリと本音がこぼれてしまう。物理的にはこうして隣に立っているのに、実力的には彼の背中を見失わないように追いかけるのが精一杯であるし、精神的には完全に彼に寄りかかってしまっている。自らビギナー達の敵意を背負う道を選んだ彼を支えたいと思っているのに、支えられているのは結局アスナの方で、悲しいほどの無力さを感じてしまう。

「え、あつ、ごめん。歩くの疲れたか？」

慌てた様子のキリトが謝ってくるが、はて何のことだろうと思いついて、自分の言葉が原因だということに思い至る。

「あ、違うの。公園が遠いってわけじゃなくて……キリト君が遠いなあって思っちゃって」

「うん？ 遠いって、今隣にいますけど……？」

「ううん。そうなんだけど、そうじゃないの」

頭の上に疑問符が浮かんでいるキリトをこまかすべく、アスナは握られている右手に少し力を込める。すると途端に疑問符が消え顔を赤めながら頬を掻く姿を見て、ついついかわいいなあと思ってしまう。

普段は冷静沈着で前を常に見据えている彼も、たまにはあるが子供っぽい姿を見せる時がある。どちらも本当の彼の姿なのだろうが、個人的には彼の子供っぽい姿の方が好きだ。彼がこれを聞いたら、男なのにかわいいとはどういうことなのかと嘆くのだろうが、本当にかわいいと思ってしまうのだから仕方ない。

——こんな姿を見てるのは、わたしとアルゴさんだけ……なんだよね。

今は自分とアルゴだけだが、今後はどうだろう。この先階層が進むにつれて最前線付近で活動するプレイヤーも増えていくだろう。そうすればキリトと共に戦う経験をするプレイヤーも増えていくに違いない。＜＜ビーター＞＞扱わず、彼自身を見ることが出来る人も

だ。彼を慕って周りに集まる人は少なくないだろう。

そんな状況になったとき、自分は変わらせずに彼の隣にいたことができるのだろうか。

今は自分が彼の相棒として活動しているが、この立ち位置はアスナが望んで無理矢理得たものでキリトが望んでいたものではない。一緒に居たいと言ってくれたことは事実だが、ずっと一緒に居てくれるのかと聞いたら答えはなかった。そのことが、いつか別れの時が来ると暗に言っているようで不安を覚える。

繋がれた右手。デートという形を取ってもらって、彼から繋いでくれた手。繋がれているのは今日のお昼までだ。次にこの手が繋がれるのはいつになるのか、機会があるのかすらわからない。自然と触れあうことはあつたとしても、こうして手を繋ぎながら歩くことなんてあるのだろうか。

この時間が終わればアスナは再び命懸けの戦いへと赴く。覚悟はできているし、躊躇うつもりもない。でも今だけは、先のことを忘れてこの大切な時間を楽しみたいと思う。相変わらずすれ違う人達からの視線は強いが、それを気にしてこの時間を無駄にするのは嫌だ。

いつもより近い彼との距離をもう少しだけ詰めた後、アスナは不安を隠すようにキリトの左手を握りしめた。

はじまりの街で最も大きい公園に設置されている巨大な噴水。キリト達はそれを中心として広がっている円形の広場の周りに設置された多くのベンチの中の一つに腰を下ろしていた。時刻は午前十時前。日差しの温かさ、噴水から水が吹き上がったときに感じる少しひんやりとした風が心地よい。ゆっくりと過ごすには理想的な場所だろう。

噴水広場はこの公園で一番人が集まる場所でベンチの多くはすでに人が座っており、男女の二人組も所々に見ることができ。自分たちもその男女ペアの一つではあるのだが、他のペアと違うところは視線を相当に集めているということだ。その理由の大部分はキリトの隣に座る美少女の存在であることは疑いない。うっとうしいと思わ

ないでもないが、朝一から視線を注がれ続けてきたのでもはや慣れてしまった感がある。それは隣に座るアスナも同じようで、視線を気にすることなくぼんやりと水が一定のリズムで吹き上がる噴水を眺めつづけていた。

「穏やかだね……」

「ああ、そうだな……」

会話が止まる。公園を歩いている最中に少し座ろうと言ったのはアスナの方からだ。こういったことは初めてだと言っていたし、慣れないことに疲れたのかとも思ったが、彼女の表情を見るにそういう訳でもなさそうだ。休憩というわけではないならこちらから会話を振るべきなのだろうが、こうして改まってみると話題を見つけたことができな^いあたり、自らのコミュニケーション能力の残念さを思い知る。

横目でアスナを見れば、じっと前を——恐らく噴水を——見つめている。その表情がどのような感情を持っているかは窺うことはできなかったが、少なくとも気まずさや不快感を持っているようには見えない。この場合なら無理に話しかけるより、そつとしておいた方がいいのかもしれない。彼女の言うとおり、多少の賑わいはあれどうるさすぎるわけでもなく穏やかな時間が流れている。普段は慌ただしく動いているのだし、今は攻略のことを考える必要がないのだから、このように只々座^{ただただ}っている時間があつてもいいのかもしれない。

しばらく無言の時間が続いた。しかし、不思議と不快感は感じない。お互いに噴水をぼんやりと見ているだけであるが、キリトの左手とアスナの右手は繋がれている。改めて意識を向ければ、自分の身体もアスナの身体もポリゴンでできたアバターであるはずなのに、何故か彼女の体温を感じることができた。

心地よいと感じる、人肌の温度。アスナも同じように感じてくれているなら嬉しいと思う。

彼女のヘイゼルの瞳は未だ前を向いているが、もし今左手に力を入れたらどうなるのだろう。彼女の瞳はこちらに向くのだろうか。試してみたい気持ちになるがその理由を見つけないことができなかった。

頭の中で葛藤するも結局実行に移すことなく視線を前に戻そうとするが、その直前にアスナの口が動いた。

「非日常、よねえ……」

何故そんな言葉が出たのかと、前を向きアスナと同じような光景を視界に移す。目に映るのは、晴れの日に公園を行き交う人たちやベンチにのんびりと座っている人たちの姿。この光景が日常が非日常かと聞かれれば、多くの人が日常と答えるのだろう。

だが、隣の少女はこの光景を非日常と言った。その理由をキリトは何となくだが理解できる。

現在のキリト達の日常はこうして穏やかに過ごすことではない。命を削り、向かってくる敵をポリゴン片に変えることこそが日常なのだ。何か一つ間違えれば命を失うギリギリの世界に身を置くキリト達にとって、穏やかに過ごす彼らの姿こそが正しく非日常に違いなかった。

しかも、非日常的なのは目に映る光景だけではなく、自らが置かれている状況もそうだ。日々パソコンに向かい人との関わりを避け続けてきたキリトにとって、所謂憩いの場に足を運ぶ機会など当然のようになかった。その自分が噴水の前のベンチに腰掛けて美少女と手を繋いでいるのだ。

「そうだなあ……」

先ほどと同じ、同意の言葉を口に出す。彼女が非日常と言った理由はこの光景の事なのか、はたまた状況の事なのかはわからなかったが、キリトにとっても非日常なのは確かだ。だが、それが不快感とイコールというわけではない。少なくともキリトにとってこの非日常は好ましいものだ。

自分だけがこの光景の異物であるという感覚。アスナに言われるまで気づくことはなかったが、気づいてみると確かにそう感じるものがあるし、一度感じてしまった違和感はずっと中々消えるものではない。だが、左手からの熱によってその違和感を上回る安堵を感じている。

「でも、こんな非日常なら悪くないんじゃないかな」

一人なら違和感を感じた時点で立ち去っていただろうし、そもそも

こんな場所に来ることなど無かつただろう。だが、二人なら、アスナと一緒に悪くないと思う。

「そう、かもね。わたしたちの場合、日常が忙しすぎるもんね」

「忙しい、と言うにはちよつとハード過ぎる気もするけどなあ」

「うん。でも、そのせいなのかな。この時間がすごく貴重な時間に思えるよ」

クエストの事も、攻略のことも考えなくていい時間。現実世界では当たり前だった時間が、この世界では貴重な休息時間となる。食事をし、散歩をし、公園で噴水を眺める。たったこれだけのことが貴重と感じてしまうほどに、キリト達は走り続けているのだ。

「現実世界に戻るためには進み続けなきゃいけないけど、適度に休まないで倒れちまうからなあ」

「そうね。それに関しては身を持って味わったわ。この世界で空腹と睡眠不足で倒れるなんて」

溜息をつくアスナを見て第一層の迷宮区の出来事を思い出す。あの時偶然、たまたま、アスナが戦っていた部屋の近くをキリトも探索していた。とはいえ救援のタイミングが後十秒遅かったら、アスナはキリトの目の前でポリゴン片と化していただろう。もしそうならいたらキリトは<<ビーター>>の汚名を背負ったまま一人で走っていたに違いない。

アスナの右手から伝わる熱。あの時少しでも遅れていたら、一人だったなら感じる事ができなかったこの熱を失いたくない。キリトが左手に力を込めると、応じるようにアスナから伝わる力も強くなる。

視線が合う。今まで前を向き続けていたヘイゼルの瞳に自分の姿が映る。その瞳はキリトが感じた不安を解きほぐすような暖かさを宿していた。

「君のおかげで、わたしはここにいます。だから、大丈夫だよ」

「……そうだな。アスナはここにいますもんね」

握れば、握り返してくる。たったそれだけの事で安心できた。アスナの行動で自分の心が随分と簡単に揺れ動くなと思うが、それも仕方

ないのかもしれない。彼女の存在は、今のキリトにとってそれほど重要なものなのだから。

「そろそろ行こっか。結構のんびりしちゃったし、次あるんでしょ？」
アスナの言葉に頷く。このまま、手を繋いだまま、こうしてゆっくりしているのも悪くないと思う。だが一応予定は立てているのだし時間もあるのだ。行かなければもったいないだろう。

その気になればまた来ることが出来る。次もこの公園でということにはならないだろうが、上の層に行けばまた新しい観光名所が出てくるはずだ。時間の余裕ができた時にアスナを誘って巡ってみるのも悪くない。

キリトは立ち上がり、アスナを手助けすべく左手を引く。「ありがとう」という言葉と共にアスナも立ち上がり、こちらに向き直った。

「よし、行きましようか。次の『非日常』を楽しみに」

「こういうことが日常になって欲しいんだけどなあ」

こんな穏やかな時間が日常になってほしいと心から願う。前を進むアスナに手を引かれながら、次の目的地に誘導すべくキリトは足を動かした。

第二十七話

十二月二十四日午後三時。第四層中央部に位置するカルデラ湖の手前に、フィールドボスである双頭の古代竜バイセプス・アーケロンを討伐すべく二大ギルド＋αの大船団が集結していた。大小合わせて八隻の船がレイドリーダーの攻略開始の合図を待っているが、DKB・ALSの二大ギルドが持つ船が三隻ずつでその全てが最低六人乗り以上の大型船のため、アスナ達の乗るティルネル号は自分たちと同様に中立を保っている四人パーティーのエギル達が乗るくくピークオツド号くくと共に後方で待機していた

ピークオツド号は『白鯨』はくげいという小説に登場する、かの有名なエイハブ船長が乗った船だ。最終的には沈んでしまう船だが、その原因となった白いマッコウクジラに会うまでは沈まないとはパーティーリーダーのエギルの談で、その外見と同じように豪快な彼の性格を表している。少なくとも今回戦うのはクジラではなくカメであるから、沈むことはないと言えるのかもしれない。

攻略開始の時間となったところで、DKBの大型船から銅鑼どらの大きな音が響く。リンドからの戦闘開始の合図と共に、各船は指定された位置へと一斉に漕ぎ出す。アスナ達のポジションはアーケロンの左側面と、最もダメージを与えることができる頭側からは外されていた。

ALSの六人乗りゴンドラから「今日はラストアタックはとれねえな！」等と欲しくもない一言が飛んでくる。ポジションを決めたのはそっちだろうと言い返したくなるが、操船担当の黒の少年は無言を貫いているのでならばと、彼に溜まっているだろう鬱憤を代わりに晴らすべく細剣二連撃技くくパラレル・ステイングくくを黒光りする分厚い甲羅の上から叩き込む。体力がジワリと減ったようにも見えたが効果的ではないのは明らかで何とも空しい気持ちになった。

「今回はあまり出番はなさそうね」

「そうだなあ。まあ、側面にいれば船は無傷で済むから、楽できていいんじゃないかな」

確かに側面には攻撃が飛んでこないの、船はおろか接近して攻撃しているアスナの体力ゲージすら無傷だ。楽ができていいとキリトは言うが、これでは必死の思いで午前中のふわふわとした気持ち切り替えた意味がない。無論油断をするわけにはいかないが、拍子抜けしてしまうのは仕方がないだろう。

時折発生する突進の注意だけしておけば、本当にダメージを食らわない。アーケロンの前面に張り付いている二大ギルドの船はそれなりに被弾をしているようだが、大型船の耐久値は高いのだろう、特に慌てることなく攻撃を続けているように見える。アーケロンの二段のHPゲージの内、既に一本目は空っぽになっており、二本目もぐんぐんと減っている。

「キリト君、そろそろゲージ赤くなるよ！」

もうじきHPがレッドゾーンに入る。暴走モードになればどのような攻撃をしてくるのかはわからないため、アスナは確実に聞こえるように大声で叫ぶ。するとそれに呼応するようにティルネル号がアーケロンから離れていく。念のために距離を取ることにしたらしい。そして、その判断はどうやら間違っていないかったようだ。

甲羅を挟んで反対側から、「離れろ！」とエギルの大声が聞こえたのはHPがレッドゾーンに入った瞬間のことだ。今まで前面にしか攻撃を行っていなかったアーケロンが、ヒレや尻尾を甲羅にぴったりと張り付けその巨体を回転させ始めた。二大ギルドの船の方を窺えば、どうやらソードスキルの連発で削りきる魂胆のようで猛烈な連撃を加えている。しかし、アスナは直感的に間に合わないと感じた。

「アスナ、屈め！」

後ろからの声に、アスナは反射的に身体を屈める。この状況で彼がやろうとしていることは一つだ。アスナはアーケロンの体力が削りきれず船が転覆した時のことを考え、すぐに浮き輪が取り出せるように右手を動かす。ストレージ内の浮き輪一つで二人分の浮力を得ることができるとは疑問だが、少なくともないよりはマシに違いない。

ティルネル号が加速し、アーケロンへと突進していく。普通の船に乗っているならば自殺行為以外の何物でもないが、この船の触先には

極めて強力な武器が存在していた。

「……知ったことか！ 俺だって、このポジションを譲る気はないからな！」

ドスンと、舳先へさきについている衝角しょうかくがアーケロンに突き刺さる感覚が伝わる。アスナは右手に浮き輪を抱えながら様子を窺うと、ティルネル号の衝角突撃ラムアタックは回転を始めていたアーケロンの横つ腹に見事に突き刺さったらしい。少し間をおいて、アーケロンの甲羅のあちこちから湯気のようなものが吹き上がってくる。そして、一瞬の後に巨体が膨らみ青いポリゴン片へと変わっていった。

止めを刺したのはティルネル号だが、アスナのリザルト画面にはラストアタック表示がない。つまり、今回は取れないと言われていた船頭の彼がまたしてもラストアタック・ボーンラスをかつさらっていったのだろう。チラとキリトの方に視線を向ければ、やってやったぜと言わんばかりの満足げな顔をしていた。これでまた一つ彼の悪評の元が増えたことになる。

「悪い、急に突進しちやっただけど、やばそうな攻撃してきそうだったからさ……」

「ううん。正しい判断だったと思う。でも、このポジションって何のこと？」

「あ、ああ、船頭、ゴンドリエーレのことだよ」

「……ふーん」

明らかにごまかしている感じだが言いたくないのなら仕方ないし、聞かなかったところで特に問題になるような内容のものとも思えないので、アスナは追及をしないことにする。

「まあ、いいわ。とりあえず移動しましょう。あちらさんの視線がすごく微妙な感じになってるし」

エギル達からは称賛の声が掛けられているが、二大ギルドの面々は皆それぞれ渋い表情をしている。こういう時は逃げの一手に限るのだ。アスナの声でキリトもそれを察したのだろう、声をかけてくれたエギル達に手を振りかえした後、櫂を倒し速やかにカルデラ湖の出口へと船を進めた。

次の村は<<ウスコ>>という名前の小村で、ベータテスト時代も重要なクエストは無かったことから、休憩と補給を行ったらすぐ次の目的地に行くことになるだろうとはキリトの談だ。カルデラ湖からは大した距離でないらしいのでのんびりと座っていたアスナであったが、突如水面を走りながら現れたアルゴの姿に驚愕する。ついに忍者になったのかとキリトが驚いていたが、それも無理はないと思う。木製のサンダルにフローターのようなものを付けた靴で滑るように水面を進んでいるのだから。

このアルゴという女性の神出鬼没さには驚愕を禁じ得ないが、彼女の目的地も恐らくは次の村なのだろうと、アスナはティルネル号の空いている席の一つを勧める。「お言葉に甘えテ」と言いつつ飛び乗ってきたアルゴは、座席に座るなりアスナに顔を寄せて小さい声で尋ねてきた。

「噂になってたゾ、アーちゃん。攻略組の美少女剣士が、男と手を繋いで歩いてたツテ」

「……まあ、そうですね」

恐らくアルゴはからかうつもりで言ったのだろうが、アスナにはそりやそうだろうという思いしかなかった。美少女剣士という言葉には突っ込みを入れたいが、あれだけの人に注目されていたのだ、噂の一つや二つ立って当然だろう。溜息一つつくが、どうやらアスナの反応はアルゴにとっては想定外だったようで、心底意外だという声を上げる。

「おや、もつと照れたり恥ずかしがったりすると思ったんだガ。意外や意外、もしかしてもうそんな関係になったりしちゃったのかな？

アーちゃんは大胆だなア」

「ちよ、ちよつと、そんな関係ってどういうことですか！ 違います！

今日のはただのデ……」

デートという言葉を口にしかけて、ぎりぎり飲み込む。アルゴの言うそんな関係がどんな関係なのかはアスナにはわからないが、デートという言葉を口にすればそれなりの関係であることを認めてしまう

ようなものだ。アルゴのニヤニヤした視線がアスナに突き刺さり、何かしら言い返したい衝動に駆られるが、アスナは必死に口をつぐむ。彼と自分は相棒ではあるが、それ以上の関係ではないのだ。

彼からの好意は感じ取れる。しかし、彼は決してこちらに踏み込んでこない。手を繋いだのも、元々は第二層でバフを貸してくれという名目の元にアスナから行動したものだ。今日は彼から手を繋いでくれたが、それ以上のことはしなかった。攻略に関しては自ら積極的に動くのに、こと人間関係に関しては受動的なのだ、キリトという少年は。

これ以上の事を、望めば、してくれるのかもしれない。だが、それは自らの甘えによる衝動を彼に対して押し付けることになる。そもそも手を繋ぐことだって相棒という関係で行うには少々無理があることであつたし、これ以上のことを自分が本当に望んでいるのかもわからなかった。

「アーちゃん、どうした？ 急に俯いて、暗い顔になってるゾ」
「あつ、ご、ごめんなさい。ちよつと思考の沼に嵌っちゃつて」

考え込んでいる内に表情が暗くなっていたようだ。俯いていた顔を上げ、平静を装ってからアルゴに謝罪する。きつと、この問題は一人では答えが出ない。キリトと話し合つて初めて何かしらの結論が出せる部類のものだ。だが、それを話すには彼との距離が少し遠すぎる感じがした。アルゴは「そうカ」と一言だけ言うと、アスナをじつと見つめている。

「……マア、あまり考えすぎないことだなアーちゃん。あの世代の男子なんて、少し脱いで誘つてしまえば一発だゾ」

「脱いっ!? ななな、何言ってるんですか！ そ、そんなことできるわけないじゃないですか！ そもそもそんな関係じゃないって……！」
「ニヤツハツハツ！ 顔を赤くして言つても説得力無いゾ、アーちゃん！」

——こ、この人は、本当に……！

からかわれているとわかっているのに、つい反応してしまうのはアルゴの話題の振り方が上手いせいだ。そうに違いない。ネタを握ら

れてるために手も足も出ない事実は無性に悔しさを感じるが、口を開けばそこをまた突つ込まれる。今は黙っているのが一番なのだ。

「ありや、拗ねちゃったかナ？ まあでモ、アーちゃんはクリスマスを楽しめているようデ、結構結構」

「……確かに、楽しかったですけど」

まだ夜にもなっていないというのに、今までの人生で一番楽しいと感じるクリスマスだった。現実世界とは違う、人の温もりを感じるこ
とができるクリスマス。一緒にご飯を食べるだけで、一緒に歩くだけで、今までモノクロだった一日が色彩豊かになった。平凡な一日が、思い出に残る貴重な一日に変わった。大切な時間を与えてくれたキリトにはそのうち何かお礼をしなければならぬだろうと考えた所で、アスナはあることを思い出す。

——そういえば、プレゼント渡すの忘れてたな。

楽しさにかまけ過ぎて、折角用意したプレゼントのことを忘れてしまっていた。昨日の夜に用意したプレゼントは二つで、キリトとアルゴのものだ。キリトがアスナの歩むべき道を示してくれた恩人ならば、アルゴはアスナに歩き始めるきっかけをくれた恩人なのだ。この二人にプレゼントを渡さないという選択肢はアスナには無かった。

キリトとはこの後も一緒に行動するので夕食の後にも渡せばいいとして、アルゴには今渡ししておくべきだろう。村までは共に来るの
だろうが、その後どう行動するのかわからないし、明日も会えるとは限らない。

「あの、アルゴさん」

「ン、何だい？ 何か話す気になったのかナ？」

「違います！ ただ、今日はクリスマスなので、良ければこれ使ってください」

アスナはメニューを操作し、事前に用意しておいた赤いリボンで閉じられた紙袋をアルゴに手渡した。

「オオー！ ありがとう、アーちゃん！ 開けていいかい？」

「はい。その、裁縫スキルが低くて実用品とはいかなかったんですけど、もしよければ使ってください」

アルゴに渡した紙袋の中にはマフラーと手袋が入っている。アスナの裁縫スキルでは現在の最前線で通用する程の防具を作ることはできず、かといって使える物を購入できる程所持金に余裕は無い。結論として、実用品ではなく何かあったときに使える物で、冬らしいものをとということでのこのチョイスになった。普段使うことはできないが、今後雪が降ったり寒い階層が出てくることもあるだろう。その時にでも、使ってもらえればいい。

「イヤア、まさかプレゼント貰えるとは思ってなかったから、オイラにも用意してないんだ。ごめんヨ」

「気にしないでください。いつもお世話になってますから」

「そういつてもらえると助かるヨ。でも、今度必ずお礼はするから期待しててナ！」

アスナが頷くと、アルゴはアスナからのプレゼントを早速船尾にいたキリトに見せびらかしている。その姿は本当に喜んでくれているように見えて、アスナの心を温める。

——— といえば、誰かにクリスマスプレゼントを贈るなんて久しぶりだな。

幼いころに兄に手伝ってもらって両親に何かしら贈った記憶があるが、アスナが一人で身の回りのことができるようになってからは両親も仕事を優先するようになり、誰かにプレゼントを贈る機会など無くなっていたのだ。

現実世界よりも仮想世界の方が新しくいい思い出が増えていることはアスナの意思を揺らがせるが、相棒の言葉を借りて、プラスの感情を否定するのは止よすでしょう。アスナは笑みを浮かべながら、キリトとアルゴがじゃれついているのを見続けた。

第四層の三つ目の街<<ウスコ>>は三日月形の湖に浮かぶ村だ。バルサ材のような丸太を何本も組み合わせ、その上に十数軒の小屋や通路、広場が作られている。主街区ロービアはヨーロッパテイストの街だったが、この村はまさに南国風といった雰囲気だ。クリスマスイブには合わないことこの上ないが、季節を度外視すれば一見の価値は

ある景観と言えるだろう。

フィールドボス攻略に参加した他のプレイヤーは主街区に戻ったか、別の場所へと行っているようで今この村に居るのはキリト達三人だけだ。村の中をしばらく進み、トロピカルな雰囲気のレストランに腰を落ち着けた。併設されているオープンテラスは湖に面しており、この街の雰囲気を楽しみながら食事をするにはまさに理想的だ。取りあえずはフィールドボスの攻略お疲れ様ということで、大振りなカクテルグラスに注がれた色鮮やかな飲み物で祝杯を挙げる。

「しかし、キー坊驚いたゾ。クリスマスイブにアーちゃんをデートに誘うとは、やるじゃないか」

「ちよっ！ アルゴさんまたその話ですか!？」

「さっき聞いたのはアーちゃんだけだからナ。当然その相方にも話を聞かなきゃ情報屋の名が廃るつてもんサ」

この街へ移動している途中の船の上でアルゴとひそひそ話をしていたアスナが急に拗ねたように見えたのはこれが理由だったらしい。キリトの目の前でキャツキャとしていた二人の女性の姿をぼんやりと見つつ、キリトは午前中の出来事のことを思い出す。

食事をし、公園でゆっくり過ごし、商業区の商店を見回り、はじめりの街の城壁の上から見渡せる第一層の全景を楽しんだ後、第二層のレストランでくくトレンブル・ショートケーキをクリスマスケーキ代わりに美味しくいただいた。何分妹以外の女性と二人で歩くなど初めてであったので、アスナを楽しませることができたかどうか不安ではあるが、いつもよりは笑顔が出る回数が多かったように感じたので問題はなかったと思いたい。

「話って言っても、はじまりの街をぐるぐる回ってただけだからなあ。特に何もなかったぞ」

「嘘付ケ。手をしっかり繋いで楽しそうに歩いてたって情報が上がってるんだ。何もないってことはないだろう?」

「……まあ、手は繋いでたけど、それ以外は本当に何もないぞ?」

確かに昨日の夜のキリトは嫉妬の心を覚えていたし今日だってデートという形を取ったのも確かだが、アルゴの言う何かとやらがな

かったのは事実であるし、またあっても困る。

アルゴの探るような視線がキリトに向けられているが、グラスに注がれたライチっぽい香りのジュースを傾けながらアルゴの追及を躲す。普段なら慌てるどころかもしれないが、今回は全く動じないキリトの態度を見て諦めたのだろうか、アルゴは溜息をつくとやれやれといった体で口を開いた。

「本当に何もなかったみたいだな、キー坊。オネーサンは悲しいゾ、クリスマスイブにデートしたのにキスの一つもしないとハ。アーちゃんに恥かかせたままでもいいの力？ン？」

「キツ、キキキ、キスなんてするわけないじゃないですか!? それに恥なんてかいてません!」

「ホホウ！ それはつまり、キー坊のエスコートに満足しているト！ 良かったなキー坊、アーちゃんはまたデートがしたいみたいだゾ！」

顔を真っ赤にして涙目になりながら否定するアスナを掌の上で転がして楽しんでるアルゴ。普段はあれほど冷静で知的な雰囲気のアスナをここまで振り回すとは大したものだと思う。ターゲットを引き受けてくれているアスナと、あのニヤリとした表情がこちらに向いていないことに感謝するが、怒りながらぶるぶると震えだしたアスナが爆発するのも時間の問題だ。

「ギテギテ、可愛いアーちゃんの姿も見れたし、オイラは主街区へ戻るとするかナ」

しかし、流星にそこは<<鼠>>と言ったところか、しっかりと引き際を弁えている。怒るタイミングを逃したアスナは自分の怒りの向けどころが無くなり大変であろうが、その内気づくはずだ。アルゴにこんなにかかわれたのは、目の前の黒い奴がフォローしなかったせいだと。キリトからすれば理不尽なことの上ないが、フォローを入れなかったのも事実なので何も言えないのが辛い所だ。よって、キリトの取るべき選択肢は一つ。別の話を繋げることで、うやむやにするということだった。

「おいおい、もう戻るのか？ こんなに早く戻るなら、何のためにこの

村まで……つてそれは野暮か」

「そういうことだナ。この村のクエストやら店売りアイテムの情報は早めに必要だろうヨ。それと、一応クリスマスパーティーにも顔を出さなきゃならんからナ。両ギルドのリーダーから直接誘いが来てるんだ。あまり目立ちたくないんだが、無下に断れんしナ」

「ほう。リンドとキバオウから、ねえ……」

あの二人はしっかりとアルゴというプレイヤーの重要性を認識しているということだろう。現在攻略がここまで順調なのは、アルゴがベータの情報と現在進行形で上がってくる正式サービスの情報を集積して配布しているからだ。恐らくではあるが、そのような重要人物であるアルゴと二大ギルドの関係は良好だと示すと同時に、アルゴの情報は攻略組も信用しているものだというを下層の面々に知らせるつもりなのだろう。

一時はアルゴもキリト同様ベータテスターとしてバッシングを受けたが、その悪評判を消しても余るほどの功績を上げているのは間違いない。今回の事でアルゴが情報屋として動きやすくなればいいのだが。

「まあそういうことなら、リーダー二人と乾杯でもして楽しんでくればいいさ。折角のパーティーだからナ」

「そうさせてもらうヨ。誰からも呼ばれなかった誰かさんの代わりにナ」

「ぐっ！ い、いいんだよ！ ネットゲプレイヤーのクリスマスは、一人パソコンの前に座ってゲーム内イベントを楽しむものなんだよ！」

「悲しいナア」

「やかましい。てか、お前だってどうせ俺と大して変わらんクリスマス過ごしてきたんだろ？」

「……キー坊。オネーサンにケンカを売るとはいい度胸ダ、気に入つタ。お望み通り、明日から主街区には入れないようにしといてやる」
「すいませんでした」

青筋を立てつつも、ニーツコリと今まで見たこともない綺麗な笑顔で物騒なことを口にしたアルゴに、深々と、テーブルに額がつくまで

頭を下げる。他のプレイヤーならまだしも、そのセリフをアルゴが言うと洒落にならないのだ。

「マア、アーちゃんのプレゼントに免じて許してやるヨ。優しい優しいアルゴさんとアーちゃんに感謝するんだナ。……じゃあ、そろそろ行くヨ。キー坊、アーちゃん、メリークリスマス」

「おう、メリークリスマス」

「アルゴさん、気を付けてくださいね。メリークリスマス」

アルゴさんの優しい温情で許されたキリトは、いつの間にか復活していたアスナと共に手をひらひらと振りながらアルゴを見送る。あつという間に後ろ姿が見えなくなり、先ほどまでの騒々しさが嘘のように静かになった。湖の小さな波が丸太に寄せる音だけが響き、その定期的な自然音によって増幅されたのだろうか、不意に眠気が襲ってくる。まだ陽は高いがこのまま隣の宿屋で一度休憩を取るのも選択肢の一つかもしれない。遠出をするには遅いし寝るには早いという、何とも中途半端な時間だった。

「キリト君つてさ、アルゴさんと仲良いよね」

さてどうするかと、相棒と打ち合わせでもしようと思った矢先にアスナの言葉が耳に入る。ありきたりな内容の言葉とは裏腹に、じつとこちらを見ているアスナの目線は何故か真剣だったので、キリトは茶化すことなく真面目に答えた。

「ああ、ベータテスト時代からの知り合いだしな。仲は良い方だと思うぞ」

友人、と言つても差し支えはないだろう。しかし、何でも気軽に話せる相手というわけではない。アルゴのポリシーは売れる情報なら何でも売るといふものだ。今こうしてキリト達と話していた内容も、誰かが相応のコルを払えばアルゴは売るだろう。アルゴと会話をするときには、必ず発言に一定のフィルターを作らなければならない。

仲は良いし友人とも思うが、仲間とは思わない。それがキリトとアルゴの関係と言えた。

キリトの答えを聞き、アスナは一瞬俯いてぼそぼそと何かを呟いた後、顔を上げる。その表情はいつもの彼女のクールな表情に戻ってお

り、何故アスナが今アルゴとの関係を訊ねてきたのかを察することはできなかった。

「さあ、この後どうするか決めましょうか。まだ寝るには早いし、クエストの二つや三つこなせるでしょう」

理由を聞くべきか迷ったが、自ら話題を変えたということあまり聞いて欲しくないのかもしれない。キリトは疑問を無理矢理頭の奥に押しやって、今後の予定を決めるべく思考を切り替えた。

時刻は午後五時ちょうど。今後の方針を決めクエストを一通り受け終えたキリト達が、補給を終えてさあ移動を開始しようとティルネル号を係留している船着き場へと足を向けた時のことだ。青く輝いていた上層の底が突如として灰色に曇り、湖から冷たい風が吹いたのと同時に、空から数えきれないほどの白い粒が舞い降りてくる。

「……えっ、嘘……」

「……雪、かよ……」

呆然と、空を見上げる。ほんの数分前まで南国の暖かさと陽光を保っていた世界が、一瞬にしてクリスマススイブに相應しい世界に変わった。南の島に相應しい雰囲気、霧の村に雪が積もっていき、NPCの子供のはしゃぎ声が聞こえる。

「まさか、本当に雪が降るなんて思わなかったな……」

ポツリと呟かれた言葉に無言で頷いて同意を示す。このSAOの世界は各層ごとに気候が設定されているが、それは現実世界の日付とは全く関連性が無いようで、現にこの階層は十二月だというのに体感で二十度を超える過ごしやすい気候設定がされていた。しかし、何の前触れもなく下がった気温と降り始めた雪は階層の設定に関係がない、恐らくはクリスマス限定の<<<天候イベント>>なのだろう。ちようど主街区ではクリスマスパーティーが始まった時間だ。文字通り降って現れたクリスマスらしさに、皆が歓声を上げているに違いない。

「素敵な……、本当に素敵なクリスマスだね」

空から視線を戻しキリトに向けられたアスナの表情は穏やかな笑

顔で、直視したキリトの脈拍を上昇させる。何とも気恥ずかしくなりキリトは視線を外して街の中央部にある広場に目を移せば、赤道直下の南の国に雪が積もるといふ、現実では間違いなく見ることができないであろう光景が広がっていた。

雪化粧という言葉が頭に思い浮かぶと同時に、キリトはベータ時代に訪れたとある場所の光景を思い出す。ベータテストの時は砂と岩ばかりの荒野によつきりとそびえ立つ建物でしかなかったが、その荒野が水で満ちているとしたら、この雪と相まってさぞ素晴らしい景色になっているに違いない。

今後雪が降っている層が出てくることもあるだろうが、この第四層で雪が降るのは恐らく来年のクリスマスまではないだろう。ならば今日くらいは、この極めて希少な設定をキリトが楽しむために、アスナに楽しんでもらうために全力を尽くすのも悪くないと思う。

「アスナ。提案があるんだ。さつき決めたばかりなのに悪いんだけど、この後の予定を全部キャンセルしたい」

「えっ？　ど、どうしたのいきなり」

キリトの言葉に、アスナが急に何を言い出すのかと驚いている。

「いや、せっかく雪が降ったんだ。こんなクリスマスらしい状況で、いつでもできるクエストをこなすだけなんてもつたないからさ。

……アスナが良ければだけど、午前中の続きでもしないか？」

「っ、続きって……」

顔を赤く染め、照れながら呟く姿はとても可愛らしかったが、こちらの視線に気づいたのだろう、「コホン」と咳払いを一つした後キリトに問い返してきた。

「別に構わないけど……。わたしに気を使ってるなら、もう十分だよ？　午前中にすぐく楽しませてもらったし、これ以上攻略以外のことに時間を使うのはきみの足を引つ張ることにならない？」

「ならないならない、俺から言い出したことだし。では、時間をいただくってことでよろしいですかね？」

コクリとアスナが頷いたのを見て一息吐く。キリトが思い描いている風景が確定したわけではないため少々不安ではあるが、その場合

でも実質的に攻略を進めていることになるし、何よりもあの場所に居るであろう人物の事を考えればアスナが怒るということも無いだろう。

「よし、行こうか。ちよつと移動に時間がかかるけど、きつと楽しんでもらえると思う」

「うん。じゃあ改めて、エスコートお願いします」

軽く頭を下げはにかむアスナに、キリトは少々照れを感じつつも左手を差し出す。すると、今度は自然に、驚くことなく、アスナがキリトの手を握り返してきた。雪が積もるほどに気温は下がっており、閑東住みのキリトにとつては少々寒すぎるもので、顔や右手は冷えてしまっていた。しかし、アスナと繋いだ左手だけは、彼女から伝わる熱のおかげでとても暖かい。

エスコートという言葉を言い訳にして手を繋いだが、それもティルネル号に乗るまでの短い距離だけだ。時間にすれば一、二分のことだろう。それでも、その短い時間の間だけでも、キリトはこの左手から伝わる熱を感じていたかった。

<<ウスコ>>の街を出てからというもの、モンスターがpopする気配がまるで無いことにアスナは疑問を感じていた。操船しているキリト曰く、イベントの日にモンスターの出現率が上下することは珍しいことではないとのことだが、圏外での移動中は常に気を張ってきたせいだろうか、どうにも調子が狂うのは仕方ないことなのかもしれない。

そんな落ち着かない気分でいると唐突にピコンとメッセージ受信の音が鳴り、ウインドウを確認すればアルゴからのメッセージが届いていた。「アーちゃんの前プレゼント早速役に立ったゾ！」という短いものではあったが、わざわざお礼のメッセージを送ってくれるアルゴの気遣いがありがたく感じる。メッセージには容量の小さい添付ファイル——恐らくテキストファイルだろう——が添えられていたが、寝る前に開けてくれと書いてあったので、その通りにしようとしてまずウインドウを閉じた。

こうして船に揺られている間も雪は相変わらず降り続いており、気温も低い。この雪がくく天候イベントくくとやらであれば、恐らくは今日一杯は——もしかしたら明日まで——降り続けるのだろう。このような気候でフーデットケープを羽織った程度の薄着で船に乗るなど現実世界なら風邪をこじらせること間違いがないが、幸いなことにこの仮想世界では少々冷えるなどといった程度の感覚でしかない。この世界にくく風邪くく等というバツトステータスがあるのかどうかはアスナにはわからないが、少なくとも現実世界より体調管理が楽なのは事実だろう。

船頭のキリトは權を大胆に前に倒しており、普段圏外を進むときのスピードよりもかなり早い。しかし、そのおかげだろうか白く靄がかかった曇り空の彼方に、薄らと灰色の巨大な塔が見えてくる。正確な距離はわからないが、この場所からは大体三キロほどはあるだろうか。

「キリト君、まさかあそこに行くわけじゃないよね？」

予定をキャンセルするとは聞いたが、行き先を聞いてはいなかった。彼の話し方を考えればこのまま迷宮区の攻略開始となることはないだろうが、まさかということもあり得るのでアスナは一応尋ねてみた。

「いやいや、流石に迷宮区は勘弁かなあ。目的はこっちの方」

キリトが指差したのは南東方向。川はこの先で二股に分かれる様で、テイルネル号は塔のふもとにある最前線の村とは反対側の川を進んでいく。今までの川の両端はただの岩壁であったが、進むにつれて趣が変化し、細かい平行線が引かれている黒い玄武岩のような岩肌に変わる。周囲の急な雰囲気の変化にアスナは戸惑うが、キリトはマップを見ながら黙々と操船しており、周囲を警戒する時の緊張を感じ取ることができなかつた。

「アスナ、そろそろ着くぞ」

そうして船に揺られ続けて一時間程経った頃、キリトの声と同時に船の前方から白い霧で覆われていく。急に視界が無くなり、すぐ側にいた筈のキリトの姿さえ霞んで見えなくなるが、アスナは何故かこの

霧に見覚えがあるような気がした。そうして考えている間にも船は進み続け、突然パアツと、今までの視界が嘘のように霧が晴れると同時に、アスナの眼には巨大な砦のようなものが目に飛び込んできた。

双頭の古代竜《バイセプス・アーケロン》と戦った時のカルデラ湖よりも何倍も広い円形の湖。その中央にそびえ立つ砦は、最早城と言っても問題ないほど巨大なものだ。荘厳、壮大、そんな言葉が似合うであろう城の頂上には角笛と曲刀を交差させた文様が描かれている漆黒の三角旗、ダークエルフの国である<<リユースラ王国>>の旗が掲げられていた。

白っぽい石で造られた外壁と、灰色の瓦のようなもので覆われている屋根。アーチ型の窓からは屋内からのオレンジ色の明かりが零れ、粉雪舞い降りる藍色の宵闇と見事なコントラストを醸し出していた。湖に浮かぶ巨大な城はまさしく幻想世界の代物で、それだけでも見たものの心を奪うであろうことは間違いない。

「きれい……。現実世界で見た、どんなお城よりも綺麗」

現実世界でも欧州の有名な城をいくつか直接見てきたアスナではあったが、これほど目を奪われる建造物を見たことはなかった。今後クリスマススイブという日付になる度に、アスナはこの光景を思い出すことになるだろう。

「これは最高の……最高のクリスマスプレゼントだよ。ありがとう、キリト君」

「喜んでもらえてよかったよ。ベータ時代は荒野の中の砦って感じだったから不安だったけど、予想通り湖になってくれてホツとしました。それにまだあるんだ、見せたいもの」

心からのお礼はほにやりと笑ったキリトに受け取られた。今のアスナの精神状態では彼の笑顔を正面から受け止めることができず赤くなつた顔を俯かせるしかなかったが、最後に付け加えられた言葉に対する疑問が沸騰しかけたアスナの思考を少しだけ冷やす。しかし、いつもより回転が遅いのは間違いなように考えても仕方ないと諦めたアスナは、目の前の幻想的な景色を心に深く刻むべく城を見続けた。

ティルネル号が正門からまっすぐに伸びる石積みの大棧橋に横付けされ、青銅製の係留柱に固定される。キリトが差し出した手を掴んで棧橋へと登ったアスナは、城を間近で見ることと改めてその巨大さを実感した。棧橋の中央で城を見上げているキリト同様に視線を上げる。最も高い尖塔^{せんとう}までは五十メートルほどはあるようで、その高さは第三層主街区の巨大バオバブと比較できるレベルだ。

城に入るべく城門へと進むと衛兵に止められたが、第三層のダークエルフの司令官から貰っていた紹介状を掲示すると巨大な城門が左右に開く。キリトに促され城内へと足を踏み入れたアスナは、予想を超える場内の光景に思わず歓声を上げてしまう。

門をくぐってすぐの前庭には植木や生垣、鋳鉄の柵が各所に設置されたランプの明かりに照らされ、アプローチの奥に見える扉までの道には足跡一つついていない。まるで一つの絵画を見ているようであったが、後ろの城門が閉まるのを見て躊躇いながらも足を踏み出す。

仮想の雪を踏みしめながら進み、城のエントランスに繋がる大扉を開ける。メインホールは赤い絨毯が敷かれ、奥には上層に続く大階段が見える。ホールの中央に設置された大理石の噴水から吹き上げられる水が天井からの照明を反射しキラキラと輝いていた。左右にある通路からは、何処からか聞こえるバイオリンの音に合わせるように、見慣れたダークエルフのNPC達が歩いてくるのが見える。

ダークエルフの拠点であるならクエストの進行なども行えるのだろうか、次々と目に入ってくる素晴らしい景色に圧倒されてしまったアスナは何を言っているかわからなくなり、只々溜息をつくばかりだ。

「この城自体もすごいけど、ここの施設はもつとすごいぞ。必要なショップは全て揃ってるし、食事も宿泊施設も一級品。ついでに豪華な大浴場まであるんだ」

「えっ!? お風呂まであるの!?!」

「ああ、ここは^{インスタンス}一時的マップだから他のプレイヤーとかち合うことも

ないし、笑おうが叫ぼうが歌を歌おうが自由だぜ」

「ぎ、流石にそれはしないわよ。そんなことより、早く中を見て回りましょう！」

アスナはキリトの手を掴み引つ張る様に前に出ると、手を引かれたキリトはバランスを崩しつつアスナに横に並ぶ。

「いいけど、最初の行き先は決めてるんだ。こっち」

何処に行こうかとホール奥の大階段の前で立ち止まると、行き先は決めているというキリトに逆に手を引かれる。アスナが手を引いた時のようにバランスを崩すような強引さは無く、先導されるがままに右の通路を進んでいく。途中で何人かの兵士とすれ違いながら進み、辿り着いたのは屋外。恐らく中庭だろう。

黒っぽい花が咲いたイバラの生け垣が迷路のように設置され、雪が薄らと積もった石畳には誰かが奥へと歩いて行ったのだろうか、足跡が残っている。それを目印にするように奥へと向かいイバラの通路を抜けると、立派な針葉樹に抱かれた美しい庭園があった。本来ならばその美しさに目を奪われるのだろうか、その針葉樹の周りに置かれていたベンチの一つに腰掛けていた女性の姿が、アスナの目を引きつけた。女性の方も庭園に誰かが入ってきたことに気付いたのだろうか、顔だけを入り口に向け、こちらを確認したと同時に勢いよく立ち上がった。

第四層でまた会おうと、確かに言った。しかし、彼女はそうらしくないとは言え間違いなくクエストのキーとなるNPCで、クエストが終わってしまうえば記憶はリセットされてしまうのではないかとも思っていた。だが、今こちらに駆けよってくる彼女は、自分達のことを覚えてくれてるに違いない。

「キリト！ アスナ！」

ぐつと、両手で抱き寄せられる。第三層の時とは違い鎧ではなくドレスを着こんではいるが、この女性は、キズメルは、間違いなくアスナの知っている彼女だった。

「キズメル、会いたかった」

見せたいものはこれだけじゃないとキリトは言っていたが、本当

に、この出会いこそが最高のプレゼントに違いなかった。右手を繋いでいたまま抱き寄せられたため、左腕だけをキズメルの背中に回し抱擁に応えた。

仲良く話しながら歩いているアスナとキズメルを後ろから眺めながら、キリト達はダークエルフの城<<ヨフェル>>城の大食堂へと移動していた。四本の塔がコの字型の通路で連結されたこの城は、右側が城に駐留する兵士たちの、左側が城主や使用人たちの部屋となっている。中庭には左側から向ったため、大食堂がある右側の二階まではそこそこの距離がある。途中、キズメルのことを知っているのであるろうNPCが挨拶してくるが、その様子は形式上の敬意は払っているものの、どこかおざなりに見えた。

「……何か、態度悪いわねあの人達」

どうやらアスナにも同じように見えたのだろう。波風立てるまいとキリトは口に出さなかったが、正義感の強いアスナは納得がいかなかったらしい。

「形だけでも敬意を払ってくれているだけマシさ。私もこう見えて近衛騎士だからな。城のほとんどの者たちから見れば上役になる。いつまでいるかわからない外から来た上役など、面倒なだけだろう?」「な、なるほど。この人たちからすれば、監査でも受けてるように感じるのかしらね」

アスナが戸惑うのも無理がないと思うくらい俗っぽい話だ。この城の外観は幻想的なのに、中で起こっていることはあまりに現実的過ぎる。キズメルの行動は極めて人間らしいがそれにも限度はあつていいと思う。茅場晶彦がどういった意図でこのようなプログラムを作ったのかはわからないが、何となく製作者の苦勞を察することができた気がしてならない。

何とも切ない気持ちになりながら歩いている内に、目的地の大食堂に到着する。食堂では兵士たちや子供、ローブを纏った集団などがそれぞれ固まって食事をとっていた。このゲームの設定では魔法は失われたはずだがと、疑問に思ったキリトが彼らのことをキズメルに尋

ねると、第九層の王城から秘健回収任務の監督に来た神官だそうだ。横柄な態度なのでこの城の者たちは不満を持っているらしく、キズメルはとぼつちりを受けているらしい。

「とまあこんな環境なのでな、少々気疲れしていた所だったのだが……会いに来てくれて嬉しい。二人が来てくれたおかげで一気に気が楽になった」

笑顔を見せるキズメルと彼女に構ってもらっているアスナは本当に仲の良い姉妹のようで、見ているキリトの気持ちを穏やかにしてくれるが、同時にその深い関係に不安も感じる。キズメルは理性的で、意外と世話焼きな部分もある人物だ。彼女にも妹がいたというし、懐いているアスナに妹の面影でも感じているのかもしれない。キリト達とキズメルの関係は極めて良好的と言ってよく、余程の事が無い限りは敵対をすることは無いだろう。

だが、問題はその余程のことが起きた時の話だ。もし何らかの間違いが起こって、クエストの流れでキズメルと相対する事態になったとしたらどうなるだろう。悪夢のような展開ではあるが、MMOに限らずゲームのストーリークエストでは、お世話になったNPCと戦うということが無いわけではない。従来のゲームであれば画面上の事の話であるから、後味は悪くとも納得することはできた。しかし、このVRMMOにおいて、あまりにもリアルすぎるこの世界においてクエストがそのような展開になったら、プレイヤーはどのような影響を受けるのだろうか。

もしアスナがキズメルに剣を向けねばならない事態になれば、彼女の手でキズメルを殺めることになれば、アスナは再び絶望の中に囚われかねない。

一度その可能性があることを言っておく必要があるだろう。極めて言いづらいことではあるが、知らずにその状態に置かれるのと、可能性を知っているのではかなり違うはずだ。

そんなことを考えていると、メイド服を着たダークエルフのNPCが料理を運んでくる。スープと前菜から始まる立派なコース料理でメインディッシュは鶏のローストと何ともクリスマスらしく、これも

もしかしたらクリスマスイベントの一つなのかもしれないと、思わずアスナと顔を見合わせた。クリスマスケーキはお昼においしくいただいていたので、これでクリスマスに食べるべきものは一通り食べることができる。

思考が暗い方向へと行ってしまうていたが、折角のクリスマスディナーなのだから明るい思考で食べる方が良い。キリトは考えていたことを頭の片隅にしまい込んでから、アスナとキズメルの会話に加わった。

キリト達に今夜の宿としてあてがわれたのは、城の東側四階にある士官用の部屋。所謂スイートルームというやつだった。共用の居間に二つの寝室が接続しているようで二人で泊まる分には全く問題はない。しかし、キリトとアスナは男と女であるからして、いくら寝室が別とは言え同じ部屋に泊まるというのはキリトには問題なくともアスナには大問題だろう。

左隣の部屋にいるから何か用があつたら呼んでくれと言って自室に戻るキズメルを見送った後、部屋の豪華さに気を取られていたアスナが寝室の事に気付き無言でこちらに視線が送られる。視線より先にくくシバルリック・レイピアの切っ先が飛んでこなかったことに安堵しつつ、キリトも無言で視線を返す。

「……………」

無言の時間が続く。麗しの細剣使い様は、どうやら何を言うべきか悩んでおられるらしい。キリトとしては、可能であれば穏当な選択肢を選んでいただきたいと願う。

「…………キリト君、どっちの部屋使う?」

その願いの甲斐もあつたのか、たつぷり考えた後に発せられた言葉はキリトの想像以上に真つ当な言葉だった。即座にどちらでもよいと答えるとアスナは部屋の東側、バスルームに繋がっている方の部屋を選んだ。

「風呂か。さつきも言ったけどこの城には大浴場があつたはずなんだけど、部屋の風呂使うのか?」

「あつ、そうだったわね！ でも、男湯と女湯は別なのかしら？」
「いや、そこまではわからないけど。多分一緒じゃないかな……」
「……………せつかくだし、行くだけ行ってみましようか」

取りあえずということでも城の東側三階にある大浴場まで足を運んだが、やはりというべきか更衣室、浴室共に一つずつしかなかった。これはダークエルフは混浴が基本という設定なのか、はたまたデータ容量の問題なのかはわからなかったが、ナーヴギアが液体の描写を不得手にしていることを考えると後者の可能性が高いだろう。

「予想通りってどこか。俺は部屋の風呂使わせてもらうからさ、アスナはここでゆっくりしてくるといいよ」

大浴場というだけあって、脱衣所からしてとても広い。真っ白なタイルで床と壁は覆われており、天井にはシャンデリア、隅には大きな鉢植えが設置されている。中央のテーブルには飲み物や果物まで用意されており、現実世界でこのような浴室が用意されているホテルに泊まったら一泊いくらかかるのかわからない。

折角の豪華な風呂なのだからゆっくりと楽しんでもらいたい。側に男が居ては気になってしまいうらやとキリトは気を使って部屋に戻ろうとしたが、後ろを向いた瞬間にコートの裾を掴まれる。

「待って」

待っても何も離してくれないと動けませんという言葉を飲み込んでアスナに向かい合えば、「うー」と唸りながら上目遣いでこちらを見る細剣フェンサー使い様の姿が。

「ど、どうした？ ……ここで見張ってた方がいいか？」

「うー……」

じつとこちらを見上げていたアスナが、コートの裾を掴んだまま脱衣所を覗く。脱衣所の中には誰もおらず、浴室の中からも物音は聞こえない。今ならば誰の眼も気にせず風呂を楽しむことができるだろう。とそこまで思考したところでキリトはアスナが唸っている理由を理解した。しかし、理解はできたが問題を解決できるかという話は別だ。

「男性NPCが来て入らないでくれって言っても、聞き入れてくれる

かは怪しいぞ」

NPCとはいえアスナが入浴中の浴室に男を入れるわけにはいかないし、それがシステムの可能かどうかはわからない。かといって試してみるわけにもいかない以上、ここは素直に諦めてもらうべきなのだろう。アスナを見ればうーうーと唸りながらついには、もじもじとしだした。彼女の珍しい姿をもう少し見ていたいという悪戯心も生まれるが、このままこうしていても仕方がない。諦めて部屋に戻ろう、キリトはそう口にしようとした。しかし、

「ねえ、キリト君……一緒に入ってくれる？」

意を決したアスナの口から飛び出た爆弾発言に、キリトの頭の中は真っ白になった。

脱衣所の規模や雰囲気から浴室もさぞ豪華なのだろうと思っただけだったが、まさかこれほどとは思わなかった。床は透明感のあるアイボリーホワイトのタイルが敷かれ、湖を囲む玄武岩で作られた縞模様の入ったエボニーブラックの浴槽はちよつとしたプール並みの大きさだ。壁は湖に面する部分がガラス張りになっており、三階という高さもあって全景を見渡すことができた。

「凄いね。こうして入っていると、空に浮かんでいるみたい」

「そうだなあ。夜景もすごいけど、これ昼間に来ても楽しめるぞだな」
無類のお風呂好きであるアスナさんが言うには、このようにリゾートホテル等にある海や湖と繋がっているように見えるお風呂のことを「<<インフィニティ・エッジ>>と呼ぶらしい。「片手剣のソードスキルみたいだな」「いや、細剣じゃない？」などと染まってきたアスナと軽い会話を交わしつつ、キリトはぼんやりと、いや確固たる意志で湖を見続ける。

今のキリトには下手に視線を動かすことは許されなかった。理由は簡単だ。すぐ横に、手を伸ばせば届いてしまう距離に、白いワンピース姿の美少女が居るのだから。浴槽の縁に腕を組んだ状態で手を乗せ足をまっすぐに伸ばしているキリトと、恐らくは同じような体勢で、金色の吐湯ととうぐち口から流れ出るお湯の音の中にかすかに混じって聞

こえる水の音から、両足をゆっくりと上下させているのだろう。

「こんな大きいと泳ぎたくなっちゃうわね」

「泳いでもいいんだぞ？ 城に入ったときにも言ったけど一時的マツ
プだからな、誰かに見られることもないし」

「きみに見られるでしょ、きみに」

確かに、風呂で泳いでいる人が居たらついつい目を向けてしまうだろう。尤も、アスナなら泳いでいなくても人の目を引き付けそうなものだが。

「でも折角水着も作ったし、どこか目立たない場所なら泳ぐのもいいわね」

「可能ならモンスターが居ないところだな。もう追いかけられるのは勘弁だよ」

「……あのオタマジャクシモドキだけは、わたし一生忘れないと思うわ」

アスナの言葉に大きく頷くことで同意を示す。あの恐怖と徒労感
は忘れることはできない類の物だろう。現実世界に戻った後でも例
のBGMを聞く度に思い出すに違いない。

——そういえば、船に乗ってる最中にはあのオタマジャクシ出てこ
なかつたな。

カニやライモガイやは倒してきたが、あれ以来あのモンスターと
出会う機会は無かった。怒りの細剣使いフェンサー様が「次に会ったら絶対肉に
してキリト君に食べてもらう」などと息巻いていたのである意味幸運
だったわけだが、キリトとしても仕返しの一つくらいはしてやりたい
とは思う。

移動手段が異なると出現するモンスターも異なるのか、はたまた単
純に出現エリアが往還階段と主街区の間だけなのか。その内機会が
あるかもしれないのでアルゴにでも聞いておこう。

「キリト君、またつまらないこと考えてるでしょ」

「えっ!? い、いや、そんなことはないぞ?」

モンスターの出現情報はつまらないことではないと言いたいが、そ
れを調べる動機が果てしなくつまらないものだったので形だけの否

定をするに止める。追及を逃れるようにキリトが再び意識を目の前の湖に戻すと、呆れたのかアスナのため息が聞こえた。

「さつきから随分と熱心に湖を見てるけど、そんなに気に入ったの？」

「ん？ あ、ああ、綺麗だよなあ」

「……ふーん。ま、いいけど」

——絶対に良くないやつですね、そのセリフ。

後で説明する必要があるそうだが、「オタマジャクシに復讐する方法を考えてました」等と言えばレイピアが光ることは間違いない。何かしらでごまかす必要があるだろうが、生半可な言い訳でごまかされてくれるお嬢さんではないのも知っていた。

頭を悩ませるキリトの姿を見てアスナの機嫌はさらに悪くなっていく。しかしちようどその時に、幸運というべきかどうかはわからないが浴室の入り口からがちやつと扉が開く音が聞こえた。

キリトは咄嗟に入り口の方へと振り向き、横ではアスナが口元までお湯の中に沈み込んでいる。NPCにもどうやら入浴のアルゴリズムが組まれていたらしい。湯気によって正確な姿は見ることはできないが、どことなくほっそりとしたシルエットが近づいてくる。

「キリト、アスナ、やはりここにいたのか」

視線をフォーカスし続けカラー・カーソルがNPCを示すイエローに変わった後、湯気の向こうから耳馴染みのある聞きなれた声が聞こえてきた。どうやらキズメルが自分たちを探してわざわざ浴室まで足を運んでくれたのだろう。相手が女性と分かりホツとしたキリトは、「キズメルで良かったな」とアスナに言うべく顔を横へ向けようとした。

しかし、どういった理由からかはわからなかったが、何故か顔を赤くしたアスナによって両手で風呂の中に沈められるという仕打ちを受けることになった。

どうしてこうなったかはわからないが、白いワンピースの水着を着た美少女と、紫色のビキニを着たダークエルフの美女に囲まれて入浴している。仮想世界に囚われるという実にゲーム的な状況に置かれ

ているキリトではあったが、こういった女性関係のイベントもゲーム的になる必要はないと思う。

だが残念なことにプレイヤー<>キリト>>の中身は桐ヶ谷和人という十四歳のごく普通の中学二年生であって、ゲームの主人公ではなかった。女性の水着姿などまともに見たこともないし、この状況で平然と会話できるほど女性慣れしているわけでもない。横に並んで腰を下ろしている二人をあまり視界に入れないようにはしているが、緊張してしまうのは仕方ないだろう。

「キリト、先ほどから随分と無口だがどうかしたのか？」

そんなキリトの様子を不自然に思ったのだろうキズメルが問いかけてきた。

「い、いや、なんでもないぞ」

咄嗟口から出た答えは明らかに何かありますと言っているのと同じで、まずいと思ったキリトがそつとキズメルを見るとこちらを窺うような眼と視線が合った。

「ふむ」

キリト、アスナ、キリトと視線を動かしたキズメルは何か思いついたのだろう、面白い獲物を見つけたと言わんばかりにニヤリと笑う。その表情を見た瞬間にキリトの直感が脳内にアラームを鳴らす、残念なことにキズメルの言葉を止める術は無かった。

「なんだキリト、まさか照れているのか？ 番つがいなだから、アスナの肌など見慣れているだろうに」

「つ、番つがい!? 違います！ この人はただのパートナーです！」

「そうか？ ただの、と言うには随分と親しそうに見えたがな。中庭で再会した時、キリトの手をしっかりと握っていたではないか」

「そつ、それはっ……！」

アルゴだけではなくキズメルにもからかわれることになるとはアスナも思っていなかったに違いない。完全な不意打ちを食らって取り乱すアスナに助け船を出すべきなのだろうが、口を出すと藪蛇やぶへびを突きかねないので黙ることにする。何も言い返すことができないアスナが「あなたのせいよ」と言わんばかりにこちらを睨んできたが、そ

の顔は赤く染まっていたため迫力は皆無だ。

「まあ番つがいというのは冗談にしても、この短い期間でアスナを落とすとは。中々やるな、キリト」

「落ちてないし、落とされる気もありません！　もう、やめてよキズメル！」

「すまんすまん」

笑いながら謝るキズメルには全く悪びれる様子はない。尤も、アスナも怒ってはいるものの嫌がってはいないのでじやれついているようなものだ。

プレイヤーをからかうNPCという極めて稀な光景だが、その会話や動作に違和感を感じない。

——むしろ、自然すぎるということ自体が違和感になるのかもしれないな。

目の前の不思議な姉妹のやり取りを見ながら、キリトはゲーム的な思考に浸ろうとする。

しかし、この時のキリトは忘れていた。姉というポジションであるキズメルにとって、からかう対象はアスナだけではないということ。そして、アスナが完全に冷静さを失っているということ。

「ああ、キリト。アスナはこう言っているが、今日用意した部屋の壁は厚いからな。安心していいぞ」

「かかか、壁？！　い、一体何するつもりなのよ！　こっち見ないですよ！！」

唐突に飛んできた流れ弾を回避することができず、キリトは油断の代償を二度目の水没という形で支払うことになった。

この仮想世界で過ごした初めてのクリスマススイブはキリトにとって中々に大変な、しかしそれなりに収穫があった一日だった。一つは攻略面。フィールドボスに関しては苦労する難易度ではなかった。戦闘自体もボス戦の割には苦勞する難易度ではなかった。特にまとめる必要もないが、手詰まり感のあったキャンペーンクエストを進めることができたのは大きな収穫だったと言える。

入浴中の二度の水没によって思い出すことができた水没ダンジョンでの出来事をキズメルに話すと、突然クエストが進行し途端に目つきを変えたキズメルに城主の部屋まで連れて行かれた。城主の〈ヨフィリス伯爵〉の態度は友好的という訳ではなかったが協力的ではあり、第三層の司令官にもらった紹介状の代わりに〈シギル・オブ・リユースラ〉と言う名の指輪を渡された。ヨフィリス伯爵曰く「身に着けている限り衛兵に咎められることはない」とのことと、これによって実質的にダークエルフ陣営の設備を自由に使えるようになったと考えていい。その代わりにこの層の秘鍵ひけんの回収をクエストという形で頼まれたので、明日からはこのクエストの攻略が中心になるだろう。

そして、もう一つ。テーブルを挟んで向かいに座るアスナとのことだ。

やるべきことが無いしせつかくのクリスマスだからという名目の元、午前中、そして夕方にかけて彼女と共に過ごすことになった。初めこそ緊張していたものの、一度割り切つてからはとても穏やかな時間を過ごすことができたし、命を削り心を荒すさませながら生きていかなければならないこの世界において非常にありがたい癒しとなった。今もミーティングを終えて何となく座っているだけなのに心が穏やかになっていくのだから現金なものだと思う。

「どうかしたの？」

ぼんやりと正面を向いていたため必然的に目の前に座るアスナに視線が向いていた。その視線が気になったのだろう、手元のメニューウインドウに目を向けていたアスナが訊ねてくる。

「ああ、いや。今日は色々あったなあと思ってさ」

「うん、そうね。物騒なこともあったけど、クリスマスイブにやるべきことはほとんどやれたもんね」

「ほとんどってことは、全部じゃなかった？」

「うん。だから、これからその残りをやろうと思います」

アスナがストレージから膝の上に乗るくらいの大きさの紙袋を実体化させる。赤いリボンに巻かれたそれにキリトは見覚えがあった。

「遅くなっちゃったけど、クリスマスプレゼント」

「おお、ありがとう。開けてもいい？」

アスナが頷くのを見てから手渡された紙袋を軽くタツプすると包装がしゅるんと解かれ、中から黒が基調の部屋着やマフラーそして赤茶色のフーデットケープが出てきた。

「アルゴさんと同じく実用品を作ることはできなかったんだけど、キリト君部屋着一着しか持ってなかったみたいだから。マフラーとケープは寒いときに使つてね。ケープの色も黒にした方がいいかはちよつと悩んだけど、流石に怪しすぎるかなと思つてその色にしたの」

「黒いフーデットケープとか怪しきマックスで逆に目立ちそうだな。この色ならアスナの普段使いのやつと色が似てるし丁度いいかもな。ありがとう、大事に使わせてもらおうよ」

「う、うん」

キリトがお礼を言うと、アスナはほんのり顔を赤く染めて軽く俯いた。同じ年代の異性にクリスマスプレゼントを渡すというのは気恥ずかしさを感じてもおかしくない。実際にこれからプレゼントを渡すキリトもそのように感じているのだから。

「では、ですね。アスナさん、俺からもクリスマスプレゼントがありますので、手を出してください」

アスナはキリトに言われるままに左手を差し出した。アスナからのプレゼントをストレージに入れ、その代わりに取り出したイヤリングを手のひらの上にそつと乗せた。

「えっ!? キ、キリト君これって……!」

「店売りの物で悪いんだけど、良ければ使つてくれ。本当なら箱か何かに入れておくべきだったんだけど、気が効かなくてごめんな」

「う、ううん、それはいいんだけど……。これ主街区のアクセサリーショップに売ってたやつだよな? デザインも性能もすごく良かったから見覚えあるもの」

その通りとキリトが頷くと、イヤリングを見て驚いていたアスナの眉がハの字になった。アスナになら似合うだろうと思つて買ってみ

だが、やはり黒しか身に着けない自分のファッションセンスではアクセサリーを選ぶなど無理があつたのだろうか。

「あー、その、お気に召しませんでしたかね？」

「そ、そんなことないよ！　こんな綺麗なイヤリングをプレゼントとして用意してくれたなんてすごく嬉しいよ！　でも……でも、こんなに高価なもの、受け取れないよ……」

アスナの言葉を聞いてキリトはなるほどと納得した。どうやら問題となつているのはイヤリングの見た目ではなく価格の問題らしい。センスが悪いとバツサリ切られなかつたことに安心しつつ、キリトはそのイヤリングに決めた理由を説明した。

「ああ、値段に関しては気にしないでくれ。正直それを渡してもまだ利益の釣り合いが取れてないくらいなんだから」

「利益の……釣り合い？　どういうこと？」

「ああ。アスナは主街区で装備をくく軽金属防具くく中心に更新しただろ？　でも俺は全身がドロップ品かクエストの報酬。つまり、防具に関して俺は修理程度しか金がかかつてないってことだ」

ラストアタックボーナスを確保しているのもあるが、全プレイヤーの一番前で攻略を続けているためダンジョンの宝箱の多くを開けることができているのも大きい。とはいっても第四層という低階層であるためどうしてもドロップ品や宝箱の中身は軽量防具に偏ることから、必然アスナよりもキリトが使う物の方が多く結果的にキリトが多くの利益を得ているのだった。

「コンビを組んでいる以上財布が一緒とまでは言わないまでも、得る利益はある程度バランスが取れていないと不公平だろ？　アスナは防具を更新したばかりだったから、中々手の回らないアクセサリー方面ならプレゼントとしても見栄えがいいし、長く使ってもらえと思うってさ」

「理屈はわかるんだけど……」

アスナの表情を見るに納得できていない様子だ。プレゼント自体は嬉しいと言っていたのでそのまま軽い気持ちで受け取ってもらえればいいのだが、彼女の真面目な性格がそれを許さないのだろう。だ

が、キリトには受け取ってもらわないという選択肢はない。

「まあ、もう買ってしまったものだから、アスナが嫌じゃなければ受け取ってほしい。プレゼントのお返しもしたいし、俺が付けても似合わないし、かといってNPCに売るのは馬鹿らしいからさ。」

少々卑怯な言い方だとは思いますが、アスナが嫌がっていないのだから多少は大目に見てもらいたい。この言葉と譲る様子のないキリトを見て観念したのだろう、ふうと一息吐いた後アスナは左手にそつと右手を重ねて胸元まで持っていく。

「そこまで言ってくれるなら、使わせてもらおうね？　ありがとう……すごく、嬉しい」

満面の笑顔と共にアスナは両手を胸元へと持っていく。胸元にて握られたイヤリングをまるで宝物のように扱う彼女の仕草に、キリトは思わず目を奪われた。

「……………」

「……キリト君？」

「えっ!?　あ、ああ！　ぜひ使ってくれ！」

「う、うん……」

——本当にこの人は……、反則だろ……!」

完全に頭が追い付いていなかった。自分が行う仕草が女つ気のないう男子に対してどれくらいの威力があるか、少しは理解してほしいと思う。

「えっと、着けてみてもいい？」

「ああ、もちろん」

アスナがメニューを操作し始めると、胸元に置かれたままになっていた左手の中からシユンとイヤリングがストレージに入る音が聞こえその後すぐに両耳に装着された。アスナは同じようにストレージから取り出した手鏡で軽く確認した後、頬を赤らめながら確認してくる。

「ど、どう……かな？」

髪の隙間から雫型のサファイアが室内の照明を反射し青く輝いているのが見える。栗色の髪に赤が基調の衣装、その中に一か所だけ涼

やかに輝く青い光。ファッションというものに疎いキリトではあったが、彼女に似合っているということは理解できた。

「その、俺から見てだけどさ……とても、お似合いだと思います」
「ほんとう？ ……あ、ありがとう」

恥ずかしそうに頬を赤らめながら笑みを浮かべたアスナを見て、何故かキリトの顔にも熱を帯びていくのがわかる。赤い顔のまま肩をすぼめて俯き加減に座っているアスナの姿はとても可愛らしいが、その可愛らしい姿を自分もしているのだろうかから何とも複雑な気分だ。傍から見れば同じような格好をした男女が二人向かい合って座っているのが見えるのだろう。

クリスマスプレゼントの交換をするだけだったのだが、何故か午前中のデートの続きのように思えてしまっただけだったのだが、何故か午前気のままこの場にいれば余計なことを言いかねないと判断したキリトは、気恥ずかしさを振り払うように勢いよく立ち上がった。驚いたアスナが眼を丸くしてこちらを見ているが、それに構うことなく寝室への戦略的撤退を選択する。

「よし、じゃあやることは全部やったし今日はもう休もう！ 明日はちよつと早いけど午前六時にここ集合ってことでいいか？」

「えっ？ あ、だ、大丈夫だけど……」
「オーケー。ではそういうことで、おやすみアスナ」

パツと右手を軽く上げてからターンして寝室へ足を向ける。極めて不自然だが、恐らくアスナも行動に悩んでいただろうし問題ないだろう。普段より少々足早にさして遠くない寝室のドアまで移動し、ドアノブに手を掛けようとした。

「キリト君、待って」
その時、静止の声が掛けられ、足を止めたキリトのコートが掴まれる。
「えっと、何でしょうか……？」

「……言いたいことがあるの」

後ろから聞こえた言葉によって、キリトのあるはずのない心臓がドクンと音を立てた。

——言いたいこと……？ 言いたいことってなんだ!?

肩ごしに後ろを見れば俯き加減のアスナの姿が映る。表情こそ窺えないが、髪の間隙から見える耳は赤く染まっており、それはキリトにこの後起こるであろう出来事を想像させた。

息を？む。顔が赤くなるのがわかる。この流れはまさかという考えに至ったキリトの思考は完全に停止し、それによって身体も硬直した。場が沈黙によって支配されるが、身体が固まったキリトにはアスナの次の一言を待ち続けることしかできなかった。

「あのね……今日は一緒に過ごしてくれて、プレゼントもくれて、本当にありがとう。すごく、楽しかった」

コートを引かれる力が強まった後、それからぽつり、ぽつりと、アスナは一言一言に心を込めるようにゆつくりと話し出す。それと共に、身体に入っていた力が抜け、キリトの思考も徐々にクリアになっていく。下手な想像で混乱している場合ではなかった。

「現実世界にいた時より、今まで過ごしたどんなクリスマスイブより、素敵な一日だった。一緒に過ごしてくれる人がいるクリスマスがこんなに楽しいものだなんて、もう忘れてしまっていたから……」

「……そっか」

アスナの言葉にそう返すことしかできなかった。一人ぼつちのクリスマスを過ごしてきたという彼女に掛ける言葉をキリトは持っていなかったのだ。何故なら自分は、彼女が欲していた家族の団だん欒らんを自ら捨ててしまっていたのだから。

「来年のクリスマスに必ずお礼するから、期待しててね。……じゃあ、おやすみ」

そう言い終えると、アスナはキリトの返事を聞かずに自室へと入っていった。それを見送った後、キリトもドアノブを回し寝室へと入る。重い歩みを進め、着替えることもなく備え付けられた豪華なベッドへと倒れ込んだ。

「来年のクリスマス……か」

ポツリと口から零れた言葉は、キリトの複雑な心情を表すかのよう
に力が無かった。もしかしたら、隣室のアスナも同じように呟いてい

るのではないだろうか。

この階層を含めて、突破しなければならぬ残りの層は九十六層だ。第三層は一週間で突破できたのでそれを目安とすると、残り九十六層を突破するのに九十六週。一年は五十二週であるから、攻略が順調に行われるという前提でゲームクリアまでに一年と十か月近い時間が必要になる。来年は間違いなくこの世界の中で過ごすことになるだろう。下手をすれば再来年も囚われたままかもしれない。

この先二年近くの時間を、命を削り、精神を擦り減らしながら過ごさねばならない事実。はじまりの街に引き籠つていれば精神は擦り減ろうとも命を削る事などなかった。リソースが無くなる前に走らなければという焦燥感があつたとはいえ、何故命懸けの戦いへと身を投じようと思つたのか四十八日という時間が経つた今でもわかつていない。

戦う理由が曖昧なままにここまで来た。アスナのように何かしらのきっかけがあり戦う意思を持ったわけではない。自分でも足元がグラグラと揺れているのがわかつてしまう。どうしても不安になるのだ。このような不安定な状態で、この絶望的な事実から来る重圧にいつまで耐えることができるのかと。不安は更なる不安を呼ぶのはわかつているのだが、キリトはこの思考を止めることができなかつた。

天井が崩れる。九十六もの分厚い壁が砕けながら落下してくる。押し潰されたキリトの身体はポリゴン片となつたが、それでも足りないと瓦礫となつた天井はキリトの身体があつた場所へ積み重なっていく。目に見えないはずの重圧が可視化されたような感覚を覚え、キリトは跳ね上がる様に上体を起こした。

——夢……か？

荒い呼吸を落ち着かせ、現状を確認する。夢の中で見たように天井が崩れている等と言うことはなく、綺麗に清掃された豪華な寝室はキリトが入ってきた時のままの状態だ。時刻はもうすぐ二十三時。二十二時過ぎにアスナと別れてこの部屋に入ったはずだから、まだ一時

間も経っていない。うたたねのようなものであつただろうに、このような悪夢を見る羽目になるとは。

マイナス思考は良くないと理解していたのに止めることができなかつた結果がこれだ。しかし、今まで先のことに対して不安を感じることも多々あつたが、悪夢を見ることなど無かつたはずだ。いつもとは違う、何か強い不安を知らぬ内に感じていたのだろうか。

無駄な思考だなど、キリトは首を振つた。何故悪夢を見たかなど考えても仕方ない。明日はそこそそ早い時間に集合するのだから、こんなことを考える暇があつたら早く休むべきだ。

——とはいえ、目も覚めちまつたな……。

ミーティングを終えた後には確かな眠気を感じていたのに、今は完全に覚醒してしまつている。この状態でベッドに横になつていても眠れるとは思えないが、とにかく寝られる姿にはなつておくかとキリトは寝間着に着替えようとして、手を止めた。

ストレージの中にある新しいアイテム。アスナからプレゼントとしてもらつた黒が基調の部屋着だ。今まで使つていたものも当然ストレージに入つていたが、折角もらつたものであるし使つてみるかと、今までの物と場所を入れ替えた後に装備する。素材は布であるから着心地こそ変わらないとは言え、アスナからのプレゼントと思うと少しだけ特別な感じがするのは不思議だ。

初めての家族以外の女性からのプレゼントということを意識してしまい気恥ずかしさを感じていると、唐突に隣の寝室の扉が開く音が聞こえた。余りのタイミングの良さに驚きの余り思わず立ち上がった。しまったが、幸いなことに音を立てることはなかつた。こんな時間にごどこかに出かけるのだろうか。声をかけるべきかとも思つたが風呂好きの彼女のことで、あの大浴場をまた楽しみに行くのだろうか。

音を立てないようにそつとベッドに寝転がり、目を閉じる。物音一つ無く意図的に作つている暗闇の中であつても眠気は来ず、どうしたものかと考えたときに、そういうえば扉の音が一回しか聞こえてない気が付く。

先ほどの扉の音はアスナが寝室から出た音だ。大浴場に行くなら

ば、もしくは寝室に戻るならばもう一回扉の音が聞こえるはずなのだが、居間で何かしているのだろうか。

裸足のままベッドを下り、足音を立てぬよう扉へと近づいた後そつと扉を開ける。扉の隙間から今の様子を窺うと、窓際に置かれたソファの上に腰を下ろしたアスナの姿が目に入った。何か作業でもしているのだろうかと思っただが、膝に手を置いたまま俯いている。

何かしているならば声をかけずにそのまま扉を閉めていただろう。しかし、今のアスナは何故か寂しそうに、不安そうに見えた。もしかしたら、キリトと同じように未来のことを考えてしまったのかもしれない。意を決して、扉を開ける。あの状態のアスナを放っておくことなど、キリトにはできなかった。

歩を進めたキリトに気付いたのだろう、アスナの視線がこちらに向く。

「あら、どうしたのキリト君」

「それはこっちのセリフ。眠れないのか？」

「うん。……なんか、落ち着かなくて」

「そっか、実は俺もなんだ。……少し、話そうか」

アスナが頷くのを見てから、キリトはソファの反対側へを腰を下ろした。キリトの言葉に応える時は顔を上げたものの、今は再び顔を俯かせている。自分から話そうと言った手前何か言うべきなのだが、アスナの様子を見れば下手な雑談を振るのはやめたほう良いだろう。ならばと、キリトは思っていたことを直球で、恐る恐る聞いてみた。

「……先のこと、考えちゃったのか？」

どうやらキリトの見当違いではなかったようで、アスナの肩がビクリと震える。顔がゆっくりと上げられ、一瞬口をつぐんだ後、震える声で話し始めた。

「うん……。さつきね、すごく自然に、来年のクリスマスって言葉が出たの。来年はキリト君を驚かせてやろうって、そういう気持ちから出た言葉だった。でも……。でもね？ 部屋に戻って一人になったら、来年までキリト君と一緒に居れるのかとか、そもそも自分はいつまで生き延びれるのかとか、色々考えだしちゃって。目を逸らしてた現実と

急に向き合ったら、なんか、部屋が広く感じて、怖く、なつちやつて……」

言いながら、アスナは自分の心を守るかのように両膝を抱え丸くなる。

「わたし、来年のクリスマスまで生きていたい。今日みたいに、二人で歩いて、ケーキ食べて、雪が降っているこの世界を、見たい……」

声は小さく、震えている。これは間違いなくアスナの心の悲鳴だ。膝を抱えた両手に力が入り、顔を膝に押し付けるようにギュツと縮こまっている。普段の様子から想像もつかないこの弱々しい姿は、自分と出会う前、彼女が戦うと決める前に、はじまりの街の宿屋に閉じこもっていた頃のアスナの姿なのではないだろうか。

一度絶望の底まで落とされた人間がそう簡単に立ち直れるものではないはずだ。それでも戦う理由を作り、ビギナーであるにも拘わらずベータテスターとしてひたすら走り続ける自分に食らいついてきた。その努力は素直に賞賛すべきもので、キリト自身も幾度となくアスナに助けられている。だが、その努力量と比例する形で、彼女の精神への負担は大きくなっていったのだろう。今日一日を殆ど休息に使ったせいで、常に張りつめられていた緊張の糸が切れ、今まで隠してきた心の疲労が吹きだしてしまったのかもしれない。

本来ならば、「大丈夫だ」と、「君は生き延びる。一緒に居る」と、一時的にでもアスナの不安を取り去ることができると言葉をかけてべきなのだろう。仮初めの言葉であっても、明日からのことを考えれば不安というものをだらだらと引き摺^ずるわけにはいかないからだ。

頭では理解できている。心もそういうべきだと言っている。だが、今ここで仮初めの言葉を口に出したとして、その根拠をどこに求めればいいのか。自分ですら明日一日を生き残ることができかわからないのに、アスナが生き残るかどうかなどわかるわけがない。安直な言葉で誤魔化すような不誠実な真似をすることなど、キリトにはできなかった。

「……………ごめん。俺には、君を安心させる言葉を言うことができない。それを言えるだけの実力も、根拠も、持っていない……」

自分を孤独から救ってくれた少女が恐怖に怯えているのに、彼女は自分を助けてくれたのに、自分は彼女を助けることができない。情けない。何と情けないのだろう。アスナの感じる恐怖、自分たちが直面している現実に対して、キリトは無力だった。

「……そう、だよ。わたし、何言ってるんだろ。こんなこと言っても仕方ないのに……。ごめんなさい、変なこと言ってる……」

謝罪を口にしたアスナが立ち上がった。自室へと戻ろうとするアスナを引き留めることもできず、キリトは顔だけでアスナを見送る。

しかし、彼女が横を通り過ぎる瞬間、キリトは見てしまった。キリトとパーティーを組んで以来気丈に振る舞い続けてきた彼女の瞳から一筋の涙が流れていることに。

頭が動く前に、身体が動いた。

立ち上がり、追いかけて、アスナの左手の手首を掴む。普段より足早だったためアスナの右手は既にドアノブに掛けられていたが、部屋に戻る前に止めることができた。突然手を掴まれたアスナは驚きで身をビクリとさせたが、ドアノブに掛けた右手を外し、目の辺りを手の甲で拭ってから振り向いた。

「……キリト君、どうしたの？」

振り向いた彼女の瞳からは既に涙は零れていなかったが、普段よりも潤みを帯びているのがわかる。何も言えないのは変わるわけがない、それに対しての諦めもあるだろう。本当は部屋に戻って泣きたいはずだ。

だが、今のアスナを一人にすることなど、キリトにはできなかつた。「……アスナが泣いているのが見えて、今の君を……一人にしたくなくて……」

何かをするために、言うために、止めたわけではない。故にキリトは自分が直感的に感じたことを口にする。しかし、言葉に力を籠めることはできず、ただ自分の感情を吐露するだけだった。

「……………急にそんなこと言うの、ずるいよ……………」

「……………ごめん」

手を掴んでいた右手が力無く身体の横へと戻ってくる。ずるいと

口にしたアスナに何も返すことができず、ただ謝るしかなかった。

「……キリト君のせいなんだから。仕方ないって、我慢しなきゃって思ったのに、そんなこと言うきみが悪いんだからね」

キリトが悪いと、アスナが言う。確かに中途半端なことをしたのはキリトだ。それはわかる。だが、先ほどまで寂しげな雰囲気を纏っていたのに、今のアスナは吹っ切れたかのように普段の雰囲気に戻っている。この彼女の急な変わりように、キリトはただ戸惑うしかなかった。

「わ、わかったよ。でも、急に一体何を……」

「今日、一緒に寝てもらおうから」

視界の外から飛んできた物体が頭にクリーンヒットしたかのような衝撃を受け、キリトの思考が完全に止まった。

「……………うん？」

「だから、一緒に寝てもらおうから」

聞き間違いに違いないと問い返したキリトに、アスナは平然と同じ言葉を繰り返した。確かに、確かに同じ屋根の下で寝たことはあるし、同じ部屋で休憩したこともある。しかし、しかしだ。あれは仕方なく行ったことであつたし、あくまで寝具は別々だった。

今それぞれに割り当てられている寝室にはベットは一つ。ダブルサイズであるから確かに二人並んで寝る分には問題ないだろうが、一つのベットに男女が寝るとするのはとても、極めて、重大な問題であることは疑いようがない。

「いやいやいやいやいや。それはダメだろ嫁入り前の女の子が何を言っているんですか落ち着いてくださいアスナさん」

「何よ、嫁入り前なんて堅苦しい言葉使って。わたしは十分落ち着いています。別にいいじゃない、ただ寝るだけなんだし」

盛大に狼狽えたキリトの言葉は目の据わったアスナに一蹴された。「ただ寝るだけって、それはそうだけどさ……!」

「一人にしたくないって言ったのはキリト君でしょ。自分で言ったことなんだから、責任取って」

——責任なんて言葉軽々しく口にしてはいけません!

澄ました顔で言うアスナに思わず叫びたくなかったが、口に出したところでどうしようもなく、そもそも自分の情けなさから出た言葉が原因なので何も言い返すことができない。内心で頭を抱えながら、キリトはアスナに手を引かれ寝室へと入っていった。

「そういうえば、部屋着使ってくれてるんだね」

寝室に入りベットに腰を下ろしたアスナが、盛大に狼狽え落ち着かず、しかし下手に動けずに部屋の入り口に直立したままのキリトを見て言った。

「あ、う、うん。折角だし、貰ったものは使わないと意味がないからさ」「ふふ、そうね。自分が贈った服を着てもらうって……なんか恥ずかしいけど、新鮮な気分ね」

頬をほんのりと赤く染めながら言うアスナの姿は、状況も相まって極めて目に毒だ。

——ホント、勘弁してくださいアスナさん……。

心の中の何かがゴリゴリと削られているのがわかる。全力で自重すべきだし、全力で自重して欲しいが、彼女に自重をやめさせるきっかけを作ったのはキリト自身だった。

「ほら、そんなところに立ってないでもう寝ましょう？ わたし、こつち側使わせてもらうから。キリト君はそつち使ってね。国境線は真ん中ってことで」

淡々とした口調で寝る側を指定したアスナが、自分で決めた側のベッドの右側へと移動し毛布の中へと潜り込んでいく。その余りにもあつさりとした態度から、全く警戒されていないということが分かり何とも悲しい気持ちになるが、立っていても仕方がない。ベッドの左側に移動したキリトは、毛布をめくって身を横たえた。

「じゃあ、明かり消すね。おやすみ、キリト君」

おやすみと返すと、部屋の照明が消える。月明かりが差すだけとなった部屋の中で、柔らかくそこそこの高さがある枕に頭を預けながら、キリトは考える。

一時はどうなることかと思っただが、随分とあつさりとした終わり方

だった。アスナの照れた顔や涙に散々心を揺さぶられ、今こうして同じベッドの上で同じ毛布に包まって寝ている。文章にすれば想像が捗る展開なのかもしれないが、現実はこの様なものだ。

一人でベッドに転がっていた時は寂しさを感じていた。今は手を伸ばせば届いてしまう距離に、自らの最も頼りにするパートナーが居る。だから寂しさ等感じるはずはない。感じるはずはないのだが。

——どうして、こんなにも広く感じてしまうんだろう。

見上げる天井はキリトが先程見ていたものと変わらない。殆どが同じ造りなのだからそれは当然だ。だというのに、今見ている天井は何故か先ほど見ていたものよりも広く感じられた。一人では寂しいと言っていたアスナは、満足してもう眠りについていいのかもしい。横を見ればすぐに確認できるのだが、何となくそれは憚はばられたので真つ直ぐ天井を見続けながら思考を進める。

結局は自分も寂しかったのだ。アスナがキリトに側に居て欲しいと言ったように、キリトもアスナに側に居て欲しかった。いや、居て欲しかっただけではない。触れて欲しかったのだ。

どうすべきか、しばらく悩んだ末にキリトは顔を横に向けた。

視線の先にはアスナの横顔がある。目は閉じられており、本来アバターアバの身体では必要のないはずの呼吸も一定だ。どうやらアスナの意識は既に夢の国へと旅立っているらしい。当たり前のことではあったが、正直なところアスナがまだ起きていて視線が合ったりしないかな等と期待していた。

仕方ないよなど、キリトは溜息を一つついた。そんな都合のいい展開があるわけがないのだ。少なくともアスナの不安を少しでも解消できたのだからそれで満足しようと、キリトは目を閉じ意識を手放そうとした。

「どうしたの?」

その時、横から声上がる。驚いて左を見れば、顔だけをこちらに向けたアスナが眼に入った。

「急に溜息ついて。まさか緊張か何かで眠れないなんてことはないでしょうね?」

「い、いや、そんなことないぞ。ただ……」

「ただ、何よ」

言うべきか迷った。誤魔化してしまえば何事もなくこのまま寝ることが出来るだろう。しかし、呆れたような言葉とは裏腹にアスナのこちらを見る眼差しは真剣なものだった。嘘をつくことはできない。キリトはただどしくではあるが、自らの望みを口にした。

「その、手ぐらいは繋ぎたいな、って思ってる……」

キリトの言葉を聞き、アスナは「そう」とだけ口にした後、沈黙した。やはり失敗しただろうか、そう思った矢先にアスナの右手がこちらへと動いた。

「……どうぞ」

差し出された手は二人の中間、国境線の辺りで止まっていた。それを見てキリトも左手を伸ばし、アスナの右手に触れる。暖かさを求め、求められて、昼間に繋いだ時とは違い、自然に指を絡ませるように繋がれた。

「……わたしだって、こう、したかったんだから」

握られた左手に感じる圧力が増す。薄暗いためはつきりとはわからなかったが、「こうしたかった」と言ったアスナの顔は赤みを帯びているように見えた。

しかし、こうしたかったということは、アスナも自分と手を繋ぎたかったということだ。ならばどうしてあんな行動をしたのだろうか。疑問に思ったキリトが問うと、アスナは頬を赤く染めたまま答えた。

「だって……キリト君、あんなこと言ったのにそれ以上は何も言わないし……。嬉しいのに、どうすればいいかわかんなくなっちゃったんだもの……」

顔を半分毛布に埋めたまま話すアスナの姿を見て、キリトはたまらず笑ってしまった。部屋に入ってからの淡々とした態度も、ベッドに入ってからすぐに目を閉じたのも、要は彼女の照れ隠しであったということだ。

「わ、笑うなんてひどいよ……」

「ごめんごめん」

「……………ふん、いいわよ。どうせ今日だけなんだし、好きにしてやるんだから。明日起きたらベッドの外に放り出してあげるわ」

「それは勘弁して欲しいなあ……………」

アスナの抗議に素直に謝るが、あまりに軽い口調だったのが悪かったのだろう、むくれてしまった。それでも本気で怒っているという感じではないし、その証拠に手は繋がれたままだ。

この状況はクリスマススイブという特別な日付が起こした偶然の産物だ。こんなことをするのも今日だけ。ならばもう少し、自分が望むままに動いてみよう。

「なあ、もう少し、そっち寄ってもいいか？」

普段の自分では言えないような、大胆なことを口にする。アスナは随分と驚いたようで一瞬躊躇ったが、おずおずと回答を口にした。

「……………国境線まで、だよ？」

キリトは頷いた後、身体をベッドの中央へと寄せていく。移動の途中アスナの右手が握られたが、強張ったというよりは緊張によって力が入ったのだろう。キリトが国境線まで移動し終わると、自然と力が緩められた。

再び寝室に静寂が戻る。しかし、それは当然と言うべきか、長く続くことはなかった。

「キリト君……………」

先ほどより近い場所から呼ばれる。この後続けられるであろうアスナの言葉を、キリトは既に知っていた。

「……………わたしも、そっち寄って、いいよね？」

「……………国境線まで、な」

「うん」とアスナが頷き、身体を寄せてくる。アスナがこちらに来る度に接触している場所が増え、最初は手のひらだけだったのが、最終的には肩がくっつくまで身体を寄せ合った。

「ちよつと、近いね……………」

「……………うん。でも、暖かいよ」

「……………そう、だね」

右手と、左手。肩をぴったりとくっつけ、手を握り合う。お互いの

皮膚が国境線となり、昼間よりも多くの熱量がアスナから伝わってくる。アスナもきつと、自分と同じように感じているだろう。

「じゃあ、おやすみ。アスナ」

「うん。おやすみ、キリト君」

挨拶をし、お互いの熱を感じながら、目を閉じる。普段の距離ではない、クリスマスイブだけの特別な距離。正しく<<今日だけ>>の距離感だった

第二十八話

十二月二十七日正午。フォレストエルフの大船団がヨフェル城周囲の湖に姿を現した。その戦力は事前の想定である<<おおよそ十隻>>よりも多く、ダークエルフ陣営の大型船八隻の倍となる十六隻に達している。最初の正面衝突でダークエルフ側が一隻、フォレストエルフ側が二隻脱落していたため七対十四の戦いとなったが、ダークエルフ陣営は城への上陸を防ぐべく密集しているため、辛うじて防戦が可能になっていた。

「突っ込むぞ！ しっかり掴まってるよ！」

戦いの激戦区は湖の北部となったが、ティルネル号では十隻乗りの大型船と正面から戦うのは厳しいため事前に死角となる位置に待機し、アスナに耐久値を回復させてもらった<<アルギロの薄布>>を被って奇襲を狙っていた。交戦が始まると同時に後方からの衝角突撃で一隻を撃沈。次いでこちらに気付いた船の突撃を小型船特有の足回りの良さを生かして回避しつつ、二隻目の大型船に突撃を敢行する。

<<炎獣の衝角>>が敵船の唯一の弱点となる船尾に突き刺さると、水蒸気が発生した後爆発、後ろ半分が派手に吹っ飛ぶ。

「よし、二隻目！」

交戦が始まって二回の突撃で二隻の撃沈という理想的な展開に快哉かいさいを叫ぶと、殆ど同時にこちらに船尾を向けている船があるとアスナの声が聞こえた。

撃沈確認をする暇もなく、アスナに言われるままに櫂を動かし目標に向かって船首を向ける。油断なく周囲を窺い続けるアスナの姿は極めて頼もしいが、何故か普段より好戦的な気がするのはいのせいだろうか。

「むっ、一隻沈められたか」

同乗するキズメルが向ける視線の先には、船を破壊され叫び声を上げながら湖へと落ちていくダークエルフの兵士たちの姿があった。その周りではダークエルフの船に完全に密着したフォレストエルフ

の船から兵士が飛び出し強襲をかけている。ダークエルフ側も必死に防戦しているが、白兵戦となつてしまえば数の差が物を言うため湖に落ちる数はダークエルフの方が多いようだ。

——上陸されるのも時間の問題だな。

守るべき秘鍵は城の五階にある城主ヨフィリスの執務室にある。城内の兵士は迎撃のために出払っているため城門前に布陣した衛兵達が最終防衛ラインとなるわけだが、陸上戦となれば数の差はより顕著に戦況に影響するだろう。

「カレス・オーの勇敢なる戦士たちよ！ 人族と組んだ卑劣なダークエルフ共を湖の藻屑へと変えてやれ！」

フォレストエルフの旗艦から大声が戦場に響き、同時にフォレストエルフの兵士たちから歓声が上がる。統率された指揮の元で戦うことができているフォレストエルフ陣営とは違い、ダークエルフ陣営は個々の船の指揮官こそいるものの全体を見渡し統率するべき上級指揮官が居ない。ダークエルフが人族と組んだという言葉には疑問が浮かんだが、残念ながらそれを考える暇はないようだ。

「旗艦、狙うべきかな……？」

「狙えるなら狙いたいけど、あそこまで密集してると流石に……」

狙いを定めた三隻目の船に衝角突撃を敢行し見事に船尾に命中させた後、戦況が徐々に悪化している周囲の状況を見ながら呟けば、アスナが敵の反撃を細剣で軽々と捌きながら答えてくる。敵の旗艦は船団の中央部に座しているため、接近してからの強襲しか攻撃手段が無い以上、旗艦を直接狙うのは難しい。仮に接近できたとしてもすぐに周囲を囲まれることになるだろう。

「素直に端から狙うべきだろうな。正面戦力が不安ではあるが、仕方あるまいよ」

やれやれと言いながらキズメルが反撃を捌き終えるのを見つつ、櫂を目一杯に倒し船団から距離を取る。三隻目の船が爆沈したのを尻目に次の獲物を探すが、こちらに対する警戒も強くなっているよう。二、三隻の船の注意がこちらに向いているのがわかった。

——まずいな。下手に突っ込めば白兵戦になるぞ……。

周囲を囲まれた状態で白兵戦となると流石に厳しいし、ティルネル号自体にもダメージがいきかねない。ならば、狙いやすい船が出てくるまで一時待機すべきだろう。方針を決め船を減速させようと目一杯に倒していた櫂を引き戻そうとするが、その直前にダークエルフ陣営から大声が響く。

「おい、その小舟！　グズグズしていないで敵の別動隊を止めろ！」
叫んだ兵士が指差す方向を見れば、船が三隻纏まって戦線を離脱し城の棧橋へと向かっているのが見えた。ダークエルフ陣営からは次々に偉そうな命令口調の言葉が飛んできており、視界の端ではアスナが憤慨しているのが見える。しかし、三十人もの兵士の上陸を許せば間違いなく城への侵入を許してしまうのは事実なので、その指示に従う他ない。

アスナとキズメルに視線を遣り、頷くのを見てからティルネル号の船首を敵別動隊へと向けた。三隻並んで進んでいる敵船はこちらを警戒しているとはいえ船尾を見せており、少なくとも最初の一撃で一隻は沈めることができるだろう。

「左、右、中央。――上陸を阻止するのなら、真ん中に行くしかないわね」「そうだな。それに、無理に相手を全員倒す必要はないのだ。櫂を壊すなり操舵手を倒すなりして、無力化してしまえばいい」

中央の船を沈めて間に入り込めば当然両側から攻撃を仕掛けてくるはずだ。その後の白兵戦に対処が可能なら足止めとしては極めて有効的になるだろう。

「オーケー！　じゃあ真ん中に突っ込むぞ！」

中央の敵船のど真ん中に突っ込めるように進路を調整する。船尾に立つ槍兵が声を上げているが、こちらの突進を止めることは難しいだろう。衝突寸前に苦し紛れの突きを繰り出してくるがアスナが軽々とそれを受け止め、直後に衝角が突き刺さった。

中央の船はたちまち四隻目の戦果となり、兵士たちが湖に投げ出されるのを見届ける。本来なら即座に離脱するのだが、キリトは櫂を前に倒し前進することであえて左右の船に挟まれるように位置取る。当然のように両側から距離を詰められ両舷がぶつかることでティル

ネル号の耐久が削られるが、これによって両側の船の速度が落ちた。「よし、二人は右の船を頼む！ 左の船は私がやる！」

接舷した直後、言い終える前にキズメルが左の船に飛び乗る。俺も遅れるわけにはいかないと、指示を聞いたアスナからのアイコンタクトに即座に反応し、二人で右の船へと飛び込んだ。

「薄汚い人族め！」

着地点の目の前にいた槍兵が怒声を上げ突きを繰り出してくるが剣を横に軽く払うことで受け流し、そのまま距離を詰めつつ剣を右腰に溜めてソードスキルの発動モーションを取った後、右から左へ水平に薙ぎ払う。

単発技<<ホリゾンタル>>が胴体部分の鎧に直撃し、槍兵はそのまま横に吹っ飛びドボンという音と共に湖に叩き込まれた。無理に相手のHPを削りきる必要はない、湖に落として戦闘不能にしてしまえばいいのだ。横目でアスナの方を窺えばそれを心得ているようで、持ち前の敏捷性で繰り出される槍を軽々躲し、上段突き<<ストリーク>>でノックバックさせることで槍兵に船上からご退場願っていた。

船上にいる敵兵は第三層で戦った<<フォレストエルブン・ハロウドナイト>>と違い、第四層の一般的なモンスターと同じ程度のステータスしか持っていないようだ。操舵手を含め残り九人の兵士がいるが、この程度ならば問題なく捌くことができる。と言ってもあまり時間をかけることはできないため、船の前方はアスナに任せて後方にいる操舵手を狙いに向かう。

当然それを阻止するべく剣兵が進路を塞いでくるが、振り下ろされた剣を下から打ち上げることでノックバックさせ、その隙に水平蹴り<<水月>>を先ほどと同じく胴体に打ち込む。本来ならば体術のソードスキル一発で吹き飛ばすことは難しいはずだが、アスナとの効率的なレベリングによってレベル二十に手が届こうとしている俺のステータスがそれを可能にした。剣兵は真横に大きく吹き飛ばされ操舵手への道が開かれる。

<<フォレストエルブン・ロウワー>>と名付けられている操舵手

はティルネル号を押し潰そうと必死に櫂を真横に漕いでいるが、残念なことにはタイムリミットだ。無防備な操舵手を湖に蹴り落とし、念のため櫂を剣で破壊する。

「アスナ、戻るぞー！」

俺の声に反応したアスナが相対していた剣兵の攻撃をパリイで弾き、その隙を突いてティルネル号に飛び降りる。一拍置いて俺もティルネル号に戻ると、キズメルが涼しい顔で迎えてくれた。

「……向こうの船は？」

「全員叩き落としたぞ。櫂も破壊しておいた」

流石第九層のエリートMobと言うべきか、彼女の實力に今更ながら驚嘆してしまう。船の周囲を見れば慌てた様子で浮かんでいる兵士が多数見える。全く、このお姉さんは頼りになることこの上ない。

「……まあ、これで六対八だ。次はこつちが攻める番だな」

「うん。数も拮抗してきているから、先に旗艦を落としたいけど……」

少々距離があるため正確には把握できないが大きな戦況の変化はないようだ。主戦場から上陸地点となる大棧橋までの距離は大体百メートル。別働隊を排除した俺たちは大棧橋とダークエルフの船団のちようど間にいるためフォレストエルフからは見えにくいはずだ。こつそりと横まで移動して奇襲することが可能かもしれない。

「船団の横に移動してみよう。戦況も見やすいし、相手の警戒次第だけど背後まで回り込めるかもしれない」

水上の戦闘であるため取れる手段は少ないが、常に奇襲を狙うことでフォレストエルフに対して圧力にもなるだろう。女性陣が領くのを見てから、船首を右に向け船団の横へティルネル号を移動させる。船団の横に移動するにつれ戦況が見やすくなっていく。ダークエルフの残存六隻がフォレストエルフの六隻と接舷状態で交戦しており、フォレストエルフの残りの二隻がその後方で待機しているという形だ。敵の旗艦はその後方に位置する二隻の内の片方、恐らくは銀色の鎧と白いマントを身に纏った人物が乗っている方だろう。指揮官はジツと前方の戦況を注視している。後方二隻に乗る兵士たちも同様

だ。

——これは、いけるかな……？

どうするべきかとアスナとキズメルを目を遣れば、既に二人ともにこちらに視線を向けており、頷きを返してきた。意思が纏まっているならば問題ないと、アルギロの薄布を被り船団の斜め後ろから突撃できるように進路を取る。

船が進むときの航跡は消すことはできないが、薄布を被っている限り船や俺たちの姿は見えない。交戦直後に使った手段をもう一度使うのは少々不安ではあれど、旗艦の護衛が一隻しかないこのチャンスを逃すわけにはいかない。

航跡を極力小さく、しかし遅くなりすぎない程度の速度を苦心しながら維持しつつ、こちらに横腹を向ける二隻に向けて進んでいく。十分に近づき確実に狙える地点——大体二十メートルくらいだろうか——まで近づいたら薄布を取り加速しようと目論んでいたが、目標地点まで残り五メートルほどに迫った時、それまでジツと戦況を見つめていたフォレストエルフの司令官が剣を抜き上に掲げた。

「今だ、中央突破を図る！ 一号船、二号船、突撃！」

事前に示し合わせていたのだろうか、交戦していたフォレストエルフの六隻が左右に分かれ、ど真ん中にスペースが作られその隙間を二隻の船がすり抜ける。

その先には——ダークエルフ陣営の旗艦が周囲の船に抑え込まれ無防備な横腹を晒していた。

轟音が二回響き、片舷に二か所も大穴を開けられたダークエルフの旗艦が沈んでいく。船の指揮官らしき兵士の叫びが聞こえるが、それに構うことなくフォレストエルフの二隻は再び前進を再開し大栈橋へと向かっていった。

「やられた……！」

俺が叫んでいる間に、即座に反応したアスナがアルギロの薄布を船から引き剥がし丸め込んでいる。最早隠れている意味はない、とにかくあの二隻を追わねばならないのだ。櫂を前方に大きく倒し大栈橋へと一直線に進んでいる二隻を追いかけるが、既に二十メートル以上

の距離が開いてしまっている。

「これは流石に間に合わないな……」

何とか追いかけてやうとするが、この距離は詰めきれないだろう。向こうはただ進めばいいが、こちらはこれからフォレストエルフの艦隊のど真ん中を突っ切らなければならぬのだ。それでも可能な限り早く追いつこうと、二隻の後を追ってティルネル号を船団の間に滑り込ませる。

先ほどまで開いていたスペースは当然埋められようとしており、両側から体当たりを受けたティルネル号の耐久がじわじわと減っていくのが見えるが、この程度の損害ならば許容範囲内だ。無理矢理に船の間を押し通り、先を行く二隻の船を追う。

船足はこちらの方が早いため何とか間に合えと全力で船を進めるが、やはりというべきか間に合わず、二隻の船から指揮官を含め合計二十名のフォレストエルフの戦士達が上陸した。勢いよく駆け出す彼らの先には城門を守る六名の兵士。二十対六、陸上戦で三倍以上の敵を押し止めるのは厳しいというしかない。

「キズメル、城の中に増援に来れる人達はいないの!？」

「……城の兵士はこの戦いに全員出張っている。神官共は戦闘経験の無い官吏だからな、武器を持って戦うのは難しいだろう」

焦るアスナの問いに答えたキズメルの声色は険しい。増援が無ければ、恐らく城門を抜かれてしまうだろう。そうなれば、秘鍵のあるヨフィリス子爵の部屋まで抵抗を受けずに進めることになる。当然クエストも失敗と見なされるに違いない——と、そこまで考えて、俺の思考に閃きと疑問が生まれる。

「……なあ、ヨフィリス閣下は戦えないのか?」

「……あのお方はレイピアの名手で有名でな、こと戦いに関してならあの城で最も強いお方だ。だが……ご病気で強い光を浴びれないと聞く。夜ならともかく、この時間帯では厳しいだろうな」

疑問をそのままに口にする、キズメルが丁寧に答えてくれる。彼女の言う通りならば、この昼過ぎの時間帯でヨフィリス閣下が戦うことは難しいのだろう。しかし、俺にはどうしても彼がこのクエストの

キーパーソンであるとしか思えなかつた。

「どの道、俺たちだけじゃ城門を守りきれない。なら……駄目元でも頼んでみるべきかな？」

駄目元でもあえてという俺の言葉に、アスナが一瞬だけ考えた後に答える。

「……そうね。確率は低いかもしれないけど、勝ちの目があるなら諦めるべきじゃないと思う。それに、キリト君がこの状況でそう言うってことは、その可能性が……確信に近いものがあるってことでしょ？」

「……まあ、話の持っていき方はさっぱりなんだけどな……」

女子校というのは人の考えの読み方とか教えていたりするのだろうか。それとも単に自分が考えを読まれやすいだけなのか。確かに救援を見込める確率はかなり高いとは思っている。だが、それを口に出してはいないのにあつさりで見抜くとは、こういった部分ではやはり彼女には敵わないと実感してしまう。

最初の敵戦力との差を考えると水上戦で勝てるよう設定とは思えない。ならば、このクエストは『上陸されることが前提』であるクエストなのだろう。水上戦で上陸する敵の数を減らし、キーパーソンの協力を得ることで防衛を達成する。話の持っていき方にもよるだろうが、恐らくはキーパーソンであるだろう城主のヨフィリス閣下の協力を得ることは可能なはずだ。

「ふむ、それならばキリトの言うとおりにするのでしょうか。私では恐らく説得はできぬから、城門で時間を稼ごう。どちらが行くのだ？」

キズメルの言葉が決定的だった。彼女が否定的な立場を取らないならば、きつとこの選択は正しい、間違いなく逆転の一手になると。

話している間にも大栈橋が目の前まで近づいている。敵兵は上陸した後隊列を整えているようでまだ交戦には至っていないようだ。

「上陸したら全力ダッシュで敵の前に割り込む。ヨフィリス閣下の元に向かうのは……アスナ、頼めるか？」

「えっ、わたし？ キリト君が行った方がいいんじゃないの……？」

「交渉事ならアスナの方が上手いだろう？ 時間稼ぎはどっちが残って

も大して変わらないから、交渉はアスナに任せた方が目が有りそう
だ」

自分から提案しておいて無責任な気がしなくもないが、ここは適材
適所でいくべきだろう。アスナは先程と同様に一瞬だけ考えた後、頷
くことで俺の提案を受け入れた。

「よし！　じゃあ、城門の近くまで一気に出るぞ！」

棧橋の横を城門の側まで全速力で船を進め、棧橋にぶつかるとギリギ
リのラインで急停止をかけて棧橋に飛び乗り、一気に駆ける。フォレ
ストエルフの隊列はすでに動き出しているが、その歩みは遅いのが幸
いして交戦前に衛兵と敵兵の間に入ることに成功した。

前方からは二十名の敵兵<<フォレストエルフン・ライトウォリ
アー>>という固有名が与えられた兵士達は、先ほどまで戦っていた
剣兵や槍兵よりも少し強いことがフォーカスで示された名前の色の
濃さで分る。城門を守る兵士も<<ダークエルブン・ゲートキーパー
>>と一般兵士よりは強そうではあるが、数は俺達を加えても三倍近
い。守勢に立ち続けることになるだろう。

「アスナ、頼むぞ！」

剣を抜き、敵兵を見据えながら叫ぶ。隣に立つキズメルも既に戦闘
態勢を整えている。ただでさえ少ない戦力を、自らの提案で一時的で
はあれ更に減らしたのだ。抜けた戦力の穴は自分で踏ん張ることで
埋めるしかない。剣を握る右手に力が入り、あと十数秒後には始まる
であろう戦闘のために集中を高めていく。

厳しい戦いになるだろう。耐えるだけとはいえ下手をすれば囲ま
れてタコ殴りにされかねない。そうなれば一気に体力を削られるこ
とになるだろう。ボス戦に近い緊張感が襲ってくるが、その時不意
に、何も持っていないはずの左手に何かが触れた。

「……気を付けて」

いつもと変わらない口調の一言。そして、左手にほんの少しの熱を
残して、アスナが城へと駆け出していく。

心配するでもなく、発破をかけるでもない。この窮地に彼女が行つ
たことは、ただただ普段通りであることだった。フツと、思わず笑み

がこぼれる。緊張で固まりつつあった身体から無駄な力が抜けていき、普段通りに身体を動かすのに必要な力だけが残った。

「必要なのは一言だけ、か。……たまらんな、キリト？」

「……ああ」

キズメルが悪戯っぽい笑みを浮かべながら口にした言葉に、俺は素直に頷いた。思えばパーティを組んで以来、アスナが側に居ない状態で戦うことなど無かった。相棒たる人物が居ない状態で戦うことに無意識に不安を覚えていたのかもしれない。アスナは敵兵と向かい合った俺の姿を見て緊張していることを察したのだろう。あえて手を握ることで意識を逸らさせ、無駄なことは言わずただ一言気遣うことで落ち着かせた。

敵兵はあと十メートルに迫っている。あと数秒の後には三倍の敵を相手に戦闘に入るだろう。だが、もう問題ない。アスナの一言で普段通りの力を発揮できる。ならば今、俺にできることは彼女の示してくれた信頼に応えることだけだ。

敵の陣形は縦三列、横六列。その後ろに指揮官と副官らしき兵士。後ろの二人が動かない限り、隊列を組んだ敵兵は身軽な動きができないだろう。一旦隊列を崩した後、正面が耐えている間に横から攻撃すれば有効的はずだ。右に立つキズメルに視線を送り、頷くのを見てから剣を再び構える。

「まず正面に。その後は右から頼む」

「了解」

このやり取りを最後に、俺は開戦の合図となる最初の一步を踏み出した。

戦闘が開始されてから五分程してアスナがヨフィリス閣下を伴い戻ってくる、徐々に押し込まれつつあった戦況は一変した。

到着早々にヨフィリス閣下は戦場全体に響き渡る声で自身の不在を詫び、改めて戦うことを兵士達に願った。長年の葛藤が振り払われた堂々たる様にダークエルフ陣営の士気は大いに上がり、本来の指揮官が戦場に到着したことによって各種ステータスの上昇バフが付与

される。

城門前と船上に残るダークエルフ陣営の戦力はほぼ半減していたが、バフの効果時間を利用し逆に攻勢に出た。その戦況の変化を察したフォレストエルフの指揮官が主導権は渡さぬと言わんばかりに攻撃を命令するが、その目論みは剣を再び手に取ったヨフィリス閣下によって阻止された。

「左右に避けなさい！」

最後尾から飛ばされた命令によって残存兵力の五名が慌てて棧橋の縁まで飛び退く。その直後、棧橋の中央を純白に輝く巨大な光の槍が通過し、フォレストエルフ陣営の残った兵士を全員吹き飛ばした。

「い、今のソードスキルなの……？」

アスナの声は驚愕によって掠れているが、それも無理はないだろう。俺はサービス開始前に発表されていたソードスキル紹介動画で取り上げられていた一つの技の名前を口にする。

「<<<フラッシング・ペネトレイター>>……」

細剣カテゴリの最上位突進技、<<<フラッシング・ペネトレイター>>。奥義として位置付けられたこの技が威力、レンジ共に優秀であることは今の一撃で理解できたが、大技は得てしてその後の硬直が長い。片膝を突いた状態でデイレイに入ったヨフィリス殿下を、フォレストエルフの指揮官が憤怒の表情で睨みつけている。

「……ッ！ アスナ、行こう！」

相棒に声をかけてから、自らも駆ける。未だ片膝を突いたままのヨフィリス殿下の横を駆け抜けフォレストエルフの指揮官を迎え撃つた。副官にはアスナが当たり、一対一が二組の形だ。

白い鎧を纏った敵の指揮官の名前は<<<フォレストエルブン・インフェリアナイト>>。赤いカラーカーソルが示す通り、振り下ろされた剣撃は速く、重い。キズメルのようなエリートクラスのM o bではないようなので一人で相手するのは問題ないが、強力な敵であるのは間違いない。

受け止めた剣を弾き返し、鎧の装甲が薄そうなの右の脇腹を狙って横に一閃するが、鎧を纏っていても素早さが高いのだろう、バックス

テップでひらりと躲される。素早い相手に距離を取られると少々厄介であるため、逃がすまいと足を踏み出して間合いを詰めつつ右下から斜めに<<バーチカル>>を繰り出す。白騎士は左手の盾でブロックを試みるが、衝撃を受け止めきれず体力ゲージがジワリと減り、軽くノックバックした。

第三層で武器を更新したのが良かったのだろう。<<ソード・オブ・サイレンス>>のSTR+15というこの階層では破格のマジック効果で、単発のソードスキルの威力がイベントボスをノックバックさせるまでに上昇している。時間はかかるが、攻撃をブロックやパリイで捌きつつソードスキルの衝撃の貫通ダメージを与えていき、そのまま押し切ることもできるだろう。

剣を交えながら右側で戦うアスナに目を遣る。副官の<<フォレストエルブ・ヘビーウォリアー>>はその名の通り重武装のようで手数を第一とするアスナでは少々相性が悪いのだろうが、<<シバルリック・レイピア>>のマジック効果と正確さの高さを存分に利用し、鎧の隙間に有効的な攻撃を加えていた。

周囲に多数居る両陣営のNPCは船上で戦っていた兵士達も含めて全員動きを止め、大棧橋の決闘を見守っている。増援に動く気配はなく、どうやらイベントバトル扱いになっているのだろう。

俺もアスナも共に優勢。このまま戦い続ければ時間はかかれど徐々に戦況はこちらに傾いていく。だが、その肝心な時間がこのまま戦い続けることを許さなかった。視界の左上の体力ゲージの上に表示された四種のバフ。このバフが消えた瞬間に俺達の有利は一瞬で崩れるだろう。

——ちよつと無理矢理だけど、付き合ってもらおうぞ……！

単発のソードスキルでは罅が明かない。素早さと高い攻撃力を兼ね揃えた相手に対して強攻は少々不安であったが、意を決して剣を右上段に構え振り下ろし、斬り上げる。<<バーチカル・アーク>>の鋭い連撃は白騎士に防がれたものの、二撃目を意図的に盾に当てることで先ほどより大きくノックバックさせ、体力ゲージも目に見えた減り方をする。技発動後のデイレイは大きいノックバックによって開

いた距離で相殺できるため、反撃を受けることもない。くくホリゾントル・アークくくや重単発技くくスラントくくも混ぜることで白騎士の防御の上からソードスキルでゴリ押していく

白騎士はソードスキルを盾で防いでも威力を殺しきれない。防御を続けても押される一方ならば、取る手段は一つ——相手より高い攻撃力の技でカウンターを狙ってくるに違いない。

「小癩な人族の小僧め！ 我が剣技、受けるがいい！」

焦れた白騎士が俺のくくホリゾントル・アークくくの発動に合わせて高々と剣を振り上げると、剣が銀色の閃光を放つ。片手剣三連撃技くくシャープ・ネイルくくが発動し、剣が俺目掛けて振り下ろされた。

ソードスキルの打ち合いで二撃目まで防ぐことはできても、その後の三連撃目は硬直時間に入ってしまうため防げない。このままであれば無防備な俺の身体にソードスキルの強烈な一撃が叩き込まれることになるだろう。

ならばどうするか——剣が届かない位置まで離れてしまえばいい。

ソードスキルの一撃目を相殺し、二撃目を水平方向の払いでブロックすると、その場で踏みとどまらず互いのソードスキルの打ち合いによる衝撃を利用して後方へと飛ばされる。先ほどから自分がやってきた攻撃を攻守を入れ替えた形で行ったことになるが、異なるのは白騎士は距離が離れた後も残る三撃目を繰り返さなければいけないということだ。

ノックバックによって体力ゲージが少々削られるものの、白騎士の放ったソードスキルの三撃目は当然空を切り、長めの硬直時間に入る。完全に無防備となったこのチャンス逃すわけにはいかない。

硬直した白騎士に向かって大きく一步踏み出し、距離を詰めると同時に剣を身体の右にピタリと構える。発動動作はくくホリゾントル・アークくくとほぼ同じだが、これから使うのはこの階層で片手剣熟練度が150を超えたことによって使用が解放されるさらに上位のソードスキル。

水平四連撃くくホリゾントル・スクエアくく。右から左、左から右へ水平方向の二連撃が白騎士の鎧に直撃して耐久値を大きく削り、そ

のまま時計回りに回転して剣を左腰にピタリと構える。続く三撃目、スカイブルーに輝く刀身の切っ先が白騎士の胸部アーマーを深く切り裂き、一瞬の後にライトエフェクトとなって散っていく。

ここでやっと硬直が解けた白騎士が何とか防御しようとして盾を構えるが、躊躇うことなく<<ホリゾンタル・スクエア>>最後の1撃を白騎士の持つカイトシールドの上から叩き付けた。正方形を描く光芒こうぼうを拡散させつつ放たれた1撃が盾に激突した瞬間、衝撃によって閃光が走り視界が白で埋め尽くされる。

「おおおおおおおーっ!」

視界が効かないが構うものか、これで最後だと、俺は雄たけびを上げながら受け止められた剣を振り抜いた。

視界が戻った直後、硬質な金属音と大岩が水に落ちたかのような盛大な水音が戦場に響く。最後の1撃によって大きく吹き飛ばされた白騎士が湖へと落下したのだろう。盾によって体力の全損こそしなかったようであるが、足元には白騎士が持っていた長剣が転がっていた。

アスナの方もちょうど終わったようで、両者共に体力ゲージはほとんど減っていないが、ブロードソードを弾き飛ばされた副官の首元にレイピアを突きつけている。ごっつい森エルフのおっさんに剣を突きつける美少女という、中々お目に掛かれない光景だ。

森エルフの副官が悔しそうな目でアスナを睨みつけた後、盾をその場で手放して自らの足で湖へと向かう。その先には湖に落ちていた白騎士が浮かんでおり、合流して再びこちらを睨みつけてから泳ぎ去っていった。

遠くでは船上の森エルフの兵士たちも次々と湖に飛び込んでいる。一方黒エルフの兵士たちは栈橋へと這い上がってヨフィリス閣下の前で整列を始めているので、状況を見る限りこれ以上の戦闘は無いらう。

剣を背中に戻し、白騎士が落していた剣を戦利品としてストレージに収納した後、同様に剣を鞘に戻し戦闘態勢を解いたアスナの元に歩み寄った。

「お疲れ。何とかあったな」

お互いの勝利を称えて軽く右拳を合わせるとそこで緊張が解けたのだろう、アスナの顔に笑みが浮かんだ。

「うん、キリト君もお疲れ様。ヨフィリス閣下のバフがどれくらい続くかわからなかったからちよつと焦ったけど、切れる前に終わらせることができて良かったわ」

確かにこのバフが無かったら勝利を得ることは難しかっただろう。視界の左上ではイベントバトルが終了したためか、四種類のバフが何回か点滅した後消えていった。

「全くだ。じゃあこの勝利は、ヨフィリス殿下を連れてきてくれたアスナのおかげってことだな」

「もう、提案したのはキリト君じゃないの。わたしはあなたの考えに従っただけよ」

提案したのは確かに俺だが、ヨフィリス閣下との交渉を成功させダークエルフを勝利に導いたのは間違いなくアスナだと思うのだが彼女自身はそうは思っていないらしく、いやいや君が、いやいやあなたが、とお互いに功績を押し付け合う。

「やれやれ、戦いが終わったばかりだというのに仲の良いことだな」
この不毛なやり取りを止めてくれたのは、もう一人居る功績大の人物だった。穏やかな笑顔を浮かべながら近づいてきたキズメルに、褒めてほしいのであろうかアスナが飛び付きよしよしと頭を撫でられている。

「キズメルもお疲れ。今回も助けられたよ」

「何を言う。フォレストエルフの襲撃を伝え、劣勢であった戦いを立て直して最後には敵の指揮官をも退けたのはお前たちだ。この城は守られ、二つの秘鍵も奪われることはなかった。これ以上の結果は無いだろう、全てお前たちのおかげだ」

彼女のその言葉がきっかけとなったのか、キャンペーンクエスト第二部くく湖上の城塞くくの達成報告ウインドウがポップアップし大量の経験値が加算される。これなら、この層のボスを討伐すればレベル二十に届くだろう。

「キリト君、区切りもついたらみたいだしアルゴさんのメッセージ確認してくるね」

「ああ、頼むよ。あの盾と剣拾っておくのを忘れずにな」

頷いたアスナが、副官の落とした武器を拾ってからテイルネル号へと駆けていく。キズメルに褒められて上機嫌なのだろうか、その足取りは心持軽いように見えた。

「お前たちはこれから<<天柱の塔>>の守護獣を倒しに行くのか？」

「うーん、一応早ければ明日にはって話にはなってるんだよな。とりあえず、俺もアスナもこの後すぐに塔の方に行くことにはなるだろうけど」

ぎこちない手つきでテイルネル号の權を操るアスナを見送りつつ、キズメルの質問に答える。本来ならば一休みでもしたいところではあるが、迷宮区の探索は二大ギルドに任せきりだった。ボス部屋はまだ見つかってないらしいので、可能な限り早く俺たちも戦線に復帰する必要があるだろう。

「お前たち、もう出立するのですか？ 戦勝の祝賀に宴でも催ちよわそうと思っていたのですが」

これからの行動指針を考えていたところに、ヨフィリス閣下の声が耳に飛び込んできた。

「アスナが今情報を受け取りに行っていますので、それを聞いてからになると思います……恐らくはそこまで長居はできないと思います」

申し訳ありませんと俺が頭を下げる。宴というのは極めて心惹かれるし、城主直々の誘いを断るのは失礼になるのだろうが、やるべきことが残っているのならば止まるわけにはいかないだろう。

「謝罪には及びません。お前たちにも成さねばならぬことはあるでしょう。ですが、大恩あるお前たちをこのまま返したとあってはヨフィリス子爵家の名折れとなるでしょう」

そう言うと、ヨフィリス閣下が左手をさつと持ち上げた。すると、城門から横幅二メートルはあるチェストを大柄な兵士たちが運んで

きた。二人で運んでいるがその足取りはよろよろとしており、余程重い物が入っているのだろう。

チェストがヨフィリス閣下の横に置かれ、懐から取り出した金色の鍵を使いチェストの鍵を開錠する。城主自らの手でチェストが開かれると、隙間から金色の輝きが溢れだす。中には鏡のように磨かれ手入れされた様々な武器防具、アクセサリー類が納められていた。

「これはヨフィリス子爵家伝来の品々です。人族の剣士よ、私からの謝礼として一品ずつ、そしてお前たちの武勇に対する褒賞としてもう一品ずつ、この中から自由に持っていきなさい」

——キャンペーンクエストやって良かった……。

今まででも多くのクエストを受けてきたが、これほどクエストの達成が嬉しいと感じたことはないだろう。報酬が選択式のクエストでは、二つ選べればと思うことが幾度もあった。今回はその「二つ選べれば」が叶ってしまったのだ。

キズメルは俺の浮かれように呆れているようであったが、今回ばかりは許してほしいと思う。ポップアップした報酬のリストを一つずつ確認していく。これほど楽しい作業は無い。

五分ほど云々うんうんと悩んだ後、心の底から思った。ああ、せめて三つ選ぶことができれば、と。

報酬で何を選ぶか頭を悩ませていると、後方からドボンと音が聞こえたので振り返れば、アスナが戻ってきておりテイルネル号を棧橋に固定しアンカーを湖に落としていた。

この喜びを分かち合うべく声をかけようとしたが、こちらに駆けてくるアスナの表情が硬い事に気づく。何やら重大なことが起きたのだろうか、相当慌てているようだ。

「大変よ、キリト君！ フロアボス攻略レイド、もう出発しちやっただて！」

「ほ、本当か!? あいつらだけで!？」

駆け寄ってきたアスナの第一声に、俺は驚愕するしかなかった。

「今日の午前中にボス部屋を見つけて、偵察までできちゃったらしい

の！ それなら午後一番で攻略してしまおうって意見がALSから出て、それにDKBが乗っちゃったのよ！」

確かに、この階層ではキャンペーンクエストでボス攻略の重要な情報を得ることができるといふ訳ではなかったが、まさか俺たち抜きで攻略を始めるとは思わなかった。LAを取りまくっている弊害がついに出てしまったということなのだろう。

「……レイドが出発した時間は？」

「今から五十五分前」

集合地点が塔のふもとの最前線の街だとすれば、既に迷宮区に入り込んでいるだろう。

「もう塔を上ってるな。——この階層は、あいつらに任せるしかないかな……？」

「……そう、だね」

キャンペーンクエストをこなしていない二大ギルドの面々は全ての時間をレベリングと迷宮区の探索に振り向けることができる。レベルもそれなりに上がっているだろうし、不安ではあるが彼らに任せようとするのだろうか。

「ふむ、この層の守護獣は奇怪な力を持つと聞きます。お前たちが信頼する者たちなら心配ないとは思いますが……」

「奇怪な力……？」

ヨフィリス閣下の言葉に、アスナが聞き返す。ベータ時代の第四層のボスは上半身が鷲、下半身が馬の、いわゆるヒツポクリフだった。飛ぶことができるとはいえボス部屋では高さが限られているため、大して苦労はしなかった記憶がある。だが、城主の話を聞くに前半分が馬、後ろ半分が魚のヒツポカンブという怪物に変更されているらしく、戦うものは水に浮かぶまじないが必要になるといふことらしい。「水って……キリト君、ボス部屋が水で溢れたら、皆武装してるから浮くことができないんじゃない？」

アスナの言葉に、俺は青褪めるしかなかった。往還階段から進んできた者たちなら<<浮き輪の実>>を持っているだろうが、一度主街区に帰って転移門から移動してきた場合水に浮かぶ手段がない。そ

うなれば、水に沈んだまま溺死なんてことになりかねない。

「迷宮区はメツセージが届かない。——俺たちが直接行くしかないな。城主様、キズメル、急で申し訳ないですが俺たちはすぐに塔に向かわなければならなくなりました。慌ただしいですが、これで失礼させていただきます」

「また必ず戻ってきますので、申し訳ありません」

事態は一刻を争う。攻略レイド壊滅の危機を防ぐため、一分一秒でも早く迷宮区へと向かわねばならなかった。二人で頭を下げ、ティルネル号に乗りこむため駆けだそうとした瞬間、キズメルの言葉で俺たちの足は止められた。

「こういう時、人族は<<水臭い>>というのだろうか？ 私も行くさ、もちろん」

「えっ？」

「ふむ、では私も同行しましょう」

「えええええーっ!?」

澄ました顔で同行すると表明した二人に対し、俺たちはただただ驚くことしかできなかった。

大型レイドによつてあらかたのモンスターが掃討され、たまに湧き出たモンスターもヨフィリス閣下の細剣が一瞬で切り捨てていく。迷宮区というのは条件が揃えばこれほど早く進めるものだったらしい。

ヨフェル城を出発して僅か四十五分後、俺たちは第四層迷宮区のボス部屋前に到着していた。すでに攻略レイドの姿はなく既にボス部屋に突入したのだろうか、本来ならば開いているはずの扉が閉ざされており、隙間からは水が漏れ出ている。ヨフィリス閣下が教えてくれた情報は正しかったのだろうか。

「……キリト君！」

アスナの声に頷きながら扉に飛びつくと、同行してくれた四名に横に移動してもらってからありったけの力で扉を開けようとする。だが、扉は中からの水圧にギリギリ耐えていたのだろう。軽く引いた瞬

間に勢いよく扉が開き、大量の水と共に浮き輪を装着したプレイヤーたちがポンポンと飛び出てきた。

「来てくれると思っただぜ……」

スキンヘッドの巨漢——エギルが俺たちを見て強張った顔にニヤリと笑みを浮かべた。犠牲者こそ出ていないようだが、中から扉を開けることができず進退窮まっていたらしい。ボス部屋前のホールには四十人近い浮き輪を装着したプレイヤーが折り重なり、呻き声を上げていた。遅れてきた俺たちに対して不満の声を上げる者たちもいたが、隣にいたヨフィリス閣下が皆の前に立ったことで全員口を閉ざした。彼らからはヨフィリス閣下の名前が黒を通り越して闇に見えるていることだろう。

「人族の剣士たちよ、戦うつもりがあるなら立ちなさい。私はリユースラの騎士ヨフィリス。剣士キリト、アスナとの盟約によりあの守護獣は私が屠ります。戦う意思を持つ者よ、立ち上がり、我に続きなさい！」

閣下が宣言と共に剣を抜き放ち、真っ直ぐに上に掲げる。すると先ほど棧橋の戦いの時に発生したバフが再び彼の周囲のプレイヤーたちに付与された。レイドメンバーは次々に立ち上がり雄たけびを上げる。士気が上がり、能力値までも底上げされた俺たちはヨフィリス閣下を先頭にボス部屋へと飛び込んでいく。

第四層ボス<<ウイスケー・ザ・ヒツポカンブ>>は十二月二十七日午後二時二十三分、七パーティー四十名のプレイヤーと、追加のパーティーによって攻略された。

窓から差し込む日差しが部屋を照らし、その明るさによって意識が徐々に覚醒していくと同時に普段は感じることもない温もりに違和感を感じる。一体何だろうと、微睡半分のまま違和感の方へと顔を向け——目の前にあつた穏やかな寝顔が、喉から飛び出そうになった悲鳴を辛うじて飲み込ませた。

——そ、そうだった。わたししたら、昨日……。

昨日の出来事を思い出し意識は一瞬で覚醒、沸騰する。視界に映るキリトの寝顔から視線を外し、アスナは自由になる左手だけで真つ赤に染まっているであろう顔を覆い隠した。

二〇二二年十二月二十五日。世間ではクリスマスと呼ばれる一日であり、現代日本では専ら恋人たちの一日というのが定着している。本来はとある宗教の創始者の生誕を祝う一日であるはずなのだが、アインクラッドこの世界には現実世界の宗教は今のところ登場してきていないのでこの世界の住人達には単純に雪が降る一日でしかない。現実世界の知識を持つプレイヤーたちには当然のようにお祭り騒ぎをする日と認識されており実際に集団で騒いでいたようだが、少しくらいは本来の意味を考えて粛々と過ごしてもらいたいものだ。

尤も、そんな恋人たちの一日を目の前の少年と二人で過ごし、あるうことか同じベッドで眠りにつくという暴挙をやらかしてしまった自分が言っても説得力は皆無だろう。昨晩の自分は正しく醜態を晒したと言つて差支えがないが、二十三日の夜から喜ばしい出来事が続いていた故に反動が大きかったのだろう。今までの努力やら何やらが昨日一日で全てが無駄になってしまった。

情けないやら恥ずかしいやらでやっつと落ち着きかけていた顔の紅潮が再び増すのを感じるが、やっつてしまったものはもう仕方ないのでとりあえずこの状態を何とかしようと考えるが、繋がれている右手のせいで動くに動けない。そもそも被っている毛布も同じものなのだから、アスナが動けば当然振動がキリトに伝わって起こしてしまうかもしれない。

本日の集合予定は午前六時でアラームを設定している五時四十分まではあと五分ほど。SAOでは朝起きてからの準備などはほとんど必要がないため、その気になれば二、三分で出発準備ができてしまうのだが、この世界に染まりきってしまうことを嫌ったアスナは日用品をあらかじめ買い揃え洗顔や歯磨きなどを行っている。とは言っても簡略化されていることは事実なので十五分もあれば準備が整ってしまふ。

キリトが何時にアラームを設定しているかはわからないが、今まで彼の行動を考えるとアスナより早いということはないだろう。朝の準備を省略することには少々抵抗があるが起こしてしまうのも忍びないので、キリトがアラームで起きるまで待機しようとアスナは再び枕に頭を預けた。

——そもそも、一緒に寝ようなんて言い出したのはわたしだもんね……。

自分がそう口にした時のキリトの狼狽えようは見ていて面白かったが、言ったアスナも内心は自分の問題発言に対して盛大に動揺しており冷静な態度を取り繕うので精一杯だった。動揺しているのがばれないようにするために随分と素っ気ない態度を取ってしまったので、もしあのまま一日を終えていたら自分の行動の愚かさを自嘲していただろう。

今キリトと繋がれている右手。昨日は随分と長い時間こうしていたように思える。午前中は突然手を握られて驚いてしまったけれど、その夜には繋いでいないと手が寂しいと思ってしまうのだから不思議なものだ。彼から手を繋いで寝ようと言ってくれた時は恥ずかしいけども喜びが勝り、そのおかげでアスナも素直になることができた。たった一言でこうして気分を晴れさせてしまう自分は、もしかしたら世間で言うチョロいと言うやつなのかもしれない。中学校の同級生が読んでいた雑誌にそんな言葉が載っていたことをアスナは思い出した。

何せ隣で寝ている彼とは出会ってまだ一月も経っていないのだ。密度の濃さが半端ないとは言え、期間だけを見てしまえばとてもでは

ないが深い関係を築ける期間ではない。現実世界の両親は娘が眼の届かないところでこんなクリスマスを過ごしていたと知ったらなんて言うのだろう。母さんは烈火の如く怒るだろうし、父さんは——まあ、苦笑いしながら程々にしなさいとでも言うのだろうか。

——実際、何なんでしょうね。この関係は。

相棒やパートナー……そんな感じの言葉を使っただけはいる。実際、二人の関係を聞かれたらアスナはそう答えるだろう。だが、キリトがそのように答えたら——恐らく、複雑な気分になるに違いない。

この関係にもいつかは答えを出さないといけないのだろうが、今すぐでなくてもいい。自分は着実に力をつけているはずだ。答えを出すのは彼と肩を並べる剣士になった時でいい。その時に、自分のその時の想いをキリトに伝えよう。未だ幼さが残る寝顔を見ながら、アスナは右手に軽く力を込めた。

キズメルの助力もあって秘鍵回収のクエストは一日で大幅に進めることができた。キリトが言うには、この調子ならば明日の夕方には完了できるだろうとのことなのでどうやら二十七日の襲撃には十分間に合いそうだ。

城に戻ってヨフィリス閣下にクエストの報告を終えた後、一旦自室へと戻ってきたアスナはベットに腰を下ろしふうと一息ついた。今日の戦闘は危なげなくこなすことができたが、やはりそれはキズメルとキリトの力によるところが大きい。足を引っ張っているということはないだろうが、細かい部分で二人共にこちらに気を使ってくれていることが解ってしまつて、それがもどかしさをアスナに感じさせるが、今の自分では仕方のないことだと割り切るしかないのだ。

努力を続けるしかない。いつか胸を張ってキリトのパートナーで、すと言えるようになるまで足を止めることは許されない。それが、彼の隣に立つという選択をした自分の責任なのだから。

まだまだ先は長いんだけど頭の中でぼやきつつ、アスナは本日消費したポーションや戦利品の確認を行うべくアイテムストレージを表示させる。喜ぶべきか悲しむべきか、ストレージの中身はほとんど

埋まっております所持重量も限界が近づいている。ドロップが多いのはありがたいのだが、筋力にあまりステータスを振っていないアスナは所持重量があまり大きくない。今手元に残っている装備は布や皮装備だからよいものの、金属系の装備がドロップするようになったら一気に重量が満たされていってその内動けなくなるだろう。アスナは軽金属装備を採用しているので金属系装備が欲しいのだが、実際に拾ってしまうと重量超過の危機が出てくると言うジレンマだ。

——その内、キリト君の言ってた<<所持重量拡張>>も取らな
きやいけないわね……。

スキルスロットが他のプレイヤーより実質一つ多いアスナではあるが、それでもスキルスロットの数の少なさには頭を抱えるしかない。レベルが上がれば増えるとはいえ、優先して取らなければならぬスキルは多いし、<<カレス・オーの水晶瓶>>はスキルの入れ替えが前提なので戦闘中に使うことはできない以上、常時発動必要な戦闘系スキルと入れ替えてもメリツトが乏しい。

以前この話をキリトにしたら、この世界には銀行システムが無いから不便だと言っていたのを思い出す。この手のゲームには本来世界のどこでも預け入れができる銀行というものが設定としてあるらしいのだが、このSAOでは存在しないらしい。一応宿屋などに泊まれば備え付けのアイテム保管箱がついてくるのだが、アスナ達のように常に宿を変えて進んでいくスタイルでは当然利用しても一日、二日程度に限られてしまうので結局手持ちの容量で何とかするしかないのだ。

明日のことも考えるに、必要なアイテムは残すとしても五、六割の空き容量は確保しておきたい。売らなければならぬであろう装備も攻略組以外の人達なら十分実用的なものであることを考えるともったいないと思ってしまうが仕方ない事なのだろう。

そうして売却するアイテムに目途を付け整理と確認を終えたアスナはホロウインドウを閉じようとするが、そこで未確認のファイルがあるというポップアップが表示された。

——そういえば、アルゴさんからのメッセージまだ確認してなかつ

たな。

昨日の夜は色々な意味でドタバタしたし、ダンジョン内でファイルを開くわけにもいかなかった。寝る前に開けてくれと書いてあったが、この後は食事と入浴をして寝るだけなのだから今確認しても問題ないだろう。

メッセージタブを呼び出し、既読の欄にあるアルゴからのメッセージを開いて添付のファイルをタップするとテキストファイルがホロウインドウに表示された。

——題名は……倫理コード解除の手順……？

はて、倫理コードとはあのハラスメントコードのことだろうか。テキストにはその手順が箇条書きされており、一番最後の行に絶対に他人に教えてはならない、大切な人と触れ合いたい時に使うといいヨ！と書かれている。

怪しい、とても怪しい。絶対に教えてはならないというのに、何故彼女は自分に教えるのか。そして、大切な人と触れ合いたいとはどういうことなのか。疑問は尽きなかったが、あの情報屋のアルゴが無償で情報をくれるなんてよっぽどのことだ。有用無用かはともかく確認だけはしておくべきなのだろう。

アスナはテキストに書かれた通りにウィンドウを操作していくが、その複雑さに驚きを感じた。極めて長いヘルプページを読むだけでも大変なのに、その中で複雑な操作を要求するとあつては辿り着くプレイヤーはほとんどいないに違いない。

操作だけでも二、三分ほどかかったが、ようやくお目当ての倫理コード解除のリンクまでたどり着いた。後はリンクをタップするだけなのだが、そこでアスナの指が止まる。冷静に考えて、倫理コードを解除するということはハラスメント行為による警告が出なくなるということなのだろう。この場合、アスナが今ここでハラスメント被害を受けてもそれを止める手段がなくなるということになる。アスナは一旦視線をウィンドウから外すと、部屋をぐるりと見回した。ここはインスタントダンジョンであるから他のプレイヤーはいないので、そのような行為を受ける心配はない。

——隣には一応キリト君がいるけれど……まあ、大丈夫よね。

隣の部屋に男性プレイヤーが居るのは間違いないのであるが、彼が自分にそのようなことをするとは思えない。それに解除したところですぐに設定を戻すのだから、特に問題はないだろう。

そう結論付けたアスナは、視線をウィンドウに戻してリンクをタップする。すると、Cautionという文字と共に、倫理コードを解除したときの注意事項が表示された。アスナはそれを読み進めていくが、やはり事前に想定した通りハラスメント被害を受けても警告が出なくなるという旨の文章が書かれている。

——やっぱりね。でもどうしてアルゴさんはわたしにこれを教えたのかしら……。

これでは解除してもこちらが一方的に損をするだけだ。彼女がアスナに対して損をするようなことをするとは思えないが、これでは何の意図を持って自分に教えたのかわからない。疑問を感じたアスナが警告文をスクロールして文章を読み進めていくが、やはり内容はハラスメント行為に対しての説明でしかなく、その内にスクロールバーが一番下に到達した。

——結局、特に驚くようなことは書いてなかったけど……。えーと、最後の段落は「擬似的な性行為の解禁」……？

その文字をアスナが理解した瞬間、出そうになった叫び声をギリギリで飲み込んだ。

——せせせ、性行為!? どど、どういふことなの!? この世界でそんなことができるの!? というか、なんでこんなものが実装されているの!?

ボンと爆発するようにアスナの顔が赤くなり思考が乱れていく。アルゴからのメッセージに何もないわけがなかった。爆弾は最後の最後に用意されていたのだ。

アスナは震える手を抑えつつ最後の段落を読み進めていく。どうやら倫理コードを解除することによって性器の描写が明確になり感覚も増幅するらしい。確かにナーヴギアを利用してペルソナ・セックスサービスの運営を予定しているという情報をちらつと聞いたこと

があつたが、このS A Oにもそれが実装されているとは思わなかつた。

最後の段落を読み終えて即座にN Oをタップしウィンドウを消した後、アスナは顔を両手で抑えたままベッドに倒れ込む。

アスナはメツセージの最後に書かれていた、誰にも教えてはいけな
いということと、大切な人と触れ合いたい時に使えという二つ言葉の
意味を完全に理解した。

この世界では女性プレイヤーは圧倒的に少ないのだ。もしこの情
報が出回ってしまえば当然悪用するプレイヤーも出てくるはずだ。
そうなってしまうえば女性プレイヤーは圏外に出ることができなく
なってしまうだろう。絶対に秘匿されるべきものだ。

そしてもう一つ——アスナは手を顔から外し、うつ伏せになった。
大切な人と触れ合う……つまり、そういう行為をする時に使うとい
うことなのだろう。無論知識では知っているが、未だ中学生の身分であ
るアスナにとっては少々刺激が強すぎる。

「大切な人、か……」

ベッドに顔を埋めたまま、アスナはポツリと口にした。完全に茹つ
た思考を普段通りに戻すべく無意味に足をパタパタとさせてみたり、
ごろごろと転がってみたりするが一向に思考はまとまらない。

生まれてこの方色恋沙汰とは無縁だったのだ。むしろそういった
ものに一喜一憂している同級生を見て下らないと思っていたし、嫌な
視線を向けてくる男子に対して嫌悪感を抱いていたほどだ。自分が
誰かと付き合うなんてことは考えたこともなかったし、自分は親が選
んだ人と結婚するのだからと端から諦めていたというのもある。

しかし、この残酷な世界で一人で生きていくのはきつと大変なこと
だ。いつか自分も誰かとそういうことになるのかもしれない。仰向
けになって天井を見上げながら、アスナはどんな人がいいのかなと想
像をしてみる。

——優しく、信頼できて、自分と肩を並べることができるとい
強い。そうね、キリト君のような人と……。

アスナの動きが止まり、身体が震えだす。今自分は一体何を考えた

？ 誰を思い浮かべた？ どうして彼のことが最初に思い浮かんだのだ？

だめだ、これ以上は考えてはいけない。アスナは無理やり思考を止めるために跳ね起きて頭を振った。

赤くなつた顔を、震える身体を隠すように、アスナは自らを抱きしめ背中を丸める。自分と彼の関係は攻略を共にするパートナーで、それ以上でもそれ以下でもない。だからあれ以上のことを想像してはいけないのだ。

——アルゴさんのバカ！ なんでこんなものを送ってきたのよ……！

寝る前に確認しろと言っていた意味も今はつきりと理解できた。こんなことを知ってしまったえば、彼の前でどんな顔をすればいいのかわからない。きつとあの鼠の少女はアスナがこうなることを理解した上で敢えてメッセージを送りつけたのだろう。

——どうしよう……！ この後ご飯も、お風呂もあるのに……！
食事の間は彼の正面に座っていなければいけないし、お風呂に関してはあろうことか昨日一緒に入ったのだ。水着着用であつたとはいえ、あまりにも大胆なことを提案していたことになる。

——つてそうだ、キリト君がこのこと知つたらどうしよう……！
昨日みたいに一緒にお風呂入つたり、一緒に寝たりなんてしたら、その、そういうことになる可能性だって……！

アルゴが知っていたのだから、同じベータテスターであるキリトが知つていてもおかしくはない。だが、一人で大浴場に入るのは誰かが来た時に困る。でも、彼と一緒に入るのはもつと……。

想像が想像を呼び、どんどんと思考が過剰になつていく。この盛大なアスナの空回りは、キリトから食事に誘われた後も思考を止めきれなかつたアスナがキリトの顔面に果物を投げつけ紫色の光を散らすまで続いたのだった。

第五層 第二十九話

第四層からの螺旋階段を登り終え第五層へと足を踏み入れ主街区<<カルルイン>>へと続く道を歩き始めてからしばらくして、後ろを歩いてきたアスナの眩きがキリトの耳に届いた。

「何というか……現在地が不安になるわね、ここ」

アインクラッド第五層は今までの自然の地形を利用したフィールドと違い極めて特徴的なマップと言えるだろう。直径10キロ近いフィールドの七割は石造りの遺跡が迷路のような複雑な地形を作りだしており、残りの三割ほどが自然地形となるのだが、そのほとんどは鬱蒼とした森で平原のように開けた場所は無い。階層全体が迷いやしく作られているため、相対的に難易度も今までのフロアより高めとなっている。全百層の内最初の区切りとなる第五層に相応しいマップであると言えるだろう。

「人工的な迷宮みたいなものだからな。ベータの時は帰り道がわからなくなつて死に戻りしてたやつが結構いたよ」

「……道順はしっかりと頭に叩き込んでおくわ」

アスナの言葉に頷きを返しつつ周囲を見渡していく。往還階段から主街区へはほぼ一本道であるため今のところ地形が変わつていないような感じはしないが、この後挑むことになる遺跡エリアの中はどうなっているかわからない。ベータ時代に十日ほどこの層を拠点にしていたためこの階層の地形は頭の中に入っているが、それをそのまま適用するのは危険ということは今までの経験からわかっている。モンスターもランクも第四層のそれから一段飛ばしで強くなっている。より注意が必要になるだろう。

——それに、警戒しなきゃいけないのはそれだけじゃない。

往還階段を出た直後にアルゴにメッセージを送っているため、転移門を有効化すればすぐに第五層に来るであろう。一通り情報収集を行つた後に一度話し合いの場を設ける予定なので、注意することを話

すのはその時でいい。今この層にいるプレイヤーは二人しかいないのだから。

そのままあまり景色の変わらない一本道を進んでいくと、唐突に視界に<<Inner Area>>の表示が現れ主街区<<カルルイン>>に到着した。フロア南部に広がる巨大な遺跡地帯の中央部、旧時代の都市であつた場所に築かれたという設定のこの街は、第四層主街区ロービアと違い水っ気は殆ど無いが毎日清掃がされているのか埃っぽさはあまり感じない。青みがかつた岩のブロックで造られた建物は所々崩れかかっているが、補修したり革や布を被せたりして使用している。中東を舞台にした映画等でよく出てくる、砂漠地帯の交易拠点と言うと想像がしやすいかもしれない。

街の中央広場は円形で縁には布張りのテントがずらりとならび、NPCが食材や武器防具を販売している。広場の中心の転移門は街の建物に使われている素材とは少々趣が異なり、白っぽい色の石材の重ね合わせでアーチが造られている。

「アスナ、アクティベートやってみるか？」

アーチの前に立ってさあ早速と手を伸ばしたが、今までずっとアクティベートは自分がやってきたことに気付き、斜め後ろに立つアスナへとお伺いを立ててみる。俺の言葉に反応したアスナがアーチ、次いで俺の顔と視線を動かしてから首を横に振った。

「ううん、キリト君がやって。アクティベートはわたしがラストアタックを取れた時にやらせてもらうわ」

なるほど実に彼女らしい答えだ。それでは遠慮なくと、止めていた手を伸ばし指が膜のようなものに触れた瞬間、アーチ全面が白く発光し始めた。

「よし、行こう」

「別に逃げなくてもいいと思うんだけど」

アスナの突っ込みをスルーしつつ近場の建物の物陰までダッシュし、そつと広場の様子を窺う。転移門はプレイヤーの移動を示す発光が途切れずに白く輝き続け、一分もしないうちに転移門の周りに人だかりができていった。

「……皆、いい表情してるわね。こうして離れて眺めるのも悪くないかも」

アスナの言うとおり、移動してきた彼らの表情は明るい。新しい階層が開かれ攻略に一步近づいたことへの喜び、新しいフィールドへの期待感等、転移門が有効化された直後のこの瞬間はこの閉鎖された世界では珍しい良い出来事なのだ。彼らは広場を一通り眺めた後、各々目的の場所へと散っていく。新しいクエストや装備の確認、味の良い食堂や観光名所等を探しに行くのだろう。ボス攻略に参加できる面々はまだ少ないが、俺たちの後ろでは間違いなく前に歩き出している人達がいることを実感できる光景だ。

「わたし達も行きましょう。フロントランナーが出だして負けてられないわ！」

思うことがあつたのだろう、気合一新といった様子で広場へと足を踏み出したアスナに釣られて、俺も改めて広場に足を踏み入れる。ここに集まる彼らがスムーズにこの階層で動くことができるように調べることは沢山あるのだから。

転移門をアクティベートしてから一時間ほどで主街区のクエストやNPC販売物の確認を終えた俺達は、転移門広場から延びる大通りの途中小道を一本入った場所にある、少なくとも街開きが成されてすぐには人が来ないであろうカフェのテーブルで、合流したアルゴを交えて現段階の第五層の情報交換を行っていた。大抵はベータ時代との情報に差異がないかを確認するだけであるが、二大攻略ギルドの面々もアルゴの攻略本の元に行動方針を決めているため馬鹿にできる作業ではない。

「クエストの方はほとんど変更なしカ……となると、この層は攻略の情報集めを優先した方が良さそうだな」

第四層のようにフィールドの環境が大幅に変わったのであれば話は別だが、この層はベータから大きい変更は無いようでそれはクエストも同様らしい。現段階ではベータ時代のクエスト情報を流用するだけでも十分参考になるだろう。

「問題は地下墓地力。クエスト内容の変更は無さそうだが、地形やモンスターのアルゴリズムは行ってみないとわからんからナ」

「確かに、攻略だけを考えるなら地下墓地を突破するのが最優先だろうしな。中ボスがいることを差し引いても、地下トンネルで最前線の村になる<<マナナレナ>>まで行ってしまうえば日数をかなり短縮できるから、優先的に調べる必要があるか」

「マア、そうなるよナ。地下ダンジョンは早めに偵察しとくべき力。とりあえず、方針はこれで良いとしてだガ……キー坊、オレっちはこの層の情報本を作るに当たって一つ悩んでることがある。最後に一つだけ、意見を聞きたい」

アルゴはこちらと会話しつつホロキーボードを使って情報を文章に纏めていたのだが、そこまで言うのと動かしていた手を止めて神妙な面持ちでこちらに問いかけた。

「この階層の注意点、キー坊はPプレイヤーKキルについて書くべきだと思う力？」
スツと左から息を？む音が聞こえたが、敢えてそちらの方を向かずアルゴの視線を受け止める。第五層には迷いやすいフィールドや強力なモンスター等今までより注意すべき点が多いが、この階層で最も警戒すべき相手は「そういうった思考」を持つているプレイヤーだ。

地上の遺跡地帯、地下の巨大ダンジョンは共に薄暗く、視界が狭い。当然身を隠すには最適で、待ち伏せなどで不意を打つのも容易いためベータの時はPKが多く出没した。デスゲームとなった今のSAOでPKが出るなど想像したくもないが、「そういうった思考」を持つている可能性があるプレイヤーと剣を交えてしまったために、この問題から目を逸らすことはできなくなった。

「……難しいな。今のSAOでPKが居るなんて言っても誰も信じないだろう。下手するとPKを煽っているなんて取られ方もされかねない。だが……書かなければ方が一のことがあった時、情報を隠していたとか騒がれることになる」

「アア、そうなれば誰かさんがビーターを名乗ってビギナーのヘイトを一身に背負ったのも無駄になル。書いても書かなくても危険な情報だ、こいつハ。だからこそ、オレっちはキー坊の意見を聞きたい。

ピーターの、PKをやらかす可能性がある奴らと直接戦ったプレイヤーの意見をナ」

情報本がベータテスターによって発行されていることは周知の事実になっている。情報本にはベータ時代の情報であると明記されているとはいえ、間違った情報を流布してしまえば当然発行者の責任を問う声が出てくるだろう。下手をすれば攻略を妨害したとして吊るし上げにされかねない。

俺がこれから言う意見にはアルゴの命が懸かっている。そう考えてもおかしくないほどに重要なものだ。目の前に置かれていた飲み物を口に含み、飲み込む。味は感じなかった。

アルゴの真剣な視線を受け止め始めてどれほど時間が経ったかわからない。その間場は沈黙に支配されたが、結論を出した俺はゆっくりと口を開いた。

「俺は、書く必要はないと思う。あいつは……モルテは確かに危険な存在だけど、手段はデュエルを利用した間接的なものだった。急に方針を変更するとは思えないし、プレイヤーを攻撃してオレンジになってもそれをグリーンに戻すクエストはまだ発見されてない。そもそもあいつの目的はALSとDKBの間に抗争を起こさせることだったみたいだし……今の状態で直接的な手段を取る可能性は低いだろう」

可能性が絶対に無いわけではない以上言葉を濁すしかなかったが、これ以上のことは言えないし、恐らくは言わせるつもりもなかったのだろう。俺の言葉を聞いたアルゴは黙って頷くと、「参考にするヨ」とだけ言ってウインドウを閉じた。

「マ、情報交換はこれで終わりだな、助かったヨ。キー坊、アーちゃん、またナ」

最後にと宣言した通り、俺の意見を聞き終えたアルゴはそれまでの真剣な面持ちをコロリと笑顔に変えてから颯爽と去って行った。その後ろ姿はSAOの攻略のための情報収集を一手に引き受けるにはあまりに小さい。ベータ時代の彼女は普通のプレイヤーだったそうで、何故このデスゲームが始まってから情報屋という危険な立ち位置

に自らを置いているのかはわからない。

だが、彼女にもあるのだろう。最初の一か月、先行者としての役割を果たすことができずに二千人近い人間を無為に死なせることになった事実に対する負い目が。

生き残っているベータテスターが今どれくらいいるのか……第一層で聞いた時には損耗率は四割と言っていたが、あれから一か月経った。その多くが最前線に身を置いているであろうベータテスターの被害は増えているに違いない。きつと誰かが死ぬ度に、情報を集積するアルゴの元には被害を知らせる連絡が届いている。

あの笑顔の裏に、どれだけの苦悩があるのか。

命が絡まなければ、SAOが普通のゲームのままだったならば、この思いをこれから何度繰り返すのだろう。澱よどんだ空気を少しでも吐き出すように深くため息をつくとき、左袖をくいと引つ張られた。視線を遣ればアスナが眉を曇らせてこちらを見ている。何も言っただけだったが、心配してくれているのは一目でわかったので「大丈夫」とだけ返し首を振った。

「俺たちも動こう。ボス戦の後とはいえ、寝るにはまだ早いしな」

暗い雰囲気振り払うように勢いよく立ち上がる。時刻は午後五時前、日が落ちるまではまだ一時間以上あるので地上の遺跡エリアの簡単なクエストくらいなら暗くなる前に消化できるだろう。どのクエストをやるべきかと早速考え始めるが、その結論が出る前に出されたアスナからの提案に頷くことになった。

対人戦での戦い方を教えて欲しい。

アスナからの提案を受け入れた俺は、主街区を出てすぐの遺跡エリアの中にある比較の見晴らしが良い広場へと足を向けた。学校の体育館ほどのスペースがあるこの広場に通じる道は一本道で、誰かが来てもすぐにわかるようになっていて。クエストのキーとなるモニュメントやモンスターも居ないため隠れて練習するにはもってこいだろう。

広場の中ほどで五メートルほどの距離を置いて向かい合い、ウイン

ドウを操作する。圏外であることも考えてルールは<<初撃決着モード>>、練習であるから制限時間は無しでいいだろう。簡単な設定を終えてOKをタップすると、目の前にウィンドウが出たのかアスナの視線が動き、デュエルが了承されると二人の中央でホロウインドウがカウンtdownを開始した。

背中から剣を抜き、構える。

アスナも剣を抜き<<シバルリック・レイピア>>の切っ先がこちらへと向けられると、カチリと脳内でスイッチが入った。アスナの戦い方を考えれば、敏捷の高さを活かして積極的に切り込んでくるはずだ。基本的にカウンターを狙う受け身の戦い方になるだろう。

カウンtdownは徐々に減っていくが、その間一言も話すことはなかった。このデュエルは練習だ。だが、練習であるからこそ真剣にやらなければ意味がない。

開始と同時に神速の<<リニア>>飛んできて反応ができるよう、腰を軽く落とし無駄な力を抜いていく。アスナの視線に普段の戦闘中のような力が無いのが気になるが、初めての対人戦であるからだろうし、剣を交えればすぐ変わるだろう。

残り二秒、一秒、零秒。デュエルが開始されてもアスナに動きはない。当てが外れたため様子を窺ってみると、剣先こそこちらに向いているが戦闘が開始されても目に力が入っていない。それどころか、まるで怯えているかのように視線の揺らぎまで見て取れた。数秒経つと目の揺らぎは剣先にも伝染し始める。

「動かないなら、こっちから行くぞ」

剣を顔の右で構え、<<ソニックリプ>>のモーションを取る。剣身が青白く発光し一步踏み込むだけでアスナに向かっての突進攻撃が発動されるだろう。それは当然アスナにもわかっているはずなのだが——視線の揺らぎが剣先にも伝わり、誰が見ても明らか程にレイピアが震えだした。本気で剣を合わせると決めたのだから、動揺しているアスナの間を突くのが正解なのだろう。今足を踏み出せば間違いなく勝敗判定がなされる威力の一撃を与えることができる。

「……………やだ。こんなの、嫌」

できるのだが、アスナはギリギリ聞こえるかどうかの音量でそう眩
き、震える右手を抑えながら俯く。剣は下げられ、視線も下を向いた
まま、アスナはただ立ち尽くしていた。とてもではないが剣を合わせ
ることが出来る状態ではないだろう。

「……少し、休もうか」

アスナが顔を上げゆつくりと頷くのを見て、発光が消えた剣を背中
へと戻した。

陽はすっかり落ちてしまい、先ほどまで夕焼けで赤く染まっていた
広場は青黒い闇に包まれている。こうしてたき火を起していなけれ
ば、隣に座るアスナの姿すらシルエツトでしか判別できないだろう。
薪として使っている枝の性質のせいかな少しばかり緑色がかつたたき
火は周囲の暗さも相まって中々に神秘的な光景を作り出している。

事前に買っておいた野営セット一式は今回のような圏外での
ちよつとした休憩でも役に立ち、ロービアでアスナが購入していた茶
葉を使ってお茶を淹れ、先程までの緊張を解すように一息ついた。横
で足を抱えるように座りながらカップを傾けるアスナはデュエルの
時に比べればかなり落ち着いてきたように見えたが、いつもの調子を
取り戻すには至っていないようだ。

「……ごめんなさい。わたしから、言い出したのに」

無言のままたき火を見続けカップに入ったお茶がなくなった頃に
アスナはぽつりと口を開いた。言葉こそ俺に向けられているが視線
はたき火に向かったままだ。

「いや、いいんだ。モンスターと戦うのとは心構えとかもさ、違うだろ
うし」

「うん。全然、違ったよ……。剣を抜くまでは大丈夫だったのに、これ
からキリト君と剣を合わせるんだって思ったたら、急に、震えてき
ちゃって。安全なルールなんだから、スポーツみたいなものだって
思ってたのに……」

確かに、今回俺が選んだ<<初撃決着モード>>はアスナの言うとお
りスポーツとしての側面が強いように思える。実際にベータ時代

には余りにも手軽なルールであったため、対人戦を行う場合は半減決着、もしくは完全決着モードが使われることが多かった。だが、デスクゲームと化した今のSAOでは体力ゲージが即ちプレイヤーの命であるため、〈初撃決着モード〉によるデュエルですら命をベツトすることになる。

「今のSAOで体力ゲージを減らすってことは、命を削るってことだ。今の俺とアスナなら心配はないだろうけど、もしそれなりのレベル差があれば一撃で相手のHPを削りきってしまうってこともあり得るんだ。——条件が揃ってしまえば、デュエルはただの殺し合いになる」

現在の俺が持つ最強技の〈〈ホリゾンタル・スクエア〉〉、アスナならば三連撃の〈〈トライアングュラー〉〉等がクリティカルヒットしてしまえば、全損まではいかないまでもHPゲージの大部分を削ってしまうだろう。練習であっても、死ぬ危険があることには変わらない。

殺し合いという言葉聞いたアスナの肩がびくりと震え、小さく縮こまる様に——クリスマスイブの夜に彼女が不安で震えていた時と同じように——膝を抱えた。

「わたし、キリト君と殺し合いなんて、したくないよ……」

そう言うてから、アスナは慌てて口を嚙くんで抱えていた両膝に顔を載せジツとたき火を見続けている。あの夜のように本音が零れてしまったのだらう、たき火の光を受けた彼女の横顔は険しく自責しているようにも見えた。

「……俺も、そんなのはごめんだ。アスナと戦うなんて——殺し合うなんてしたくない、絶対に」

自分を責める必要がなんかない、そう伝えるべく俺も素直に本音を口にする、アスナは驚いたようにこちらを見る。それに合わせるように俺も視線をアスナへと向けた。

「……………第三層でモルテって人と戦った時、キリト君はやっぱり怖かった？」

「……………そう、だな。あのとき、体力が五割ギリギリまで削られて、もし

一つでもミスをすれば片手斧のソードスキルで体力を全損するって状態まで追い込まれたんだ。モルテが俺を殺そうとしてるってことに気付いた時……背筋が凍ったよ」

アスナの疑問に答えながらあのデュエルのことを思い返し、思わず両手に力が入る。あの出来事が無ければ、俺はここまで対人戦のことにこだわらなかつただろう。

「まだ、信じられないの。このゲームで死ねば現実世界でも死んでしまうのに、それでも他のプレイヤーを殺そうとしている人たちがいるなんて……」

「気持ちにはわかるよ。正直攻略組の妨害を工作して何のメリットがあるのかわからないし、それが継続されるって保証もないんだ。突発的なものだったってこともあるかもしれない。でも……」

一旦そこで言葉を切った。アスナが嫌がっていることも、俺自身が嫌だということも、既に伝え合っている。それを承知した上で敢えて、俺は続く言葉を口にした。

「……それでも、この層を攻略し始める前に、ある程度は対人戦に慣れておいてほしい」

現段階で対人戦によるPKが起きるとは思えないし、攻略組でも最強格のアスナが狙われる可能性はさらに低くなる。それでも万が一があつた時、ステータスでは勝つても人型のモンスターとしか戦っていないアスナでは対人戦術で劣る。優れた戦術や対人戦に特化したスキル構成をしている相手に対して勝利を得ることは難しいだろう。

負けることができない以上勝つ他ないのだ。戦いたくない。だが、その気持ちを押し殺してでもアスナに自らを守る術を身に着けてもらいたい。俺の言葉を聞いたアスナは心の中の不安や葛藤を示すかのように瞳を揺らし、視線から逃れるように顔を逸らした。

普段冷静なアスナがこれだけ動揺しているのだ、俺が考えている以上に衝撃が大きかつたのだろう。今日はこのまま主街区に戻るつもりであるから答えを出すのは明日でもいい。明日の朝クエストを進める前に改めてこのことを聞くことにしよう。膝を抱えながら考え込むアスナを尻目に、揺れ燃えるたき火へと視線を戻した。

第三十話

焼き芋を齧^{かじ}って頬をほころばせるアスナの姿は、張りつめていた空気を弛緩させた。焚き火を起こした時に第四層で手に入れていた芋を放り込んでおいたのだがどうやら正解だったらしい。

「この芋、サツマイモとはちよつと違うけど、すごくおいしいね。いつの間に買い込んだの？」

「ああ、それ第四層迷宮区の半魚人のドロップ。何とB級食材だ、すごいだろ？」

第四層の迷宮区に出現する半魚人がドロップするこのサツマイモのような芋はこの階層では極めて貴重と云っていいB級食材で、実際に一口齧ってみると焼きたてほかほかのほっくりとした身がクリームのように溶け甘味がジワリと広がる。ただ焼いただけだけでこの味なのだから高い料理スキルを持つプレイヤーが調理すればさぞ美味しい料理ができるのだろう。

とはいえ先ほどまでほころんでいたアスナの頬が引きつっているのを見るに、重要なのは出所で高ランク食材というのは関係ないらしく、先程まで美味しそうに齧っていた芋を眉間に皺を寄せながらじつと見ている。その真剣な目が何やら面白く感じてしまい様子を窺っていたが、しばらくして心の中での葛藤は決着を見たようで再び芋を口に運び頬をほころばせた。

その内暇な時間を見つけて面白い食材集めに走るのも悪くないな等と考えながら芋を齧るが、食べ盛りの中学生であるためか芋半分程度では少々物足りない。主街区に戻ったら改めてレストランにでも行こうと決める。

「ところで、半魚人がなんでこんな芋持ってるの？ 魚とかなら自然なのに」

アスナの疑問も尤^{もつと}もなので、俺はサツマイモの原産地から発展するアステカ神話との関係性という、大抵の人が聞けば「運営の人そこまですべて考えてないと思うよ」とバツサリ切られてもおかしくないこじつけのような説明をしてみると、予想に反して知識欲の強いアスナの琴線

に触れたらしく意外な食いつきを見せた。

「確かにちよつとこじつけっぽいけど、面白い推理だと思うわ。キリト君って結構博識なのね」

「まあ、小学校の頃に自由研究でちよつと調べたことがあってさ。意外と覚えてるもんだよなあ……」

「ふうん。でも、自由研究でサツマイモのこと調べるなんて珍しいわね」

「あーつと、向こう側で住んでるところがサツマイモの名産地でさ」

俺が少々言いよんどんでから答えると、アスナがその理由に気付いたのか一瞬止まってから「ごめんなさい」と謝ったので、気にするなと首を横に振った。そこで会話が一度途切れたが、ちようど《フオツシルウツドの枝》の耐久値が底を尽きかけてきて、焚火の勢いも徐々に弱くなってきた。完全に消えてしまう前に移動してしまつたほうがいいだろう。

「火が消えそうだし、そろそろ街に戻ろうか。真つ暗なのはあんまり好ましくないし」

「あつ、うん。おイモ、ごちそうさまでした。……その、ごめんね？」
「気にするなつて。それよりも俺ちよつと物足りないからさ、主街区でレストランに入りたんだけど……付き合ってくれる？」

俺のお願いをアスナはすぐに了承してくれたが、当然のように出された高い要求に主街区までの道すがら頭を悩ませることになった。

美味しいけど穴場で落ち着けてお店が綺麗なレストランという、パートナーからの現実世界で言われたらさぞ困るであろうリクエストに応えるため、怪しげな露店が軒を連ねる主街区の裏通りを進んでいく。この層はフィールドも迷いやすいが主街区も遺跡を利用して作られているため大通りを一本外れると細い道が入り組んで迷宮のようになっているので慣れないうちはマップを開きながら歩くことになるが、ベータテストで十日近くこの層を拠点にした俺は道を間違えることなく目的の店の前に到着した。

《B L I N K & B R I N K ……瞬まばたきと崖たつぷち？ 随分と特徴

的な名前ね。それに駆け込み注意ってどういうこと？」

看板に書かれた文字を見たアスナが当然のように投げかけてきた疑問に俺は「入ればわかるよ」とだけ答え扉に付けられた鑄鉄のリングを引っ張ると、店の中から冷たい風が吹き出してきた。驚くアスナに店に入るよう促すと、恐る恐るといった様子で中を覗き込んでから歩みを進める。

「なに、これ……」

四角いテラスの鉄製のテーブルを小走りで横切りながら真っ直ぐに奥へと進み、お腹の高さにある手すりをしっかりと掴んだアスナが驚きの声を上げる。目の前に広がる絶景を前に呆然とするアスナの隣で手すりに腕を載せ寄りかかった。

崖つぶちの名の通りこのテラスはアインクラッドの外周から突き出すように設置されている。鉄製の手すりの先に広がるのは無限の雲海。左手には辛うじて残っている太陽の赤い輝きが雲を茜色に染め、そこから視線を右に動かすと青紫、藍色、濃紺と変わっていき最終的には漆黒に支配されていく。上を見上げれば無数の星が輝きを放ち、時折大型の鳥が群れを成して横切り空の彼方へと消えていった。内を向けば各層の特徴ある大地が、外を向けば無限の空と雲が広がるこの世界観は、数多の大地を切り取って組み上げ天空へと舞い上がった《浮遊城》の名に恥じぬものだろう。

ベータ時代にこの絶景を初めて見た時には全身が痺れるような感覚を感じ瞬きまばたするのも忘れていた。ログアウトした後に店の名前の意味を辞書で引いてなるほどと納得したのを覚えている。隣に立つアスナは驚きの声を上げてからずっと無言のままだったが、少しでも感動を共有できただろうか。

「そっか。店の名前の瞬きまばたって、こういう意味だったのね……」

数分ほどこの絶景に見入った後、再起動を果たしたアスナが納得したように頷きながら言った。

「そういうこと。このお店はいかがでしょうか、アスナさん？」

「少なくとも穴場で綺麗ってのはばっちりね。夕焼けも、夜空も、ごく素敵」

俺の質問に答えたアスナの顔に笑みが浮かぶ。この層に来て早々に重苦しい雰囲気になりアスナの表情も硬くなっていたが、ここに来てやっと明るさが戻った。

「さあ、早速ご飯にしましょ。折角だからこのテラス席でいいわよね？」

俺が領きを返すと、アスナは手すりに最も近い席を選び腰を下ろし鋼板に羊皮紙を貼ったメニューを二人で見れるように横向きにした。

「それで、おすすめのメニューは何？ この《ホロホロ鳥のロースト》って悪くなさそうだけど」

「ああ。それは結構面白いぞ、色んな意味で」

「味のことを聞いているの！ 食事に面白さなんて求めてないわよ」

等と話している内にNPCのウェイトレスが注文を取りに来たので、アスナが慌てて三品頼み、俺も同じものをもう一つずつとワインのボトルを一本、食後にコーヒートこの店の名物であるタルトを二つずつ頼んだ。見事な復唱を終えてからお辞儀をして去っていくウェイトレスを見送り、スタンドにメニューを戻す。

「デザートを頼むなんて珍しいわね。おいしいの？」

「ああ、ここのデザートはバフ付きの限定メニューでさ。味も中々だからベータの時はすごく人気だったんだ」

「バフ？ どんな効果があるの？」

「それは食べてからのお楽しみってことで。でも、正直ラッキーだったよ。もう街が開いて結構時間経ってるし混雑してるかもって思ってたから」

「確かに、こんなに素敵な夜景が見られるだけでも話題性十分なもの。そこに限定メニューなんてものがあつたらそりゃあ人が集まるわよね。そう考えると、混雑する前に来れたんだからキリト君の言うとおリラッキーだったかも」

少なくともテラス席には俺たち以外のプレイヤーの姿はなく貸切状態だ。宿屋も併設されているため利便性が高くベータ時代は常に混雑していたのだが、どうやらこの店の情報はまだ出回っていないらしい。二人で店内を見渡したため会話が途切れたが、そのタイミグ

で丁度良く料理が運ばれてくる。

《ホロホロ鳥のロースト、丸パンつき》、《シユブル・リーフと十種チーズのサラダ》、《あつあつグラタンスープ》、頼んだ三品はどれも想像していた範囲の料理で少なくとも見た目は問題なさそうだ。一緒に運ばれてきたボトルの栓を抜き、アスナのグラスにほんのりと金色がかった液体が注がれる。普通の白ワインであつたことに安堵しているようだが、続いて注がれたワインの色にアスナは目を丸くして驚いた。

「これ、どういうトリック？」

「種も仕掛けもございません。この《フィックルワイン》は注ぐことに中身が変わるのさ。赤・白・ロゼにスパークリング、当然甘口・辛口もランダム。味は飲んでのお楽しみってこと」

ピンク色のワインが注がれた俺のグラスを見てアスナが感心したように何度か頷いた後、手元のグラスを持ち上げ一口含んだ。どうやら白の辛口は舌に合ったらしく満足そうであつたが、その随分とワインを飲みなれている雰囲気には俺は驚きを隠せなかつた。日ごろからワインを嗜むということは現実世界では二十歳以上という証明になるのだ。我が麗しの細剣使い様は自分と同じ年か離れていても精々二つ上くらいだろうと思つていたので。

「ちよつと、何よその眼。君だつて親のお酒をちよびつとくらい味見したりするでしょ」

「ま、まあ確かに」

訝しむ視線に気づいたアスナが慌てて言うと、同じく経験のあつた俺は頷くしかなかつた。晩酌でよくビールを飲む母親に度々分けてもらうことがあるがその度に苦いとしか感せず、同じ炭酸飲料ならばコーラやサイダーのような清涼飲料の方が舌に合つたのはやはり子供だからなのだろうか。

グラスを手に取り一口含む。ワインというものを飲む機会など皆無に近かつたが、グラスに注がれたロゼの甘口は驚くほど飲みやすい。現実世界に戻ったら試してみるのも悪くないと思つたところで郷愁の念に駆られた俺は、この想いがアスナにはばれないよう視線を

右側に広がっている夜空へと向けた。

陽は完全に沈んだようで、暗闇に支配された空には数多の星が先ほどもよりも強く輝いている。紛うことなき満天の星空であったが、郷愁の念を振り払うために夜空に視線を移したというのに何故か想いが強くなってしまった。現実世界でこれほどの星空を見たのは家族で地元埼玉にある堂平山の天文台に行った時くらいのものであったが、経験が少なかった故にその時の思い出が強く想起されてしまったのかも知れない。

「……星座、現実世界と同じなんだね……」

俺と同じように夜空を見上げていたアスナが声を掠れさせながらそう呟いた後、ギョツと目を瞑って俯いた。鋼鉄のプレートプレートに右手を強く押し当てているのは、こみ上げる思いを抑え付けているのだろう。君だけじゃない、現実世界を思い出して胸が苦しくなるのは君だけじゃない、我慢をする必要はないのだと伝えるために口を開こうとして、

「何も、言わないで」

俺の言葉を拒絶するように、アスナがそう囁いた。半ば開かれていた口からは何も音を発することなく口を嚙む。

「ごめんなさい……でも、口に出してしまったらきつと、この間みたいに止まらなくなっちゃうから……」

この間というのは恐らくクリスマス・イブの夜のことだろう。ソファの上で膝を抱えながら座り、声を震わせていたアスナの姿は未だ記憶に新しい。とはいえ声を震わせているのはあの時と同じであったが、その佇まいは落ち着いていた。

「うん……ごめんな？」

「いいの。逆に気を遣わせてごめんなさい。……さあ、ご飯食べちゃいましょ。冷めちゃうわ」

触れただけで崩れる鳥のローストと葉っぱ自体がマヨネーズ味のサラダ、ぐつぐつと煮え立ち中々冷めてくれないスープなど少々の間

題はあったが、味の方は問題なく色々な意味で楽しい食事だった。三杯目のワインを飲み終え丁度ボトルが空になったところで、ウエイトレスが頼んでおいた食後のデザートとコーヒーを運んでくる。

「これが例のバフ付きデザート？ 見た目は普通のブルーベリータルト……にしてはちよつと青すぎる気がしなくもないけど」

「『ブルーベリータルト』の名は伊達じゃないってことだな。わかりやすくいいだろ？」

アスナは賛否曖昧に頷いたが、フォークを取り一口食べるとアスナの顔がパアツと笑顔に変わった。

「あ……。美味しいね、これ」

「口に合って何より。ベータの頃はこのタルトと景色目当てにテラス席がカップルで埋まっててなあ。その中でバフ欲しさに一人タルトを黙々と食べているときの侘しさは中々……」

人間それほど他人に見られてはいないと思うのだが、周りが全員恋人やら友人やらと一緒に来ているのに自分だけ一人きりだと、どうしても視線が気になってしまうものだ。そんなアウエー感満点の状態でも悲しさやら悔しさやらを押し殺し、早食いに徹してそそくさと店から逃げた記憶を思い出してしまったことで何とも苦々しい思いが込み上げてきた。タルトの甘さで少しでも紛らわそうと先端の三角形をフォークで切り取り口に入れようとしたところで、

「ふうん……。じゃあ、良かったじゃない。こうして二人きりで来れて」

澄ました顔でそんな発言をしたアスナが俺の動きを制止させた。切り取ったタルトをフォークの先ごと口に入れ頬を膨らせたままアスナをまじまじと見つめるとそこでようやく自分の発言に気付いたのか、アスナは急に顔を沸騰させフォークを持ったまま手をぶんぶんと言がなるような勢いで横に振った。

「あつ、え、えつと……！ その、カップルとかって、そういう話じゃなくてね……!?!」

真つ赤な顔で慌てる美少女剣士様の可愛らしさは途轍もない破壊力でたまらずこちらの顔も沸騰しそうになってしまおうが、もしここで

誤魔化すため茶化すようなことを言ったらアスナは顔を別の意味で赤く染めて間違いない怒るだろうし、そうなれば手に持っているフォークが俺の顔目掛けて飛んできてもおかしくない。

こういう時は素直に思ったことを言うに限ると判断し、口の中のタルトを飲み込んでから俺は口を開いた。

「アスナが気にしていることは置いておいてもさ、俺も二人で来れて良かったと思うよ。アスナと一緒にじゃなかったら景色も一瞬見て終わりだったし、飯も早食いして終わりだっただろうからさ」

「……そんなこと、真面目な顔で言わないでよ。恥ずかしくなるじゃない……」

素直に言ったのが功を奏したようでアスナの抗議には勢いがなく、顔を赤らめたまま恥ずかしさを誤魔化すように手元のタルトを食べ進めている姿は微笑ましい。とはいえ人が物を食べているのを見続けるのは失礼なので、まだ一口しか食べていないタルトの消化に取り掛かった。

甘酸っぱいブルーベリーの下には濃厚なカスタードクリームが隠れており、それを包むタルト生地はサクサクとして口触りが良い。量的には《トレンブル・ショートケーキ》のようなインパクトはないため少々物足りないが、味の面では勝るとも劣らない。あつという間に一切れ食べ終えてしまい思わずもう一個といきたくなるが、沸きあがる欲求をグツと抑えてコーヒーを一口飲む。

ほうと一息つくときアスナも食べ終わっていたようで既にフォークを置いていたが、視線が左上に向いているのがわかった。

「アスナ、ちよつと向こう見てみなよ」

アスナの疑問を解決するため俺はテラスの隅を指さすと、その先にはぼんやりと光っている何かが落ちている。気になったのかアスナが立ち上がってそれを拾い上げ、まじまじと観察しながら戻ってきた。

「……これ、何かのコイン？ お金みたいに見えるけど……」

「そ。一応お金だな。と言っても、設定的にはこの浮遊城に囚われる前の、つてことらしいけど。この層の遺跡にはさ、それみたいに色ん

な《遺物》があちこちに落ちてるんだ」

「……なるほど。さっきのタルトのバフって、この《遺物》がはつきりと見えるようになるバフってことね？」

「ご名答。結構いろんなものが拾えるもんで、ベータの頃は頻繁に遺物拾い祭りが開催されてたよ。今アスナが持つてるようなコインとか、レアなものだと金貨や宝石……特殊効果付きのネックレスや指輪なんてのもあったかなあ」

当時のことを思い出しながら話していると、宝石やネックレスといった単語に反応するようにアスナの肩がぴくぴくと動いた。ローピアで宝石は「見る分には」好きと言っていたが、やはり実際に手に入る機会があるととなると気になってしまうのだろう。

「バフ時間はまだ残ってるし、この近くにそこそこ拾えそうな神殿跡があるんだけど……行ってみる？」

断られることはないだろうと思うが少々不安を抱えつつお誘いをしてみると、意図に気付いたアスナは手の中の銀貨と俺の顔とで視線を往復させながら考え込んだ。その挙動不審な姿に笑いをこらえながら十五秒ほど待つと、何かしらの葛藤を抑え付けることに成功したらしいアスナが決心したように言った。

「……行く。わたしも、遺物拾い祭りやりたい」

想定通りの言葉が発せられたことに安心し頷いた俺は立ち上がり、アスナに手を差し伸べる。

「おーけー、じゃあ早速行こう。バフ時間も意外と短いからさ」

「あつ、うん。……ありがと」

俺の手をおずおずと握りアスナが立ち上がった。《ブルーブルーベリータルト》のバフ時間は一時間で、ちよつと夢中になるとすぐに過ぎてしまう時間だ。やると決まったならば急いだ方がいいと、アスナを促すように俺は気持ち駆け足で店の入口へと向かった。

神殿跡での遺物拾いの成果はバフの効果もあってか中々の物だった。大小のコインや宝石、マジック効果のあるネックレスとブレスレットに指輪が二つと、すべて換金すれば五千コルは堅いだろう。

アスナの機嫌はこれだけの成果を挙げたことで時折鼻歌を歌うほど極めて良好であったが、その隣を歩く俺は脳内に遺物拾い中に見た光景がちらついて離れず、平静を装うことで一杯一杯となっていた。

遺物は基本的に地面に落ちているため拾うには当然屈む必要がある。落ちているのが一個の場合はすぐに立ち上がるが、周辺に遺物が密集していた場合はわざわざ立ち上がりせずに四つんばいのまま移動することになるだろう。それは至極当たり前なのだが、問題だったのはアスナの服装が短いスカートだったということだ。

たまたま、本当にたまたまであったのだが、向こうは拾えてるかなーと視線を向けたのとアスナが動いたタイミングが重なり、ひらりと、普段は隠れていなければならぬものが見えてしまった。

無論一瞬のことであつたし、暗がりであつたためとても気になる詳細まではわからなかったが、今回に限ってはわからなかったことが災いする。もう少し明るければ、いっそもう少し近かったら等と考えてしまうのは、健全な男子中学生としては仕方のない事ではないだろうか。

「……キリト君、君なんか変なこと考えてない？ さつきから顔が百面相してるけど」

そしてこんなことを考えていれば当然、人の心の変化に機敏なフェンサー細剣使い様にバレる。先ほどまでの機嫌の良さは鳴りを潜め、こちらを訝しむように視線が向けられた。

「い、いやあ、ちよつとベータ時代の苦い記憶を思い出してさあー！」

何とか誤魔化そうと大げさに言っていると、「ふーん」と口では納得するものの視線の鋭さは変わらず、明らかに信じていないということがわかる。それでも追及されバレてしまうと本当の意味で命の危険に晒されるため視線を逸らしてシラを切り通すと、しばらくしてからアスナが溜息を一つついて呆れるように言った。

「……ま、いいけど。キリト君がその顔してる時は、間違いなくくだらないこと考えてる時だもの」

余りの言い様にその顔ってどんな顔だという突っ込みを入れたいなるがグツと抑えて、話題を遺物拾いに戻すべく発言する。

「そ、それよりもさ。早いところそれ鑑定してもらおうぜ。場所が場所だからそこまでレアなものはないと思うけど、装飾品なら着けておいても損はないだろうからさ」

「……そうね。今は君の口車に乗っておいてあげましようか。でも、その内聞かせてもらおうからね」

ニツコリと冷たさを帯びた微笑をこちらに向けたアスナに、俺はただただ頷くことしかできなかった。

メインストリートに面した露店のNPCに鑑定を依頼した結果、アクセサリー類に付加されていたマジック効果はどれも今一つであることがわかったが、指輪の一つに《燭光》しよくこうという見慣れない効果が付加されていた。燭光と言う意味を考えるにぼんやりと光る程度の効果はあるのだろうか。

銀色のリングに黄色い石が付いた指輪は《燭光》以外はステータスアップも無く敢えて装備する必要を感じなかったが、もう一つの指輪の効果が極めて微妙であり折角装備枠が開いているのだからという事でアスナの右手中指に装備された。残りのアイテムを全て換金すると総額は六千コルを超えたので半分をアスナに送った後、ちょうど近くにあったベンチに腰を下ろし一息つく。

「満足したわ……。なんとというか、中毒性高そうね、遺物拾い」

「ベータ時代も攻略そっちのけで毎日遺物拾いに勤しむ奴がいたよ。その熱心さに敬意を表して《ヒロワー》ひろわーって呼ばれてたな」

「絶対敬称じゃないわよね、それ。……明日には結構賑わいそうね、こども」

時刻はもうすぐ午後九時というところだが、メインストリートを行き交うプレイヤーの数は先ほどよりも増えているように思えた。装備もあまり整っていないプレイヤーの姿を多く見かけるので、どうやら良い儲け話の噂を聞きつけたプレイヤーたちが下の層から上がってきているらしい。

「遺物拾いは時間はかかるけど確実に儲かるからなあ。特にまだ町から出れてないプレイヤーには貴重な機会になるのかもな」

「……そっか。そう考えると、ちよつと悪いことしちやつたのかな……?」

「悪いこと? ……ああ、そういうことか」

唐突に沈痛な面持ちを見せたアスナの言葉に驚いたが、すぐにその言葉の意図が理解できた。恐らくアスナは俺たちのようにモンスターと戦うことで稼ぐことができるプレイヤーが、圏内に籠ることを選んだプレイヤーたちが稼げる貴重な機会を少しでも奪ってしまつたということに対して罪悪感を感じているのだろう。遺物拾いをしている間アスナは非常に楽しそうにしていたから、その反動もあるのかもかもしれない。

「本当に、優しい人だよな、アスナって」

俺の言葉に反応するまでに三秒ほど時間をかけてから、「は、はあ!?!」と言う言葉と共に急にわたわたとしたアスナを見て思わず笑みがこぼれる。率直な物言いをしてしまったことで俺も多少の照れを感じつつ、先ほどの神殿跡の遺物はこの街全体で拾える遺物から考えて本当にごく僅かなものであるから気に病む必要はないと伝えると、多少は気が晴れたようだった。

「なんか、気を使わせてごめんね?」

「気にするなつて。それで、遺物拾い、楽しめた?」

「うん。付き合ってくれてありがとね。十分満足できたよ」

笑顔で頷いたアスナを見てフォローは十分だと判断し、そろそろ次の行動に移るために話題を変える。

「さて、遺物拾い祭りを楽しんだアスナさん、これからどうする? もう時間も遅いし宿に入っちゃつてもいいけど」

「うーん……。流石に日付が変わる前には休みたいし、これからクエストを進めるとちよつと中途半端になるわよねえ……。かといって、九時じゃ流石に早すぎるし……」

頭を悩ませるアスナを見ながら俺もどうすべきかと考えるが、良い案は中々浮かばない。この街のクエストのメインは地下のダンジョンになるので、一度潜つたら可能な限り全てをこなしてしまいたい。そうなると数時間は潜りっぱなしになるのは間違いなく、地上に戻つ

てくるのは朝方になってもおかしくないだろう。階層ボス戦が終わった日にそのまま徹夜と言うのは流石に勘弁だ。もういつそのこと今日はこのまま遺物拾い祭りを継続すべきかという考えに至ったとき、アスナが何かを思い出したように口を開いた。

「あつ！ キリト君、攻略を始める前に子爵様に報酬貰いに行かないと」

「ああ……それ、忘れてたな。報酬の一覧見たけどかなり強力な装備が揃ってたし、第五層の攻略が本格的に始まる前に行っておかないと戻れなくなっちゃうもんな。今日中に資材だけ集めておくか」

「うん。早く集められればお城まで行ってそのまま泊まっちゃいましょ。宿代も浮くし」

お風呂も入れるしとは続かなかったがあの大浴場を期待しているのだろう、お風呂大好き剣士の目は輝きが増していた。尤も、俺とてあの城で一泊するのは食事のクオリティが高いので大歓迎であるから、動機という意味では大して変わらないかもしれない。

じゃあ早速行きましよう、立ち上がって転移門へと向かうアスナに遅れないように後に続いた。

第三十一話

第四層主街区《ロービア》に移動した俺たちはロービアで露店を開いていたエギルに偶然出会い、厚意によって彼らの乗っていた《ピークオッド号》を貸してもらうことができた。

本来は森に行つて船の材料を再び集める予定だったのだが、予期せぬ幸運によつて移動手段を確保することができたので早々にロービアに別れを告げヨフェル城へと舵を取る。

「こういうちよつと大きめの船も、伸び伸びとできていいわね。座り心地はティルネル号の方が断然いいけど」

「単純に倍の広さだからな。存分にはしゃいでもらつて構わないぞ？」

「もう圏外なんだから、そんなことするわけないでしょ！」

俺の言葉にぷりぷりと怒るアスナだが、その表情が綻んでいるためまるで威圧感がない。

時折出現するカニやラワニやらも悉く細剣の錆となり、上層の底面と川面に映る星空に挟まれながらの船旅を二時間ほど楽しんだところで、白い靄を抜けてヨフェル城へと到着した。

ヨフィリス閣下から貰つた指輪《シギル・オブ・リユースラ》はこの城に入るための通行証を兼ねているので城門前で装備している左手を掲げると、警戒のために槍をこちらに向けていた衛兵が敬礼し城門がゆつくりと開いていく。

城門、正門を通過してまずは目的であるヨフィリス閣下に謁見すべくそのまま一直線に五階の城主の部屋へと向かい、部屋の前で少しだけ中の様子を窺つてからノックすると、すぐに中から「入りなさい」という落ち着いた声が返ってきた。

扉を開け中に入ると、大きなデスクの向こうから見覚えのある長身のエルフの男性がこちらに視線を向けてくる。

時刻もすでに真夜中と言つていい時間帯だが未だ執務を続けているのだろう、持っていた羽ペンを机に置き、羊皮紙のようなものを机の引き出しにしまう姿が見て取れた。

「アスナ、キリト、待っていましたよ」

「こんばんは、城主様。夜遅い時間にお邪魔して、すみません」

「気にすることはありません。この城を守ってくれた恩人であるそなたたちならばいつでも歓迎です。さあ、こちらへ」

アスナの謝罪にも微笑みながら答えた城主は俺たちを手招きしたので、素直にデスクの前へと歩みを進めつつ部屋の中を見渡すが、居るのは城主のみでこの城にいた筈のもう一人の姿は見当たらない。

「残念ながらキズメルは既に上の層の砦へ発ちました。ですが、あなた方に会いたがっていましたよ。渡した指輪があれば砦にも入れるでしょうから、機会があれば砦を訪れてみてください」

「そうなんですか……。わかりました、必ず会いに行きますね」

俺たちの視線に気づいた城主が察したように口にするアスナは一瞬寂しげな表情になったが、すぐに切り替えて頷きそれを見た城主も再び微笑んでから頷き返した。部屋に入ってから会話を全てアスナに任せてしまっているが、どうやら俺が想像する以上にこの二人は親密な関係を構築したようだ。接点と言えば城主に増援を頼みに行った時くらいのもののだが、あの短時間でアスナはこの英明なエルフの心を開くことに成功したらしい。

それを認識した直後に、黒くもやつとしたものが心の奥底で渦巻き始めたのを認識するが、表情に出ないように努めつつ、失礼にならない程度に城主の顔に視線を向けた。

俺たちが来る前には誰にも顔を見せなかったというが、今こうして話している限りでは顔を隠すようなそぶりは全く見せていない。額から左眼を通って縦に刻まれた傷跡は健在だが、恐らくはあの戦いの中で心境の変化があったのだろう。

どうやらアスナの周囲を変える力はプレイヤー達だけではなくNPCに対しても有効らしい。

その後言い出しにくかったクエストの報酬のことを城主から切り出してくれたので、浮き上がるテンションを抑え込みながら開かれた輝く宝物箱の中のアイテムを順番に確認し、二つのアイテムを選択する。クエスト完了直後にも確認したが性能はどれも一級品で、今回選

んだものも強化をしつかりを行っていけば長い期間使い続けることができるだろう。

心持ち重くなったストレージにほっこりしていると城主が手を一振りして宝物箱が閉じられ室内の光量が元に戻ったので、取りあえず一区切りと気前の良い城主に改めて礼と共に二人で頭を下げる。

「そう何度も頭を下げずとも良いのですよ。相応の報酬を渡しただけなのですから。……とは言え、これはこの城を救ったことに対してのもの。アスナ、あなたにはもう一つ渡すものがあります」

城主の言葉に「えっ?」と声を上げて驚いたアスナだったが、それを尻目に城主は部屋の奥に備え付けられた暖炉の前に向かいマントルピースの上に飾られていた細身の剣を手に取った後、俺たちの前まで歩いてきた城主は両手で剣をアスナへと差し出した。

「アスナ、あなたは私と同じくレイピアを使っていましたね。この剣は私が幼い頃に当時の王から下賜されたもの。私が使うことはもうありませんが、このまま埋もれさせるには惜しい一品です。あなたの手元になれば役立つこともあるでしょう」

「そ、そんな! 貴重な品を二つもいただいたのに、これ以上は受け取れません!」

隣でアスナがテンプレ通りの反応をしている間に俺は城主が持っている剣に視線を移す。鞘に納められているため剣身を見ることはできないが、柄頭には赤い宝石がはめ込まれ、鞘に使われている黒い皮も見ただけで上質なものであることがわかる。手を守るナツクルガードや鞘の付け根や先端には金銀の文様細工が細かく刻まれ、どちらかという実用性よりも見た目を重視した剣のようだ。

城主は練習用に下賜されたと言っていたが、これは剣の練習に振り回しても大丈夫なのだろうか。そんな俺の視線を見て城主が口を開いた。

「この剣は見た目通り、戦いには用いることができない儀礼用のものですが、古のまじないの効果によって所持する者の成長を助ける効果があるのです」

なるほどと頷き、俺は視線を剣からアスナに移してそっと窺う。

剣を差し出されたときには慌てていたが、城主の説明を聞いたアスナの視線は剣に釘付けになっていた。真つ直ぐに剣に対して向けられたそれは、ロービアの装飾品店でアクセサリーを見ていた時のようなキラキラとした輝きを放つものではない。

目の前の物が自らを高めるために必要なものであると認識した、強く真剣な視線だ。

「二つだけ、聞かせてください。……何故、わたしにだけこの剣を？」

お気持ちはずごく嬉しいのですが、その、不公平になってしまします」アスナの言葉は尤もだ。少なくともベータ時代にこのクエストをクリアしたときには報酬は一つであった。それが二つに増えたというだけでも驚きなのにさらにもう一つ、それも一人にだけというのはどう考えてもおかしい。

聞いた限りではアイテムの効果は非常に強力なものようだし、もしこれが正式サービスで意図的に組み込まれたものならばその意味を考えなければならぬだろう。

「……そうですね。確かに、あなた方の功績は等しい。本来であるならばこのようなことをするべきではないのでしよう」

聡明な城主は俺の危惧を察したようで、自らの行為をするべきではないことと認めしたが、一度顔を横に少しだけ振ってから「ですが」と続けた。

「顔に傷を負って以来、人前に姿を現すことなく長い時を過ごしてきました。……どうしても報いたいのですよ、一人のエルフの騎士ヨフィリスとして、この部屋を出て再び顔を上げるきっかけくれたあなたに」

これは個人的なものだと城主は言い切ると、アスナは窺うようにこちらを見たので軽く頷きを返す。それを受けて一旦城主と視線を合わせ、少しだけ躊躇った後に剣を手に取った。手の中から剣の重さが消えた城主は満足そうに微笑む。

「アスナ、あなたの眼差しはかつて私が世話になった女性とよく似ています。その瞳が濁ることが無いよう、この城から祈っています」

そう最後に一言添えた後、話は終わりだというように城主の笑顔が

消え普段の伶俐な表情に戻った。

この人が俺たちに個人的な笑顔を向けることはもうないだろう。俺たちはひたすらに上に進み続けるし、この人はこのままこの城の城主であり続ける。明日この城を発つてしまえば、こうして顔を合わせることが二度と無いかもしれない。

恐らくは最初で最後であることを隣に立つ少女も理解している。その証左に、アスナの頭は先ほどよりも深く下げられていた。

更衣室で「やることがあるから先に入つて」とアスナに言われた俺は手早く水着に着替えて浴室の扉を開けた。金色の吐湯口ととうぐちから流れ出るお湯に満たされた浴槽に口許まで身体を沈め、ぼんやりと前方を見つめながら先程の出来事について思考を巡らせる。

ダークエルフのクエストはベータ時代と同じような展開で進んでいた。クエストの内容や攻略するべきダンジョンに大きな変更点はなく、自らが知り得ている情報で十分に対応できているし、明らかに報酬が良くなっている点を考えれば歓迎すべき状態なのは間違いない。

だが、と自身の困惑を吐き出すように口から空気を開放すると、前面のお湯が湧き立つ。

城主はアスナに渡した剣は個人的な報酬であると明言した。しかも、クエストを攻略した直後に、システムウィンドウに提示された以外のものを。

あのクエスト中に俺とアスナの行動の違いがあつたのは城門の防衛に当たった時だ。城門に残つて敵兵と戦うことを選んだ俺と、城主に増援を頼みにいったアスナ。城主本人が言っていたように部屋の外に出るきつかけをアスナが与えることができたと考えれば、個人的な報酬を追加でアスナだけに渡すのはおかしいことではない。

キズメルや城主を見る限り、この世界の一部のNPCは極めて高性能でかなり自由な行動が許されているようだし、クエストの流れを見ても不自然さは感じないように思える。だが、クエストの報酬というゲームの進行上公平性が求められるものにまで影響を及ぼせるほど

の権限が与えられることなどあり得るのか。

普通のゲームであるならば情報サイト等にかきこめば誰かしらが確認してくれるのだろうが、S A Oにこのゲームそんなものがあるわけもなく、例え情報提供をしたとしても俺たちの行動がキズメルが居ることが前提だったことを考えると同じ行動をとってもらうのは難しいだろう。これが本来の仕様なのか、このゲームの高度なA Iが成した奇跡なのか、それを確認する術が現段階では無い以上、頭を悩ませるのは無駄なことなのかもしれない。

最近はどうも深刻に考えすぎる気があると自分でも思わなくもないのだが、このゲームが始まった直後のようにソロで動いているわけではないのだ。何か一つの見落としによって致命的な結果を引き起こし、それで自分だけが死ぬのならいい。だが、そうなった場合は側に居る人間たちをも巻き込む可能性が高いのだ。

——もし、俺のミスによってアスナが死ぬことになったら……。

不意に頭に浮かんだ光景は全身を湯の中に沈めているというものにも拘らず背筋に悪寒を走らせたが、その直後に浴場の入り口から引き戸が開く音が聞こえたため驚愕も合わさり、身体は予想よりも大きく震え盛大にバランスを崩す。

「ちよつと、大丈夫?」

風呂に入った直後に響いた水音に驚いたのか、湯気の向こうから聞こえてくる足音は普段よりも大きい。

「ああ、大丈夫。ちよつとバランスを崩しただ……え?」

一度は水没した身体を戻して顔を拭い、既に湯船に足を入れていたアスナに視線を向けてたつぷりと観察してから一言、俺は困惑の声を上げた。

ヨフェル城に泊まった初日に入浴のためにアスナが作った水着は白のワンピースタイプの水着だった。しかし、今日の前で俺を見下ろしているアスナはこれまでとは違う赤いビキニタイプの水着を身に着けていた。

「……言いたいことがあるなら言えばいいじゃない」

「い、いや! いやいやいや! 何もありません!」

ワンピースタイプの水着とは違い、赤いビキニによって美少女細剣使いフェンサー様の蠱惑的なプロポーションが強調されている。その姿は思春期真っ盛りの男子中学生にはあまりにも刺激が強すぎた。

極めて真面目なことを考えていた気がするのだが、そんなものは一万光年の遙か彼方へと吹っ飛び、巨大な引力に視線が引きつけられた言い訳をして全力で顔を背けることしかできない。

「……ふーん」

そして返されたのは絶対に納得していないだろう一言。つい先日同じようなやり取りをした気がするが、今回はアスナの声はその時より幾分低く感じた。

そりゃあ水着姿をまじまじと見られればいい気はしないよなとそつと横を窺うと、左五センチほどの距離を置いてお湯に身体を沈めているアスナの姿が目に入る。両腕で膝を抱え俺と平行になる様に座っているが、目は普段より細められ明らかに不機嫌そうな顔がこちらに向けられていた。

「えつと……俺、先上がりします……ね……？」

不穏な気配を感じ取った俺は角が立たないよう一言断ってから離脱するべく立ち上がろうとしたのだが、片膝を立てたところで左手がガツシリと掴まれた。

「見張り、忘れてないわよね？」

ニツコリと、しかし凄味のある笑顔に無言のまま頭を上下させる。一緒に入っているのに見張りも何もとは思ってしまったのだが、これも口に出すときつと機嫌を損ねるのでゆつくりと湯船に身体を戻すと掴まれていた左手が解放された。

クリスマスにこの城に来てから毎日、見張りという名目でアスナと一緒に入浴をしているのだが、その間キズメル以外のNPCが現れたことはない。時間帯が違うのか、そもそもそのようなプログラムが組まれていないのかはわからないが、見張りなど置かなくても問題ないということを聡明なアスナなら既に察していてもおかしくないはずだ。それなのに、こうして俺を入浴のお供に連れてきている。

当然それには何がしかの意図があるのだろうが、それを察するには

我が身の経験が不足しすぎているし、すぐそばに水着姿の美少女がいるという極限状況でいくら頭を悩ませようと答えが思いつくはずもなかった。

「……ねえ、なんでいつもそんなに顔をしかめてるの？」

「うえっ!? い、いや、なんでもない……ぞ?」

「確かに、そこまで深刻そうな感じはしないけど……。毎日、つて言っても二、三日だけど、そんな顔されてたら気になるに決まってるじゃない」

「うっ……」

突然の指摘に慌てて言い訳を口にするが誤魔化されてくれないようだ。このままアスナの機嫌を損ねたままではよろしくない。かと言って、正直に口にして距離を取られてしまえば俺の心の体力ゲージは空っぽになりポリゴン片のように砕け散るだろう。

言うべきか言わないべきか、悩んでいる間にも拗ねたアスナはとつても不機嫌ですという態度をありありと見せている。彼女の不機嫌の原因が俺の態度にある。ならば、このまま何も言わないわけにはいかないだろう。

「えっと、アスナさん……」

「……何?」

険むな声が返されたため一瞬怯むがそれをぐつところさえ、俺は決意を持って言うべきことを口にする。

「その……、水着、とてもお似合いです」

短く、端的に、伝えたい言葉を言い終えた後すぐにでも飛んできかねない光る拳に備えて身構えるが、アスナの身体は肩がピクリと動いた程度で大きく動くことはなかった。どうやら暴力的な手段に出ることは無いようで、ここが圏外であるということも含めて安堵したが、反応がないのもそれはそれで困る。

吐湯ととうぐち口から流れ出るお湯の音だけが浴室に響く。会話が途切れてからまだ一分も経っていないだろうに、今の俺には途轍とてつもなく長い時間を感じる。何となく想定はしていたもののやはり言うべきではなかった、謝るべきだなと口を開こうとした俺を制すように、アスナが

ポツリと、浴室に響く水音に掠れるほどの音量で言った。

「そう……。ありがとう」

言い終えた後アスナは身体の向きを変え、完全にこちらに背を向けた。しかし、俺は気づいてしまう。髪が結び上げられたことによって完全に露わになっている項や耳が、赤く染まっていることに。

瞬間、アスナから視線を外し、俯いた。揺れる水面に映る俺の顔は赤く染まっているが、恐らくこちらからは窺うことができないアスナの顔も、俺と同じ程度には赤くなっているのだろう。

予想外だ。完全に予想外だった。

あのアスナが、クールで知的なあの美少女細剣使いが、俺ごときにお世辞を言われただけで恥ずかしがっているのだ。確かに彼女は最近頻繁に赤面している気がしなくもないが、この状況でその反応見せるのは反則と言っている。

だが、細剣使い様のターンはまだ終わらないらしい。動揺と沸き上がる衝動によって思考がだんだん鈍くなり視界がぼやけてくる最中、アスナは背中越しに小さな声で俺に尋ねてくる。

「ねえ、キリト君……。前の水着の時も、その……似合ってるって、思ってくれてた……?」

とてもお似合いでした、と声を大にしていうことができればどれほど楽だろうか。的確にクリティカルを狙い続けるアスナの攻撃は、モンスターだけでなくパーティーメンバーにも有効らしい。

「う、うん」

精神の体力ゲージがレッドゾーンに突入していたため、声に出せたのは必要最低限の同意だけだったが、それでも俺の意図が伝わるには十分だったらしい。

「……そっか」

少しだけあった間の後にアスナは頷くと、先ほどの俺と同じように口元までお湯の中に沈めた。明らかな照れ隠しであるその仕草に、思わず額に手を当てながら後ろの浴槽の縁にもたれ掛る。

——ああ、ホントもう、駄目だ……。

どうしてこの人はこんなにも無防備な姿を晒してくれるのか。そ

れだけ信頼されているということなのかもしれないが、同時に同じ程度には不安も感じてしまう。

——見張り、頑張らないとなあ……。

度重なる精神攻撃に耐えきれなくなりぼんやりとした俺の頭には余りにも漠然とした想いだけが浮かんでくるのだった。

翌朝、城主に改めてのお礼と別れを告げ、ピークオッド号でロービアへと移動してエギルに船を返却した後、再びカルルインの街に足を踏み入れた俺たちを待っていたのは、この世界では恐らく初めてであろう雨であった。

「うわあ、ドシヤ降りじゃない」

「ベータの時は結構降ってたんだよな、雨。余りに不快なもんだから結構文句が出てたらしいから頻度の修正は入ると思ってたけど、ついに来たかあ……」

言いながら転移門広場をぐるりと見渡してみるが、昨日あれほど賑わっていたというのに人影はほとんどない。バケツをひっくり返したような、とまではいかないまでもこのドシヤ降りの中屋外を歩きたがるプレイヤーは中々いないだろう。

「そんな考察はどうでもいいから、早くどこかに入りましょ?」

「そうだな。とは言え朝食は食べてきちやっつたし……このままクエスト消化に行っちゃうか」

「ああ、例の地下ダンジョンね? 地下なら屋根もあるし、ちょうどいいかもね」

異論は無いようなので、アスナの問いに頷きを返してから町の北部へと駆け出す。ダンジョンの入り口は崩れかけた大型の遺跡で転移門広場からはさほど離れていないこともあり、服が水没判定を受ける前に屋内に入ることができた。

遺跡の内部は神殿のような造りになっており、両側の壁には石像がずらりと並び、正面には地下へと向かう階段が大きな口を開けている。広間の四隅の篝火によって光が揺れ動くため非常に不気味な雰囲気だ。

「……あのね、先に聞きたいことがあるんだけど」

「ん？ どうした？」

「これからやるクエストって、どんな内容なの……？」

「ん。どんなって言われても、どこにでもあるようなクエストなんだけど……」

アスナの様子が何やらおかしい気もするが、まずは質問に答えようとウィンドウを開いて可視モードにした後、最初に攻略する予定のクエストの説明文を表示する。

「順路的にまずはこの《三十年の嘆き》に行こうと思ってるんだけど、ダンジョンになってる地下墓地のどつかにいる悪霊を……」

「にえっ！」

説明の途中、急に奇声を上げたアスナに何事かと視線を向けると、アスナがしまったという顔をしつつ両手で口を塞いでいた。

「……今の、にえっ、って何？」

「……ロシア語の、『ノー』よ。ネタバレ禁止ってことよ」

「……ああ、そうなんだ……」

恐る恐る口を開いた俺は、それ以上は聞くなという、それはもう強い眼力で黙らされた。アスナの反応にもしかしてと一つの考えが思い浮かんだが、きつと口に出せば今度は俺の口が塞がれるのだろう。物理的に。

「……………よし、いいわ。覚悟を決めたわ」

右手でレイピアの柄を持ち、たつぷり二、三分ほど目を閉じていたアスナが、意を決して宣言する。普段の戦闘時よりも鋭い眼光に少々怯んだが、当の本人が良いと言っている以上止めることはできないだろう。

「わかった。じゃあ、あまり無理しないように、地下墓地の攻略、開始しよう」

「ええ、行きましょう！」

意気込んだアスナがずんずんと階段を下りていく。今回の先導役はどうやらアスナが担ってくれるらしい。その背中を少々不安に見守りつつ、俺たちは第五層の攻略を開始した。

第三十二話

地下墓地の攻略はアスナの危惧をよそにアストラル系のモンスターが出現するというのではなく無難にクエストを進めることができた。「覚悟を決めた」という言葉は強がりではなかったようで攻略中は終始普段通りに振る舞っていたが、地下墓地を出ると同時に大きく息を吐いて肩を落としたので、それなりに精神力は消耗していたらしい。

良く頑張ったと、明らかに疲れの見える背中をポンポンと叩いて労いつつ時間を確認すれば十七時半を少し過ぎていた。クエストの報告を終わらせて《ブリंक・アンド・ブリंक》に戻る頃には夕食にはちょうどいい時間になっているだろう。

一度だけ大きく深呼吸をしてからフードを被ったアスナに「行こうか」と一声入れてから歩き始める。地下墓地に入る前にはドシャ降りだった天候もすっかりと晴れ、既に沈みつつある陽の光が青みがかった遺跡を橙色に照らしていた。

「ねえねえ、クエスト報告のついでに少し街の中回ってみない？」

中々に幻想的な光景に我がパートナー様のテンションも上がったらしい。袖をくいくいと軽く引つ張りながら提案してきたアスナに二つ返事で頷く。この街に着いたのは昨日だが見回る前にヨフェル城に戻ってしまったためにまだNPCショップの確認すら終わっていないのだ。

この《カルルイン》は第四層主街区である《ロービア》のように観光地然としているわけではないのだが、遺跡の中を走る通りに怪しげな露店が軒を連ねているのを見ると好奇心に任せてついつい覗いてみたくなってしまう。怒られるかなとアスナの様子を窺ってみると視線をあちこちに飛ばしていたので、これなら遠慮することはないなと心持ゆつくりと歩きつつ露店を見物していく。

「この層の露店、結構面白い物が多いのね。食材関係は少ないけど、宝石とかアクセサリーとか……未鑑定品まで売ってるし、遺物拾いの影響が大きいのかしら」

「未鑑定品の中にはとんでもないレアアイテムがあるぞ。ベータの時にはDEX+10の指輪とかあったらしい」

「ぷらっ……!? ちょ、ちよつとだけ興味をそそられるわね……」

「確率はお察しだけだな」

レアものを求めて未鑑定品を購入するくらいなら、《ブルーブルーベリータルト》を食べてから地下墓地の最下層までダッシュして遺物を探した方がまだマシだ。アスナもギャンブル性が高いことはすぐに理解できたようで露天の取引ウィンドウを閉じて肩をすくめたが、何かに気付いたのか立ち止まりこちらを向く。

「キリト君ってこういうの好きそうなのに、あんまり興味無さそうなのはちよつと意外ね」

「え？ あー、確かに好きなんだけど……」

煮え切らない答えにフードの中から見えるアスナの表情には疑問が浮かんでいたが、すぐに察したよう目で目を細めた。

「……ベータ時代に何かあったの？」

「まあ、遺物拾いで儲けた金をそのまま突っ込んだら、な」

「丸損したと……。未鑑定品買うの、禁止だからね」

「……………はい」

無慈悲な宣告にぐうの音も出なくなった俺は、肩落としつつ前を行くアスナの後ろに続いた。

クエストの報告をすべて完了するとちよつとアスナのレベルが20に上がったので、今日は少しだけ豪華な夕食にしようとする。先程まで橙色に街を照らしていた陽はすっかりと落ち、東の空には既に星が輝き始めていた。空腹を訴える抗議の声も大きくなってきているので早足で《ブリンク・アンド・ブリンク》へと抜ける路地を歩いていると、ちよつと武器や防具を取り扱っているNPC露店のすぐ近くで客引きの声が聞こえてきた。

声の方に視線を遣ると、行き交うプレイヤーたちに声掛けをする女性プレイヤーの姿が目に入る。少し離れた所から様子を窺ってみれば、手にはプレイヤーミスに使う初心者用のハンマーを持ち、見覚

えのある敷物——《ベンダーズ・カーペット》を開いて携帯金床を展開していた。

「おお、プレイヤーの鍛冶屋か。ネズハ以外にもいたんだな」

「あ、ホントだ。女の子の鍛冶屋さんなんて、珍しいんじゃない？」

女性アバターでの生産職というのはMMORPGの世界においてはそう珍しい存在ではないのだが、ゲームの初心者であるというアスナにとっては女性がハンマーを振るう姿は珍しく見えるようだ。尤も、それは他のSAOプレイヤーにも言えるようで、彼女の周りには数名のプレイヤーたちが取引のために集まっている。

「ねえねえ、わたしも、少し声かけてきてもいい？」

「もちろん。武器の修理もまだだったし、費用なんてNPCと大して変わらないだろうからついでに済ませちゃおうぜ。上層まで出てきてくれる生産者とは繋がり持つとくに越したことはないしな」

この手のゲームでは基本的にモンスターからドロップするレアな武器が性能面で強力な場合が多いが、当然確保できるかどうかには運の要素が大きく絡んでくる。よって比較的安定した性能の武器防具を供給してもらえる腕のいい鍛冶屋と知己を得ることは今後攻略組で活動していく上で重要になるはずだ。

「確かに一々下層まで降りるのは面倒だもんね。それに、わたしたちのスキル構成だとしても戦闘面以外の部分が疎かになっちゃうし……」

「そういうこと。俺たちの場合は鍛冶屋と、アクセサリなんか作れる装飾細工師とかの知り合いも作つときたいな。布・皮製品を作れる裁縫系に関しては……アスナさんが頑張るんでしょうか？」

アスナの裁縫スキルは何だかんだで出番が多い。本人も意外と気に入っているようなので、本腰を入れるつもりはあるのかと一応訊ねてみると、アスナは頷おとがに指を当ながら少しばかり考え込んだ後、首を横に振って溜息を付いた。

「うーん、ちょっと難しいかなあ……。一応毎日寝る前にスキル上げはしてるんだけど上がり方が鈍いのよね。素材に困ることはないけど、性能も店売りと同じくらいだし時間を割きすぎるとレベリング時

間が無くなっちゃうもの」

《カレス・オーの水晶瓶》を利用してフロントランナーながら生産スキルを取っているアスナだが、やはり最前線でレベリングをしながら生産スキルを上げるといふのは時間的な制限から難しいのだろう。

「まあ、そうだよな。俺はSAOで生産スキル取ったことないから何とも言えないけど、それなりに手間と時間がかかるのは間違いないだろうし」

「うん。寝る前の暇つぶしや気分転換にはなるんだけど、本格的にっつてのは中々ね」

ゲームの世界で暇つぶしというのもおかしな表現だが、普通に過ごしていると空き時間がどうしてもできてしまうのがこのSAOというゲームの特徴だ。ダンジョンなどに潜る場合、余程の理由がない限り疲労の限界まで狩り続けずに街に帰還するための余裕を残しておくものだが、そうすると街に帰還してミーティングや補充を終えた後、就寝までに時間が余るといふことがそれなりの頻度で起こる。

暇つぶしに最適なスマートフォンやパソコン等この世界にあるはずがなく、そもそも本ですら手に入れることが難しい現状では空いた時間をつぶすのは中々に難儀だ。かといって、余力を使い切るためにもう一度街の外に狩りに出るのは本末転倒であるし、無理に眠りに就く時間もベッドの上で退屈な時間を過ごす羽目になる。そういった時のために生産スキルを一つでも取っておくというのは、健全な生活を行う上で以外に有効なのかもしれない。

「キリト君も何か取ってみたら？ 生産できるアイテムとかデザインとか眺めてるだけでも意外と楽しいわよ？」

「悪くないよなあ、実際。まあ、今は戦闘スキル優先だし、一通りスキルを取り終えてからかな」

「じゃあ、その時を楽しみにしとくわね。——お客さん居なくなりそうよ、行きましょ」

様子を窺いつつ話していた間に先客の取引は済んでいたようだ。最後の客が離れたところを見計らって近付いていくと、こちらに気付いたのか前の客への見送りを区切り、営業スマイルを浮かべながら聞

き取りやすい声で迎えられた。

「ようこそ、リズベツト武器店へ！ 武器の修理ですか？ お買い物ですか？」

リズベツト、というのは店主の名前だろう。髪はほんの少しブラウンが入ったショートカットで、挨拶からも伝わるように活発的な印象がある。身に着けている装備は第四層の標準装備といったところで、もしかしたら何かしらの戦闘スキルを取っているのかもしれない。

「えっと、修理をお願いします。わたしと、この人のも」

「かしこまりました。では、武器をお預かりしますね」

アスナから武器を受け取った店主がウィンドウを操作してレイピアを金床にセットすると、時間が止まったように動きが固まりアスナの顔を窺うように顔を上げた。驚きの表情を浮かべた店主は一瞬だけ口を開きかけたように見えたが、ブンブンという音が聞こえるような勢いで顔を左右に振って表情を営業スマイルに戻し、平然を装いつつ説明を続けた。

「えーっと、一応修理代金はこんな感じですよ。ただ……私のスキル値だと、この武器ならNPCで修理したほうが安上がりになると思いますよ」

レイピアの性能に関して何も言及しなかった店主に感心しつつアスナが取引ウィンドウを可視化したので覗いてみると、確かにNPCに修理に出した時より一割ほど高い金額が書かれていた。鍛冶スキルの数値によって修理に必要な素材数が変わるので修理代金が高つくのはわかっていたが、まさか店主から言い出してくるとは。

「このまま修理することもできますが……どうします？」

「そのままやっちゃってください、きつとそうだろうとは思ってましたから。まさか指摘してくれるとは思いませんでしたけど」

「ふふ、信用商売ですからね。では、はじめます」

承諾と料金を受け取った店主がアスナが見守る前でレイピアにハンマーを振り下ろし始める。金属同士がぶつかり合い、通りに鈍音が鳴り響く。近場にあるNPCの鍛冶屋からも同様の音が聞こえているのだが、それよりも心なしか音が重く聞こえたのはやはり人間が剣

を打っているからなのだろう。

必要な回数を叩き終え、無事に耐久値を回復させたレイピアを受け取ったアスナは剣身に視線を滑らせてから満足げに頷き鞘へと戻した。ステータス上はNPCで修理したものと変わらないはずなのだが、何かしら感じることもあったのだろうかと首を傾げる。

「えっと、そちらの方も修理するんですよね？」

「ん？ ああ、お願いするよ」

アスナの仕草に疑問を浮かべていると店主に声をかけられたので背中から剣を外し手渡す。店主が受け取った瞬間に「重っ……！」と小さい声が聞こえたが、何もなかったかのように金床に剣をセットしたのを見て評価をさらに上方に修正しておく。

修理や強化のためにプレイヤーの鍛冶屋に剣を預けると当然性能が鍛冶師にばれてしまうのだが、剣の性能を知るということはそのプレイヤーの大まかなステータスを知るとほぼ同義となる。つまり、今回の取引によって俺とアスナがどのような立場にいるかをこのリズベットというプレイヤーは察することができるだけの情報を得ることができたわけだ。

俺たちの持つ剣の性能はこの階層ではかなり強力で知れば誰もが入手方法を知りたがるほどの一品だが、この店主は性能に驚きはすれどすぐに表情を隠し平静を装った。顧客の情報は漏らさないとという意味の表れとっていいだろう。極力注目されるのを避けたい身としてはありがたいことだ。

内心で頷きながら料金を支払い、修理が終わって戻ってきた剣を眺める。なるほどアスナが満足そうにしていたのはこういうことかと実際に間近で見ると納得した。ステータス上では同じはずなのに、NPCで修理した時に比べ何となくではあるが剣身の輝きが違い、若干ではあるが剣自体の存在感が強くなって印象がある。ほんの些細な違いではあるが、一度気づいてしまえば気になってしまうだろう。

「いい仕事だ、ありがとう」

剣を鞘に納めながら感謝を伝えると、店主は笑いながら力こぶしを

作りポンポンと叩いた。

「そう言ってもらえると嬉しいわ。修理とはいえ精魂込めてやってるので、今後も是非ご利用ください」

「ええ、こちらこそお願いしますね」

店主の言葉に大きく頷き、笑顔で握手を交わす。取引が終わりちようど一区切りついたところで、アスナが質問を投げかけた。

「リズベツトさん……でいいのよね？　ここで毎日露店出してるんですか？」

「ええ。といつても、一日中つて訳じゃないですけどね。修理や強化をする人が多くなる朝方や夕方にも二時間ずつぐらいが基本かな」
「なるほど。それ以外の時はフィールドで狩りを？」

「そういうこと。修理用の素材はNPC販売になってるのが救いだけど、素材をかうお金が無くて修理すらできないなんて状態になったら鍛冶師名乗れないし……」

プレイヤーによる武器や防具の修理にはNPC鍛冶屋で販売している砥石や接着剤等を使い、ランクに応じた必要スキル値があれば自動成功となる。修理にもスキルの上昇判定があるため、インゴットや中間素材の作成と並び貴重な鍛冶スキル初期のスキル上げ手段であったはずだ。しかし、ベータの時の情報では武器を作るのが一番上昇効率が良いと聞いた覚えがあるのだが。

「武器の製作とかはあんまりしてないのかな？　そっちの方がスキル上がりやすいって聞いたけど」

「うーん、ホントはそっちをメインにしたいところなんですけどね……」

俺の疑問に深くため息をついた後、リズベツトは肩を落としてながら答えた。

「素材の買取はしてるんですけど供給が少なくて数を作れないし、性能も店売りの武器と同程度がいいところ。当然売れ行きも良くなって、素材の買い取り代金をペイするのも難しいんですよ」

「なるほどな。性能が同じなら、わざわざプレイヤーに頼む人は少ないか……」

従来のMMORPGのように露店を開けば勝手に売買ができるようなシステムが無い以上、プレイヤーが製作した武器を買うには本人と取引するしか手段がない。この状況では性能や価格に大きな差がないのであればわざわざ手間をかけて取引を行おうとする者は少ないのだろう。

「武器の売り上げだけでやっていくのが理想なんですけどね。需要もない、素材も安定供給されないと……」

「それを活動のメインに据えるのは難しい。でも修理と強化に頼つてばかりではスキルが上がらないと。上手くいかないな」

「生産系スキルの序盤はきついつてのは別のゲームの経験からわかってはいたんですけど、状況が状況ですから。一応、顔売るためにパーティーとかには参加して利用してくれる人は増えてきてはいるんですが、中々……」

何とも身につまされる話だ。彼女が普段どのように活動しているはわからないが、ソロで動いているのならネズハのようにパーティーメンバーから素材を回してもらえないわけではないのだ、懐事情は相当に厳しいだろう。

視線を感じ横を向けば、アスナの目が何かいい案はないのかと訴えてきていた。確かにせっかく信頼できそうな鍛冶師を見つけたのだから、今後の関係を良くするためにも何かしらの情報を提供したいところだが、生産職を経験していない以上スキル上げ関連の助言は難しい。

首を傾げながら頭を悩ませてみるもの一向にいい案が浮かばない。メイン武器というのはプレイヤー一人につき一本が基本であるし、更新や強化にかかる費用のことを考えればメイン武器を二本持つというのは現実的ではないのだ。そもそも武器が複数必要になる状況など、武器が壊れたり失われたりしない限りないわけであるし――。

ここまで考えた時に俺の脳裏に浮かんだのはベータ時代にあった悪夢のような経験だった。リアルで五時間もの時間をかけて地下墓地を駆けずり回り、武器や防具を取り戻す羽目になったあの事態。そ

れが起こったのは、間違いなくこの第五層だった。

「なあアスナ。《シバルリック・レイピア》以外に予備の武器って持ってるか?」

「えっ? ちょっと待ってね……………一応、店売りの《アイアン・レイピア》が何本かストレージに入ってるけど、急にどうしたの?」

《アイアン・レイピア》は細剣で最も弱い武器でどう頑張っても第五層で通用する武器ではない。つまり、アスナが持つ有用な武器は《シバルリック・レイピア》のみということだ。これならばこれからする提案は少なくともアスナに損はないだろう。

「そうか。ならさ、余ってる素材使って予備の武器一本作ってもらったらどうだ?」

「予備の武器? 二本目のレイピアってこと?」

「ああ。さつき地下墓地で倒した《スライ・シユルーマン》っていうネズミみたいなやついたろ? 実はあいつらがこの世界で最初の武器奪いをしてくるモンスターなんだよ。今後もそういうモンスターは出てくるからさ、第二層や第三層辺りの余った素材使って予備の武器作っとけば安心じゃないかなって」

下は第一層の中盤に出てくるモンスターの武器落とし攻撃から、上は俺の知る限りの第十層迷宮区までのほとんどの場所で、武器を落下させたり奪ったりするモンスターは頻繁に出現してくる。ベータ時代は気になる武器や防具を買い漁っていたために武器が無くなるという事態はあの一回しかなかったが、俺はともかくまだ特殊な攻撃への対処に慣れきってないであろうアスナはある程度の性能を持った予備の武器を確保しておいたほうが安心できるはずだ。

「なるほど。そこら辺の素材はもう強化には使えないし、余ってる素材を使うならNPCで買うよりも安く上がるもんね。《アイアン・レイピア》じゃ予備の武器として不安だし…………制作、大丈夫頼めますかね?」

「もちろん! 素材持ち込みの武器制作なんて、こちらとしては大歓迎ですよ!」

依頼がよほど嬉しかったのか、リズベツトは少々大袈裟と思えるほ

ど元気良く頷いた。

「じゃあ、お願いします。料金はおいくらですか？」

「ああ、今回は無料でやらせてもらいます。その代りにですけど、予備の武器のことを営業に使わせてもらってもいいですか？」

手数料は情報代の替わりということだろう。俺には全く異存はないので、こちらに視線を向けるアスナの代わりに答える。

「ああ、構わないよ。ガンガン使って儲けてくれ」

「助かるわ！ では、さっそく作っちゃいますね！」

リズベツトは手際よくアスナから受け取った素材を携帯型のフォージに投げ込み、ボンヤリとした剣の形になったものを金床に載せ叩いていく。第三層のエルフの野営地では四十回の鎚音が響いたが、今回は素材や彼女の持つハンマーからしてそこまでの回数に至る前に剣は完成してしまうだろう。しかし、一心に剣を叩き続ける彼女の真剣さはモンスターと戦っている時のアスナのそれに通じるものがあった。舞台は違えど、彼女もまた鍛冶という職業に対して命を懸けているのだ。

心地良きすら感じる金属音が三十と少し響いた後、金床の上の剣が強い光を放ってからしっかりとした姿を現した。持ち手の部分の装飾はシンプルなものだが、剣身が左右対称ではなく片側の刃がほんの少しだけ湾曲しているのがわかる。

「出来たのは《リオ・レイピア》。第四層の序盤に入手できるレイピアですね。この層の最前線で使うには強化しないと厳しいでしょうけど、予備の武器としてなら十分な性能だと思えます」

「へえー、刃の特殊加工によつて長さが認識しづらくなる……ですつて」

《リオ・レイピア》を受け取ったアスナは説明文を読んだ後、剣先を自分に向け正面から眺めている。少々気になったので貸してもらい、同じように見てみると刃の湾曲によつて一般的なレイピアよりも心なしか短く見える印象があった。モンスターとの戦いでどう影響するかはわからないが、対人戦では特に有効な武器かもしれない。

「これで少しは安心かな？」

「少なくとも《アイアン・レイピア》よりは遙かにな。しかし、あの素材で第四層レベルの武器を製作できるとは。驚いたよ」

今回使った素材は第二層、第三層産で、《シバルリック・レイピア》の武器ランクが高すぎて強化素材としては使いにくくなってしまっていたものだ。そのため、今回製作される武器は第三層レベルの武器だと想定していたのだが。

「作った私も驚きましたよ。尤も、運が良かっただけなんでしょうけど……流れが良かったというのもあるかもしれませんね」

「流れ？ そんなものあるんですか？」

「うーん、良い雰囲気の時とか、今みたいに明らかに失敗するような状況じゃない時は、何故か上手くいくんですよ……」

「ああ。何となくわかります、そういうの」

「乱数の引きが良かったり、確率が偏ったりしただけってのが一般的な考え方だけだな」

ゲームマーとしては至極当然のことを言っただけなのだが、途端に呆れの目が二方向から向けられる。視線の圧力に屈して一歩後ずさると、アスナは盛大に溜息をつき「ロマンがないわね」と一刀両断した。何故なのか。

「じゃあ、わたし達はこの辺で。色々ありがとうございます、またよろしくお願いしますね」

「それはこっちのセリフですよ。お待ちしてますね」

俺が衝撃で動けなくなっていた間に会話を終わらせたアスナは、リズベットに軽く一礼してから俺の袖を引っ張りながら歩きはじめる。慌てて足を動かして崩れたバランスを取り戻した後、路地を一本曲がった辺りでアスナが口を開いた。

「良い人だったね。話しやすかったし……何か、仲良くなれそうな感じがするわ」

「そりゃよかった。実際、鍛冶師としては十分に信用できる感じだったから、長く付き合いたいもんだな」

「ふーん。長く、ねえ……？」

アスナの感想に俺も思ったことを素直に答えると、目を細めたアス

ナは何とも意味ありげな視線をこちらに向けてきた。スルーするわけにもいかず、若干たじろぎつつもお伺いを立ててみる。

「えっと、何かありましたか……？」

「別にー。ただ、随分と嬉しそうだったから、キリト君はああいう子が好みなのかなーって」

「うえっ!?! き、急に何を……」

「ふふ。冗談よ、ちよつとからかってみただけ。ほら、早く行きましょ」

「そういう冗談は勘弁してください……って、ちよつと、引つ張るなつて!」

突然の疑いに驚いた俺は慌てて弁解しようと口を開いたが、全て言い切る前にアスナは口許に手を当てて軽く笑った。ドキツとする冗談は勘弁してほしいと肩を落とせば、そんな俺を急かすようにアスナは再び袖を引いて歩き始める。今日はどうやら精神的にも肉体的にもアスナに振り回される日のようなだが、この状況でも一切不快に感じないのだから俺も相当に彼女にやられているのだろう。

とはいえずつと引つ張られているわけにはいかないと、歩みを速めてアスナの横に並ぶが袖は掴まれたままだ。結局そのまま歩き続け、俺の袖が解放されたのはレストランに入る直前のことだった。